博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	ヨカ　サーニャ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 285 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせをめぐって

Name	Joka, Sanja
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 285
Date	March 12, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	On Combinations of Nouns in the *Accusative Case without Prepositions* and Verbs in the Serbian Language

セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせをめぐって

東京外国語大学大学院総合国際学研究科　博士後期課程

ヨカ・サーニャ

JOKA　Sanja

目次

第一部　序論 1
第一章　本研究の目的および概要 1
1.1.　研究の動機および意義 1
1.2.　研究の目的 1
第二章　本論文の構成と略号 3
2.1.　本論文の略号 3
2.2.　本論文における記号の説明 3
2.3.　本論文における日本語訳について 4
第三章　セルビア語に関して 5
3.1.　言語特徴と使用領域 5
3.2.　セルビア語における単語および文 5
3.3.　品詞 6
3.4.　述語文の種類 7
3.4.1.　述語文の基本的な構造 7
3.4.2.　動詞述語文 8
3.4.3.　名詞的述語文 8
3.4.4.　副詞的述語文 9
3.5.　動詞述語文に現れる必須成分（補語） 10
3.5.1.　直接目的語 10
3.5.2.　間接目的語 11
3.5.3.　補足的述語内容語 12
3.5.4.　副詞的補語 13
3.6.　補足的な情報を与える成分 15
3.6.1.　副詞的修飾語 15
3.6.2.　付帯状況修飾語 17
3.6.3.　連体修飾語 19
3.6.3.1.　形容詞的修飾語 19
3.6.3.2.　格的修飾語 19
3.6.3.3.　名詞的修飾語 21
3.7.　まとめ 21

第四章　先行研究 23
4.1.　セルビア語学の先行研究 24
4.1.1.　Gortan-Premk(1971)「セルボ・クロアチア語における前置詞なし対格を含む句」 24
4.1.1.1.　Gortan-Premk（1971）による「前置詞なし対格」を含む句の意味 25
4.1.1.2.　Gortan-Premk(1971)の分析の問題点 40
4.1.2.　Arsenijević(2012)『セルビア標準語の直接目的語を表す格』における直接目的語を含む句の体系について 45
4.1.2.1.　Arsenijević(2012)『セルビア標準語の直接目的語を表す格』の方法論について 45
4.1.2.2.　対格名詞的成分と動詞との組み合わせの体系 46
4.1.2.3.　分析について 48
4.1.2.4.　Arsenijević(2012)における問題点と本研究との相違点 62
4.2.　日本語を対象とした研究 64
4.2.1.　奥田靖雄（1968-1972） 64
4.2.2.　奥田(1968-1972)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」と本研究との関連 84
第五章　本研究の分析対象および方法論 87
5.1.　分析対象 87
5.2.　本研究の方法論 88
第二部　本論　（分析結果） 93
0　序説　本論の構成 93
第六章　セルビア語における対格名詞の現れ方のパターン 93
6.1.　対格名詞的な単位の用法の基本的なパターン-本質的な対象的な関係を表す組み合わせ 94
6.2.　二重対格の名詞的な単位を含む構造 96
6.3.　人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせ 99
6.4.　組み合わせについて補充的な情報を与える対格の名詞的な単位 104
6.5.　主部と述部で表す事柄について補足的な情報を与える対格の名詞的な単位 105
第七章　物に対する働きかけ 108
7.1.　変化 108
7.2.　付着 113
7.3.　除去 116
7.4.　移動 120

7.5.　接触 125
7.6.　生産 129
第八章　人に対する働きかけ 133
8.1.　生理的な変化 133
8.2.　生理的な状態 135
8.3.　心理的な変化 137
8.4.　心理的な状態 139
8.5.　空間的位置変化 140
8.6.　社会的場面での人への働きかけ 142
8.7.　人の行為の引き起こし/放任 145
第九章　事に対する働きかけ 147
9.1.　事の「変化」 150
9.1.1.　組み合わさる要素の特殊化 152
9.1.2.　物の「移動」を表すものと人の「移動」を表すものとの関係性－意味の段階性と意味の境界的な性質 153
9.1.3.　物の「変化」と事の「変化」との関係 155
9.2.　事の出現 156
9.2.1.　「やりもらい」との関係 158
9.2.2.　物の「生産」を表す組み合わせとの関係 160
第十章　所有関係 163
10.1.　「物持ち」 166
10.2.　「授受」 175
10.2.1.　遠心的授受 176
10.2.2.　求心的授受 177
10.3.　助動詞としての所有動詞の用法 179
第十一章　心理的なかかわり 183
11.1.　「認識の組み合わせ」 183
11.1.1.　「感性的な組み合わせ」 183
11.1.2.　「知的な組み合わせ」 186
11.1.3.　「発見の組み合わせ」 192
11.2.　「伝達の組み合わせ」 195
11.2.1.　「通達」 195
11.2.2.　「教育目的の内容伝達」 197

11.3.　「態度を表す組み合わせ」 199
11.3.1.　「感情的な態度の組み合わせ」 199
11.3.2.　「知的な態度の組み合わせ」 202
11.3.2.1.　「知的な組み合わせ」と「知的な態度の組み合わせ」の連続性 204
11.3.2.2.　「感性的な組み合わせ」と「知的な組み合わせ」における「観察する」の相互性 205
11.3.3.　「表現的な態度の組み合わせ」 206
11.4.　「モーダルな態度を表す組み合わせ」 208
11.4.1.　「要求的な組み合わせ」 208
11.4.2.　「意図的な組み合わせ」 209
第十二章　状況的な組み合わせ 211
12.1.　「状況的な空間・時間を表す組み合わせ」 212
12.1.1.　「空間を表す組み合わせ」 212
12.1.2.　「時間を表す組み合わせ」 214
12.2.　「状況的量を表す組み合わせ」 215
12.2.1.　「狭義の量的関係を表す組み合わせ」 215
12.2.2.　「物事の重さ、物事の価値・値段 を表す組み合わせ」 215
12.2.3.　「時間的量を表す組み合わせ」 216
12.2.4.　「空間の量を表す組み合わせ」 217
第十三章　外的状況を表す対格名詞的な単位 219
13.1.　「外的時間・期間を表す対格名詞的な単位」 219
13.2.　「外的回数・頻度を表す名詞的な単位」 221
第十四章　対格名詞と動詞との組み合わせの意味分類におけるカテゴリー間の相互的関係 223
14.1.　構造の拡大による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化 224
14.2.　組み合わさる要素の意味的な性質の変化による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化 228
14.3.　意味的な分類がし難い対格名詞と動詞との組み合わせ 234
14.4.　構文的なコンタミネーション 237
14.5.　組み合わさる要素の特殊化に伴う対格名詞と動詞との組み合わせの慣用的な用法 241
第十五章　日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの類似点と相違点 243
15.1.　両者の類似点 243

15.1.1.　両者の基本的な用法 243
15.1.2.　所有を表す組み合わせ 244
15.2.　両者の相違点 245
15.2.1.　知的活動を表す組み合わせ 245
15.2.2.　通達を表す組み合わせ 246
15.2.3.　待遇関係を表す組み合わせ 246
15.2.4.　状況的関係を表す組み合わせ 247
15.2.4.1.　移動を表すもの 248
15.2.4.2.　狭義の状況的関係を表す組み合わせ 250
15.2.4.3.　空間の量を表す組み合わせ 250
15.2.5.　本質的量的関係を表す組み合わせ 251
15.2.5.1.　物の量を表す組み合わせ 251
15.2.5.2.　物事の重さ、物事の価値・値段 を表す組み合わせ 252
15.2.5.3.　特定の過程の回数を表す組み合わせ 252
15.2.6.　人の生理的な状態と心理的な状態を表す組み合わせ 253
15.2.7.　二重対象的な関係を持つ組み合わせ 253
15.3.　終わりに 254
第三部　結論と今後の課題 255
十六章　結論 255
16.1.　セルビア語における対格名詞の現れ方のパターン 255
16.2.　対格名詞の現れ方の分類 257
16.2.1.　対格名詞と動詞との組み合わせ 258
16.2.2.　外的状況を表す対格名詞的な単位 264
16.3.　対格名詞と動詞との組み合わせの体系におけるカテゴリー間の相互関係 265
16.4.　セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせと日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの類似点と相違点 268
16.5.　今後の課題 271
用例出典 273
初出一覧 275
参考文献 276

第一部　序論

第一章　本研究の目的および概要

1.1.　研究の動機および意義

日本語学では言語の現象の分析にあたって単語の語彙的な性質と文法的な性質との関係を考察することによって特定の現象が現れる条件を一般化し説明しようとする研究がある。その際、単語の語彙的な性質と文法的な性質の他にも、文中に現れる諸要素の間の相互関係も考えることによって文の構造を解釈しようとする。このような研究の中では特に奥田靖雄（1968-1972）「を格名詞と動詞とのくみあわせ」が興味深い。この論文では奥田はヲ格名詞と動詞の語彙的な性質と文法的な性質、さらに、これらが現れる文の他の要素との関係も考え、ヲ格名詞と動詞との組み合わせが作る体系を記述している。それにあたって、単に多様な意味的カテゴリーを分類しているのでなく、この体系におけるカテゴリー間の相互関係も徹底的に考察している。

日本語におけるヲ格名詞と動詞との組み合わせの用法はセルビア語の「前置詞なし対格」名詞[1]と動詞との組み合わせに類似しているために、セルビア語における対格名詞の現れ方を理解するために、奥田の研究も参考にする必要があるように思われる。セルビア語学では当然対格名詞の現れ方に関する研究は行われているが、このような方法論を使いその体系の分析が行われた研究は見当たらない。そこで、日本語学の方法論に学びセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせに関する研究を行うことにした。

なお、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方には日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方に類似しているところが多いが、異なるところもある。したがって、本研究ではセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせを日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせに対照させながら、これらの類似点と相違点に関して述べ、本研究を進めたい。そうすることによって、セルビア語学にもセルビアにおける日本語教育学においても貢献できると思われる。

1.2.　研究の目的

本研究では日本語学の方法論を使い、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系を記述したい。その際、対格名詞、動詞および文の他の要素の語彙的な性質と文法的な性質の関係を考え、対格名詞と動詞との組み合わせが現れる条件を設定し、一般化を行っていき

[1] セルビア語学における対格の研究は、「前置詞あり対格」(akuzativ sa predlogom)および「前置詞なし対格」(akuzativ bez predloga)の二つに分かれている。前者は対格名詞が前置詞のいわゆる目的語となる場合を扱い、後者は対格名詞が単独で用いられる場合を扱っている。本研究ではこれ以降「前置詞あり対格」を扱っていないので、「前置詞なし対格」を「対格」と呼ぶ。

たい。なお、セルビア語では名詞の他にも名詞的代名詞[2]、曲用を持つ数詞[3]も名詞と類似した曲用を持ち、対格形で動詞と組み合わさるために、これらも分析の対象に含める。したがって、本研究の対象を「名詞的な単位」[4]と名付けてもよいと考えられる。

対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を記述し一般化することによって、意味的カテゴリーを分類することが本研究の一つの目的であるが、それだけでなく、これらの意味的カテゴリーの間の相互関係、連続性、特定の意味的カテゴリーから他の意味的カテゴリーへの移行などに関しても触れたい。そうすることによって、対格名詞と動詞が作る体系をより全般的に捉え、対格名詞と動詞の組み合わせの諸タイプ間の相互性への理解を深めることができるように思われる。また、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方と比較し、似ている用法が多いが、異なる用法も見られるために、それを考慮に入れながら考察を行い、二つの言語の類似点と相違点に関してもまとめたい。

[2]名詞的代名詞とは、名詞のように、それ自体で独立した文の成分になる代名詞である。例えば、ja「私」、ti「あなた」、on「彼」、 neko「誰か」、ko「誰」 nešto「何か」、svako「誰でも」、svašta「何でも」がその例である。

[3] 数詞 stotina「百」, hiljada「千」, milion「百万」および milijarda「一億」は名詞と似た曲用を持つ。

[4] 名詞的代名詞または数詞を特別に取り上げる必要がない場合、本研究の対象をを便宜的に「名詞」と呼ぶ。

第二章　本論文の構成と略号

2.1.　本論文の略号

本論文で使用した略号は以下のとおりである。

1	1 人称	PST	確定過去
2	2 人称	AOR	アオリスト
3	3 人称	FUT	未来
SG	単数	PASS	受身
PL	複数	APP	能動過去分詞
NOM	主格	PPP	受動過去分詞
GEN	属格	M	男性
DAT	与格	F	女性
ACC	対格	N	中性
INST	具格	NEG	否定
LOC	所格	TRANS	副動詞
REFL	再帰代名詞	PART	分詞
REL	関係代名詞	INF	不定詞
PRES	現在		

2.2.　本論文における記号の説明

- 形態素境界　（グロスの場合、半角になる。）

: 同時共起　（例えば、「PST:1SG」は過去形の 1 人称単数になる）

... 文が省略されること

// 単語の語彙的な意味

〈〉 単語のカテゴリカルな意味

[]　単語の文法的な意味

〈直〉直訳

2.3.　本論文における日本語訳について

本論文における実例の翻訳及び引用の翻訳は全て筆者によるものである。実例の場合は、特定の文章や構造に関する読者の理解を容易にするために、必要に応じて直訳あるいはそれに近い訳を括弧内に〈直〉として示した。

下線およびグロスも筆者によるものである。

第三章　セルビア語に関して

この章ではセルビア語の特徴に関して簡単に述べる。本論文では対格名詞と動詞との組み合わせの体系の記述にあったて対格名詞的な単位の品詞、文中での機能、述語文における位置や他の文の要素との共起が関わってくるために、本章ではセルビア語の文の成分、品詞および文（述語文）の構造に注目して述べる。

3.1.　言語特徴と使用領域

セルビア語はインドヨーロッパ語族に属し、スラブ語派の南スラブ語群の言語である。主にバルカン半島に分布し、セルビアを中心に、クロアチア、ボスニア･ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニアでも話されている。キリル文字およびラテン文字が表記として使われている。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国の時代にはクロアチア語、ボスニア語と一緒に一つのセルボクロアチア語のようにされていた。現在は別の言語として考えられるが、これらの三つの言語の違いは方言程度である。他に関係がもっとも近い言語は、南スラブ語群のブルガリア語、マケドニア語およびスロベニア語である。

筆者はセルビア語を母語としており、セルビア語と日本語の特徴を対照して研究したいと考えている。この章ではそれに先立って、セルビア語の述語文の代表的な構造を考えながら、それを構成する文の成分について紹介してみる。それにあたって、Piper i dr.(2005)、Stevanović(1974)およびStanojčić, Popović(1994)に習い内容をまとめるが、そのうち主にStanojčić, Popović(1994)を参考にする。必要に応じて筆者が例文を補足する。

3.2.　セルビア語における単語および文

セルビア語における構文的単位に広義の文、狭義の文、句および単語がある。

広義の文とは、コミュニケーション上の一つのまとまった内容を表す単位のことである。狭義の文とは、ある一つの事態を構文的に表す単位のことである。広義の文は狭義の文を一つ、あるいは、二つ以上含むことができる。狭義の文には独立語文と述語文があるが、最も典型的な文は述語文である。独立語文とは、述語がなく、コミュニケーション上の特殊な機能のために使われている単位である。独立語文の例を以下に挙げる。

(1)　Požar!

火事!

述語文とは、時制および人称標識を持った述語から成り立つ単位のことである。述語文の例として

(2) Ivan-ø　　<u>je vide-o</u>　　požar-ø.

イワン-NOM:SG　　見る-PST:3SG　　火事-ACC:SG

「イワンは家事を<u>見た</u>。」

が挙げられる。

3.3. 品詞

文の成分の考察のために、品詞も考える必要がある。セルビア語の品詞を主要品詞と補助的品詞に分けることができる。主要品詞とは、文の成分の語彙的な中心になるものであり、補助的品詞は単独で文の成分にならない品詞のことである。これらを以下のようにまとめることができる。

<u>主要品詞</u>

名詞的な単位:　名詞[5]、名詞的代名詞[6]、名詞と似た曲用を持つ数詞[7]

形容詞的な単位:　形容詞[8]、形容詞的代名詞[9]、序数詞[10]

副詞的な単位:　副詞[11]、不変化数詞[12]

動詞[13]

---

[5] knjiga「本」、dečak「男の子」、biblioteka「図書館」、značaj「重要性」などが名詞の例である。

[6]名詞的代名詞とは、名詞のように、それ自体で独立した文の成分になる代名詞である。例えば、ja「私」、ti「あなた」、on「彼」、 neko「誰か」、ko「誰」 nešto「何か」、svako「誰でも」、svašta「何でも」がその例である。

[7] 数詞 stotina「百」, hiljada「千」, milion「百万」および milijarda「一億」は名詞と似た曲用を持つ。

[8] veseo「嬉しい」、dug「長い」、skup「高い」などが形容詞の例である。

[9] 形容詞的代名詞とは、それ自体で独立した文の成分にならず、他の単位を修飾する代名詞のことである。例えば、moj「私の」、tvoj「あなたの」、čiji「誰の」、nečiji「誰かの」、ovaj「この」、taj「その」、ovakav「こんな」、takav「そんな」がその例である。

[10] 序数詞 (prvi「一番目」、drugi「二番目」など) は形容詞と似た曲用を持つ。

[11] polako「ゆっくり」、daleko「遠く」, ovde「ここ」、dobro「よく」などが副詞の例である。

[12] 注 3 にあげた数詞(stotina「百」, hiljada「千」, milion「百万」および milijarda「一億」)の他、jedan「一」から cetiri「四」までは曲用を持つ数詞であるが、それ以降全ては不変化数詞である。

[13] jesti「食べる」, pevati「歌う」, ići「行く」, raditi「働く」などが動詞の例である。

補助的品詞

接続詞[14]

感動詞[15]

小辞[16]

前置詞[17]

3.4. 述語文の種類

セルビア語の文の成分は主要成分および二次的成分に分けることができる。主要成分とは主語と述語であり、二次的成分とは補語、修飾語である。その中で、主語、述語および補語は述語文の成立のために必須の要素であり、修飾語は文に補足的な情報を与える任意の要素であると言える。以下においては、第一にどの必須の要素を要求するかという観点からセルビア語の述語文を記述する。その後、文に補足的な情報を与える文の成分について述べる。

3.4.1. 述語文の基本的な構造

述語文の基本的な構造は主語と述語から成り立つ。主語と述語は性、数、格において一致し、法・時制上の具体的な内容を表している。

主語は述語によって表される物事を指し示す主要成分である。品詞としては常に名詞的な単位、つまり、名詞、名詞句あるいは名詞的代名詞である。人称代名詞[18]であれば、省略されることがしばしばある。主語は典型的に主格で表される。述語が主語に対し形態的に一致すること、文中で現れる再帰代名詞が常に主語のことを指し示すこと、および、主語が文の視点を決めることを根拠に、主語は文の主要成分とされる。

[14] ali「しかし」、ili「～か（あるいは）」、jer「～ので」などが接続詞の例である。
[15] ah「ああ」、oh「おお」などが感動詞の例である。
[16] 小辞の多くは形態的に副詞あるいは接続詞であるが、文の内容に対する話し手の態度を表す機能を持つことから、副詞、接続詞とは別の品詞として立てられている。ただし、疑問や否定を表す小辞のように、そうでないものもある。
[17] na「～の上に」、zbog「～ので」、od「～から」などは前置詞の例である。
[18] 人称代名詞は名詞的代名詞の一つのタイプである。

3.4.2.　動詞述語文

動詞述語は主語と一致する標識を持った動詞である。その標識は人称、性および数を含む。補語を要求しない動詞述語文も多く、このような述語文を主語･述語の単純モデルと言う。動詞述語文の例を以下に挙げる。

(3)　Temperatur-a　　**rast-e.**

気温-NOM:SG　　上がる-PRES:3SG

「気温が**上がる**。」

(4)　Neko-ø　　**dolaz-i.**

誰か-NOM　　来る-PRES:3SG

「誰かが**来る**。」

(5)　Vesel-i　　dečak-ø　　**se**　　**igr-a.**

元気な-NOM:SG　　男の子-NOM:SG　　REFL　遊ぶ-PRES:3SG

「元気な男の子が**遊んでいる**。」

3.4.3.　名詞的述語文

名詞的述語は繋辞および名詞的述語内容語から成り立ち、主語の性質を述べたり、主語を同定したりする。動詞 jesam「であり」（英語の be 動詞に相当）が繋辞として機能し、述語の述語的部分をなす。繋辞は特定の意味を持たず、主語と述語を繋げ、時制･法･みとめ方から文を定めている。繋辞は、述語動詞と同様、主語と一致する。名詞的述語内容語は主語について性質を述べたり、同定を表したりする。名詞的述語内容語になるのは、主語と一致する主格の形容詞的な単位(例(6))、主語と一致する主格の名詞的な単位[19](例(7))、および、前置詞に先行される主格･呼格以外の格の名詞的な単位[20](例(8))である。

(6)　Ivan-ø　　**je**　　**vredan-ø.**

イワン-NOM　　である-PRES:3SG　　まじめ-NOM:SG

[19] この場合、名詞的な単位は主語の性質あるいは主語の同定の両方を表すことができる。
[20] この場合、名詞的な単位は主語の性質しか表さない。前置詞句の形で現れることがほとんどである。その場合、格は前置詞によって定められる。

「イワンは**まじめである**。」

(7) Ivan-ø **je** **učenik-ø.**

イワン-NOM である-PRES:3SG 学生-NOM:SG

「イワンは**学生である**。」

(8) Taj-ø problem-ø **je** **od** **značaj-a.**

その-NOM:SG 問題-NOM:SG である-PRES-3SG ～から 重要だ-NOM:SG

「その問題は**重要である**。」

セルビア語学には「形容詞述語文」というものは存在せず、形容詞的な単位との組み合わせも「名詞述語文」と呼ばれる。

3.4.4. 副詞的述語文

副詞的述語は繫辞および副詞的述語内容語から成り立ち、主語について副詞的内容(場所、状態、時間)を表している。繫辞の特徴は名詞的述語文の場合と同様である。副詞的述語内容語は主語について場所、時間、状態などを表す。副詞的述語内容語になるのは場所･状態･時間を表す副詞的な単位(例(9)、(10)、(11))、名詞的な単位[21]、あるいは、前置詞句(例(12))である。副詞的述語文の例を以下に挙げる。

(9) Fakultet-ø **je** **daleko.**

大学-NOM:SG である-PRES:3SG 遠く

「大学は**遠くにある**。」

(10) Njegovo kretanje **je** **užurbano.**

彼の-NOM:SG 動き-NOM:SG である-PRES:3SG バタバタ

「彼の動きは**バタバタしている**。」

(11) Ispit-ø **je** **sutra.**

試験-NOM:SG である-PRES:3SG 明日

「試験は**明日である**。」

[21]主格･呼格以外の格の名詞的な単位

(12) Bibliotek-a　　je　　pored　　fakultet-a.

図書館-NOM:SG　　である-PRES-3SG　隣　　大学-GEN:SG

「 図書館は**大学の隣にある**。」

なお、名詞的述語文と副詞的述語文を合わせたものを、「動詞述語文」に対して「繫辞的述語文」と呼ぶ。

3.5.　動詞述語文に現れる必須成分（補語）

主語および述語の他、動詞述語文に現れる必須成分は補語である。補語の性質、例えば、どのような格になるか、単純な名詞的成分になるか、前置詞句になるかなどは述語によって定められる。補語には直接目的語、間接目的語、補足述語内容語および副詞的補語がある。

3.5.1.　直接目的語

直接目的語は他動詞の補語になり、典型的には前置詞がつかない対格で現れる。

(13)　Ivan-ø　　vol-i　　Maj-u.

イワン-NOM　　愛する-PRES:3SG　　マヤ-ACC

「イワンは**マヤを**愛している。」

(14)　Ivan-ø　　čit-a　　roman-ø.

イワン-NOM　　読む-PRES:3SG　　小説-ACC:SG

「イワンは**小説を**読んでいる。」

その他、部分的属格(部分的目的語)あるいは否定的小辞に伴う属格(否定的目的語)で現れることもある。

(15)　Popi-la　sam　　malo　　mlek-a.

飲む-PST:1SG　　少し　　牛乳-GEN:SG

「**牛乳を**少し飲んだ。」

(16) Ivan-ø je je-o kolač-a.

イワン-NOM 食べる-PST:3SG お菓子-GEN:PL

「イワンは**お菓子を**食べた。」

(17) Nisam reka-o ni reč-i.

言う-NEG:PST:1SG も 単語-GEN:SG

「**ひと言も**言わなかった。」

直接目的語の存在が含意され、形態的に補語で表さなくてもよい他動詞もいくつかある(pisati「書く」、jesti「食べる」、piti「飲む」、pevati「歌う」、čitati「読む」)。これらの他動詞が直接目的語を伴わずに使われる際、直接目的語が単に省略されているだけの場合もあるが、直接目的語を表さないことによって特別な意味を帯びる場合もある。例えば、次の例は、

(18) On-ø mnogo jed-e.

彼-NOM:SG たくさん 食べる-PRES:3SG

「彼はよく**食べる**。」

よく食べることがその人の特徴であることを表している。あるいは、

(19) On-ø vol-i da piš-e.

彼-NOM:SG 好き-PRES:3SG ～ように 書く-PRES:3SG

「彼は(文章を)**書くのが好きである**。」

という例はその人の文章を書くことが好きだという性質について述べている。

3.5.2. 間接目的語

間接目的語は典型的には自動詞を補う。間接目的語になるのは、動詞の性質によって定められる格を取る名詞的な単位である。格は多様であるが、対格および所格の場合は常に前置詞が先行する。属格および具格は前置詞を必要とする場合もあれば、前置詞を必要としない場合もある。与格は前置詞を必要としない場合がほとんどである。

(20) Ivan-ø　　lič-i　　na　　majk-u.

イワン-NOM　　似ている-PRES-3SG　　～の上に　　母-ACC:SG

「イワンは母に似ている。」

(21) Maj-a　　prič-a　　o　　Ivan-u.

マヤ-NOM　　話す-PRES:3SG　　について　　イワン-LOC:SG

「マヤはイワンについて話している。」

(22) Maj-a　　se　　boj-i　　grmljavin-e.

マヤ-NOM　　REFL　　おびえる-PRES:3SG　　雷-GEN:SG

「マヤは雷におびえている。」

目的語を二種類必要とする動詞もある。この場合、間接目的語も他動詞の補語になると言える。これらの動詞は授受動詞および伝達動詞が多い。これらの動詞は与格の間接目的語および対格の直接目的語を要求する。

(23) Maj-a　　daj-e　　Ivan-u　　knjig-e.

マヤ-NOM　　あげる-PRES:3SG　　イワン-DAT　　本-ACC:PL

「マヤはイワンに本をあげる。」

(24) Maj-a　　je rek-la　　istin-u　　Ivan-u.

マヤ-NOM　　言う-PST:3SG　　真実-ACC:SG　　イワン-DAT

「マヤはイワンに真実を言った。」

3.5.3.　補足的述語内容語

補足的述語内容語を要求する構造は、名詞的述語文と似ており、ある種の動詞(「～なる」および「～思われる」など)および補足的述語内容語から成り立つ。補足的述語内容語とは、述語を補足的に説明することによって、その内容を主語または目的語と関係づける名詞的な単位あるいは形容詞的な単位である。補足的述語内容語は動詞の性質によって主格(例(25)、(26))、具格(例(27))あるいは前置詞 za (「～のために」という意味) および対格の前置詞句(例(28))を取る。

(25) Ivan-ø je posta-o profesor-ø.

イワン-NOM なる-PST:3SG 先生-NOM:SG

「イワンは先生になった。」

(26) On-ø se zov-e Ivan-ø.

彼-NOM-SG REFL 呼ぶ-PRES:3SG イワン-NOM

「彼は自らをイワンと名のる。」

この構造は、動詞を通して名詞的内容あるいは形容詞的内容を主語または目的語と関係付ける点から、広義の名詞的述語文とされることもある。したがって、これらの構造を構成する動詞は半繫辞的動詞と名づけられることもある。しかし、これらは繫辞を含む構造に比べ相違点もある。それは、これらの動詞が繫辞と違い、特定の意味(「なる」、「思う」、「よぶ」など)を持ち、その意味によって補足的述語内容語の性質が定められることである。

この構造は述語動詞が他動詞でも可能である。その場合、補足的述語内容語の内容は、主語ではなく直接目的語と関係付けられる。

(27) Koleg-e Ivan-a smatra-ju izuzetn-im

同僚-NOM:PL イワン-ACC:SG 思う-PRES:3PL 優秀-INST:SG

profesor-om.

先生-INST:SG

「同僚はイワンのことを優秀な先生だと思っている。(イワンは優秀な先生とされる。)」

(28) Izabra-li su Ivan-a za predsednik-a.

選ぶ-PST:3PL イワン-ACC:SG ～のために 大統領-ACC:SG

「イワンを大統領として選んだ。」

3.5.4. 副詞的補語

特定の文においては、主語と関係付けられる内容が完結した情報になるように、動詞の意味を副詞的な単位によって補充する必要がある。この働きをする文の成分を副詞的補語という。副詞的補語というのは、副詞的な意味を持つ単位で、動詞について補充的な情報を与えるものである。この情報がなければ、動詞の意味が不完全になる。副詞的補語になるのは副詞的な単位（副詞および副詞句）、主格・呼格以外の格の名詞的な単位および副詞的な意味

を持った前置詞句である。副詞的補語は典型的に場所(例(29)、(30))、様態(例(31))、量(例(32))および目的(例(33))を表している。

(29) Ja stanuje-m ovde.
私-NOM:SG 住む-PRES:1SG ここ
「私はここに住んでいる。」

(30) Knjig-a se nalaz-i na stol-u.
本-NOM:SG REFL ある-PRES:3SG ～の上に 机-LOC:SG
「本は机の上にある。」

(31) Ivan-ø se ponaš-a čudno.
イワン-NOM REFL 行動をする-PRES:3SG 奇妙な
「イワンは奇妙な行動をする。」

(32) Ov-e cipel-e košta-ju 10000 jen-a.
この-NOM:PL 靴-NOM:PL 値段がある-PRES:3PL 一万 円 - GEN:PL
「この靴は一万円する。」

(33) Ov-a mašin-a se korist-i za
この-NOM:SG 機械-NOM:SG REFL 使用する-PRES:3SG ～のために
pravljenj-e kaf-e.
作ること-ACC:SG コーヒー-GEN:SG
「この機械はコーヒーを作るのに使用する。」

副詞的補語はほとんど自動詞を補うものであるが、他動詞を補う例も多少見られる。「置く」、「載せる」など、ある種の付着を表す動詞は対象および付着先の両方を対格で表せる。そのような文は対格が二つ現れる文である。このうちの二つ目の対格名詞的な単位の前に前置詞句が付く(例(34))の na sto「机の上に」はそうである）。その場合、副詞的な意味は目的語と関係付けられる。

(34) Ivan-ø je stavi-o dokument-a na sto-ø.
イワン-NOM 置く-PST:3SG 書類-ACC:PL ～の上に 机-ACC:SG
「イワンは机の上に書類を置いた。」

3.6.　補足的な情報を与える成分

文に補足的な情報を与える成分として副詞的修飾語、付帯状況修飾語および連体修飾語を挙げることができる。

3.6.1.　副詞的修飾語

副詞的修飾語は主語、述語、補語によって示された内容について補足的な情報を与える。

副詞的修飾語になるのは副詞的な単位、副詞的意味を持つ名詞的な単位または前置詞句である。副詞的修飾語は場所、時間、様態、原因などの意味を表す。

動詞との関係という観点から、副詞的修飾語を**一般的修飾語**および**特定修飾語**の二つに分けることができる。**一般的修飾語**は述語の意味に影響されず、状況を補足的に説明している。これらの修飾語が文中に現れた場合、動詞の意味的タイプを予測することができない。これらは原因(例(35)、(36))、場所(例(37)、(38))、時間(例(39)、(40))、頻度(例(41)、(42))などを表すものである。

(35)　Zbog　loš-eg　vremen-a　otkaza-li smo

～ので　悪い-GEN:SG　天気-GEN:SG　キャンセルする-PST:1PL

piknik-ø.

ピクニック-ACC:SG

「悪天候のためピクニックをキャンセルした。」

(36)　Zbog　loš-eg　vremen-a　igra-li smo

～ので　悪天候-GEN:SG　(スポーツを)する-PST:3PL

tenis-ø　u　sal-i.

テニス-ACC:SG　～の中に　体育館-LOC:SG

「悪天候のためテニスは体育館でしていた。」

(37)　Ovde　igra-mo　tenis-ø.

ここ　(スポーツを)する-PRES:1PL　テニス-ACC:SG

「ここでテニスをする。」

(38) Ovde radi-m svak-og petk-a.

ここ 仕事をする-PRES:1SG 毎-GEN:SG 金曜日-GEN:SG

「毎週金曜日にここで仕事をする。」

(39) Danas igra-m tenis-ø.

今日 (スポーツ) をする-PRES:1PL テニス-ACC:SG

「今日はテニスをする。」

(40) Danas ide-m na piknik-ø.

今日 行く-PRES:1SG ～の上に ピクニック-ACC:SG

「今日はピクニックに行く。」

(41) Često igra-m tenis-ø.

よく (スポーツを)する-PRES:1SG テニス-ACC:SG

「よくテニスをする。」

(42) Često ide-m na piknik-ø.

よく 行く-PRES:1SG ～の上に ピクニック-ACC:SG

「よくピクニックに行く。」

それに対し、**特定修飾語**とは述語の意味によって定められる修飾語である。例えば、移動動詞の場合はその到着点を表す修飾語がつく。

(43) Maj-a id-e kuć-i.

マヤ-NOM 行く-PRES:3SG 家-DAT:SG

「 マヤは家へ行っている。」

また、状態を表す動詞はその状態を起こす要因を表す特別修飾語を要求する。

(44) Ivan-ø se umori-o od trčanj-a.

イワン-NOM REFL 疲れる-APP:M:SG から 走ること-GEN:SG

「イワンは走ることによって疲れた。」

これらは副詞的補語に近いものである。副詞的補語と副詞的修飾語の間は区別し難い場合も少なくない。例えば、

(45) Ivan-ø　trč-i　park-om.

イワン-NOM　走る-PRES:3SG　公園-INST:SG

「イワンは公園を走っている。」

における「park-om（公園を)」が副詞的補語であるか、副詞的修飾語であるかが決め難い例である。

3.6.2.　付帯状況修飾語

付帯状況修飾語（規定的副詞的修飾語、述語的連体修飾語、臨時的連体修飾語ともいう）とは動詞で表される状況の実現の際の主語あるいは目的語の特徴を表す修飾語である。付帯状況修飾語は主語・目的語の様子・状態を表すと同時に、述語の様子・様態も表すので、修飾語と異なる性質を持っている。この点から見ると、付帯状況修飾語は述語内容語に近いとも言える。しかし、述語を通して主語あるいは目的語と関係付けられるわけでなく、独立の成分として現れる。そのため、主語、目的語、述語と関係なく語順を自由に変えることができる。この文の成分は典型的に様態(例(46)、(47))、時間(例(48))、原因(例(49))を表す。

(46)　Ivan-ø　se　vrati-o　sa　trening-a

イワン-NOM　REFL　帰る-APP:M:SG　～から　トレーニング-GEN:SG

umoran-ø.

疲れた-PART:NOM

「イワンは疲れた様子でトレーニングから帰ってきた。」

(47)　Ivan-ø　je doša-o　na　fakultet-ø

イワン-NOM　来る-PST:3SG　～の上に　大学-ACC:SG

sa　zavijen-om　ruk-om.

～と　巻く-PART:INST:SG　腕-INST:SG

「イワンは(包帯を)巻いた腕のまま大学に来ている。」

(48) Kao det-e se doseli-o u Beograd-ø.

として 子供-NOM:SG REFL 引っ越す-PST:3SG ～の中に 地名-ACC：SG

「子供の時、ベオグラードに引っ越した。」

(49) On-ø plač-e tužan-ø.

彼-NOM 泣く-PRES:3SG 悲しい-NOM:SG

「彼は悲しくて泣いている。」

付帯状況修飾語は主に補足的な状況を与えるので、修飾語ではあるが、以下の例のように、特定の動詞と一緒に現れる場合、副詞的補語の役割を果たしている。例(50)の場合、その補語がないと、意味が完結した情報にならない。

(50) Ivan-a smo ostavi-li loše raspolozen-og.

イワン-ACC:SG 残す-PST:1PL 悪く 機嫌-PART:GEN:SG

「(私たちは)イワンを機嫌が悪いまま残しておいた。」

付帯状況修飾語になるのは、主語または目的語と一致する形容詞単位（形容詞、形容詞句、形容詞的代名詞、序数詞）、主格・呼格以外の格の名詞的な単位、名詞的な単位を含んだ前置詞句、および、「kao」という小辞(「として」の意味)と主格・対格の名詞的な単位からなる句である。

3.6.3.　連体修飾語

名詞および名詞句を修飾する文の成分を連体修飾語という。連体修飾語の種類は多様であるが、連体修飾語になる単位の形態的性質によって三つに分けることができる。

3.6.3.1.　形容詞的修飾語

形容詞的修飾語になるのは形容詞的な単位（形容詞、形容詞句、形容詞的代名詞および序数詞）である。これらは、修飾している名詞あるいは名詞句に対し、格、性および数において一致している。形容詞的修飾語は名詞的な単位に多様な意味的側面を与えるが、もっとも代表的なのは名詞的な単位の特徴およびその属性を表すことである。

(51)　Onaj-ø　Ivan-ov　poznanik-ø　je doša-o.

あの-NOM:SG　イワン-GEN:SG　知り合い-NOM:SG　来る-PST:3SG

「**イワンのあの**知り合いが来た。」

(52)　Izloži-li su　veoma　lep-u　slik-u.

飾る-PST:3PL　とても　きれいな-ACC:SG　絵-ACC:SG

「**とてもきれい**な絵を飾った。」

3.6.3.2.　格的修飾語

格的修飾語として使われているのは主格・呼格以外の格の名詞あるいは名詞句である。これらは前置詞を取るものもあれば、取らないものもある。格および前置詞の有無は名詞の性質によって定められる。格的修飾語を意味的に三つのグループに分けることができる。

A　**形容詞的意味を持つもの**は、名詞的な単位の特徴あるいは属性を表す。これらは「どんな」、「誰の」、「何から/で」、「どの種類の」という質問について情報を与える。

(53)　Kupi-la sam　haljin-u　siv-e　boj-e.

買う-PST:1SG　ドレス-ACC:SG　グレー-GEN:SG　色-GEN:SG

「**グレーの**ドレスを買った。」

B **関係を表すもの**は、名詞的な単位を関係的に位置づける。修飾語の格あるいは前置詞を取るか取らないかは名詞の性質によって定められる。

(54) Oseti-la je ljubav-ø prema dec-i.

感じる-PST:3SG 愛-ACC:SG に対する 子供-DAT:PL

「**子供への**愛を感じた。」

C **副詞的な意味を持つもの**は、場所(例(55))、時間(例(56))、手段(例(57))、原因(例(58))などを表す。これらはほとんど前置詞および名詞的な単位の組み合わせであるが、副詞でも多少現れる。

(55) Letovanj-e na mor-u je

夏休み-NOM:SG ～の上に 海辺-LOC:SG である-PRES:3SG

zabavn-o.

楽しい-NOM:SG

「**海辺での**夏休みは楽しい。」

(56) Vožnj-a po noć-i je

ドライブ-NOM:SG ～の上に 夜中-LOC:SG である-PRES:3SG

opasn-a.

危ない-NOM:SG

「**夜中の**ドライブは危ない。」

(57) Vožnj-a autobus-om je

バスに乗ること-NOM:SG バス-INST:SG である-PRES:3SG

dug-a.

長い-NOM:SG

「**バスに**乗ることは長い。」

(58) Radost-ø zbog pobed-e je

喜び-NOM:SG ～ので 勝利-GEN:SG である-PRES:3SG

velik-a.

大きい-NOM:SG

「勝利のための喜びは大きい。」

3.6.3.3.　名詞的修飾語

これらは名詞的な単位を限定的に特徴づける名詞である。これらは名詞的な単位に対し格および数において一致する。

(59)　vozač-ø　　početnik-ø　→　vozač-i　　početnic-i

運転手-NOM:SG　初心者-NOM:SG　　運転手-NOM:PL　初心者-NOM:PL

「初心者の運転手」

(60)　pas-ø　　lutalic-a　→　ps-i　　lutalic-e

犬-NOM:SG　野生　　犬-NOM:PL　野生 - NOM:PL

「野生の犬」

3.7.　まとめ

以上の考察から、セルビア語の述語文における文の成分を以下のようにまとめることができる。

Ⅰ　主要成分

主語

述語 -　動詞述語、名詞的繋辞述語、副詞的繋辞述語

Ⅱ　二次的成分

補語 - 直接目的語、間接目的語、補足的述語内容語、副詞的補語

修飾語 - 副詞的修飾語、付帯状況修飾語

連体修飾語− 形容詞的修飾語、格的修飾語、名詞的修飾語

また、セルビア語の述語文は、どの文の成分を要求するかによって以下のようにまとめることができる。それぞれの文の種類の後ろに、本文で挙げた例文のうち該当するものの番号を記す。

Ⅰ動詞述語文

A 補語を必要としない文

主語・述語文　(例(3)～(4))

補足的な情報を与える成分を含む文　(例(5)、(32)、(33)、(38)、(40)、(42)、(43)、(44)、(46)～(49)、(51)、(55)～(58))

B 補語を要求する文

直接目的語を要求する文　(例(13)～(17))

間接目的語を要求する文　(例(20)～(22))

二重目的語を要求する文　(例(23)、(24))

補足的述語内容語を要求する文　(例(25)、(26))

目的語および補足的述語内容語を要求する文　(例(27)、(28))

副詞的補語を要求する文　(例(29)～(31))

副詞的補語および目的語を要求する文　(例(34))

補語および補足的な情報を与える成分を含む文　(例(35)～(37)、(39)、(41)、(50)、(52)～(54))

Ⅱ　繋辞述語文

名詞的述語文　(例(6)～(8))

副詞的述語文　(例(9)～(12))

第四章　先行研究

この章ではセルビア語の前置詞なし対格名詞に関する代表的な研究を紹介してから、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの研究に関して述べる。そして、これらの研究における問題点と本研究との関連性を紹介していく。

セルビア語学の対格名詞的な単位の用法の代表的な研究として Gortan-Premk(1971)『セルボ・クロアチア語における前置詞なし対格を含む句』と Arsenijević(2012) 『セルビア標準語の直接目的語を表す格』が挙げられる。これらの研究はセルビア語学における対格の研究の系統を示し、詳細に分類しているので、本研究において参考にする価値がある。Gortan-Premk(1971)と Arsenijević(2012)からは対格名詞的な単位の用法に関しても、これらの文中の機能に関しても学ぶことができる。ただし、これらの研究では意味分類においても方法論においても問題点が多く見られ、その改善の必要性が感じられる。特に、明確な基準を元に定まった方法論を用いて、対格名詞的な単位の用法を分析する必要性が感じられる。

この点に関しては奥田(1968-1972[1983]) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」を参考にすることができる。奥田(1968-1972[1983])はヲ格名詞と動詞との組み合わせを分析する際に、豊富な実例を元に要素の語彙的な性質と文法的な性質も考慮に入れながら、特定の意味が現れる条件を一般化している。この分析の仕方はセルビア語学に見られる、意味だけを重視する分析の仕方とはかなり異なり、本研究において使う価値があると思われる。その上、奥田(1968-1972[1983])は分類における意味的カテゴリーを詳細に立てているだけでなく、カテゴリー間の相互関係も十分に考察している。そうすることによって、ヲ格の名詞と動詞との組み合わせの体系をより全体的に捉えている。このことは奥田(1968-1972[1983])の研究において最も著しいところであり、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系の分析にあたっても考察に含める必要があると思われる。セルビア語学においては意味的カテゴリー間の相互関係に関して述べた研究がないために、この進め方は有意義であると思われる。

日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの体系をセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系に比べると、似ている点もあるが、異なる点もあるので、日本語学の方法論と意味分類を使うことによってこれらの二つの言語における用法の類似点と相違点も明らかにすることができる。ただし、奥田(1968-1972[1983])の方法論を全く批判的に捉えないのかと言えば、そうではない。奥田(1968-1972[1983])の方法論にも問題点が認められるために、それを早津（2005、2015、2016）に基づき拡大し、本研究に適した方法論を考える。

4.1.　セルビア語学の先行研究

4.1.1.　Gortan-Premk(1971)「セルボ・クロアチア語における前置詞なし対格を含む句」

セルビア語学における対格の研究は、「前置詞あり対格」(akuzativ sa predlogom)および「前置詞なし対格」(akuzativ bez predloga)の二つに分かれている。前者は対格名詞が前置詞のいわゆる目的語となる場合を扱い、後者は対格名詞が単独で用いられる場合を扱っている。[22]

次の例では「novčanik-ø」(財布)は「前置詞なし対格」名詞であり、「u torb-u」(かばんに)は「前置詞あり対格」名詞である。

(61)　Stavi-la　sam[23]　novčanik-ø　u　torb-u.

入れる-PST:1SG　財布-ACC:SG　～の中に　かばん-ACC:SG

「財布をかばんの中に入れた。」

「前置詞なし対格」の代表的な研究として、Gortan-Premk(1971)「セルボ・クロアチア語における前置詞なし対格を含む句」[24](*Akuzativne sintagme bez predloga u srpskohrvatskom jeziku*)がある。この論文においてGortan-Premkは「前置詞なし対格」名詞を含む句の構造、意味および機能について述べているが、その中でも意味について最も詳しく書いている。「前置詞なし対格」名詞を含む句は大きく「対象的な関係を持つ句」(sintagme objekatskih odnosa)、「二重対象的な関係を持つ句」(sintagme dvostrukih objekatskih odnosa)および「副詞的関係を持つ句」(sintagme adverbnih odnosa)に分かれる。それぞれのグループはさらに詳細に分かれる。Gortan-Premk(1971)はセルビア語と日本語の対照研究の上でも有益であると思われる。しかし、その記述には問題点が少なくない。

Gortan-Premk(1971)はロシア語のヴィノグラードフの論文(Виноградов В.В.(1947a)、(1947b)、(1950))を参考にして、セルビア語の「前置詞なし対格」を分析している。日本語学において奥田(1968-72)も同じヴィノグラードフの論文を参考にして、日本語のヲ格と動詞の連語について研究している。実証性、体系性、論理性において、奥田の論文のほうがすぐれていると思われるので、日本語についての奥田の分析に学びながら、セルビア語について分析することには大きな意義があると考える。本章においては、4.1.1.1. 節

[22] 英語学では「前置詞+名詞」の構造は前置詞が主要部で名詞は前置詞の目的語であるとされるが、セルビア語学では、名詞がいわば主要部で、前置詞を介して動詞と関係を結ぶかどうかが問題とされる。
[23] セルビア語の確定過去は 動詞 jesam (「be 動詞」)の現在形と能動過去分詞から成り立つ。確定過去の部分に下線を引く(例(61)において「stavila sam」)。
[24] Gortan-Premk は名詞と動詞の組み合わせを句と呼ぶ。したがって、以下「句」と訳されるものは名詞と動詞の組み合わせを表す。

において Gortan-Premk(1971)にそって「セルボ・クロアチア語における前置詞なし対格を含む句」の分析を詳しく紹介する。そして、4.1.1.2. 節において、その問題点について、奥田(1968-1972)を参考にしながら指摘する。

本章 4.1.1.1.節の例文は Gortan-Premk(1971)に掲出されているものである。ただし、原文をそのまま引用したものも多少あるが、ほとんどが適宜省略して示した。4.1.1.2. 節の例文は筆者の作例である。

本論文では「前置詞あり対格」を扱っていないため、以下「前置詞なし対格」を「対格」と呼ぶ。

4.1.1.1. Gortan-Premk (1971) による「前置詞なし対格」を含む句の意味

この節においては Gortan-Premk(1971)による対格を含む句の意味についてまとめる。

I 対象的な関係を持つ句

「対象的な関係を持つ句」(sintagme objekatskih odnosa)において見られる対格の意味は対格の基本的な意味である。この場合、対格で示される事物は動詞が表す過程に完全に含まれる対象である。

「対象的な関係を持つ句」は三つのグループに分かれる。

I.I. 具体的な対象的な関係を表す句(sintagme s objektima konkretnih odnosa)

この種の関係を作る動詞は他動詞である。動詞は具体的(物理的あるいは精神的)動作を表す。その動作の影響を受けて、対格で示される対象が変化していく。対象の変化の種類に応じて、このグループの句を細かく分けることができる。

I.I.I. 生産的関係を表す句(sintagme kreativnih odnosa)

このタイプの句は事物の生産あるいは破壊を表している。句の主要部である動詞は生産的な動作あるいは破壊的な動作およびその動作の結果を表している。

a)生産的関係を表す句(sintagme kreativnih odnosa)

このタイプの句の対象は動詞が表す動作によって作られた具体物を表している。

(62)	Napravi-ti	rup-u	「穴を開ける」
	作る-INF	穴-ACC:SG	

精神的な活動の結果として成り立つ抽象的概念もこのグループに入る。

(63) Izmisli-ti　　laž-ø　　「うそを作り出す」

作り出す-INF　　うそ-ACC:SG

b)破壊的関係を表す句(sintagme destruktivnih odnosa)

このグループは、対象が動作の影響によってなくなる(例(64))または破壊される(例(65))ことを表す。

(64) Ispi-ti　　vod-u　　「水を飲みほす」

飲みほす-INF　　水-ACC:SG

(65) Zapali-ti　　kuć-u　　「家を燃やす」

燃やす-INF　　家-ACC:SG

I.I.II.　加減的・変化的関係を表す句 (sintagme modifikativno-transformativnih odnosa)

このグループでは、対象が質においてあるいは量において変化していく。対象は具体物、生き物または抽象的な概念を表している。まず、「質的変化」の例を挙げる。

(66) Pra-ti　　ruk-e　　「手を洗う」

洗う-INF　　手-ACC:SG

続いて、「量的変化」の例を挙げる。

(67) Smanji-ti　　plat-u　　「給料を減らす」

減らす-INF　　給料-ACC:SG

I.I.III.　対象無変化の単純な含意を表す句(sintagme s odnosima prostog obuhvatanja i angažovanja bez transformacija)

この種の句において主体は対象に対して積極的に働きかけ、対象はその動作に含まれるが、変化しない。対格で示される対象は具体物(68)であってもいいし、抽象的なもの(69)であってもよい。

(68)　Udari-ti　　nek-oga　　「誰かを叩く」

叩く-INF　　誰か-ACC:SG

(69)　Koristiti　Sunčevu　　energiju

使う-INF　太陽の-ACC:SG　エネルギー-ACC:SG　「太陽のエネルギーを使う」

このグループには、物理的な接触対象だけでなく、言語活動の対象も含まれる。

(70)　Laga-ti　　muž-a　　「夫をだます(〈直〉夫にうそをついてだます)」

うそをつく-INF　夫-ACC:SG

(71)　Grdi-ti　　nek-oga　「誰かを叱る」

叱る-INF　　誰か-ACC:SG

このグループに属する動詞の中には、同じ対象項目を対格としてでも与格としてでも取ることができる動詞がある。これらは lagati(うそをつく)、savetovati(アドバイスする)、pomagati(手伝う/助ける/援助する)、smetati(邪魔する)、suditi(評価する/裁判する)などである。対格を取るか与格を取るかにより意味的な違いが現れることがある。

例えば、Gortan-Premk は、pomagati(手伝う/助ける/援助する)が与格を取る場合には、手伝うことの目的が強調されるとする。そして、対格を取る場合には、手伝うことの対象が強調される、言い換えれば、対格を取る場合は、手伝うことによって対象を完全に含みこむことを表していると述べられている。[25]

[25] Gortan-Premk (1971) はこの主張をこれ以上詳しく説明していないので、理解し難い。Gortan-Premk(1971)の意図はこういうことであろうかと思われる。すなわち、与格を取る場合には、単に誰かに援助を与えるということを表しており、一方、対格を取る場合には、お金などの手段によって誰かを守るあるいは育てるといった事情を表していると言いたいようである。この理解が正しければ、与格を取る名詞の文法的な意味は「相手」に近いのに対し、対格を取る名詞は「対象」になると考えられる。

(72) Ver-a　　pomaž-e　　čovek-u.

信仰-NOM:SG　　手伝う-PRES:3SG　　人-DAT:SG

「信仰は人に力を貸す。(〈直〉信仰は人を助ける。)」

(73) Car-ø　　pomaž-e　　siromašan-ø　　narod-ø.

皇帝-NOM:SG　　手伝う-PRES:3SG　　貧乏-ACC:SG　　庶民-ACC:SG

「皇帝が貧乏な庶民を支援している。」

また、savetovati/posavetovati(アドバイスする、相談する)は与格を取る場合には「誰かにアドバイスを与える」という意味になるが、対格を取る場合は「アドバイスにより誰かを助ける、支える」という意味になると述べられている。

(74) U　　sel-u　　tog-a　　čovjek-a　　bi-o　　jedan-ø

～の中に　村-LOC:SG　その-GEN:SG　人-GEN:SG　いる-PST:3SG　一人-NOM:SG

pametan-ø　　čovjek-ø,　　pa　　je　odni-o　　t-u

頭が良い-NOM:SG　人-NOM:SG　そして　持っていく-PST:3SG　その-ACC:SG

bundev-u　　k　　njem-u,　　da　　mu[26]　　on-ø

かぼちゃ-ACC:SG　～に　彼-DAT:SG　～ように　～彼-DAT:SG　彼-NOM:SG

savjet-uje[27]　　što　　je　　to-ø.

アドバイスする-PRES:3SG　何-NOM:SG　である-PRES:3SG　それ-NOM:SG

「その人の村には一人の頭の良い人がいたので、それは何なのか彼にアドバイスしてもらえるように、彼にそのかぼちゃを持っていった。」

(75) Niko-ga　　da　　je　　posavet-uje,

誰も～ない-GEN:SG　～ように　彼女-ACC:SG　アドバイスする-PRES:3SG

[26] セルビア語の人称代名詞は強調されている形および強調されていない形がある。この例において「mu」は「on」(彼)の与格の強調されていない形であり、「njemu」は同じ人称代名詞の与格の強調されている形である。

[27] Savjetovati は savetovati のイェ方言のヴァリアントである。

セルビア語、クロアチア語、ボスニア語の主要な方言としてシュト方言がある。シュト方言の下位区分はスラブ祖語の母音「ヤト」(ѣ)の変化によるものである。「ヤト」が、「e」となるものをエ方言(セルビア語の標準形)、「ije/je」となるものをイェ方言、「i」となるものをイ方言と呼ぶ(ekavski dijalekat, ijekavski dijalekat、ikavski dijalekat)。「アドバイスする」はそれぞれの方言において savetovati、savjetovati、savitovati のようになる。

da　　je　　upu-ti,　　niko-ga

～ように　　彼女-ACC:SG　　指導する-PRES:3SG　　誰も～ない-GEN:SG

da　　joj　　pomogn-e.

～ように　　彼女-DAT:SG　　手伝う-PRES:3SG

「誰も**彼女にアドバイスせず**、彼女を指導せず、また誰も彼女を助けない。」

一方、Gortan-Premk (1971) は lagati(うそをつく)あるいは smetati(邪魔する)の場合は、対格を取るか与格を取るかによる意味的な違いがほとんど見られないとする[28]。

なお、これらの動詞が対格も与格も取ることができるという傾向は、スラブ語族の中でもセルビア語の特徴であると言える。他のスラブ語ではこれらに相当する動詞は与格のみを取るのが普通である。

I.I.IV.　動的関係を表す句(sintagme mobilnih odnosa)

このタイプの句においては、動作の実行によって空間における対象の場所が変わる。場所の変化の種類やそれが行われる方法は動詞の意味による。

(76)　Stavi-ti　　knig-u　　pod　　jastuk-ø　　「**本を**枕の下に置く」

置く-INF　　本-ACC:SG　　～の下に　　枕-ACC:SG

対象が衣服を表し、動詞がその着脱を表す句もこのグループに入る。

(77)　Skinu-ti　　haljin-u　　「**ドレスを**脱ぐ」

脱ぐ-INF　　ドレス-ACC:SG

上記の例文は動作主の物理的な動作によって行われるものである。しかし、このグループには動作主の物理的な動作を表すものだけでなく、動作対象の移動を促す指示などを表すものもある。

[28]　意味的な違いはほとんどないと思われるが、現代セルビア語では lagati(うそをつく)が対格名詞を取ることが多く、与格名詞を取ることが少なくなっている。また、smetati(邪魔する)は与格名詞を取るのが普通であり、対格名詞を取る例がほとんど見られない。

(78) Protera-ti　ljud-e　iz　zemlj-e　「人々を国から追い出す」

追い出す-INF　人-ACC:PL　～から　国-GEN:SG

また、乗り物の運転を表す句もこのグループに属する。

(79) Vozi-ti　kol-a　「車を運転する」

運転する-INF　車-ACC:PL

このグループに属する特別なものとして、対象が身体部位を表し、動詞がその部位が含まれる動作を表す句がある[29]。

(80) Podi-ći　glav-u　「頭を上げる」

上げる-INF　頭-ACC:SG

I.I.V.　動的関係の変化を表す句(sintagme s modifikacijama mobilnih odnosa)

動詞が表す動作の影響によって対象の動的性質が変化していく。動的性質の変化は方向の変化と動作の速さの変化を含む。

(81) Ubrza-ti　hod-ø　「歩みを速める」

速める-INF　歩くこと-ACC:SG

(82) Okrenu-ti　kol-a　udesno　「車を右に曲がらせる」

曲がらせる-INF　車-ACC:PL　右に

このグループに属する動詞は方向の変化と動作の速さの変化に限られているので、これらの数と使用頻度は少ない。

[29] このタイプの動詞について、Gortan-Premk は、身体部位が体に固定され、ほかの対象に比べて移動性が低いという点で、このタイプの組み合わせは特別なものであるが、表現する言語事実はほかの「動的関係を表す句」と同様であるとする。

I.I.VI.　対象の相対的な変化を表す句(sintagme s relativnim promenama objekta)

このタイプの句においては、対象が変化せず、他の要素(例えば、主体、手段、方法を表す要素)が対象に対して位置や関係を変える。そのため、対象の変化は相対的で間接的であると言える。

(83)　Pokri-ti　lic-e　maram-om　「スカーフで顔を覆う」
覆う-INF　顔-ACC:SG　スカーフ-INST:SG

(84)　On-a　ga　dočeku-je　lepo.
彼女-NOM:SG　彼-ACC:SG　出迎える-PRES:3SG　よく(親切に)
「彼女は彼を親切に出迎える。」

istaći(強調する)およびpokazati(見せる)もこのグループに含まれる。

(85)　Ista-ći　njegov-u　vrednost-ø　「彼の価値を強調する」
強調する-INF　彼の-ACC:SG　価値-ACC:SG

また、対象に対する主体の態度の変化や対象の身分の変化を引き起こすことを表す動詞もこのグループに含まれる。

(86)　Ispisa-ti　det-e　iz　škol-e　「子供を退学させる」
退学させる-INF　子供-ACC:SG　～から　学校-GEN:SG

また、naslediti「受け継ぐ」、dobiti「もらう」、pokloniti「贈る」、dati「あげる」、kupiti「買う」、prodati「売る」、naručiti「注文する」などの動詞もこのグループに属する。

I.I.VII.　賠償的関係を表す句(sintagme kompenzacionih odnosa)

これらの句は動詞が対象のための賠償として行われる動作を表している。zameniti「替える」、pokajati「反省する」、osvetiti「かたきを討つ」、platiti「払う」のような動詞がこのグループに入る。

(87) Osveti-ti　　mrtv-og　　oc-a　　「死んだ父のかたきを討つ」

かたきを討つ-INF　死んだ-ACC:SG　父-ACC:SG

(88) Iskaja-ti　　svoj-e　　greh-e　　「自分の罪を反省する」

反省する-INF　自分の-ACC:PL[30]　罪-ACC:PL

I.II. 抽象的な対象的な関係を表す句 (sintagme s objektima apstraktnih odnosa)

「具体的な関係を表す句」は対象の生産あるいは変化を表すものが多い。しかし、「抽象的な対象的な関係を表す句」にはそのような傾向が見られず、ただ、主体と対象の(抽象的な)関係が述べられているだけである。このタイプの句において対象は動詞が表す過程に含まれているとは言えるが、それによって変化を被るとは言えない。

I.II.I. 所有関係を表す句(sintagme posesivnih odnosa)

このタイプの句は所有関係を表す。このタイプの句を作る動詞は imati(持つ)および posedovati(所有する)である。対象は主体が所有する具体物 (89) 、主体の身体部位 (90) あるいは主体の外部に存在する関係物 (91) を表す。

(89) Ima-ti　　kuć-u　　「家を持つ」

持つ-INF　家-ACC:SG

(90) Ima-ti　　brkov-e　　「口ひげをはやす (〈直〉ひげを持つ) 」

持つ-INF　口ひげ-ACC:PL

(91) Ima-ti　　razlog-ø　　ljutnj-e　「怒りの理由を持つ」

持つ-INF　理由-ACC:SG　怒り-GEN:SG

I.II.II. 知覚的、認知的関係を表す句(sintagme opažajnih i saznajnih odnosa)

このタイプの句を作る動詞は知覚的作用 (gledati(見る)、čuti(聞く)、mirisati(嗅ぐ)等) 、認知的作用 (saznati(知る)、učiti(学ぶ)等) 、あるいは、これらに似たような作用 (čitati(読む)、tumačiti(解釈する)等) を表す。

知覚的作用を表す文脈において対象は具体物、生き物あるいは抽象的な概念を表す。視覚的作用を表す文脈においては、対象が具体物あるいは生き物を表すことが多い。

[30] 代名詞 svoj は形容詞的代名詞なので、日本語訳では「自分の」として示しておく。形容詞的代名詞はそれ自体で独立した文の成分にならず、他の単位を修飾する。この場合は形容詞的代名詞 svoj「自分の」が名詞 greh「罪」を修飾する。

92) Vide-ti　　putnik-a　　「旅人を見る」

見る-INF　　旅人-ACC:SG

聴覚的作用を表す文脈においては、対象は具体物も抽象的な概念も表すことができる。

(93)Ču-ti　　smeh-ø　　dec-e　　「子供の笑い声を聞く」

聞く-INF　　笑い声-ACC:SG　　子供-GEN:SG

認知的作用を表す場合、対象が主体の認知的作用によって含まれる具体物あるいは抽象的な概念を表している。

(94) Razume-ti　　zadatak-ø　　「問題を理解する」

理解する-INF　　問題-ACC:SG

(95) Zapamti-ti　　reč-i　　pesm-e　　「歌の歌詞を覚える」

覚える-INF　　単語-ACC:PL　　歌-GEN:SG

I.II.III.　感情的関係を表す句(sintagme emotivnih odnosa)

このタイプの句には二種類がある。まず、主体における感情的な過程を表す句がある。対象はその感情的な過程を起こす元になるものであるとも言える。その例を以下に挙げる。

(96) Vole-ti　　nek-oga　　「誰かを愛する」

愛する-INF　　誰か-ACC:SG

(97) Omrznu-ti　　život-ø　　「人生が嫌いになる」

嫌いになる　　人生-ACC:SG

次に、動詞が願望、希望や要求を表し、対象が願望・希望の志向先としての物事を表す句がある。

(98) Žele-ti　　bogatstvo-ø　　「財産を望む」

望む-INF　　財産-ACC:SG

(99) Traži-ti　　pomoć-ø　　od　　nek-oga

求める-INF　　手伝い-ACC:SG　　～から　　誰か-GEN：SG

「誰かから手伝いを求める」

いずれのタイプも対象が具体物であってもいいし、抽象物であってもよい。

I.II.IV.　質的関係を表す句(sintagme kvalifikativnih odnosa)

このタイプの句は動詞が主体が行う過程を表すだけでなく、主体の能力についても述べる。そのため、このタイプの句が表すのは主体の質的描写であるとも言える。これらの最も代表的なのは、動詞 znati(知る/分かる)を含む句である。

(100) Zna-ti　　nemački-ø　　i　　engleski-ø

知る-INF　　ドイツ語-ACC:SG　　～も　　英語-ACC:SG

「ドイツ語と英語ができる（〈直〉ドイツ語と英語を知っている)」

基本的な用法において異なる「対象的な関係を表す句」も「質的関係」を表す場合がある。例えば、動詞 gledati(見る)は基本的な用法において「知覚的関係」を表すが、次のような文においては「知覚できる」という意味になる。

(101) Posle　operacij-e　vid-i　samo　velik-e　predmet-e.

～の後　手術-GEN:SG　見る-PRES:3SG　～だけ　大きい-ACC:PL　物-ACC:PL

「手術の後、大きな物だけが見える。（〈直〉手術の後、大きな物だけを見る。)」

I.II.V.　主体の状態を表す句(sintagme sa odnosima subjektovih stanja)

このタイプの句は、対格名詞が動詞で表されている主体の状態を詳しく説明する。このタイプの句は「感情的な関係を表す句」(I.II.III 節)や「質的関係を表す句」(I.II.IV.節)と意味的に近い。

(102) Bolova-ti　　bolest-ø　　「病気に苦しむ」

苦しむ-INF　　病気-ACC:SG

(103) Podnosti-ti　　udarc-e　　「打撃を我慢する」

我慢する-INF　　打撃-ACC:PL

I.II.VI.　文法的目的語（論理的主語）の状態を表す句(sintagme s odnosima stanja gramatičkih objekata (tzv. logičkih subjekata))

このタイプの句において、対格は動詞で表される状態と文法的な主語で表される事物によって影響される人あるいは生き物を表している。この構造において対格で示される文法的な目的語は論理的な主語となり、文法的な主語は対格で示される目的語の状態を起こす原因をしている。

(104) Guš-i　　ga　　kašalj-ø.

息苦しくさせる-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　咳-NOM:SG

「彼は咳で息苦しくなっている。（〈直〉咳が彼を苦しくさせる。）」

(105) Bol-i　　ga　　nog-a.

痛む-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　足-NOM:SG

「彼は足が痛い。（〈直〉足が彼を痛くさせる。）」

I.III. 空間的対象的な関係および時間的対象的な関係を表す句(sintagme s objektima prostornih i vremenskih odnosa)

このタイプの句を作る動詞は、他の「対象的な関係を表す句」と同じように、他動詞であり、対象が含まれる過程を表しているが、空間的な意味と時間的な意味を持っているので別のグループとして立てることができる。

I.III.I.　空間的対象的な関係を表す句(sintagme objekatsko prostornih odnosa)

このタイプの句はある障害物を乗り越える、または、ある空間を渡ることを表している。

(106) Pre-ći　　ulic-u　　「道路を渡る」

渡る-INF　　道路-ACC:SG

(107) Prepliva-ti　　rek-u　　「川を泳ぎ渡る」

泳ぎ渡る-INF　　川-ACC:SG

I.III.II.　時間的対象的な関係を表す句(sintagme objekatsko-vremenskih odnosa)

このタイプの句は時間を過ごすことを表している。

(108) Proves-ti　　dan-ø　　「一日を過ごす」

過ごす-INF　　一日-ACC:SG

(109) Prožive-ti　　mladost-ø　　u　　t-om　　grad-u

生きる-INF　　青年時代-ACC:SG　　～の中に　その-LOC:SG　　町-LOC:SG

「青年時代をその町で暮らす」

II. 二重対象的な関係を持つ句(sintagme s dvostrukim objekatskim odnosima)

このタイプの句では、動詞の要求する対象が二つある。二番目の対象は動詞に関わっているだけでなく、一番目の対象にも関わっている。

II.I.　二重対格を持つ句(sintagme s dvojnim akuzativom)

このタイプの句における動詞は učiti/naučiti/poučiti(教える)、moliti /zamoliti(頼む)、pitati/zapitati/upitati(聞く)など、伝達や言語活動を表すものである。一番目の対格は動詞が表す過程に含まれる人であり、二番目は動詞の過程の内容あるいは目的を詳しく指定している。

(110) Uči-ti　　đak-e　　pesm-u　　「生徒に歌を教える」[31]

教える-INF　　生徒-ACC:PL　　歌-ACC:SG

(111) Pita-ti　nek-oga　　pitanj-e「誰かに質問をする（〈直〉誰かを質問を聞く）

聞く-INF 誰か-ACC:SG 質問-ACC:SG

[31] 日本語では二重ヲ格構文がないため、例文の翻訳において動詞が表す過程で含まれる人をニ格で表す。

II.II.　述語的対格を持つ句(sintagme s predikativnim akuzativom)

これらは現代語では見られないので、ここでは省略する。

III. 副詞的関係を持つ句(akuzativne sintagme adverbnih odnosa)[32]

ここまでの句は対象的な関係を表していたが、これらは対象的な関係を含まず、副詞的な関係を表している。

III.I.　時間的関係を表す句(sintagme vremenskih odnosa)

このタイプの句は対格が動詞で表される過程の行われる時間あるいは期間を表している。[33] dan(一日)、jutro(朝)、noć(夜)、čas(瞬間)など相対的に短い時間を指定する表現を含む。そして、これらの単語は svaki「毎-」などのような修飾語を伴うので、対格の単位が二つ現れると言える。

このタイプの表現は対格だけでなく、属格を取ることもある。

(112)　Svak-i　dan-ø　id-e　u　kupovin-u.

毎-ACC:SG　日-ACC:SG　行く-PRES:3SG　～の中に　買い物-ACC:SG

「毎日買い物をしに行く。」

(113)　Svak-i　čas-ø　usta-je　sa　mest-a.

毎-ACC:SG　瞬間-ACC:SG　立つ-PRES:３SG　～から　席-GEN:SG

「しょっちゅう席を立つ。」

[32] 「対象的な関係を表す句」とは違って、このタイプの句は動作が行われる時間あるいは量(普通文中に副詞で表すことが多い要素)を表すので、「副詞的関係を表す句」と名づけられると思われる。また、「対象的な関係を表す句」における対格名詞が文中で直接目的語の機能を果たすのに対し、このタイプの句における対格名詞は(普通は副詞で表される)副詞的修飾語あるいは副詞的補語の機能を果たすというところにもこの名づけの動機があると思われる。

[33] このタイプの句は「時間的対象的な関係を表す句」とは異なる。Gortan-Premk はこのことについて説明していないが、「時間的対象的な関係を表す句」における対格名詞が「過ごす対象としての時間」を表すのに対し、「時間的関係を表す句」における対格名詞は動作の対象とならず、「動作が行われる時間」を表していると思われる。

この二つのタイプの句の違いは、動詞の意味的な種類の違いに現れる。「対象的時間的関係を表す句」を作る動詞は数が少なく、provesti/provoditi(過ごす)、presedeti(座って過ごす)、 prespavati(寝て過ごす)のようなものに限られる。一方、 「時間的関係を表す句」を作る動詞には意味的な制限がない。

また、この二つのタイプの句における対格名詞が文中に果たす機能も異なる。「時間的対象的な関係を表す句」における対格名詞は直接目的語になるのに対し、「時間的関係を表す句」における対格名詞は副詞的修飾語になる。

godina(一年)、mesec(一月)、nedelja(一週間)など相対的に長い時間を指定する表現は属格を取る。

(114) Svake godine idem na more.

毎-GEN:SG 年-GEN:SG 行く-PRES:1SG ～の上に 海-ACC:SG

「毎年海を訪れる。」

III.II. 量的関係を表す句(sintagme mernih odnosa)

このタイプの句は三つのグループに分かれる。

III.II.I. 本質的量的関係を表す句(sintagme pravih mernih odnosa)

このグループでは三つの下位類が見られる。第一に対格で示されるものが属格で示されるものの量を表している組み合わせがある。

(115) Kupu-je kilogram-ø jabuk-a.

買う-PRES:３SG 一キロ-ACC:SG りんご-GEN:PL

「りんごを一キロ買っている。（〈直〉りんごの一キロを買っている。）」

第二に、物事の価値、値段あるいは重さを表している組み合わせがある。このタイプの句は自動詞と組み合わさる点で特別なものであると言える。これらを作る動詞は koštati「価値がある」、valjati「価値がある」、stajati「かかる」、imati vrednost/vredeti「価値がある」および biti težak/težiti「重さがある」、meriti「計る」である。

(116) Ov-o tež-i jedan-ø kilogram-ø.

これ-NOM:SG 重さがある-PRES:3SG 一-ACC:SG キロ-ACC:SG

「これは一キロの重さがある。（〈直〉これは一キロを重さがる。）」

第三に、動詞が表す過程の回数を指定する組み合わせがある。対格で示される数詞(変化数詞だけが曲用を持つ)と属格で示される put(～回/～度)という名詞から成り立つ。

(117) Stotin-u put-a ga je udrai-o.

百-ACC:SG ～回-GEN:PL 彼-ACC:SG 叩く-PST:3SG

「彼を百回叩いた。」

III.II.II. 空間的量的関係を表す句(sintagme merno-prostornih odnosa)

このタイプの句は対格が移動の量を表す。これらは「空間的対象的な関係を表す句」とは違うものである。「空間的対象関係を表す句」は、他動詞を取り、対格で示されるものが目的語である。それに対して、「空間的量的関係を表す句」は、ほとんど自動詞を取り、対格で示されるものが副詞的修飾語である。また、「空間的対象的な関係を表す句」は対格が移動で乗り越える空間あるいは渡る空間を示しているのに対して、「空間的量的関係を表す句」は移動の量、長さを示している。

(118) Putova-ti stotin-e kilometar-a voz-om

旅行する-INF 百-ACC:PL キロメートル-GEN:PL 電車-INST:SG

「電車で数百キロメートル旅行する」

III.II.III. 時間的量的関係を表す句(sintagme merno-vremenskih odnosa)

このタイプの句は動作の継続の長さを表している。動詞には、意味的制限があまりなく、他動詞である場合もあるし、自動詞である場合もある。したがって、このタイプの句を作る動詞の数は少なくないが、対格で示される名詞は時間の長さを表しているものに限られる。

Gortan-Premk は「時間的量的関係を表す句」と「時間的対象的な関係を表す句」(1.3.2.)は違うものであると述べている。「時間的対象的な関係を表す句」における対格名詞は過ごす時間あるいは期間を表しているとする。それに対し、「時間的量的関係を表す句」における対格名詞は特定の動作の長さを表しているとする[34]。

[34] 上記の Gortan-Premk の説明は理解し難い。この二つのタイプの句の違いは、「時間的対象的な関係を表す句」における対格名詞が「過ごす対象としての時間」を表すのに対し、「時間的量的関係を表す句」における対格名詞が「運動の量的側面としての時間」を表すというところにあると思われる。

この二つのタイプの句の違いは、動詞の意味的な種類の違いに現れる。「対象的時間的関係を表す句」を作る動詞は数が少なく、provesti/provoditi(過ごす)、presedeti(座って過ごす)、 prespavati(寝て過ごす)のようなものに限られる。一方、 「時間的量的関係を表す句」を作る動詞には意味的な制限があまりなく、trajati/potrajati(続く)がもっとも典型的ではあるが、govoriti(話す)、kašljati(咳をする)、iščeznuti(消える)、sanjati(夢を見る)、slušati(聞く)、spavati(寝る)なども例に現れる。

また、この二つのタイプの句における対格名詞が文中で果たす機能も異なる。「時間的対象的な関係を表す句」における対格名詞は直接目的語になるのに対し、「時間的量的関係を表す句」における対格名詞は副詞的補語あるいは副詞的修飾語になる。

(119) Zabun-a je traja-la nedelj-u dan-a.

混乱-NOM:SG 続く-PST:3SG 一週間-ACC:SG 日-GEN:PL

「混乱した状態が一週間続いた。」

4.1.1.2. Gortan-Premk(1971)の分析の問題点

Gortan-Premk(1971)はセルビア語の対格名詞の用法について豊富な情報を有するが、検討の余地も少なくないと思われる。本節では奥田(1968-1972[1983])を参考にしつつ、Gortan-Premk(1971)の問題点を指摘する。

(1).方法論における問題点

Gortan-Premk(1971)は対格を含む句の意味を詳細に記述しているが、意味記述を動詞と名詞の他に現れる他の要素との関係において行う姿勢に乏しい。すなわち、考察を行う際には多くの場合動詞の意味のみに注目し、一部の項目においては共起する対格名詞が抽象物であるか具体物であるかなどについて言及する箇所もあるが、特定の意味が現れる場合の環境(共起する他の名詞項や副詞句の種類など)について徹底的に説明しているわけではない。

セルビア語における対格名詞の意味や機能を理解するためには、対格名詞の語彙的な種類なども十分に考察に含める必要があると思われる。また、考察は単に名詞と動詞だけでなく、他の要素も考慮する必要があると思われる。したがって、対格名詞の意味機能の記述を行う際、対格名詞と動詞の関係だけに注目するのではなく、それが他のどのような文中要素と組み合わさるかを記述する必要がある。その際、組み合わさる他の要素の意味的な性質と文法的な役割を考慮に入れる必要もある。そうすることによって、ある特定の意味・機能を備えた対格名詞が現れる条件の一般化を目指すことが可能となるのである。

例えば、Gortan-Premk は対象の移動を表すものを「動的関係を表す句」と呼び、このタイプの句について「動作の実行によって空間における対象の場所が変わる」と述べているが、構造の特徴を詳しく説明しているわけではない。しかし、このタイプの句における対象の意味的な性質からとらえると、それが多くの場合具体名詞になるという特徴がある。また、「移動前の場所」および「移動後の場所」という文法的な役割を表す要素が文中に頻繁に現れることも重要な特徴である。なお、これらの要素は、意味の面から見れば、言うまでもなく場所名詞である。その例を以下に挙げる。[35]

(120) Bakren-e marijaš-e ... ljud-i su baca-li

銅-ACC:PL コインの種類-ACC:PL 人々-NOM:PL 投げる-PST:3PL

[35] 筆者の用例コーパスからの例である。

na	dn-o	crn-e	skel-e...
～の上に	底-ACC:SG	黒い-GEN:SG	上-GEN:SG

「人々は...**銅貨を**黒い筏の上に**投げていた**...」　(Na Drini čuprija)

これらの構造の特徴を考慮に入れると、対象の移動を表すものを以下のように一般化することが可能になる。

V 移動	[対象]ACC	iz/sa[移動前の場所]	na/u/pod/niz[移動後の場所]
	〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉

以上の見地に立って、現代セルビア語における対格名詞の意味および機能の記述方法を再検討する必要があると思われる。

この再検討作業にあたっては、奥田靖雄の「を格の名詞と動詞のくみあわせ」を参考にすることができる。奥田(1968-72)は豊富な例を元に、言語形式との関係において日本語のヲ格の意味が現れる条件を設定し、そこから意味の一般化を行っている。考察は、文の要素の意味的な性質および文法的な役割を徹底的に考えながら行われる。セルビア語の対格の分析においてもこのような研究方法を取り入れる価値があると思われる。そして、セルビア語の対格および日本語のヲ格の使用の範囲はいつも同じわけではないが、二つの言語の類似点および相違点を考察する際にも奥田の研究が役に立つと思われる。

なお、Gortan-Premk(1971)が挙げている例文には、19 世紀後半～20 世紀 10 年代のもの、つまり、今となっては古い年代のものが混じっており、また用例から文全体の構造を読み取ることができないものも多いので、現代セルビア語の分析のためには適切な用例を改めて選ぶ必要があると言えよう。

(2). 分類における問題点

Gortan-Premk(1971)の対格名詞の分類の仕方にも問題が見られる。例えば、「お世辞を言う」、「苦情を言う」など、言語活動に関するものが「生産的関係を表す句」に含まれるが、これらは「家を建てる」や「ケーキを作る」など、典型的な生産的関係を表すものとは性質が異なると考えられる。奥田 (1968-72[1983]) は日本語においてこれらのような例の存在を考察し、「通達の内容規定」と名づけている(奥田 1968-1972[1983:137)。このグループの代表的な例として「じょうだんをいう」、「あいさつをのべる」、「日本語をはなす」、「おしまいの言葉をかたる」のようなものを挙げている。これらはある程度生産性が認められるが、単純な生産を表すものとは異なる。生産を表すものは、材料を表している要素が文中に現れやすい(「砂糖と卵でケーキを作る」、「レンガで家を建てる」)が、「お世辞を言う」、「苦情を言う」などはそうではない。また、これらが通達の側面を含むことが単純

な生産とは異なる特徴である。以上のことから、セルビア語の対格名詞についても「通達の内容規定」のような項目を立てるべきであると考えられる。

そして、Gortan-Premk(1971)はこのグループの代表例の中に「それをいう」、「それをかたる」のような、曖昧な例文も挙げている。これらの例文は動詞の意味しかはっきりしていないので、文の構造を読み取ることができない。言語活動に関する動詞は異なる環境において「通達のむすびつき」(「父の病状をたずねる」、「自分の情熱を語る」、「勝子の死をきく」)も作ることが可能であるため、文の構造が読み取れるような例文を挙げる必要がある。

すなわち、「通達のむすびつき」においてはヲ格名詞が原則的に抽象名詞であるのに対し、「通達の内容規定」を表すものは「名前」、「苦情」、「じょうだん」、「お世辞」など、言語活動の内容を質的に特徴づけるもの、あるいは、「日本語」、「ドイツ語」などに限られる。また、「通達のむすびつき」は相手を表すニ格、あるいはカラ格の名詞、仲間を表すト格名詞で広げられていること(「保科家での会話をみね代に報告する」等)が特徴である(奥田 1968-1972[1983:111])。

考えてみると、この二つのむすびつきは確実に異なることが分かる。「通達のむすびつき」は発話行為とは別に存在している内容について述べ(「父の病状」、「自分の情熱」、「勝子の死」等)、これらはヲ格名詞の対象性が比較的高い。それに対して、「通達の内容規定」におけるヲ格名詞(「じょうだん」、「あいさつ」、「おしまいの言葉」等)はその場での発話行為とは切り離せないものであり、対象性が「通達のむすびつき」より低い。

上述の特徴から分かるように、奥田(1968-1972[1983])は分類を設定する際、動詞の意味あるいは性質だけでなく、ヲ格名詞と組み合わさる他の名詞の性質およびそれ以外の文の種々の要素の性質も説明することの重要性を示している。このような方法でセルビア語の対格の研究も進める必要性が感じられる。

また、Gortan-Premk(1971)では、「対象無変化の単純な含意を表す句」の中には「誰かを叩く」、「鳩をなでる」など、代表的なもののほかに、「誰かを叱る」、「誰かをほめる」のようなものも含まれる。これらのような例は奥田において「表現的な態度のむすびつき」として分類される。確かに、「叱る」や「ほめる」が対象の変化という側面を含意しないのは事実であるが、これらは、奥田の主張のように、まずは「おもに言語をもちいて、感情的な、評価的な態度をそとに表す」(奥田 1968-1972[1983:126])タイプのむすびつきだと言える。なお、これらにおいてヲ格名詞が多くの場合人を示す名詞だという奥田の指摘も重要である。また、動詞が発言の内容をさしだす引用句で補われる(「梅子は佐川の令嬢をたいへんおとなしい子だとほめた」)ことも「表現的な態度のむすびつき」において重要な特徴として挙げられる。セルビア語の対格の分類においても、このように、文の要素の性質をもう少し広く考察し、徹底的に記述する必要があると思われる。

同じ「対象無変化の単純な含意を表す句」として、「誰かに何かを頼む」、「何かをねがう」のようなものも含まれるが、これらは奥田の分類において「のぞむ」、「ねがう」、「希望する」、「もとめる」、「命令する」のような動詞と一緒に「要求的なむすびつき」として挙げられている。これらは相手を表すニ格名詞で広げられることおよびヲ格名詞が動作性の名詞であることが構造の特徴である(「娘の手術をきみにたのむ」、「ぼくに節煙を

命じる」)。また、これらにおける相手は単なる話し相手ではなく、ヲ格の名詞で示される動作の主体でもある(奥田 1968-1972[1983:132])。

このように、奥田の分類を参考にすることにより、セルビア語の対格名詞の分析でも「対象無変化の単純な含意を表す句」の代表的なものから「態度を表すもの」および「要求を表すもの」を区別して考える必要があることが明らかになる。

このほか、Gortan-Premk(1971)は「子供の躾をする」、「子供を養う」など、対象への働きかけを表しながら、対象の変化について情報を必ずしも与えないものを「変化を表すもの」として分類している。また、「知覚的関係を表す句」と「認知的関係を表す句」を一緒にすることや「感情的な関係を表す句」に要求を表すもの(「財産を望む」、「手伝いを求める」)を含める点など、再考の余地のある個所は少なくない。

奥田の日本語のヲ格の分類をそのままセルビア語の対格の分析にあてはめることができないことはもちろんであるが、奥田の分析手法や方法論をセルビア語の研究に導入することで、日本語のヲ格名詞とセルビア語の対格名詞との間の類似点と相違点とを意識しながら、セルビア語の事実について発見することが可能になると思われる。そして、奥田の論文の方法論は実証性、体系性、論理性において優れているので、それに学び、セルビア語の対格の再考察を試みる意義があると思われる。

(3). 動詞の意味の解釈についての問題点

先に述べたように、Gortan-Premk(1971)は対格も与格も取ることができる動詞をスラブ語の中でもセルビア語の特徴として挙げているが、これらが対格を取る場合および与格を取る場合の意味的な違いの説明は理解し難いように思われる。

Gortan-Premk(1971)は「pomagati(手伝う/助ける/援助する)が与格を取る場合、手伝うことの目的が強調されるが、対格を取る場合、手伝うことの対象が強調される」と述べているが、このような一般化ではこれらの二つの用法の違いを説明することはできないと思われる。

与格と対格の選択は、実際、pomagati が「手伝う/助ける」という語彙的な意味を実現するか、「援助する」という語彙的な意味を実現するかという意味的な違いと連動していると思われる。つまり、pomagati が与格を取る場合「手伝う/助ける」という語彙的な意味を実現する(121)が、対格を取る場合は「援助する」という語彙的な意味を実現する(122)。

(121) Dec-a　　svak-i　　dan-ø　　**pomaž-u**　　**majc-i**

子供-NOM:PL　　～毎-ACC:SG　　日-ACC:SG　　手伝う - PRES;3PL　　母-DAT:SG

u　　kuhijnj-i.

～の中に　　台所-LOC:SG

「子供たちは毎日**母の**台所での仕事を**手伝っている。**（〈直〉子供たちは毎日**母に**台所で**手伝っている。**）」

(122) Vlad-a　　pomaž-e　　stipendij-ama　　izuzetn-e

政府-NOM:SG　援助する-PRES:3SG　奨学金-INST:PL　優秀な-ACC:PL

student-e.

学生-ACC:PL

「政府は奨学金で優秀な学生を援助している。」

また、savetovati(アドバイスする) に関しては、与格を取る場合「誰かにアドバイスを与える」という意味になるが、対格を取る場合は「アドバイスにより誰かを助ける、支える」という意味になる」と述べているが、これらの二つの格の使い分けの間の意味的な違いは非常に微妙であり、対格を取る場合も「誰かにアドバイスを与える」という意味になる場合が見られる。Savetovati は「誰かにアドバイスを与える」という意味になる場合および「アドバイスにより誰かを助ける、支える」という意味になる場合の間には、実際、名詞の格の違い以外にも大きな形式的な違いが見られると考えられる。つまり、「アドバイスにより誰かを助ける、支える」という意味になる場合、対格を補足的な内容で補う必要がない(123)が、「誰かにアドバイスを与える」という意味になる場合は、対格を取っても、与格を取っても、アドバイスの内容を da(～ように)節(124)、関係節あるいは動作性名詞で文中に補う必要があるという事実が見られる。

(123) Lako　　je　　zdrav-ome　　bolesn-oga

簡単(ADV)　である-PRES:3SG　元気な(人)-DAT:SG　病気の(人)-ACC:SG

savetova-ti.

アドバイスする-INF

「元気な人にとって病気の人をアドバイスで支えることは簡単である。」

(124) Savetova-ti　　det-e/det-etu　　da　　se

アドバイスする-INF　子供-ACC:SG/DAT:SG　～ように　REFL

druž-i　　sa　　dobr-im　　ljud-ima

友達になる-PRES:3SG　～と　良い-INST:PL　人-INST:PL

「子供に良い人と友達になるように、アドバイスする」

4.1.2. Arsenijević(2012)『セルビア標準語の直接目的語を表す格』における直接目的語を含む句の体系について

Arsenijević(2012)は他動性という大きな観点からセルビア標準語の直接目的語を表す格[36]について研究している。直接目的語を代表的に表す格として「前置詞なし対格」が挙げられる。Arsenijević(2012)は直接目的語を果たす対格名詞的な単位だけ分類の対象とする。[37]その中では主格名詞的成分、対格名詞的成分と動詞を中心に考慮に入れ、直接目的語を含む句の意味分類を挙げている。しかし、その際は主に動詞の意味を元に分類を行っている。その意味では動作的動詞の他動性、過程的動詞の他動性と関係動詞の他動性という三つのカテゴリーを元に分類を行っている。

Arsenijević(2012)はセルビア語学における対格名詞的な単位の研究の系統を示すために重要であり、本論文においても、特に所有関係に関して、参考にする。したがって、次にArsenijević(2012)による直接目的語を含む句の体系について簡単にまとめ、本研究との関連性と相違点に関して述べる。

4.1.2.1. Arsenijević(2012)『セルビア標準語の直接目的語を表す格』の方法論について

Arsenijević(2012)は主に動詞と名詞の意味とその関係という観点から直接目的語を含む句ついて分析している。その際、要素の語彙的な意味を中心に考え、要素が文中に果たす機能についても触れているが、その二つの関係に関しては述べていない。また、直接目的語と述語（名詞的成分と動詞）以外の要素との共起についても多少言及しているが、この点に関しても徹底的には述べていない。Arsenijević(2012)によると、対格で示される直接目的語を表す動詞を大きく動作的動詞、過程的動詞と関係動詞[38]に分けることができ、この三つの大きな動詞のグループを元に対格名詞的成分と動詞から成り立つ句の体系も記述することができる。Arsenijević(2012)の分類は次のような体系を見せている。

[36] セルビア語で直接目的語を表す格として「前置詞なし対格」と属格がある。
[37] 本論文とは大きな相違点になる。
[38] この三つのタイプの動詞の性質などについては詳しく述べていない。

4.1.2.2.　対格名詞的成分と動詞との組み合わせの体系

I 動作的動詞の他動性

操作動詞を含む目的語句

移動的関係を表す目的語句

運動的関係（navući čarape「靴下を履く」 、vaditi krofne「ドーナツを取り出す」）

除去運動的関係（kidati rese na šalu「マフラーのふさを抜き取る」、otkinuti list「葉っぱを（枝から）取る」）

刺激運動的関係（odgurnuti ga「彼を押しのける」）

転換的関係（deliti kolače「お菓子を配る」）

賠償的関係（prodati vinograd「ぶどう園を売る」）

所在関係を表す目的語句

接続的関係（uvatiti ručku「ハンドルを握る」）

位置的関係（pljesnuti nekoga po ramenu「誰かの肩を叩く」）

変更的関係を表す目的語句

運動形成的関係（podići ruku「手をあげる」）

変化的関係　（ošišati kosu「髪の毛を切る」）

破壊的関係

対象の分解（prekinuti konac「糸をちぎる」）

対象の排除（razbiti tanjir「皿を割る」）

生産的過程（praviti kuću「家を建てる」）

音響的プレゼンテーション動詞を含む目的語句

コミュニケーション関係を表す目的語句

言語情報的関係（promrmljati pozdrav「挨拶をささやく」）

言語使役的関係（pozvati kelnera「ウェイターを呼ぶ」）

言語評価的関係（pohvaliti vino「ワインをほめる」）

解釈的関係を表す目的語句（ svirati Hajdna「ハイドン（の音楽を）演奏する」）

使役動詞を含む目的語句

使役操作的関係（naterati dete da jede「子供に（何かを）食べさせる」）

使役知性的関係（uveriti druga u svoju pricu「友だちをその話が本当だと、説得させる」）

使役感情的関係（uvrediti je「彼女を侮辱する」）

II 過程的動詞の他動性

知覚動詞を含む目的語句

始動の知覚対象を含む目的語句

視覚知覚的関係（posmatrati prolaznike 「通行人を見る」）

聴覚知覚的関係（čuti ptice「鳥（の鳴き声）を聞く」、slušati muziku（「音楽を聞く」）

他の知覚的関係（mirisati cvet「花（のにおい）を嗅ぐ」）

知覚内容の効果・形態を表す知覚対象を含む目的語句 （gledati film 「映画を見る」、čuti vic「冗談を聞く（冗談が耳に入る）」）

認知動詞を含む目的語句

認知創造的関係を表す目的語句（učiti muziku「音楽を学ぶ」）

認知運用的関係を表す目的語句（prepoznati majku「（母を見て）母だと分かる」）

陳述的関係（znati istoriju 「歴史（の知識）を持つ能力」）

能力を表す関係 （čitati novine「新聞を読む」）

III 関係動詞の他動性

感情的関係を表す目的語句（prezirati rat「戦争を憎む」、 voleti ruže「ばらの花が好きである」）

対人関係を表す目的語句（usvojiti dete「子供を養子にする」、kontrolisati radnike「従業員をコントロールする」）

評価を表す目的語句（poštovati oca「父を尊敬する」）

使役的指定的語句（krstiti decu 「子供達に洗礼を与える」）

意志的関係を表す句（tražiti čekić「ハンマーを探す」、naručiti raskošnu večeru「豪華な夕食を注文する」、tražiti pravdu「正義を求める」）

所有関係を表す目的語句（imati kuću「家を持つ」、imati sina「（誰かに）息子がいる」、imati sablju「刀を持つ」）

4.1.2.3. 分析について

I 動作的動詞の他動性

操り動詞を含む目的語句

動作とその動作によって含まれる消極的な役割を持つ参加者との関係を表す句のことである。その参加者一種の操作によって影響される対象である。その操作には動的、変化的、生産的、破壊的性質、あるいは、一般的な操りの性質が見られる（baciti kamen「石を投げる」、čistiti ribu「魚をさばく」等）

移動的関係を表す目的語句

運動的関係

これらの句では動詞の意味には他動性と空間性という二つの性質が混合し、それが対象との関係に影響を与え、このタイプの句には移動的性質が見られる。移動的動作によって消極的な役割を持つ対象が一つのところから他のところに移る関係を表している。このタイプの句は対象の意味にほとんど制限がないと見られない。例えば、preneti orman/bolesnika/poruku/gripu「物入れ/病人/メッセージ[39]/インフルエンザを移す」という例がこれを示している。

例：navući dugačke pantalone「長いズボンを履く」、obući blejzer「ジャケットを着る」、skinuti nekome ciplele「誰かに靴を脱がせる」、staviti lepezu na usne「扇子を唇に当てる」、staviti vedricu pred njega「彼の前にバケツを置く」、zabosti sablju u zemlju「刀を地面に突き刺す」、doneti nekome prsten「誰かに指輪を持ってくる」、nositi cipele na terasu「靴をバルコニーに持っていく」、nositi rakiju na imanje「お酒を土地に持って行く」、prineti mu klarinet「クラリネットを彼の方に寄せる」

[39] 「メッセージを伝える」という意味になる。

除去運動的関係

対象の除去を表す関係のことである。このグループでは、除去の対象と除去先が統一のものとして知覚される場合だけが扱われている。そして、対象の除去が動作の目的であり、その動作によって続いていた統一性が崩れる例だけがこのグループに入る。

例：(kidati rese na šalu「マフラーの糸を破る」、otkinuti list sa grane「葉っぱを枝から取る」)、otkinuti dugme sa košulje「ボタンをシャツから引きちぎる」

刺激運動的関係

対象は人であるが、意志を持ち自由に行動するのでなく、他の人の影響によって、つまり、外から影響されて移動する。

例：okretali me uokrug「私をぐるぐると回した」、odgurnuti ga「彼を押しのける」、gurnuti devojku lepezom「少女を扇子で押す」、izvesti momka nasred mehane「少年をビストロの真ん中に連れ出す」、povući ga za čakšire「彼のズボンを引っ張る（*彼をズボンに引っ張る）」、povući me za jezik「私の舌を引っ張る（*私を舌に引っ張る）」、voditi muža do hrama「主人を寺まで連れていく」

このタイプの句では人を表す二重項が見られる。主語が文中の動作主でもあり、動作を刺激する主体でもあるが、人を表す目的語が刺激を受ける被動者であると同時に運動の主体でもある。

転換的関係

このタイプの関係の特徴は、人間である参加者の間の対象の対象の所有権・所持権の置き換えである。二人の参加者の中の一人は送り手であり、もう一人は受け手である。したがって、このタイプの句はどの動詞と名詞的成分の組み合わせでも、 その意味に転換を表す「あげる-もらう」という対が基本的に含まれている。

例：dati nekome kaput「誰かにコートをあげる」、davati slobodne dane zaposlenima「従業員に休暇を与える」、poslužiti prijatelju laku večeru「友だちに軽い夕飯を出す」、deliti vino i šećer「ワインと砂糖を配る」、nuditi im kokain「彼らにコカインを勧める」、isporučivati oružje Iraku「イラクに兵器を提供する」、dati Mariji Vertera da čita「マリアにウェルテルを読ませる（*マリアに読むためにウェルテ

ルをあげる）」、dobiti katalog「カタログをもらう」、dobiti pismo od prijatelja「友だちから手紙をもらう」、primiti moje pismo「私の手紙をもらう」、primati njene tvrdnje ili pitanja sa ironijom「彼女の宣言や質問を皮肉的に受け取る」、istrgnuti crkvenjaku pero iz ruke「神父の手から筆をもぎ取る」、ukrasti mu konja「彼に馬を盗む」

賠償的関係

この関係の句では、同時に二つの方向に向かった移動と二重移動が見られる。一つは対象の移動であり、もう一つは代償の移動である。よく売買関係を表すものが見られる。時には単なるものの取り替えを表すことがある。このタイプの句で二つの対象が見られる。一つは明示的な構文的目的語であり、もう一つは暗示的な代償であるが、常に金銭に限られるわけでない。

例：prodati vinograde「ぶどう園を売る」、kuiti zgradu「建物を買う」、iznajmiti sobu「部屋を借りる」、plaćati porez「税金を払う」、dobiti dobru ocenu「良い成績をもらう」、primiti nagradu「賞を受ける」、osvetiti smrt oca「父の死の復讐をする」、opravdati ćerku「娘（の行動）を大目にみる（*娘を大目にみる）」

所在関係を表す目的語句

接続的関係

このタイプの句は、主体と対象との間の多様な接続関係が成り立つための操作という側面を表している。主に主語が目的語と一種の物理的な接続をなすが、その際は主体の手以外の手段が必要となっていない。対象を表すものには有情物より無情物の方が多い。このタイプの句の特別な現れとして動詞 nositi「着る」と服を表す目的語との組み合わせがあり、それが「自分の体に（何かを）持つ」という意味に近い。よく対象の位置を指定する要素と共起することがある。

例：uhvatiti ručku kofera「スーツケースのハンドルを取る」、držati rukavicu desne ruke「右手の方の手袋を持つ」、držati njegovu ruku「彼の手を握る」、dodirnuti zid 壁に触る（*壁を触る）」、nositi mušku kapu「男性用の帽子をかぶる」、nositi čizme「ブーツを履く」、nositi srebrni puder u kosi「髪の毛に銀色のパウダーをつける」、nositi knjigu za pojasom「帯に本をつける」

位置的関係

単なる接続が目的である行為を超える関係であり、一種の接触を表す組み合わせである。接触の際は主体の手以外の手段が使われているか、あるいは、主体の外に存在する手段が使われている。対象には多様な種類のものが見られるが、人を表すものが多く見られる。それでも、その人が静的な存在として知覚される。

例： potapšati me po ramenu「私の肩を叩く（*私を肩に叩く）」、milovati kravu i tele「牛と小牛をなでる」、udariti ga「彼を殴る」、pokriti lice rukama「両手で顔を覆う」、pokriti maramom testo za krofne「スカーフでドーナツの生地を覆う」、zapušiti mu usta rukavicom「手袋で彼の口を閉じる」、mazati kosu vinom「髪の毛をワインで塗る」、razgolititi grudi「胸をむき出しにする」、iskapiti čašu「グラスを飲み干す」

主体による操作の位置が明示的に示される場合もあれば、暗示的に含まれる場合もある。

変更的関係を表す目的語句

運動形成的関係

身体に対してその身体部位が動くことを表す句である。身体から離せない部分である以上、身体部位をむしろ静的対象のように見ることができる。動作の目的は対象の位置を変えることである。身体部位の他に衣服を表すものもこの関係を表す対象になる。位置を変える目的で対象を操る関係を表す句には、目的語が日常生活によく使われるものを表すものもある。

例：podići ruku「手を挙げる」、nagnuti glavu ulevo「頭を左に傾ける」、isplaziti jezik 「舌を出す」、raširiti ruke「手を開く」、prevući pantalone preko kolena「ズボンをひざの上までたくし上げる」、zasukati rukav「袖を巻き上げる」、nakriviti šešir「帽子を傾ける」、otvoriti prozor「窓を開ける」、zalupiti vrata「ドアをバタンと閉める」、podići krevet「ベッドを上げる」、okrenuti jastuk「枕をひっくり返す」

変化的関係

この関係を表す句の特徴は質的変化あるいは量的変化を表すことである。その変化は、対象の形成、形、性質に関わるが、変化の程度は異なる。対象が完全に変わる場合もあれば、その一部だけ変わる場合もある。変化の最終的な結果という観点から、このグループに入る動作を破壊的なものと生産的なものに分けることができる。

例： kvasiti kosu「髪の毛を濡らす」、zapaliti sveće「「ろうそく（に火を）つける（〈直〉ろうそくをつける）」、bojiti cigle「かわらを（色で）塗る」、lampa osvetljava sobu「ランプが部屋を照らす」、izmeniti svoju garderobu「自分の服を替える」、menjati ime「名前を変える」、prevoditi novinske članke「新聞記事を訳す」

上に挙げた例は外から見ればすぐ分かる変化であるが、対象の外から見る様子に変化が知覚できなくても、変化の結果が見られるようなものもある。

例：lečiti zube「歯を治療する」、vlažiti kožu「肌を保湿する）、jagode čiste organizam「いちごが体をきれいにする」、jačati imunitet「免疫を強くする」、izmeniti svoje navike「自分の習慣を変える」、opravljati sat「時計を修理する」

変化的関係を表す句には質的変化が含まれるものもあれば（čistiti ribu「魚を捌く」、razmutiti kašičicom šećer「小さじで砂糖を溶かす」、tuga joj smrkne lice「悲しみが彼女の顔を暗くする（〈直〉悲しみが彼女に顔を暗くする）」）、量的変化を表すものもある（hladiti vino「ワインを冷たくする」、potamneti belinu tena「肌の白さを黒くする」、oštriti nož 「ナイフを鋭くする」、obogatiti asortiman robe「商品の選択を豊かにする」）。

破壊的関係

対象の本質的な性質が崩れるか、あるいは、破壊することを表している。この対応の句における対象を「破壊対象」と呼ぶ。

対象の分解

そのタイプの句では、動詞が表す破壊的な過程により対象の全体が分解されていくことが表される。その際、対象の性質の最低限が残っている。破壊の過程を途中で中止した場合、その対象の本質が存在する。例えば、家を破壊する過程では対象が最後まで「家」だということが認められるわけである。

例：prekidati razgovor「話を遮る」、rušiti kuću「家を壊す」、proces oksidacije razgrađuje hranljive materije「酸化の過程が栄養成分を分解する」、seći kolače「ケーキを切る」、seći krila guskama「かもの翼を切る（〈直〉かもに翼をきる）」

もし、この関係が表す動詞が完了体になった場合でも、最終的な破壊の結果が見られるにもかかわらず、対象の最初の本質が明らかで完全に消えるわけではない。例えば prekinuti

konac「糸を切る」、iseći pečenje「焼き肉を切る」やpocepati rukavicu「手袋を破る」のような例では対象の本質的な性質が他も保たれていることが分る。

対象の排除

このタイプの句では対象が分解されるが、その分解によってできた部分はもう最初の対象とは異なるものになってしまう関係である。その動作の結果を完全な排除のように捉えることができるので、その動作の対象を「排除対象」のように名付けることができる。有情物の主体または自然現象によって対象の物理的な存在が完全に排除されるか、あるいは、抽象概念の持続性が中断される。主体が人である場合、その主体による対象の破壊は意志的な操作であることもあれば、そうではないこともある。

例：razbiti instrument「楽器を壊す」、razbiti tanjir「皿を割る」、spaliti pisma「手紙を燃やす」、sagoreti kalorije「カロリーを消費する」、uništiti Venecijansku republiku「ベネチア共和国を破壊する」、prekinuti štrajk「ストライキを中止する」、prekinuti igračku karijeru「選手のキャリアを中断する」

破壊の極端な現れとして、有情物の排除があり、それを代表的に表す動詞がubiti/pobiti「殺す」である。（pobiti žene i decu「女と子供を殺す」）

生産的過程

対象と一種の生産過程を表す動詞との組み合わせである。このタイプの組み合わせを作る動詞には結果的側面が含まれており、対象　を「生産対象」と呼ぶ。主体の操作は物理的な働きかけに限らず、時には主体が動作を引き起こすだけであり、それを実際実行するのが異なる主体である。主体の物理的な働きかけを表す場合は、その過程において多様な手段が頻繁に重要な役割を果たしている。例えば、zida kuću「家を建てる」という組み合わせには二つの解釈が考えられる。一つは、主体が家の建設を始め、それに必要な作業を行っている意味であり、もう一つは、主体が異なる主体に家の建設をさせ、間接的にそれを実行しようとする意味である。

例：praviti sok「ジュースを作る」、napraviti aerodrom「空港を建設する」、spremiti crnu kafu「ブラックコーヒーを作る」、praviti spiskove「リストを作る」、prirediti zabavu u rezidenciji「公邸でパーティーをする」、organizovati izložbu「展覧会を主催する」、sačiniti prvu verziju zakona「法律の初版を作る」、napisati pismo「手紙を書き上げる」、objaviti studiju「研究を発表する」、odsecati tanke komade pečenja「焼き肉を細切れにする（〈直〉焼き肉の細い切れを切り取る）」

音響的プレゼンテーション動詞を含む目的語句

主体が感情的あるいは知的作用によって刺激され、他の有情物に対して物理的にまたは生理的に活動を行うが、その有情物が主体の活動を聴覚で知覚する。知覚される音の源として動物でも物でも考えられるが、 コミュニケーションの目的で体系的で言葉による内容を意志的に述べる主体としては人間しか考えられない。このタイプの句を作る動詞には人間の相互連絡の成立という側面が含まれている。聴覚的内容が 主体の声によって直接的に成立するか、あるいは、楽器によって間接的に成立するかによって、このような関係を表す動詞はコミュニケーション動詞と（芸術的）解釈動詞のように分かれる。

コミュニケーション関係を表す目的語句

このタイプの関係を表すものには、「話し手」「伝える内容」と「聞き手」三つの参加者が見られるが、皆が常に文中に現れるわけではない。それにも関わらず、これらは常に話し手と聞き手との間の言葉による内容の伝達を表している。

例：pričati priču「話を語る」、dozivati konobara「ウエイターに呼びかける（〈直〉ウエイターを呼びかける）」

この関係の特別な現れとして特定の言語の言語によるコミュニケーションの能力を表すものが見られる（govoriti engleski「英語が話せる（〈直〉英語を話せる）」）

言語情報的関係

このタイプの句は、reći、kazati「言う」、 saopštiti「知らせる」、 pričati「話す/語る」など、言語によるコミュニケーションを表す動詞と対象を表す要素の組み合わせであるが、対象の内容に関してはメッセージの内容があまり含まれず、むしろ形態などのような特徴が表されることが普通である。その他、対象に対する話し手の態度のニュアンスが含まれることがある（govoriti beznačajnosti「重要でないことを話す」）

例：reći rodoljubivu frazu「愛国的な決まり文句を言う」、reći ime i prezime「名前と名字を言う」、saopštiti vest od nikakva značaja「何も重要でないニュースを知らせる」、reći istinu「真実を言う」、reći svoje mišljenje「自分の意見を言う」、izlagati svoje stanovište「自分の立場を発表する」

言語使役的関係

主体が対象に言語によるコミュニケーション（pozdraviti profesora「先生に挨拶する」（〈直〉先生を挨拶する））あるいは非言語活動（zvati nekoga da nešto uradi「何かをするように誰かに呼びかける」（〈直〉何かをするように誰かを呼びかける））を進める関係を表す句である。対象は人を表す。

例：osloviti devojku 「少女に声をかける（〈直〉少女を声をかける）」、nuditi gosta hranom「お客さんに料理を勧める（〈直〉お客さんを料理で勧める）」

対象に進められる行為の実行が強く期待される場合は、対象を表す要素が人でなく、その行為の内容を表すようになる。

例：narediti nešto nekome 「誰かに何かを命令する」、propovedati mir「平和を主張する」、diktirati pismo「手紙を書き取らせる」

言語評価的関係

この関係を表す句では、主体が対象に対する良い/悪い評価、あるいは、特定の状況に関する態度を表している。対象は有情物を表す場合もあれば、無情物を表す場合もある。

例： komentarisati odluku suda「裁判所の決断についてコメントする（〈直〉裁判所の決断をコメントする）」、prekorevati kćerku「娘を叱る」、kleti pisce te knjige「その本の作家に呪いをかける（〈直〉その本の作家を呪う）」、opanjkavati ostale stanare「他の居住者の噂をする（他の居住者を噂する）」、opanjkavati njihovo ponašanje「彼らの行動の噂をする（〈直〉彼の行動を噂する）」

解釈的関係を表す目的語句

pevati「歌う」、svirati「(楽器を)弾く」のよう動詞が作る組み合わせであり、人間の才能だけでなく特技についても述べている。

例：pevati pesmu「歌を歌う」、pevati bogove i boginje「髪と女神について歌う（〈直〉髪と女神を歌う）」、svirati Hajdna「ハイドンを演奏する」、svirati tužnu melodiju「悲しいメロディーを演奏する」

使役動詞を含む目的語句

主体が対象に対して特定の行為の実行をさせる目的で働きかけている関係を表す句である。Naterati「（強制的に）～させる」、dozvoliti「（望みどおりに）させる」prisiliti「強制する」、nagovoriti「説得する」、zapoveditiー「命令する」、zabraniti「禁止する」などが代表的な動詞である。

使役操作的関係

このタイプの関係には参加者が少なくとも二つ見られる。一つは行為の実行（あるいは特定の状態）を引き起こす主体であり、もう一つはこの行為を実行する（特定の状態になる）対象である。主体は常に主格で示され、文の主語になるが、対格名詞的成分を取る対象が目的語の機能を果たしている。また、対象は主体の働きかけに対して被動者ではあるが、同時にその行為を実行する点では一種の主体としても捉えることができる。例えば、「神父が彼らを黙らせた（←神父は彼らに彼らが黙るように影響を与えた）」という例文ではこのような関係が見られる。対象は常に有情物を表す要素である。

例：pojiti konje vinom 「馬にワインを飲ませる」、dojiti bebu「赤ちゃんに母乳を与える（〈直〉赤ちゃんを母乳を与える）」、probuditi dete「子供を起こす」、najuriti mušteriju iz radnje「店からお客さんを追い出す」、požurivati nekoga「誰かを急がせる」、oženiti sina「息子を結婚させる」

使役知性的関係

主体は対象の知覚認知的能力に働きかける過程を表す関係である。その働きかけよって特定の知的作用の実行を引き起こそうとしている。

例：urazumiti sina「息子を理性的にさせる」、uveriti ga da to nije istina「それが真実でないと、彼を説得する」、zbuniti nekoga「誰かを混乱させる」

使役感情的関係

主体が対象に働きかけることによって対象が特定の感情的状態になる関係を表す句である。このタイプの句の特徴は、対象が特定の状態になるかどうかが主体や対象の意志によってコントロールできないことである。

例：obradovati oca「父を喜ばせる」、umiriti prijatelja「友だちを冷静にさせる」、hrabriti dete「子供を励ます」、zabavljati decu「子供を遊ばせる」、plašiti žene 「女の人たちを怖がらせる」

II 過程的動詞の他動性

知覚動詞を含む目的語句

知覚を表す動詞は聴覚、視覚、嗅覚、触覚、味覚を通しての人間の環境との積極的な関係を表すものである。自然に起こる知覚自体は本能的であり静的な過程であるが、その解釈には知的特徴、感情的特徴や経験と創造力関わってくるため、その過程がダイナミックでもあると言える。Videti「見る」、čuti「聞く」、mirisati「嗅ぐ」、pipati「触る」という典型的な動詞の他にも osećati「感じる」や registrovati「認識する」など全ての知覚に対応する動詞もこのような関係を表している。この関係を表す句の対象を「知覚対象」と呼ぶことができる。

始動の知覚対象を含む目的語句

「始動の知覚対象」というのは、主体の注意をひき、主体を外の刺激の受け手として始動している外の刺激の源のことである。

例文の中の最も多くは視覚と聴覚に関するものである。その中で、特に čuti/videti「聞こえる（耳に入る）/見る(目に入る)」と slušati/gledati「（注意して）聞く/見る」という対立が興味深い。これらの動詞の対はその過程における主体の意志性によって異なる。前者は主体の意志性に関わらない知覚が代表的であるが、後者は主体が知覚を行う目標で計画的に外の刺激に注意を向ける過程を表している。したがって、それぞれの対象を「目標的始動の知覚対象」と「自然的始動の知覚対象」のように名付けることができる。

視覚知覚的関係

例：motriti žrtvu「犠牲者を観察する」、gledati vodu Dunava sa prozora「ドナウ川の水を窓から見る」、gledati muža ne razumevajući šta govori「言うことを理解せず、主人を見る」、gledati je krišom「彼女をこっそり見る」、primetiti žensko poprsje na slici「絵のなかに女性の胸に気づく（〈直〉絵のなかの女性の胸を気づく）」、videti na fresci Hrista kako se pričešćuje「フレスコ画のなかに聖餐を受けるキリストを見る」

聴覚知覚的関係

聴覚動詞と音声の源になる性質を持つ有情物や無情物との組み合わせである。

例：slušati ptice「鳥（の鳴き声）を聞く（〈直〉鳥を聞く）、slušati prolaznike「通行人（の声）を聞く（〈直〉通行人を聞く）」、čuti prvu srpsku bandu「初めてのセルビアのバンドを聞く」、čuti ulazna vrata「玄関のドアの音を聞く（〈直〉玄関のドアを聞く）」、čuti prozore「窓の音を聞く（〈直〉窓を聞く）」、čuti vetar s juga「南の風の音を聞く(〈直〉南の風を聞く)」

時には聴覚の状況を具体的に記述する要素が文中に現れる。

例：čuti profesora da viče「先生が叫んでいるのを聞く（〈直〉先生を叫んでいるように聞く）」、slušati samu sebe kako peva「自分自身が歌っているのを聞く（〈直〉自分自身を歌っているように聞く）」

他の知覚的関係

ほとんど嗅覚と触覚を表す句が見られる。また、中立的な意味の osetiti「感じる」という動詞を含む例がよく見られる。

例：osetiti dim「煙を感じる」、osetiti mirisni vetar「いいにおいの風を感じる」、mirisati bočice「小さな瓶（の内容）を嗅ぐ（〈直〉小さな瓶を嗅ぐ）」、osećati njene prste na sebi「自分の（の体の）上に彼女の指を感じる」、opipati kamen「石を触る」

知覚内容の効果・形態を表す知覚対象を含む目的語句

対象は聴覚的あるいは視覚的内容の効果を表すというダイナミックな性質を持ち、よく状況の枠を具体的説明する役割を持つ動名詞になる。この関係は主体の自分の周りの出来事の体験の結果を表している。

例：čuti urlik「叫び声を聞く」、čuti šapat「ささやきを聞く」、čuti ranjenikovo disanje「けが人の呼吸を聞く」、čuti svoj plač「自分自身の泣き声を聞く」、gleda ulazak austrijskih trupa u Beograd「オーストリア軍がベオグラードに入るのを見る」、gledati dedine teske pokrete「おじいちゃんの苦しい動きを見る」

認知動詞を含む目的語句

このタイプの句が主体の認知作用を表す。これらを作る認知作用動詞は多様であるが、認知作用の過程によって創造的作用を表すものと認知運用的作用を表すものに分けられる。

認知創造的関係を表す目的語句

学ぶことによる知識の習得の多様な形態を認知創造的作用と呼ぶ．この作用によって対象全体がその過程に含まれるのではなく、その一部あるいは一つの側面が含まれる。

例：saznati pravu istinu「本当の真実を知る」doznati mračne okolnosti「暗い状況を知る」、saznati važan podatak iz njenog života「彼女の人生について重要な情報を知る」、upoznati nekoga「誰かを知る」、upoznati dela svetske književnosti「世界文学の作品を知る」、upoznati stanje raznih zemalja「いろいろな国の状況を知る」、razumeti smisao tog problema「その問題の意味を理解する」,razumeti značenje njenih reči「彼女の言葉の意味を理解する」、zamisliti Elizu na čajanci「ティーパーティーでのエリーザを想像する」、smisliti odgovor「答えを考え出す」、učiti muziku「音楽を学ぶ」、učiti molitve「祈りを習う」

認知運用的な関係を表す目的語句

陳述的関係

この関係を代表的に表す動詞は znati「知っている/分る」[40]と多様な意味の対象の組み合わせである。

例：znati istoriju「歴史を知っている」、znati poneki trač「いくつかの噂を知っている」、znati vrednost novca「お金の価値を知っている」、znati njihov jezik「彼らの言語を知っている」、znati napamet redosled rečenica「文章の順番を暗記している（〈直〉文章の順番を暗記という形で知っている）」、znati njegovu sestru「彼の妹を知っている」、pamtiti delove pesama「詞の部分を覚えている」、zaboraviti naš razgovor「私たちの話を忘れる」

能力を表す関係

知識の特別な現れ方として、読書、書くことや数えることなど学ぶことによるスキルがある。このタイプのスキルを表す動詞が内容を表す対象とくみ合わさり能力を表す関係を作る。

例：čitati novine 「新聞を読む」napisati seminarski rad「レポートを書く」zapisivatii brojeve「数字を書く」 preprojati gledaoce「観客を数える」、objasniti

[40] 「認知創造的関係を表す目的語句」で挙げたも日本語の「知る」のように訳したが、この場合は「知る」を知的作用の過程のように解釈することがふさわしい。それに対して「陳述的関係」で「知る」と訳すものは」むしろ「知っている」状態を示している。

šare i pismena na štapu「棒の上の文字や模様を説明する」、objasniti njeno uzbuđenje sinovljevom posetom「彼女の興奮を息子の訪問で説明する」

相手に対して向けられた行為を表すこともよくある。その相手がしばしば与格で示されることがある。

例：čitati ocu sadržaj knjige「父に本の内容を読んで聞かせる」、izbroji seljaku novac「小作人（のため）にお金を数える」

III 関係動詞の他動性

感情的関係を表す目的語句

このタイプの句を作る動詞の意味には主体の意識的な動作という側面がある程度含まれているので、これらを単なる状態を表すのではなく、一種の過程を表すものでもあるように解釈できる。感情の対象は有情物と無情物であり、対象に影響され、主体が動詞の表す過程に含まれる。

例：voleti dete「子供を愛する」voleti srebrne predmete「銀のものを愛する」、voleti više kokoš od ovčetine 「マトンより鶏肉を愛する」više voli dan od noći「夜より昼間が好きである（〈直〉夜より昼間を好きである）」、obožava vatromete 「花火が大好きである（〈直〉花火を大好きである）」」mrzeti svog starijeg brata 「兄を憎む」

感情的な関係は通常時間や空間によるものではないが、そういった条件があれば、文中に必ず明確的に現れる

例：mrzeti sinove kao slabiće「弱気な時の息子達を憎む」

対人関係を表す目的語句

このタイプの句は対象に対して働きかけるが、その際対象が物理的変化せず主体との関係が変わってくる。その関係は、主体の働きかけによってできた良い効果や悪い効果に対する対象の一種の社会的な関わりである。

例： sresti prijatelja u crkvi「教会で友だちに会う（〈直〉教会で友だちを会う）」、ispratiti gosta do avlijskih vrata「お客さんを庭の玄関まで見送る」、

predstaviti ih svešteniku「彼らを神父さんに紹介する」、varati narod「国民をだます」、ponižavati nekoga「誰かを軽蔑する」、uverediti prijateljicu「友だちを侮辱する」、pobediti rivala「競争相手に勝つ（〈直〉競争相手を勝つ）」

評価を表す目的語句

このタイプを表す句は、主体の対象に対す態度について述べている。その態度は、主体が対象を観察する、あるいはコントロールする過程において成立する。対象は基本的に有情物となるが、無情物を表すものもある。主体による対象への態度（評価）は中立的である文脈も見られる。

例： braniti prijatelja 「友だちを守る」、braniti ljudska prava「人権を擁護する」、 pratiti standard života u drugim gradovima「ほかの都市での生活水準を観察する」、proveriti uticaj vremena na useve「天気の作物への影響を確認する」、poštovati učitelja「先生を尊敬する」、prihvatiti nove obicaje「新しい習慣を受け入れる」

意志的関係を表す句

このタイプの句では主体が必要とする対象の要求行為が表される。または関わりたくない対象を避けようとする行為が表現される。代表的な動詞は traziti「探す/要求する/もとめる」とその類義語である。

例：tražiti čekic po sobi「部屋でハンマーを探す」、tražiti predele pogodne za zemljoradnju「農業にふさわしい場所を探す」、tražiti opravdanje za svoje ponašanje「自分の行動のための言い訳を探す」tražiti pomoć od prijatelja「友達に手伝いを求める」

所有関係を表す目的語句

このタイプの句は多様な所有関係を表し、多様な意味を表す対象と組み合わさる。代表的な動詞は imati「持つ/ある」である。

例：imati veliku porodicu i lepu kuću「大きな家族ときれいな家を持つ」、imati moć i novac「権力とお金を持つ」、imati veliku biblioteku「大きな図書館を持つ」、imati inofrmacije o skorašnjim zbivanjima「最近のできごとについて情報を持つ）」、imati dobre prijatelje「良い友達を持つ」、imati decu」「子供がいる（〈直〉子供を持つ）」

所有関係を表す句では性質あるいは衣服の体への付着を表すこともできる（imati loš karakter「悪い性格を持つ」、imati nove patalone na sebi「新しいズボンを（体に）履く（〈直〉新しいズボンを（体に）持つ）」

4.1.2.4. Arsenijević(2012)における問題点と本研究との相違点

Arsenijević(2012)はGortan-Premk(1971)の後に対格名詞的な単位の用法を詳細に分析した初めての研究であるため、セルビア語学において代表的な研究であると認められ、対格名詞的な単位について学べる部分が大きい。本研究のためには特に「所有関係」について学べる部分が重要である。なお、Arsenijević(2012)はセルビア語学における対格の研究の系統を示しているために、重要な研究である。しかし、Arsenijević(2012)には方法論と分類における問題点も相当見られる。また、本研究とは方法論、分類の仕方、研究の目的などが大きく異なるために、その問題点および相違点に関しても述べる必要がある。

第一に、Arsenijević(2012)は他動性という大きなテーマの一部として対格名詞的な単位を含む句を分析している。Arsenijević(2012)は他動性を扱う際の複雑性を認めているにもかかわらず、セルビア標準語の直接目的語を表す格の分析のためにはセルビア語学において伝統的に他動性を示す要素とされてきた直接目的語の機能を果たす対格名詞的な単位だけを研究に含めている。しかし、本研究はそれと違って直接目的語だけでなく、他の機能を果たす対格名詞的な単位も分析の対象に含めている。また、動詞と組み合わさらない対格名詞的な単位、つまり、独立で現れる対格名詞的な単位の用法も本研究の対象にしている。そうすることによって、対格名詞的な単位が構成する体系をより広く、より徹底的に考察できると考えるためである。

また、Arsenijević(2012)における方法論は明確ではない。Arsenijević(2012)は主語、直接目的語と述語の意味を考慮に入れ、直接目的語の動作への含意の程度を元に分析を行い、広い文脈も考えていると簡単に述べているが、そのような分析の行い方に関しては詳しく説明していないので、方法論には不十分な点が多い。つまり、Arsenijević(2012)は意味だけに注目し[41]、分析を行うことが多いため、特定の意味的カテゴリーに異なる性質のものを一緒に分類してしまっている点が相当見られる。

例えば、具体的な意味の組み合わせと抽象的な組み合わせを同じカテゴリーの中に分類することが多く見られる。具体的には、preneti orman/bolesnika/poruku/gripuのような組み合わせを全部同じものとして分類している（Arsenijević 2012:33）。動詞preneti「移す/伝える」は多義的であり、組み合わさる名詞の性質によって構成する組み合わせの性質もかなり異なる。例えば、具体名詞と組み合わさった際に、物の「移動」を表す（preneti bolesnika/orman「たんす/病人を（どこかに）移す」）が、内容を表す名詞と組み合わさっ

[41] 主に動詞の意味に注目している。

た際には情報の「伝達」を表す（preneti poruku「メッセジーを伝える」）。また、病気を表す名詞と組み合わさった際には「感染させる」という意味に近い（preneti gripu「誰かにインフルエンザをうつす」）。これらを同じ意味的カテゴリーとすることには無理があるように思われる。

そして、Arsenijević(2012)は特定の意味的カテゴリーの構造を記述しないことが問題点として考えられる。例えば、「図書館に本を持っていく」と「母は父の頭を枕の上にのせる」を同じ意味的カテゴリーのものとして分類している。これらの二つの例における空間性を考えると、前者は[移動後の場]という要素（「図書館に」）、後者は[付着先]という要素（「枕に」）との共起が見られるために、構造が明らかに異なると認めなければならない。また、「授受」を表す組み合わせには[授受相手] を表す要素が存在することが構造上の際立った特徴である以上（例えば、「私に指輪を持ってくる」のようなものにおける「私に」）、これらを「運動的関係」を表すものとして分類することにも無理があると思われる。

なお、Arsenijević(2012)は分類が詳細すぎる点も見受けられる。例えば、「破壊的関係」を対象の分解（rušiti kuću「家を壊す」、pocepati rukavicu「手袋を破る」）と対象の排除（razbiti tanjir「皿を割る」、spaliti pisma「手紙を燃やす」）のように細かいカテゴリーに分けているが、これらは同じ構造を持つものとして見ることができる。これらの例もArsenijević(2012)は要素の意味だけに注目し、分類を行っていることを示している。

その上、Arsenijević(2012)は意味的カテゴリー間の相互関係に関して一切述べていない。本論文の筆者は対格名詞と動詞との組み合わせの体系を理解するために、その意味的カテゴリー間の相互関係を考察に含める必要があるという立場である。それは今までのセルビア語学の研究とは大きな相違点である。

以上のことから、今までのセルビア語学における対格の研究と本研究は大いに異なることが分かる。本研究では奥田(1968-1972[1983])と早津（2009、2015、2016)に習い、方法論を明確に定めた上で対格名詞と動詞との組み合わせの構造を一化般し、その体系を徹底的に考察することを目指している。その際には要素の語彙的な意味、カテゴリカルな意味と文法的な意味を考慮に入れ、分析を行う。また、対格名詞と動詞だけでなく、文中に他に現れる他の要素も考察に含め、構造の一般化を目指す。最後に、意味的カテゴリーの相互関係も考察することで対格名詞と動詞との組み合わせの体系をより詳細に把握する。

そして、日本語学の方法論を使うことにより、本研究では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの用法の類似点と相違点を明らかにすることができる。そうすることによって、本研究はセルビア語学にもセルビアでの日本語学、日本語教育学にも貢献できると思われる。

4.2.　日本語を対象とした研究

4.2.1.　奥田靖雄（1968-1972）

日本語を対象とした研究学においてヲ格名詞と動詞との組み合わせの代表的な研究として奥田靖雄（1968-1972）の「を格名詞と動詞とのくみあわせ」がある。奥田はヲ格名詞と動詞との組み合わせを連語として見ている。この研究において奥田は豊富な用例を元にヲ格名詞と動詞との組み合わせに見られる意味的関係を分析している。この分析にあたって、ヲ格名詞と動詞の語彙的な性質と文法的な性質、また、その構造に他に現れる要素の性質も考慮に入れて分類している。そうすることによって、特定の意味が現れる言語的条件を一般化しようとしている。分類を詳細に記述しているだけでなく、その分類における意味的カテゴリーの間の相互関係、連続性、特定の意味的カテゴリーから他の意味的カテゴリーへの移行などに関しても徹底的に述べている。このようにして奥田はヲ格名詞と動詞との組み合わせの体系における相互性に関して述べている。これは奥田のヲ格名詞と動詞との組み合わせの研究のもっとも重要な貢献であると考えられる。

奥田はヲ格名詞と動詞をかざり・かざられのむすびつきとして見ている。そのむすびつき方の違いによってヲ格名詞と動詞との組み合わせを大きく「対象的なむすびつき」と「状況的なむすびつき」のように分けている。

「対象的なむすびつき」ではヲ格名詞で示される直接対象に対して動詞で示される動作が向かっている関係が見られるとする。これらは他動詞との組み合わせであり、ヲ格名詞の基本的な働きを見せていると述べている。このタイプのむすびつきには「木をきる」、「土地をたがやす」、「家をかう」、「敵をにくむ」、「娘をおもう」、「本をよむ」など、多様な意味的関係を表すものが見られる。

「状況的なむすびつき」ではかざられが移動または移動の形態を表している自動詞が多く、かざり名詞が典型的にその移動が行われる空間を表している。「道をあるく」、「トンネルをぬける」、「山をのぼる」などは「状況的なむすびつき」の例である。このタイプのむすびつきは「ゆうぐれをいそぐ」、「ひとごみをぬける」、「ひと夏をすごす」などのような状況的なむすびつきに発展しているとする。自動詞との組み合わせである以上、多様な意味的関係を表すものに発展していないと主張している。

それに対し、「対象的なむすびつき」では動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化がおこり様々な意味的なタイプが見られるとする。奥田によると、これらは次のようになる。

・対象への働きかけを表す連語　（第一章）

・対象の所有、やりもらい、うりかいを表す連語　（第二章）

・対象への心理的なかかわりを表す連語　（第三章）

それぞれに関して簡単に述べる。

第一章「対象への働きかけ」

このタイプの組み合わせではヲ格名詞が物、人、現象、状態、過程や関係を表し、動詞がそれに対する働きかけを表している。「対象への働きかけ」を表す組み合わせは大きく「物にたいする働きかけ」、「人にたいする働きかけ」と「事にたいする働きけ」という 3 つの下位グループに分かれる。

第一節　物にたいする働きかけ

このタイプの連語には「皿をわる」、「こまをまわす」のような組み合わせがある。ヲ格名詞が具体的な物を表し、動詞がそれに物理的に働きかけている動作を示している。したがって、その物になんらかの変化が起こる。このように、このタイプの組み合わせは具体的で経験で捉えることが可能である。ヲ格名詞と動詞との組み合わせの中で「物にたいする働きかけ」は基本的な領域であり、その体系の研究のための出発点になるとする。

「物にたいする働きかけ」を表す連語には次のような構造的なタイプが見られる。

a もようがえ	「皿をわる」
b とりつけ	「受話器を耳にあてる」
c とりはすし	「ビールのせんをぬく」
d うつしかえ	「菓子折りを海へなげる」
e ふれあい	「両手で自分の顔をこする」
f 結果的なむすびつき	「家を建てる」

奥田はこれらのタイプの関係について次のように述べている（奥田 1968-1972[1983: 25]）。すなわち、対象的なむすびつきの中から「物にたいする働きかけ」を表す連語を取り出すことは難しくないが、これらには、第一に、中間的なものやカテゴリーの間の中間的なものがたくさんある。また、構造を変えることによって他の意味的カテゴリーに移行するものもあるので、同じ現実を異なる構造的タイプで表す現象もみられる。そして、二つのむすびつき方のコンタミネーション、つまり、混合的な連語がある。最後に、特定の文において連語の構造が省略されることがある。これらの要因のために、その連語をこれらのカテゴリーに完全におさめることは簡単ではないとする。そのために、奥田はこれらのカテゴリーの記述を行ってから、これらの間の相互関係に関しても述べている。

a もようがえ

このタイプの連語は具体的な動作の働きかけによって対象のあり方に変化が起こることを表している。その変化のざまざま形態が見られる。「もようがえ」の例として「髪をたばねる」、「戸をあける」、「袖口をぴんとのばす」、「くるみをわる」、「歯をそめる」などを挙げている。「もようがえ」の連語を典型的に作る動詞として「あたためる」、「あらう」、「こわす」、「きる」、「しばる」、「たたむ」、「つぶす」、「ぬらす」、「ひやす」、「むすぶ」、「ゆるめる」などを挙げている。そして、「くう」、「のむ」、「ころす」もこの意味的関係を表す動詞とする（「お酒をのむ」、「蛇をころす」など）。

b とりつけ

このタイプの連語は動詞で示される動作によって第一の対象が第二の対象にくっつけられる関係を表す。そのくっつけもさまざまな形態が見られる。そして、「とりつけ」を表す連語は第二の対象を示すニ格またはヘ格で広げられることが構造上の特徴である（「すい口をほおにあてる」、「トロッコにいっぱい石炭をのせる」、「布を胸につける」、「つばきやつつじを庭にうえる」など）。「とりつけ」を代表的に作る動詞として「あてる」、「いれる」、「うめる」、「おく」、「かつぐ」、「つなぐ」、「はる」などを挙げている。

そして、第二の対象を表すニ格名詞が欠けても意味の完結性が持たれる例として「夏帽子をかぶる」、「赤シャツを着る」など、衣服や履物を身に着ける動作を表す動詞との組み合わせが見られる。

また、二単語の組み合わせの中で「もようがえ」を表すが、三単語の組み合わせでは「とりつけ」を表す動詞も挙げられる現象についても述べている。これらは「しばる」、「まく」、「むすぶ」、「ぬる」などである。例えば、「娘は本をふせる」というのは「もようがえ」を表すが、「あらいおわったなべを棚にふせる」という例は「とりつけ」を表している。

なお、「もようがえ」を表す動詞が「～つける」という動詞と組み合わさって「とりつけ」を表す動詞に移行するという現象についても述べている。これらは「むすびつける」、「まきつける」、「かざりつける」などである。また、「布をぬう」と「番号札を着物のえりにぬいつける」のような例に違いを「もようがえ」と「とりつけ」の対立を証明しているものとして挙げている。

c とりはずし

このタイプの連語は第一の対象が第二の対象から外される関係を表している。第二の対象はカラ格名詞で示される。したがって、このタイプは「とりつけ」と反対の現実を表しているとする。「とりはずし」を表す例には「川魚をくしからぬく」、「包帯を首からはずす」、「顔からハンカチをとりのぞく」などである。また、カラ格の代わりにノ格名詞で示される場合もある（「ビールのせんをぬく」、「頭のうえの手ぬぐいをはずす」）ために、三単語的な性格は「とりつけ」の場合ほど厳密ではないと述べている。「とりはずし」を代表的に

表す動詞には「おとす」、「とる」、「ぬく」、「ぬぐ」、「のぞく」などがある。また、「もようがえ」の連語（「紙巻き煙草をこなごなにむしる」）も「とりはずし」の連語（「人形のかみの毛をむしる」）も作ることができる動詞も見られる。また、「もようがえ」と「とりはずし」の間の境界的なものもあることは二つの連続性を見せているとする（「あたまをかる」と「いねをかる」）。また、典型的に「とりはずし」を表す動詞が「とりつけ」を表す連語も作る（「小桶に湯をとる」）ことは、この二つのカテゴリーの連続性も見せている。

d うつしかえ

このタイプの連語は物の空間的な位置の変化を表している。したがって、場所を表すカラ格名詞あるいはマデ格名詞とニ/へ格名詞で広げられる。「大砲を島にはこぶ」、「毛布をうしろへほうる」、「川崎船をウインチからおろす」などは「うつしかえ」の例である。このタイプの連語を代表的に作る動詞は「あげる」、「おとす」、「おろす」、「なげる」、「はこぶ」などである。また、「もちあげる」、「おしだす」のように、「～あげる」か「～だす」が後項動詞になる複合動詞も見られる。

「うつしかえ」を表す連語は「とりつけ」と「とりはずし」と緊密な関係を持っている。このタイプの連語では「とりつけ」のようにニ格名詞で広げられ、また、「とりはずし」と同様カラ格名詞で広げられるためである。ただし、この二つのタイプの連語に比べ「うつしかえ」におけるニ/へ格名詞やカラ/マデ名詞は常に空間性を表す要素と組み合わさることが特徴である。つまり、このタイプの連語を広げるのは、常に空間名詞になると主張している。例えば、通常「とりつけ」を表す連語を場所名詞で広げると、「うつしかえ」のむすびつきに移行していく。「リュックを肩にかつぐ」と「石炭を船から倉庫へかつぐ」のような例はこのことを見せている。

また、「まくりあげる」や「まきあげる」という動詞の存在は「まくる」や「まく」のように通常「もようがえ」が表す動詞が「うつしかえ」を表す動詞に移行していることを見せている。「すそをすこしまくる」は「もようがえ」を表すが、「ひとえの袖を肩のへんまでまくりあげる」は「うつしかえ」を表していると言える。

e ふれあい

このタイプの連語では動詞で示される動作の働きかけによって対象の変化が起こらないが、接触または把握が起こる。この意味的関係を表すものには「ほおをさする」、「片手で剣をおさえる」、「木の葉をふむ」、「鉛筆をなめる」のような例がある。このタイプの連語を作る動詞には「おす」、「かかえる」、「たたく」、「つかむ」、「なぐる」、「にぎる」、「もつ」などがある。「ふれあい」を表す連語では対象の変化という側面を表さない以上、対象の変化を表す、全ての連語と直接に関係を持っている。その中でも特に「とりつけ」の緊密な関係を持つのが当然であり、また「とりつけ」も「ふれあい」も両方とも作る能力がある動詞が見られる。これらは「たたく」、「さす」、「さわる」、「つく」、「ふ

れる」のような動詞である。例えば、「（蚊の群は）というには「ふれあい」を表すが、「ふとい針をからだにさす」という例は「とりつけ」を表している。

f 結果的むすびつき

このタイプの連語ではヲ格名詞が動詞で示される動作の働きかけによって変化するのでなく、その結果として作り出されるものである。「結果的なむすびつき」として「家屋をたてる」、「着物をぬう」、「湯をわかす」、「ごはんをたく」のような例が挙げられる。デ格名詞で原料＝対象を表す要素で広げられることは「結果的なむすびつき」の特徴であると言える。このタイプの連語を作る動詞には「つくる」、「きずく」、「こしらえる」、「にる」、「たく」などがある。しかし、「つくりなおす」、「ぬいなおす」、「たてなおす」のような生産動詞を「もようがえ」に移しかえることができる。この場合、結果として作り出されるものはヲ格名詞でなく、ニ格名詞に示される。例えば、「御飯をたく」というのは「結果的なむすびつき」の例であるが、「お米を御飯にたく」という例は「もようがえ」になる。この事実は「結果的なむすびつき」と「もようがえ」の関係性を見せていると言える。また、いくつかのもようがえ動詞ととりつけ動詞は臨時的に「結果的なむすびつき」を作ることができる。例えば、「千代紙で姉さまをたたむ」や「三の木戸に小屋をかける」のような例はこのことを示している。

また、「結果的なむすびつき」のうち出現的なニュアンスが含まれるものも見られる。この場合ニ格は結果＝対象が現れる場所を示している。例えば、「釜の底にあなをあける」はその例である。

「物にたいする働きかけ」を表す連語は具体的な物に対する具体的な動作による働きけを表しているために、このタイプの連語の中に人を表す名詞が入っても、これらは物として扱うことがふさわしいとする。例えば、「誰かをなぐる」や「誰かを両手でゆすぶる」のような例はそうである。

また、これらのタイプの構造に抽象名詞が入っても、その名詞が具体化することも見られる。例えば、「寝室の壁に夫婦の心得をはりつける」のようなものはそれを見せている。

第二節　人にたいする働きかけ

このタイプの連語では動詞で示される動作の働きかけを受けて変化する対象は人間である。このことはこのタイプの連語のもっとも際立った特徴になる。物への働きかけを代表的に表す動詞が人名詞と組み合わさると、その動詞に語彙的な意味のずれ＝抽象化が起こる。このことは人を示す名詞の語彙的な意味の性格によって規定されるとする。

「人にたいする働きかけ」を表す連語には「若いものをねむらせる」、「友達をおどろかす」、「母を家出させる」、「誰かを雇う」のような例が見られる。

なお、このタイプの組み合わせを作る動詞も際立った特徴を持っている。人間の生理的＝心理的、社会的変化を表すことはもちろん、これらの動詞は動作の働きかけが対象（人間）に一定の変化を起こす他動詞＝使役動詞としてまとめられる。「人にたいする働きかけ」を

作る動詞の大部分は自動詞と対になっている他動詞または自動詞の使役の形のものになる。また、「幸せにする」や「借金とりになさる」のような、二単語の組み合わせも「人にたいする働きかけ」を表す連語を作っている。

このように、「物にたいする働きかけ」は具的的で物理的であるとすれば、「人にたいする働きかけ」は他動＝使役性の中に表現され抽象的であると主張している。働きかけと変化との関係は、「物にたいする働きかけ」では直接的であるが、「人にたいする働きかけ」では主体性を媒介にしているとする。つまり、変化が起こるかどうかをその主体に任せるしかない。例えば、「人をおどろかす」という際にはその「人がおどろく」かどうかがその人によるわけである。このように、「物にたいする働きかけ」と「人にたいする働きかけ」を別のカテゴリーとして分類する必要があることが分かる。

「人にたいする働きかけ」を表す連語を構造的なタイプの違いから次のように分けられる。

a 生理的な状態変化	「子供をなかせる」
b 空間的な位置変化	「学生を学校から公園まで走らせる」
c 心理的な状態変化	「ゆき子をぞっとさせる」
d 社会的な状態変化	「学校の先生をやめさせる」
e よびかけ	「木下をうながす」

この中では、「そそのかす」、「うながす」や「さそう」のように、変化が起こるかどうかについて情報を与えない動詞が作る連語を特殊なものとして挙げる。これらは「よびかけ」という。

a 生理的な状態変化

このタイプの連語では対象（人間）の生理的な状態が変わる過程が見られる。このタイプの連語を作る動詞には「あそばせる」、「おどろかせる」、「さわがせる」、「立たせる」、「だまらせる」、「やすませる」など、ほとんど自動詞の使役形の他動詞がある。「生理的な状態変化」を表す連語には「ともだちを笑わせる」、「少年をあそばせる」、「幾子をつかれさせる」、「不二子をねかす」のような例が挙げらえる。

「人をころす」と「人をしなせる」のような例は「もようがえ」と人の「生理的な状態変化」の違いを見せているとする。前者は「もようがえ」を表すが、後者は人の「生理的な状態変化」になる。

b 空間的な位置変化

このタイプの連語では、動詞が移動を示し、ヲ格名詞がその移動を行う人間を示している。「空間的な位置変化」を表す連語は場所を示すニ格/へ格とカラ/マデ格で広げられる。このタイプの連語の例として「子供を東京へいかせる」、「女中を仲町へはしらせる」、「遊女を軍艦までおしかけさす」や「娘を上京させる」などが挙げられる。これらを作る動詞には「あるかせる」、「いかせる」、「かえらせる」、「のぼらせる」、「はいらせる」のようなものが代表的である。

また、「かえす」、「もどす」、「やる」など、通常やりもらい動詞であるが、「空間的な位置変化」を表す連語の構造に入って、人の空間的な移動を表すようになる。「古女房を国にかえす」や「奥さんを東京へやる」などはその例である。

そして、「物にたいする働きかけ」を表す動詞が語彙的な意味にずれをおこし「空間的な位置変化」の連語を作る傾向も見られる。このことから、「空間的な位置変化」を表す連語は「とりつけ」または「うつしかえ」の構造を受け継ぎ、新しい構文的なむすびつきに発展していると言える。「岡田をまえへだした」や「二人を座敷にいれる」などがその例である。

「空間的な位置変化」が場所を示す名詞で広げられることは「生理的な状態変化」と区別される重要な構造上の特徴である。例えば、「あるかせる」や「はしらせる」が二単語の組み合わせでは「生理的な状態変化」を表すが、場所名詞で広げられる場合に「空間的な位置変化」を表すことができる。このことは「村から五人組の一人をたたせる」のような例に見られる。

c 心理的な状態変化

このタイプの連語は人間の心理に起こる変化を表している。したがって、このタイプの連語を作る動詞に人間の心理状態を示す自動詞の使役形のものが頻繁に見られる。「いらだたせる」、「たのしませる」、「こまらせる」、「うれしがらせる」、「いきいきさせる」、「心配させる」などが代表的に「心理的な状態変化」を表す連語を作る動詞である。このタイプの連語の例として「白川を興奮させる」、「敬二をいらだたせる」、「先生をわずらわす」、「旦那さまを夢中にさせる」などが挙げられる。

また、「生理的な状態変化」と「心理的な状態変化」の間の境界的な例も見られる。例えば、「みんなを不機嫌にだまらせる」というのはその例である。

なお、通常「物にたいする働きかけ」を表す動詞が人名詞と組み合わさり、意味にずれ＝抽象化を起こし、「心理的な状態変化」を表すものに移行する場合も見られる。「わたしをきずつける」や「木原をみたす」のような例はこの現象を見せている。

d 社会的な状態変化

このタイプの連語ではヲ格名詞で示される人が新しい人間関係の中に引き込まれる過程が見られる。または、その人の社会的な状態が変わる過程が見られる。「社会的な状態変化」

を作る動詞も「あわせる」、「つとめさせる」、「さけさせる」、「入学させる」、「退職させる」のように、自動詞の使役形のものが頻繁に見られる。また、「やとう」、「退校する」、「雇用する」のような他動詞も見られる。「社会的な状態変化」を表す例として「ゆき子を富岡へめぐりあわせる」、「夫を患者の要求に従わせる」、「政治家を入閣させる」などが挙げられる。

このタイプの連語は身分や職業を示すニ格名詞で広げられることがある（「米国婦人を家庭教師にやとう」）。この要素は人間にあたらしくそなわった社会的な状態・位置を表し、「もようがえ」を表す連語を広げている結果＝対象のニ格名詞の発展したものであるとする。そして、やりもらい動詞や所有動詞もこのタイプのニ格名詞をとり、「社会的な状態変化」を表す動詞に移行するものも見られる（「息子を年季にやる」）。

なお、「社会的な状態変化」を表す連語は相手を示すニ/ヘ格名詞または仲間を示すト格名詞で広げられることが多い（「船員を漁夫とにらみあわせる」、「隣家の息子にお民をひきあわせる」など）。

e よびかけ

「よびかけ」を表す連語では動詞が言葉または別の手段を使って人に働きかけている過程を表している。動詞はその働きかけによって対象に変化が起こるかどうかについて述べないために、このタイプの連語を特殊なものとする。「よびかけ」を作る動詞には「うながす」、「教える」、「せきたてる」、「たのむ」、「よぶ」、「さそう」のようなものがある。このタイプの連語を表す例として「巡査が木下をうながす」、「主従四人をせきたてる」、「先輩をたのむ」、「人の子を教える」。その中でも、「よぶ」、「まねく」、「さそう」のような動詞は特定の所への移動の人への要求という側面も含意するために、人間＝対象の変化に完全に無関心ではないとする。したがって、これらの動詞が中心となる連語は「空間的な位置変化」と同じ構造を成す現象が認められる（「座敷のところへお民をよぶ」）。

また、「しかる」、「ののしる」、「からかう」、「ほめる」のような動詞の語彙的な意味には対象に対する感情＝評価的な態度が含められるので、これらは態度を表す連語を作る。このように、対象が人間であるからといって必ずしも「人にたいする働きかけ」を表すわけではない。例えば、「子供をほめる」、「学生をしかる」のような例は態度を表すむすびつきの例である。

なお、「よびかけ」を作る動詞が抽象名詞と組み合わさる際に「モーダルな態度のむすびつき」を作る傾向も見られる。その場合、「よびかけ」ではヲ格名詞で示される人名詞がニ格を取る（「敬二に最後の決心をうながす」）。

第三節　事に対する働きかけ

このタイプの連語では、働きかけを受けて、変化していくのは物や人ではなく、これらの動き、状態、特徴あるいは関係である。ヲ格名詞はそのうごき、状態、特徴や関係を表す抽象名詞である。動詞はこれらの側面における変化を示している他動詞である。「事にたいす

る働きかけ」を表す連語の例は「秩序をみだす」、「歯車の回転をはやめる」、「態勢をととのえる」、「川のながれをせきとめる」などである。

ただし、その動きや状態に変化を引き起こすということはそのもちぬしである人や物に対し直接的にまたは間接的に働きかけることを媒介にしないでは成り立たないと主張している。しかし、「事にたいする働きかけ」を表す連語では人や物に対して働きかけて、それに変化を与える全過程のうちから、働きかけの具体性を切り捨てて、変化を受ける側面だけ取り出している。したがって、「事にたいする働きかけ」を表す連語の名付け的な意味は抽象的であると分かる。このように、「事にたいする働きかけ」を表す連語を「物にたいする働きかけ」や「人にたいする働きかけ」から区別する根拠として、第一に構成要素と組み合わせ全体の抽象性が挙げられることが分かる。なお、このタイプの連語では、対象への働きかけは直接的でなく間接的であることは重要な特徴である。

「事にたいする働きかけ」を表す連語は次のように下位カテゴリーに分けられる。

a 変化のむすびつき	「歯車の回転をはやめる」
b 出現のむすびつき	「人のこころに海防の念をよびおこす」

a 変化のむすびつき

「変化のむすびつき」は、ヲ格名詞がその所有者を表すノ格名詞で頻繁に広げられる（「農民の生活水準をたかめる」、「教育の中立性をおかす」）ことが構造上の重要な特徴である。

「変化のむすびつき」は「もようがえ」を表す連語の抽象化の結果成り立つ連語であるとも言える。つまり、「かためる」、「ちぢめる」、「ひろげる」のような動詞が具体名詞と組み合わさると「もようがえ」を表す連語を作るが、抽象名詞との組み合わせにおいては「変化のむすびつき」を作る。このことは「物にたいする働きかけ」と「事にたいする働きかけ」の相互関係を見せている。

b 出現のむすびつき

このタイプの連語は動きや状態が現れる場所を示すニ格名詞で広げられることが構造上の特徴である。「出現のむすびつき」には「生活機能に麻痺状態を惹起する」、「創作活動はかれのなかに分裂をつくる」のようなものがある。「出現のむすびつき」を広げるニ格名詞がノ格の形を取ることもできるのは「変化のむすびつき」と「出現のむすびつき」の連続性を見せていると主張している。

また、「結果的なむすびつき」が出現のニュアンスを帯びる（「釜の底にあなをあける」）ことは「結果的なむすびつき」と「出現のむすびつき」の近い関係を示している。つまり、「出現のむすびつき」は「結果的なむすびつき」の抽象化によって成り立つと言える。「つくる」、「きずく」、「もうける」のような動詞がこのように両方のタイプのむすびつきを

作る。この事実も「変化のむすびつき」でも見られたように、「物にたいする働きかけ」と「事にたいする働きかけ」の相互関係を示している。奥田はこの二つの意味的カテゴリーが歴史的にも構造的にも相互関係を持っているとする。

また、「よぶ」、「まねく」、「おこす」のような動詞が抽象名詞と組み合わさることによって「出現のむすびつき」を作る（「（社会変化は）芸術形式の変化をよぶ」）。なお、ヲ格名詞が組織になる場合、「人にたいする働きかけ」を示すとする（「政府を窮地においこむ」）。こちらの現象は「人にたいする働きかけ」と「事にたいする働きかけ」の関係を示していると主張している。

以上述べたように、「物にたいする働きかけ」、「人にたいする働きかけ」と「事にたいする働きかけ」は「対象への働きかけ」という上位のカテゴリーに統一されるとする。

第二章　「所有のむすびつき」

このタイプの連語ではヲ格名詞が所有の対象を表し、動詞がその対象に対する所有や占有あるいはその所有権（占有権）の移動を表している。したがって、このタイプの連語は対象に対する働きかけでなく、対象をめぐる所有関係を表していると言える。

所有権の移動は場合によって空間的な移動という側面も含められることがある。例えば、動詞「わたす」、「あげる」、「うけとる」などの場合はそうである。しかし、その空間的移動はこのタイプのむすびつきにおいて無関心な側面である。と言うのは、その空間的移動の側面が欠けても、所有権の移動さえあれば、「所有のむすびつき」が成り立つことができるためである。「土地をわたす」、「家をあげる」のような連語はこの事実を示している。

「所有のむすびつき」の成立はヲ格名詞と動詞の特殊性に根付いていると言える。このタイプの連語を作る動詞は所有動詞である。そして、ヲ格名詞は所有対象になり得るものであり、つまり、その語彙的な性質は多様である。ヲ格名詞は具体名詞から資本や富、技術や権利、または、資本や月給などお金をさまざまな側面から特徴づけているものになる。したがって、その語彙的な意味を所有物として一般化できるとする。

「所有のむすびつき」には「やりもらい」と「ものもち」の二通りの現れ方が見られる。

a やりもらい	「ともだちにノートをかりる」、「計算器をうる」
b ものもち	「家をもつ」、「外貨をかせぐ」

a やりもらい

「やりもらい」は対象に対する所有権や占有権の売買、譲渡、掠奪などによる移動を示しているとする。

このタイプの連語を作る動詞には対象が主体の方へ近づいてくることを表すもの（「かう」、「かりる」、「もらう」、「とる」、「うばう」など）と対象が主体から遠ざかって

いくことを表すもの（「うる」、「かす」、「ゆずる」、「わたす」、「くれる」、「あげる」など）が見られる。

「やりもらい」の連語では前者の動詞がカラ格名詞で広げられる（「女中から小皿をもらう」）が、後者の動詞がニ格で広げられることが構造上の特徴である（「家を養子にゆずる」）。これらの名詞が相手＝対象を示し、構造上の特徴である以上、このタイプのむすびつきを三単語の組み合わせとして扱う必要があるとする。この要素の存在は対象の空間的な移動、「とりつけ」、「とりはずし」の「やりもらい」への移行を示しているとする。つまり、「とりつけ」・「とりはずし」のむすびつき、「うつしかえ」のむすびつきを表す連語は、場所や第二の対象を表す名詞を相手＝対象にとりかえると、「やりもらい」に移行してくると述べている。この事実は「所有のむすびつき」が「物にたいする働きかけ」を表す連語から発展してきたことを見せていると主張している。

b ものもち

このタイプの連語は対象に対する所有を表している。ヲ名詞が「やりもらい」の場合と同様、所有物を表すことは「やりもらい」と「ものもち」が体系を作っていることを証明しているとする。「ものもち」を表す連語もニ格名詞で広げることができるが、このニ格名詞は所有物のありかを示している（「お金を財布に持つ」）。奥田は、この種のニ格名詞が「とりつけ」あるいは「ふれあい」を広げて間接的な対象を示す第二の名詞から発展してきたという過程を述べている。このタイプのニ格名詞は「やりもらい」にもある程度見られる（「二階に六畳一間をかりる」）ので、「ものもち」だけの構造的特徴として取り出すことができない。

このタイプのむすびつきではヲ格名詞が所有物を表すことが重要な構造上の特徴である以上、ヲ格名詞が所有物を表さない場合、所有動詞と組み合わさっても、「所有のむすびつき」を作らない。この事実は、「日本帝国をうる」や「その志をかう」のような「態度のむすびつき」の例を見ると分かる。

また、古いやりもらい動詞である「与える」や「うける」のようなものが状態を示す抽象名詞と組み合わさると、「事にたいする働きかけ」を表す連語を作っている傾向も見られる。「自分に納得を与える」のようなものはその例である。しかし、これらが動作を表す抽象名詞と組み合わさった際に抽象化し、単に「する」という意味になってしまい助動詞的働きをするようになる（「確答を与える」、「患者に有害なる刺激を与える」）。

第三章　心理的なかかわり

このタイプの連語では動詞が心理活動を表し、ヲ格名詞がその対象を表している。「対象への働きかけ」とは違って、「心理的なかかわり」は対象の変化に関して無関心である。しかし、心理活動を表す他動詞にもある程度対象への働きかけの性質が認められるとする。つまり、このタイプの組み合わせは物理的でなく、人間の対象に対する働きけのうちから心理的な側面だけを抜きとって、表現していると述べている。

奥田は「心理的なかかわり」を表す連語が「対象への働きかけ」を表す連語から歴史的に派生してきたという仮定を立てている。また、具体的な動作を表す二、三の作用動詞は語彙的な意味にずれ＝抽象化を起こし、心理的な活動を表す動詞へ移行しているか心理的な活動を表す多義語へ移行していると述べている。このことを「心理的なかかわり」が「対象への働きかけ」から発展してきた証拠として挙げている。例えば、「しらべる」、「あばく」、「しりぞく」、「すすめる」のような動詞は現在具体的な意味を表さなくなってきている。そして、「とる」、「つかむ」、「のみこむ」、「とどける」のような動詞は基本的な意味では「対象への働きかけ」を表すが、他の意味では「心理的なかかわり」を表す傾向も見られる（「親のせつなさをよくのみこむ」、「そういう空気を鋭敏につかまえる」）。また、心理動詞への移行の過程が現在も進んでいると指摘している。

奥田は「心理的なかかわり」を表す連語を次のように分類している。

認識のむすびつき

a 感性的なむすびつき	「天井をみる」、「ジャズをきく」、「かおりをかぐ」
b 知的なむすびつき	「親の気持ちを理解する」、「人口問題を考える　」
c 発見のむすびつき	「松の枝に鳥の巣をみつける」

通達のむすびつき	「妹から父の病状をきく」、「あなたがたの関係を話す」

態度のむすびつき

a 感情的な態度	「敵をにくむ」、「先生をうやまう」
b 知的な態度	「文章を小説の技術とみなす」
c 表現的な態度	「子供をほめる」、「学生の遅刻をいましめる」

モーダルな態度のむすびつき

a 要求的なむすびつき	「手術を君にたのむ」、「患者に禁煙を命じる」
b 意志的なむすびつき	「結婚をちかう」、「復讐をくわだてる」

内容規定的なむすびつき	
a 体験の内容規定	「疲れを感じる」、「みじめさをあじわう」
b 思考の内容規定	「方針をきめる」、「作戦を考える」
c 通達の内容規定	「誰かに冗談をいう」、「日本語をはなす」

第一節　認識のむすびつき

このタイプの連語では動詞がさまざまな形態の認識活動を表し、ヲ格名詞はその認識活動が向かっていく対象を表している。

「認識のむすびつき」の下位カテゴリーである「感性的なむすびつき」、「知的なむすびつき」と「発見のむすびつき」について簡単に述べる。

a 感性的なむすびつき

動詞は視覚活動、聴覚活動、嗅覚活動、味覚活動、つまり、感性的な経験を表し、ヲ格名詞はその感性的な経験が直接かかわる対象を示している。「ゆきだおれを見る」、「天井をみつめる」、「ピアノをきく」、「人のはだえをかぐ」、「果物をあじわう」などは「感性的なむすびつき」を表す例である。これらにおけるヲ格名詞は知覚活動で捉える対象なので、原則として具体名詞になるが、その一部は現象名詞になることもできる。また、抽象度が高いものはそれを具体化するノ名詞で広げられる（「蛇のようすを見る」、「旦那のすがたをみる」、「小鳥のさえずりをきく」）。また、感性的な経験を示す動詞が抽象名詞と組み合わさると、その語彙的な意味も抽象化する傾向も見られる。例えば、「貧乏人の地位の変化を見る」や「富岡のすがたの激しい変化をみる」における「見る」は「理解する/知る」という意味にずれる。つまり、ヲ格名詞が具体名詞あるいは現象名詞になることは「感性的なむすびつき」の構造上の重要な特徴である。感性的な経験を表す動詞が抽象名詞と組み合わさっても、「感性的なむすびつき」を作らず、「知的なむすびつき」を作る。

b 知的なむすびつき

このタイプの連語では動詞は思考活動を表し、ヲ格名詞はその対象になる。「感性的なむすびつき」とは違って、「知的なむすびつき」を作る名詞は常に抽象名詞になる。それでも、このタイプの組み合わせでもある程度対象性が認められる。ただし、「感性的なむすびつき」とは違って、このタイプの連語でその対象性は直接的でなく、いくつかの物、あるいは現象の分析と総合が進んでいて、そこから抽出されたものがヲ格名詞で表現されている。「知的なむすびつき」を表す例は「養子の身分を思う」、「ロシア人の精神状態を考察する」、「家庭生活を反省する」、「組み合活動というもののむずかしさを考える」などのようなものである。

いくつかの具体的な作用動詞は抽象名詞と組み合わさると、「知的なむすびつき」を作ることが見られる。「朝子は山路のくせをのみこむ」や「正しい人間関係をしっかりつかませる」のような例はこの傾向を示している。また、「知的なむすびつき」を作るヲ格名詞には現象名詞も見られることはこのタイプの連語と「感性的なむすびつき」の連続性を見せているとする。他に、思考動詞は具体名詞と組み合わさると、むすびつきの性格にずれを起こし「態度のむすびつき」を作ることも見られる。例えば、「百姓を自分の子のように考える」では「考える」は「判断する/みなす」という意味にずれてくる。

c 発見のむすびつき

「発見する」、「みつける」、「みいだす」のような動詞が具体名詞とも抽象名詞とも自由に組み合わさって「発見のむすびつき」を作る。このタイプの連語は知られていないもの、性質や状態などを認識していくことを表している。「発見のむすびつき」は感性的でもあり、知的でもありうる。このタイプの連語は発見の対象のありかを示すニ格名詞で広げられることが構造上の特徴である。「たかい峠のうえの位置に宿をみつける」や「自然のなかに美をみいだす」のようなものは「発見のむすびつき」の例である。感性的経験を表す動詞も知的活動を表す動詞もこの構造の中に入ってくると、「発見のむすびつき」を作る（「愛の裏面に感情の働きを意識する」、「文三の顔を天井にみる」など）。このことは「認識のむすびつき」の中で「発見のむすびつき」を取り出すことの必要性を見せている。ただし、これらは発見の構造に中に入っても、元の感性的な意味または知的な意味を完全に失ってはいない。例えば、「和子のね息のなかに干にしんのにおいをかぎつける」は「感性的なむすびつき」でありながら「発見」の構造を持っていると言える。したがって、「発見のむすびつき」は「認識のむすびつき」を表す連語の体系の中で特殊なものであると考えられる。

第二節　通達のむすびつき

このタイプの連語では動詞が言語活動を示し、ヲ格名詞はその言語活動で表現される現実のできごとを示しているとする。ヲ格名詞が典型的に抽象名詞になることは「知的なむすびつき」と類似した構造上の特徴である。「通達のむすびつき」を表す例として「あなたがたの関係を話す」、「自分の情熱をかたる」、「さびしさをうったえる」、「父の病状をたずねる」などが挙げられる。

「通達のむすびつき」を表す動詞は言語活動を表すものとして大きく一般化できるが、その中には「つげる」、「おえる」、「しらせる」、「つたえる」のような、信号による通達を表すものもあると述べている。また、具体名詞の場合は「～のこと」を加えることによってそれが抽象化し「通達のむすびつき」を作ることができる（「ロシア人のことをいろいろはなす」）。ただし、動詞「いう」、「のべる」の場合、抽象名詞でさえ「～のことを」をつけないと、「通達のむすびつき」でなく、「内容規定的なむすびつき」を表す（「不平をいう」）。

また、名詞化する動詞は「～することを」という手続きで「通達のむすびつき」を表す（「芝居小屋にかよいつめたことをいった」）。それに対し、「感性的なむすびつき」の場

合は「～することを」ではなく「～するのを」という手続きをとる。このことは二つのカテゴリーの違いを明らかにすると思われる。つまり、「誰かが歌うのをきいた」のようなものは「感性的なむすびつき」の例になるのに対し、「誰かが歌うことを聞いた」のようなものは「通達のむすびつき」になるということである。

「通達のむすびつき」は相手を表すニ格名詞あるいはカラ格名詞、仲間を表すト格名詞で広げられることが構造上の重要な特徴である（「この会話をみね代に報告する」など）。このニ格名詞の存在は「知的なむすびつき」（「神経過敏の取り締まりぶりから世潮をうかがう）と「通達のむすびつき」（先生に意見をうかがう）の違いをはっきりさせることがある。また、このニ格名詞の存在は「感性的なむすびつき」から区別する特徴である。例えば、「誰かからはじめてその話をきく」というのは「通達のむすびつき」の例であるが、「君らの話をきく」は「感性的なむすびつき」になる。

第三節　態度のむすびつき

このタイプの連語は対象に対する感情、評価、判断、捉え方など、広く言えば対象に対する態度を表す。これらを作る動詞は態度を表す動詞であると言える。そして、態度の対象になる名詞は物、現象、側面あるいはそれらの間の関係でも良い。また、「態度のむすびつき」は感情や評価の内容をさしだす第三の部分で広げられることが構造上の重要な特徴である（「友達をうらやましく思う」、「彼を一流の作家とみなす」など）。この要素の存在はこのタイプの連語を「認識のむすびつき」から区別する根拠にもなる。

「態度のむすびつき」には、次のように、三つの下位カテゴリーが見られる。

a 感情的な態度のむすびつき	「敵をにくむ」、「先生をうやまう」、「へびをおそれる」
b 知的な態度のむすびつき	「文章を小説の技術とみなす」
c 表現的な態度のむすびつき	「子供をほめる」、「学生の遅刻をいましめる」

a 感情的な態度のむすびつき

このタイプの連語では、動詞は感情を示し、ヲ格名詞はその感情が向かう対象を示している。「病気をおそれる」、「駒子をあわれむ」、「くもやかにをきらう」、「果物をたのしむ」などが「感情的な態度」を表す例である。

連語の構造から見て「感情的な態度のむすびつき」を作る動詞として扱うが、感情というよりも評価を表すものもある（「無視する」、「軽視する」、「肯定する」、「否定する」など）。また、「尊敬する」、「軽蔑する」、「あがめる」のように感情的であるか評価的であるかが区別し難いものもある。これらを含む組み合わせをむしろ「感情＝評価的なむすびつき」のように名付ける方が良いとする。

なお、動詞「思う」が形容詞を伴い、「こいしたう」という意味を表す場合に「感性的な態度のむすびつき」を作る（「なな子をかわゆくおもう」、「この事件を気の毒に思う」など）。動詞「感じる」でも類似したふるまいが見られる（「自分をあさましく感じる」など）。このように、動詞「おもう」と「感じる」は内容規定的に働く形容詞と組み合わさる場合に「感情的な態度のむすびつき」を作ると言える。

b 知的な態度のむすびつき

このタイプの連語では動詞が思考活動、主に判断を表し、名詞はその対象である。そして、「知的な態度のむすびつき」は判断あるいは決定の内容、考え方（対象への接近の仕方）を示す要素を必ず含む。「物語の作家としてジョイスを規定する」、「壁のむこうのなく声を浜崎夫人の声だときめる」、「雲をけむりとまちがえる」などは「知的な態度のむすびつき」の例である。

このタイプの連語を作る動詞には特殊なものがほとんど見られず、「みなす」、「解釈する」、「判断する」、「たとえる」、「なぞらえる」のような少数の動詞に限られる。ただし、「知的なむすびつき」を典型的に作る動詞が判断の内容を示す単語と組み合わさると、「知的な態度のむすびつき」を作る傾向が見られる。「それらの人たちを自分の先輩と考える」、「お嬢さんをひじょうな美人とおもう」などのような例にそれが見られる。この他にも、「知的なむすびつき」と「知的な態度のむすびつき」とを区別させる根拠が見られる。それは、「知的なむすびつき」は対象を知的な領域に取り入れていることしか表現しないが、「知的な態度のむすびつき」対象への態度を表現しているということである。また、「知的なむすびつき」を作るヲ格名詞は抽象的なものに限られるが、「知的な態度のむすびつき」ではヲ格名詞には制限がない。なお、「知的な態度のむすびつき」の場合は動詞の語彙的な意味にずれが派生している。例えば、「みる」、「にらむ」、「ながめる」、「みとめる」など、「感性的なむすびつき」を作る動詞は態度の構造の中に入ると、「みなす/判断する」という意味にずれてくる。例えば、「ぼくを生活上必要な道具とみる」、「浮雲を自然主義の先駆とみとめる」などではそうである。

c 表現的な態度のむすびつき

このタイプの連語では、対象に対する感情なり評価なりが主に言葉の中に表現されている。このタイプの連語を作る動詞の全てに/おもに言語をもちいて、感情的な、評価的な態度をそとにあらわす/という意味（奥田 1968-1972[1983:126]）が含まれている。「表現的な態度のむすびつき」を作る動詞には「しかる」、「いましめる」、「せめる」、「からかう」、「ほめる」、「ののしる」、「けなす」などがある。ヲ名詞は人名詞になる場合が多いが、常にそうであるとは言えない。このタイプの連語の例とし「むすめをしかりつける」、「非常識をしかりつける」、「まだ手紙がこないかと、私をせめる」、「友達を励ます」などが挙げられる。ヲ格名詞が必ずしも人名詞でないことは、このタイプの連語を「人にたいする働きかけ」からはっきりと区別している。

このタイプの連語は「感情的な態度のむすびつき」とは極めて近い関係を持っている。ただし、「表現的な態度のむすびつき」は動詞が発言の内容を指し出す引用句で補われることが重要な特徴である（「佐川の令嬢ををたいへんおとなしい子だとほめる）。なお、このタイプの連語は、動詞が言語活動を表す以上、相手を示すニ格で広げられることは「感情的な態度のむすびつき」と「知的な態度のむすびつき」から区別する重要な特徴である（「敬二のことをえらいと宗さんにほめる」）。

第四節　モーダルな態度のむすびつき

このタイプの連語を作る動詞は心理活動動詞であるが、その中に特に要求や命令、願望や期待、忠告や奨励、許可や禁止、意図と決心など、さまざまなモーダルな態度を表している。このタイプの動詞である「ねがう」、「いのる」、「もとめる」などがヲ格名詞と組み合わさると、動作に対する「モーダルな態度」を表す連語を作る。「復活をのぞむ」、「復讐をくわだてる」、「回復をいのる」のようなものは「モーダルな態度のむすびつき」の例である。

このタイプの連語を作る名詞が動作性を持つ名詞に限られていることは、「モーダルな態度のむすびつき」を「知的なむすびつき」から区別する重要な特徴である。また、「通達のむすびつき」を作る動詞も動作性を持つヲ格名詞と組み合わさると、「モーダルな態度のむすびつき」を作ることが見られる。なお、「モーダルな態度のむすびつき」は、特に「知的なむすびつき」や「通達のむすびつき」に比べると、対象性を失いかけていると言える。したがって、このタイプの連語におけるヲ格名詞は、認識や伝達の対象よりも、質料的な内容を表すものになると言える。

「モーダルな態度のむすびつき」を表すものに二つの下位カテゴリーが認められる。

a 要求的なむすびつき	「手術を君にたのむ」、「患者に禁煙を命じる」
b 意志的なむすびつき	「結婚をちかう」、「復讐をくわだてる」

a 要求的なむすびつき

このタイプの連語を作る動詞には「のぞむ」、「いのる」、「ねがう」、「ゆるす」、「希望する」、「許可する」、「禁止する」、「もとめる」、「命令する」のような動詞が見られる。「要求的なむすびつき」は相手を表すニ格名詞で広げることができるが、この場合のに格名詞は単なる話し相手でなく、ヲ名詞で示される動作の主体でもある。つまり、「妻はわたしに人間的であることをのぞんでいる」のような、「要求的なむすびつき」は「妻はわたしが人間的であることをのぞむ」というように言い換えられるわけである。

他に「要求的なむすびつき」を表す例として「ぼくに節煙を命じる」、「それ以上の働きを梅太郎に期待する」、「君の健在をいのる」などが挙げられる。

b 意志的なむすびつき

このタイプの連語を作る動詞には「たくらむ」、「こころざす」、「めざす」、「心がける」、「企画する」、「意図する」、「決心する」、「約束する」のようなものが見られる。「意志的なむすびつき」の例として「毒殺をくわだてる」、「復讐をたくらむ」、「完全な教育を心がける」、「結婚をちかう」などが挙げられる。ヲ格名詞は動作性が含まれたものであるが、その名詞で示される動作の主体は、動詞で示されるモーダルな態度の主体と同一である。「ちかう」、「約束する」のような言語活動動詞は話し相手を表すニ格名詞で広げられても、動作の主体を表すニ格名詞で広げることができない。このことは「意志的なむすびつき」と「要求的なむすびつき」を区別する根拠になるとする。

第五節　内容規定的なむすびつき

このタイプの連語では動詞が心理活動を示し、ヲ格名詞はその心理的な活動の内容を質的に特徴づけている。このタイプの組み合わせは対象的な性質を失っている。「不平を言う」、「怒りをかんじる」、「興味をかんじる」、「ドイツ語をはなす」などは「内容規定的なむすびつき」の例である。

「内容規定的なむすびつき」の例である「ドイツ語をはなす」を「通達のむすびつき」の例である「ドイツ語のことを話す」と比べると、これらにおける対象的な性格が異なることが分かる。前者では対象性が失われているが、後者では対象性が認められる。

また、思考動詞も思考動詞の内容の質を特徴づけている名詞と組み合わさると、「知的なむすびつき」でなく、「内容規定的なむすびつき」を作る。「対策を考える」や「わけを考える」などはその例である。

「内容規定的なむすびつき」を「知的なむすびつき」や「通達のむすびつき」と区別することは難しいが、「ドイツ語のことをはなす」というのは「ドイツ語についてはなす」のように言い換えることができ、このタイプの組み合わせでは主体と対象が別のものとして存在している。つまり、ヲ格名詞（「ドイツ語のこと」）の対象性がはっきりしていると認められる。それに対し、「ドイツ語をはなす」ではヲ格名詞である「ドイツ語」の対象性が失われている。ここでは主体の話す動作そのものがドイツ語によって行われており、主体と「ドイツ語」を切り離すことが難しい。このような組み合わせを「内容規定的なむすびつき」を表すものとして考える。

「内容規定的なむすびつき」は次のように、三つの下位カテゴリーに分類されている。

a 体験の内容規定	「怒りを感じる」、「悲しみをあじわう」、「反感をおぼえる」
b 思考の内容規定	「策略を考える」、「理由を考える」、「方針をきめる」
c 通達の内容規定	「じょうだんをいう」、「あいさつをのべる」、「文句をいう」

a 体験の内容規定

「体験の内容規定」を表す連語を代表的に作る動詞は「感じる」、「経験する」、「あじわう」、「おぼえる」、「しる」、「みる」などであり、ヲ格名詞の位置に来るものも特殊であり、「つらさ」、「いかり」、「必要」、「感激」、「苦痛」、「恐怖」などのような、内的体験を示す名詞になる。ここまで述べた例の他にも、「体験の内容規定」を表す組み合わせとして「みじめさをあじわう」、「つかれを感ずる」、「おそれをしる」なども挙げられる。

このタイプの連語は「認識のむすびつき」と極めて近いが、もともと認識動詞である「みる」、「しる」、「あじわう」などに意味的にずれが派生し、「体験の内容規定」のむすびつきを作るようになると言える。

b 思考の内容規定

このタイプの連語を作る動詞は「考える」に限られる。ヲ格名詞の位置に来るのは、「策略」、「方針」、「方法」、「理由」、「意見」、「真偽」など、思考活動の内容を特徴づけているものである。「名義を考える」や「善悪を考える」などは「思考の内容規定」の例である。

c 通達の内容規定

このタイプの連語を作る動詞は言語活動を表し、「いう」、「のべる」、「はなす」、「しゃべる」などになる。ヲ格名詞は言語活動の内容を質的に特徴づけているものになる。「通達の内容規定」の例として「じょうだんを言う」、「苦情をのべる」、「日本語をはなす」、「お民の名をよぶ」、「感想をかく」などが挙げられる。

第四章　状況的なむすびつき

ヲ格名詞と組み合わさって対象的なむすびつきを作ることは、他動詞を自動詞と対照させる重要な特徴である。つまり、ヲ格名詞は原則として他動詞と組み合わることが重要な特徴である。

ただし、この原則からずれてヲ格名詞と組み合わさる自動詞もある。移動動詞は空間名詞と組み合わさり、「道をあるく」、「トンネルをぬける」、「川をわたる」のようなむすびつきを作る。この場合、動詞は移動動作を表し、ヲ格名詞はその移動が行われる場所を示している。

また、このタイプの空間を表す連語はヲ格名詞が自然現象を示すものになれば、狭い意味でも状況的なむすびつきを作るとする。例えば、「雪ふりあげくをぺたぺたやってくる」ではそうである。

そして、この名詞は時間を示す名詞に変えると、時間的なむすびつきにずれてくる（「秋の夕ぐれをひとりでかえる」）。

同じように、時間＝量的なむすびつき（「六年の月日を郷里から伊予とうろつきまわる」）と空間＝量的なむすびつき（「三百メートルをはしる」）も見られる。

このように、自動性の動詞はヲ名詞を取り替えることによって、次のように「状況的なむすびつき」に分かれていくとする。

a 空間的なむすびつき	「堤防をあるく」、「橋をわたる」、「事務所をでる」
b 状況的なむすびつき	「暗がりをあるく」、「霧の中をいそぐ」
c 時間的なむすびつき	「夕飯のあとをさびしくすわる」
d 時間＝量的なむすびつき	「一晩を芸者家にねる」
e 空間＝量的なむすびつき	「わずかな距離をあるく」、「二三町をとおる」

a 空間的なむすびつき

このタイプの連語では動詞は移動の場所を表しているが、その場所と移動動作の関係は一様ではない。動詞の語彙的な意味によって「空間的なむすびつき」は次のように分かれる。

ア　うつりうごくところ	「堤防をあるく」、「（川が）谷底を流れる」
イ　とおりぬけるところ	「橋をわたる」、「山をこえる」
ウ　はなれるところ	「事務所をでる」、「岸をはなれる」

b 状況的なむすびつき

ヲ格名詞を自然現象や人間が作り出す物理的な生理的な現象を示すものに変えると、狭い意味の「状況的なむすびつき」を作る。「花のにおいの中をあるく」、「霧の中をいそぐ」のようなものはその例である。

c 時間的なむすびつき

ヲ格名詞を時間を表すものに変えると、「時間的なむすびつき」を表すようになる。「春の日を一日床にねる」や「暑中休暇を鎌倉の方でくらす」などはその例である。

d 時間＝量的なむすびつき

このタイプの連語ではヲ格名詞が単なる時間ではなく、時間＝量を表している。「一時間あまりを窓ぎわにたつ」や「半夜をあやしい恍惚のなかにとけてすごす」などは「時間＝量的なむすびつき」の例である。

e 空間＝量的なむすびつき

ヲ格名詞を空間＝量のものに変えると、「空間＝量的なむすびつき」へ移行する（「わずかな距離をあるく」）。また、数量を示す名詞（数詞）になると、完全に量＝規定的なものになる（「周囲の三分の二をとおりすぎる」）。

4.2.2. 奥田(1968-1972)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」と本研究との関連

奥田（1968-1972）は、日本語におけるヲ格名詞と動詞との組み合わせの単なる分類としてでなく、他の言語にも参照可能な一般言語学的な貢献として見ることがふさわしいように思われる。奥田は、奥田（1968-1972）に限らず、動詞と名詞の語彙的な性質と文法的な性質、また、文の他の要素の語彙的な性質と文法的な性質を考慮に入れながら、これらの現れ方の条件を一般化し説明しようとしている（例えば、奥田（1967）などもそうである）。

奥田は単語の語彙的な意味の記述にあたって、個別の例における意味を記述するのではなく、豊富な用例を元に、単語の意味が現れる条件を設定し、そこから意味の一般化を行う重要性を主張している。その際に動詞と名詞との組み合わせの他にも文の他の要素との関係も十分に考慮に入れながら、言語の現象を分析していく。それにあたって、単語の語彙的な性質と文法的な性質が相互に結びついている、という立場に立っている。このような方法論で言語の現象を説明していくことは奥田の言語学における重要な貢献であると認められる。

ゆえに、このような分析の仕方はセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの分析においても応用できるように考えられる。セルビア語の分析を日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わさり方と対照しながら行いたい。それは、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方がセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方に類似し、共通点が多いとともに、相違点も大いに見られるために、必要であるように思われる。

セルビア言語学では、ここまで述べたように、対格名詞に関する研究が当然あるが、上述の奥田のような方法論を使って対格名詞と動詞との組み合わせの体系を分析している研究は一切存在しない。

それだけでなく、奥田は多様な下位カテゴリーを詳細に記述しているだけでなく、ヲ格名詞と動詞との組み合わせが構成する体系の総合性を徹底的に説明していることが最も重要な貢献であるように思われる。カテゴリー間の相互関係、連続性、一つのカテゴリーから他のカテゴリーへの移行やカテゴリーの間の境界的なものなどを全般的に説明している。この点

では日本語学においてもセルビア語学においても類似した研究が見当たらない。そのために、本論文ではこの考え方も取り入れ、セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせの体系を分析していきたい。

このように、本研究は奥田の研究を大いに参考にするのだが、セルビア語は日本語とは異なる言語なので、奥田の分析をそのまま当てはめることはできない。本研究ではセルビア語の特徴を十分に考察しながら、奥田の分析のし方に基づく方法論を使い、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系を分析したい。

なお、本研究の方法論には奥田の方法論とは異なる点もある。主として次の 2 点である。

（1） 主格名詞も考慮に入れること

第一に、分析を行う際に、動詞の要求する主格名詞の語彙的な性質と文法的な性質も必要に応じて考慮に入れることである。[42]それは、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの分析において主格名詞が全体の意味に影響を与えることが少なくないので、無視することができないためである。例えば、セルビア語では既に挙げているように、次のような組み合わせがある。

例： Guš-i　ga　kašalj-ø.

息苦しくさせる-PRES:3SG　彼-ACC:SG　咳-NOM:SG

「彼は咳で息苦しくなっている 。(〈直〉咳が彼を息苦しくさせる。)」

例： Bol-i　ga　nog-a.

痛む-PRES:3SG　彼-ACC:SG　足-NOM:SG

「彼は足が痛い。(〈直〉足が彼を痛くさせる。)」

このような組み合わせは、主格名詞なしに存在しないわけである。しかし、このタイプの組み合わせは対格名詞の現れ方を示している用法である以上、本論文の考察に含める必要がある。それは主格名詞なし無理になる。

他にも、主格名詞を除くと、組み合わせ全体の意味が不明確になる場合がある。例えば、次のような例もそうである。

例： Ov-o　tež-i　jedan-ø　kilogram-ø.

これ-NOM:SG　重さがある-PRES:3SG　一-ACC:SG　キロ-ACC:SG

「これは一キロの重さがある。」

[42] 日本語のガ格と類似した用法を持つ。

つまり、上に挙げた例では主語の ovo「それ」を除くと、teži jedan kilogram「一キロの重さがある」の意味は不完全になる。

本論文の筆者はこのタイプの組み合わせを 12.2.2.で「物事の重さ、物事の価値、値段を表す組み合わせ」として扱う。

また、この場合以外にも、主格名詞で示される要素は構造上の重要な特徴を示すことがある。例えば、次の実例では主格名詞が特定の状態を起こす[原因]として見るべきであり、

例: Naprasan-ø odlazak-ø najpopularnij-eg Makedonc-a

突然-NOM:SG 辞去-NOM:SG 一番人気の-GEN:SG マケドニア人-GEN:SG

ražalosti-o je i **rasplaka-o** i

悲しませる-PST:3SG ～も 泣かせる-APP:M:SG ～も

staro-ø i mlado-ø.

年寄り-ACC:SG ～も 若者-ACC:SG

「最も人気のあるマケドニア人の**突然の辞去は年寄りも若者も悲しませ、泣かせた**。」(Politika)

このような実例を 8.1.で人の「生理的な変化」として扱う。

[原因]を表す要素としての主格名詞を対格名詞の用法の分析に含める必要をセルビア語学においても指摘している学者がいる(Ivić 2002)。

また、日本語学においてもガ格名詞の語彙的な性質と文法的な性質を言語の現象の分析に含める必要性を主張している研究が見られる。[43]したがって、必要に応じて主格名詞の性質も分析に取り入れることを奥田の方法論の拡大として考えられる。

（2）語彙的な意味、カテゴリカルな意味、文法的な意味という概念の導入

第二に、奥田は単語の語彙的な性質と文法的な性質を十分に考察しているが、それを明確に強調しない場合もあるように思われる。そのために、本研究では早津（2009、2015、2016）に習い、奥田の方法論を広げる立場になる。その際、単語の語彙的な意味、カテゴリカルな意味と文法的な意味という概念を分析に導入する。この三つの概念については次の章で詳細に説明するが、本論文の筆者は語彙的な意味、カテゴリカルな意味と文法的な意味を考慮に入れながら、対格名詞と動詞の組み合わせが作られる条件を設定し、一般化することを目指している。

[43] 本研究では主に早津（2009、2015、2016）、三代川（2015）を参考にする。

第五章　本研究の分析対象および方法論

5.1.　分析対象

本研究は言語資料から実例を集め、対格名詞と動詞との組み合わせをの現われ方を分析し、その体系を記述するという方法で進める。

この章では資料の選定方法、実例の抽出方法に関して述べる。具体的な言語資料の出典に関しては、本論文末の「用例出典」で述べる。

本研究の分析対象になる実例のためには、第一に「現代セルビア語のコーパス」：

Corpus of Contemporary Serbian (SrpKor) Human Language Technologies Group, University of Belgrade(現代セルビア語のコーパス（SrpKor）人間言語技術グループ、ベオグラード大学)

http://www.korpus.matf.bg.ac.rs

を使用した。このコーパスは現代セルビア語の最も詳しく多様な文体の作品を集めているコーパスであり、なお、本論文の筆者は大学院の時にその作成のプロジェクトに協力した経験があるために、本研究のために参考にすることにした。

第二に「セルビア文学の名文集」：

Antologija srpske književnsti(セルビア文学の名文集)

http://www.antologijasrpskeknjizevnosti.rs/ASK_EN_projekat.aspx

を使用した。このコーパスでは、セルビア語の代表的な文学作品が集められているために、本研究のために使用する必要があるように思われた。

その他にも、二冊の小説から手作業で集めた実例も分析対象に含めた。これらは次のようになる。

Meša Selimović, (1966) *Derviš i smrt*（ダルウィーシュと死）.Svjetlost, Sarajevo.

Ivo Andrić, (1945), *Na Drini ćuprija*（ドリナの橋）. Prosveta, Beograd.

その理由は、この二つの小説がセルビア文学において（より正確に言えば、旧ユーゴスラビア文学において）最も代表的な作品であるので、この二つの作品を詳細に読み、分析に含めたかったことである。

この二つの作品の他にも旧ユーゴスラビア時代の文学作品を分析対象に含めたものもある。現在その作品はセルビア文学に属するか、あるいは、クロアチア文学やボスニア・ヘルツェゴビナ文学に属するか、言語学者や文学者に議論されることが頻繁にある。ただし、旧ユーゴスラビアの時代にはこれらの作品は一つの言語であるセルボ・クロアチア語で書かれたも

のとされていた以上、本論文の筆者はこれらを現在もセルビア文学の代表的な作品として分析に含める価値があると考えている。同時に、これらの作品はクロアチア文学にもボスニア・ヘルツェゴビナ文学にも属することを否定せず、それに関しては議論する立場にない。

このように、本研究のためには第一に小説の実例を使用した。その他に、新聞や雑誌の実例も使用した。その中でも、最も参考にしたのは *Politika*「ポリティカ」というセルビアの日刊紙になる。Politika はセルビアで高級紙とされており、バルカン半島でも最も歴史が長い日刊紙である。したがって、使用されている文体も現代セルビア語の分析のためにふさわしいと考えている。

最後に、法律文書、先行研究に挙げられている例と筆者の作例を多少本論文の分析対象にした。

作品の選定の際は、これらが現代セルビア語の分析のために代表的であり文体的にも言語的にも適切なのかを考えてきた。したがって、インターネットのウェブサイトや歴史の浅い新聞や雑誌または文体的にそれほど一般的とは言えないような小説は今回分析対象から省いた。時代的に言えば、最も多い作品は第二世界大戦後から現在にかけて書かれたものになるが、セルビア文学の中で代表的であり、対象にする価値があるものをそれより古くても多少含めた。

5.2. 本研究の方法論

本研究では、奥田の方法論を広げ、早津（2009、2015、2016）に習い、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、文法的な意味という概念に基づき、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を分析する。したがって、本節では語彙的な意味、文法的な意味、および、カテゴリカルな意味という概念について説明する。単語には語彙的な意味および文法的な意味がある。早津（2009）はこの二つの概念について次のように言う。

> ふつう国語辞典に書かれているのは語彙的な意味である。それに対して、文法的な意味とは一定の文法的な形を整えた単語が他の単語との関係の中で発揮する意味（物事と物事との関係的な意味、およびそれらと話し手との陳述的な意味）である。（早津 2009:4）

具体的な例として、「読む」は/文字で書かれたものを一字一字声に出して言う/または/文字や文章、図などを見て、その意味・内容を理解する/という語彙的な意味を持つ。それに対して、「読む」は、次のような形で以下のような文法的な意味が現れる

読んだ	読まない	読んでいる	読めば	読んでも分からない
［過去］	［否定］	［動作の継続］	［条件］	［逆条件］

また、「小屋」の語彙的な意味は/小さく、簡単な造りの粗末な建物/また/仮に建てた小さな建物/になるが、この名詞は格助詞と組み合わさり、多様な文法的な意味を表す。

小屋を掃除する	小屋を作る	小屋を出る	小屋を通る
［動作の対象］	［生産物］	［出発点］	［通過点］

これらの例では、同じ「小屋を」という形式が［動作の対象］、［生産物］、［出発点］、［通過点］という、異なる文法的な意味を表している。

単語の語彙的な意味、および、文法的な意味は別々に存在しているわけではなく、なんらかの関係で結びついている。その関係はカテゴリカルな意味で表される。カテゴリカルな意味とは、単語の語彙的な意味のうちで文法的な性質と関わって共通的に取り出せる側面である。奥田（1979）はカテゴリカルな意味について次のように述べている。[44]

> 要素=単語の語彙的な意味と文法的な意味の間には、媒介としてカテゴリカルな意味 categorical meaning がある。カテゴリカルな意味というのは、文法的なむすびつきとのかかわりとのなかにおける、語彙的な意味の一般化である。（奥田 1979［1984:162］）

つまり、カテゴリカルな意味とは、語彙的な意味と文法的な意味を繋ぐものである。単語が一定の規則に従い、他の単語と組み合わさり、文法的なむすびつきを作る。しかし、この規則は単語ごとに働くわけではなく、特定の単語のグループにおいて働くわけである。その特定の単語のグループの語彙的な意味に共通に取り出せる側面がカテゴリカルな意味である。

a	公園で歩く	店で服を買う	図書館で勉強する	大学で働く
b	寒さで震える	箸で食べる	大声で叫ぶ	台風で家が倒れる

a において、デ格で示される名詞の文法的な意味は、［動作や出来事の場所］になる。それに対して、b におけるデ格名詞は a と同じ文法的な意味を表すとは言えない。a および b の名詞を比べると、a の名詞は全て空間性を持つ名詞であることが分かる。つまり、デ格が空間性を持つ名詞と組み合わさる時、［動作や出来事の場所］という、文法的な意味を表すと言える。したがって、a の名詞において〈空間〉という、カテゴリカルな意味を取り出すこと

[44] 早津（2009:5）からの引用である。

ができる。〈空間〉というカテゴリカルな意味は、a の名詞の語彙的な意味のうちで[動作や出来事の場所]という文法的な意味と関わる共通的に取り出せる側面である、と言える。また、次に挙げるデ格名詞の文法的な意味は[手段]になる。

c　筆で絵を書く　　箸で食べる　　糸で破れた服を縫う　　ナイフで野菜を切る

これらを「台風で家が倒れる」や「店で服を買う」などと比べると、〈具体物〉という、共通の側面を取り出すことができる。つまり、デ格が〈具体物〉という、カテゴリカルな意味を表す名詞と組み合わさる時、[手段]という、文法的な意味を表すようになる。また、

d　寒さで震える　　台風で家が倒れる　　大雪で道路が普通になる

におけるデ格名詞の文法的な意味は[原因]であり、これらの名詞に共通に取り出せる側面は〈現象〉になる。したがって、デ格が〈現象〉という、カテゴリカルな意味を表す名詞との組み合わせにおいて、[原因]という、文法的な意味を表すようになる、と言える。

構文的に同じ環境でも、構文に含まれる各要素のカテゴリカルな意味、および、文法的な意味を考察することによって、種々のタイプを見出すことができる。例えば、以下に挙げる作例は、皆「Ｎに　ＮヲＶ」という構文を持つが、要素のカテゴリカルな意味、および、文法的な意味の観点から分析してみると、異なるタイプになることが分かる。

a　本棚に本をあげる　　お皿に料理をのせる　　壁にポスターを貼る

b　友達に本をあげる　　学生にプリントを渡す　　客に商品を売る

c　友達にうわさを言う　　学生に辞書の使い方を教える　　友達に噂を伝える

これらをカテゴリカルな意味、および、文法的な意味という観点から整理してみると、以下のようになる。

a	[付着先]ニ	[対象]ヲ	
	〈具体物〉	〈具体物〉	〈付着〉Vt
b	[授与相手]ニ	[対象]ヲ	
	〈人〉	〈具体物〉	〈授与〉Vt
c	[伝達相手]ニ	[伝達対象]ヲ	
	〈人〉	〈情報〉	〈伝達〉Vt

上に挙げた作例を見ると、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味が、それぞれの文法的な意味に影響を与えている、と言える。

さらに、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、および、文法的な意味という観点から、多義語の現れ方についても考察できる。

a かばんに着替えと本とノートを詰めこむ　　郵便物をボックスに詰めこむ

b 学生に知識を詰めこむ　　教え子に英単語を詰めこむ

(a) における「詰めこむ」の語彙的な意味は/ものを入れ物に大量に詰める/になり、これは「つめこむ」の基本的な意味になりうる。(b) は/色々な知識を無理矢理覚えさせる/になり、これは「詰めこむ」の派生的な意味になる、と考えられる。この二つの例の組み合わさる要素のカテゴリカルな意味と文法的な意味を一般化してみる。

(a) におけるニ格名詞として/かばん/、/ボックス/が現れるが、これらに共通する意味的な側面として〈物・空間〉というカテゴリカルな意味を取り出すことができる。その文法的な意味は[付着先]になる。ヲ格名詞のカテゴリカルな意味は〈具体物〉になり、その文法的な意味は[対象]になる。この場合、これらの組み合わせにおける「詰めこむ」の意味は広く言えば「付着」を表している。したがって、この意味における「詰めこむ」の現れ方を以下のようにまとめることができる。

(a)

[第二の対象]ニ	[対象]ヲ	V 付着　/ものを入れ物に大量に詰める/
〈閉じた空間〉	〈具体物〉	

それに対し、(b) における二格名詞である/学生/や/教え子/に共通する意味的な側面として〈人〉というカテゴリカルな意味を取り出すことができ、その文法的な意味は[伝達相手]になる。 ヲ格名詞として/知識/と/英語の単語/という語彙的な意味のものが現れるが、これらのカテゴリカルな意味は〈内容〉になり、文法的な意味は[伝達対象]になる。この場合「詰めこむ」の現れ方を広く言えば「伝達」として考えることができる。したがって、この意味における「詰めこむ」の現れ方を以下のようにまとめることができる。

(b)

[伝達相手]ニ	[伝達対象]ヲ	V 伝達　/色々な知識を無理矢理に覚えさせる/
〈人〉	〈内容〉	

「詰めこむ」の上の二つの意味のまとめを比べてみると、基本的な意味の場合のヲ格名詞のカテゴリカルな意味が〈具体物〉から〈人〉に変わり、ヲ格名詞のカテゴリカルな意味が〈具体物〉から〈内容〉に変わることにより、これら文法的な意味も変わっていると言える。さらに、ニ格名詞は[第二の対象]ではなく、[伝達相手] になり、ヲ格名詞の文法的な意味は[伝達対象]になる。そうすると、組み合わせ全体が「付着」ではなく、「伝達」を表していると言える。

以上のことから、単語の語彙的な意味、カテゴリカルな意味、および、文法的な意味は深い関係があり、これらの概念をセルビア語学においても十分に考慮すべきであると考える。したがって、これらの概念に基づき対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を分析していきたい。そして、これらの多様な現れ方を考察する際、語彙的な意味をそれぞれ個別に記述するのではなく、豊富な実例を基に、それぞれの意味が現れる条件を一般化し、共通の傾向を見ていきたい。語彙的な意味、文法的な意味、および、カテゴリカルな意味、という観点は、そのために有効であると考えられる。本研究では、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方の考察をこの三つの意味の観点から行い、それらが現れる条件を一般化していく。

第二部　本論　（分析結果）

0　序説　本論の構成

ここでは分析の結果、考察できた内容の構成に関して述べる。

セルビア語における対格名詞の用法を考察した結果、その体系を徹底的に記述するために、次のように分けて述べる必要が感じられた。

第六章では、第七章以降での連語タイプの分析に先立って、セルビア語における対格名詞の現れ方の五つのパターンを紹介し、その特徴に関して確認する。

第七章～第十三章では対格名詞の意味分類に関して述べる。第七章～第十二章ではヲ格名詞と動詞との組み合わせのタイプを分析し、その一般化を行うが、第十三章では「外的状況を表す対格名詞」、つまり、対格名詞が動詞と組み合わさるのではなく、単独で現れ、主部と述部で表される事柄全体を外から状況的に説明する用法に関して紹介する。

第十四章では対格名詞と動詞との組み合わせの意味分類におけるカテゴリー間の相互関係に関して述べる。

最後に、第十五章では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの類似点と相違点に関して述べる。

第六章　セルビア語における対格名詞の現れ方のパターン

セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わさり方は日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの体系に比べると、異なる点もあるために、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系を理解するために、詳細に説明する必要があると考えられ、この章では本論の筆者の分析に基づいた対格名詞の組み合わさるパターンについてまとめる。

セルビア語では対格名詞的な単位の用法に五つの異なる構文的なパターンが見られる。第一に、対格を取る名詞的な単位が動詞と組み合わさり、動詞に対し対象を表すパターンが見られる（Izbrisati trag「跡を消す」）。これは対格名詞的な単位と動詞との組み合わせの最も典型的なパターンである。第二に、二重対格の名詞的な単位を含む構造がある（Učiti đake pesmu「生徒に歌を教える」）。これらも対象的な関係がある程度認められるが、二つの対格名詞的成分を要求するため、別のグループとして立てられる。第三に、主格名詞、対格の人称代名詞と動詞という三つの必須要素からなる構造がある。この構造は対格の代名詞が動詞で表される状態と主格名詞で表される事物によって影響される人あるいは生き物を表している（Guši ga kašalj「彼は咳で息苦しくなっている」）。第四に、動詞と一つの対格の名詞的な単位との組み合わせであるが、対象的な関係を表さず、動詞について補充的な情報を与えているものがある（Ulaznica košta hiljadu dinara「チケットは千ディナールか

かる」）。このタイプの組み合わせは対格の名詞的な単位を省くと、文章が成り立たず、対格の名詞的な単位は副詞的補語の機能を表す。第五に、対格の名詞的な単位には主部と述部で表す事柄について補足的な情報を与えている用法が見られる（To jutro je kašljao「その朝彼は咳をしていた」）。これらは文中で副詞的修飾語の機能を果たしていることが特徴である。

このように、セルビア語では対格名詞(名詞的な単位も含めて)の用法に五つの異なる構文的ふるまいが見られる。特定の構文的なパターンにおいて対格名詞的な単位が文中で異なる機能を果たしており、異なる意味的な関係を表していると言える。これらの構文的なタイプについてまとめてみる。

6.1. 対格名詞的な単位の用法の基本的なパターン-本質的な対象的な関係を表す組み合わせ

このタイプの組み合わせでは、対格を取る名詞的な単位が動詞と組み合わさり、動詞に対し一種の対象になる。したがって、これらの組み合わせが対象的な関係を表していることがほとんどである。名詞的な単位が典型的に直接目的語の機能を果たしている。

(125) Priša-o sam nejednak-im stopa-ma
近づく-PST:1SG 一様でない-INST:PL 歩み-INST:PL
u pijesk-u i **izbrisa-o** **trag- ø**.
～の中に 砂-LOC:SG ～も 消す-APP:SG:M 跡-ACC:SG
「砂の中の一様でない歩み(の跡)に近づき、**跡を消した**。」(Proljeća Ivana Galeba)

(126) **Drža-o** mu **je**[45] **glav-u**
握る-APP:SG:M 彼-DAT:SG である-PRES:3SG 頭-ACC:SG
kao djetet-u, na lijev-oj ruc-i...
～のように 子供-DAT:SG ～の上に 左の-LOC:SG 手-LOC:SG
「子供の（頭を抱える）ように、**彼の頭を**左手の手で**握っていた**。（〈直〉... **彼の頭を**左手の手の上に**握っていた**。）」 (Proljeća Ivana Galeba)

[45] jesam（「be 動詞」）の現在形と能動過去分詞が構成する確定過去は、例(126)のように、jesam の現在形と能動過去分詞の間に他の単語が入ることがある。

(127) **Vrati-li smo** **ih** na obal-u rijek-e

押し戻す-PST:1PL 彼ら-ACC:PL ～の上に 岸辺-LOC:SG 川-GEN:SG

tek sedam-ø dana-ø kasnije.

わずか 七 日-GEN:PL ～後

「わずか七日後、**彼ら(敵軍人)を**川の岸辺へ**押し戻した**。」(Proljeća Ivana Galeba)

これは対格を取る名詞的な単位のうち最も多く見られる用法である。このタイプの対格名詞的な単位と動詞との組み合わせの中に、多様な意味的関係が見られる。

セルビア語学の対格を含む句についての代表的な研究Gortan-Premk (1971) ではこのタイプの組み合わせにおける対格の名詞的な単位が全て文中で目的語の機能を果たすものとして挙げられている。

しかし、これらの対格を取る名詞的な単位が動詞に対して対象のように解釈できるにも関わらず、対象的な関係の現れ方の中に程度の差が見られる。例えば、対象的な関係が強く現れるものがある。これらは対象の変化(125)、あるいは、対象の把持(126)や移動(127)などを表すものが典型的な例である。

対象的な関係を強く表す組み合わせでは対格を取る名詞のカテゴリカルな意味が〈もの〉、〈人〉あるいは〈身体部位〉になる。このタイプの組み合わせは動詞が有情物主体による対象への積極的な働きかけを表している。

一方、カテゴリカルな意味が〈こと〉になる組み合わせにおいて対象的な関係が弱くなると言える。

(128) **Izgubi-o sam** **prirodnost-ø** i **sigurnost-ø**, kad

失う-PST:１SG 自然さ-ACC:SG ～も 自信-ACC:SG ～時に

sam se susreta-o s ljud-ima.

である-PRES:1SG REFL 出会う-APP:SG:M ～と 人-INST:PL

「人々に出会った時に、**自然さ**と**自信を失った**。」(Derviš i smrt)

なお、空間を表す対格名詞と特定の空間から離れていくことを表している動詞との組み合わせ (129) や時間を表す対格名詞と時間を過ごすことを表している動詞との組み合わせ(130)においても対象的な関係が弱いと言える。つまり、このタイプの名詞と動詞との組み

合わせにおいて動詞で表される、対象への働きかけは例(125～127)に比べると、それほど積極的ではないことが分かる。

(129) Malo dan-a poslije oproštajn-e predstav-e, glumačk-a
少し 日-GEN:PL ～後 お別れの-GEN:SG 劇-GEN:SG 俳優の-NOM:SG
družina **napusti-la je** naš-e mjest-o.
一座-NOM:SG 去る-PST:3SG 我々の-ACC:PL ところ-ACC:PL
「お別れの劇の数日後、俳優の一座が**我々の小さな町を去った**。」(Proljeća Ivana Galeba)

(130) Mnogo nas **je prove-lo** noć-ø bez sn-a.
大勢 我々-GEN:PL 過ごす-PST:3SG 夜-ACC:SG なし 夢-GEN:SG
「我々の大勢が眠れず**夜を**過ごした。（〈直〉我々の大勢が夢なしに**夜を過ごした**。）」(Derviš i smrt)

このタイプの組み合わせにおける対格名詞は全て、セルビア語学において文の成分として直接目的語であると言われている。ただし、名詞的成分と動詞との組み合わせの中に、対象的な関係が強く感じられるものが確実に直接目的語であると言えるのに、空間的な関係を表す組み合わせや時間を表す組み合わせでの目的語は性質が異なると考えられる。したがって、セルビア語における直接目的語のタイプを今後考える必要がある。

6.2. 二重対格の名詞的な単位を含む構造

セルビア語では二重対格の名詞的な単位を含む構造がある。

(131) Uči-ti đak-e pesm-u
教える-INF 生徒-ACC:PL 歌-ACC:SG
「**生徒に歌を**教える（〈直〉**生徒を歌を**教える）」

(132) Pita-ti nek-oga pitanj-e
聞く-INF 誰か-ACC:SG 質問-ACC:SG
「**誰かに質問を**する（〈直〉**誰かを質問を**聞く）」

このタイプの構造を作る動詞の数は限られており、内容を教えることを表す učiti/naučiti/poučiti(教える)、依頼を表す moliti/zamoliti(頼む、願う)、尋ねることを表す pitati/zapitati/upitati(聞く)と savetovati(アドバイスする)が典型的な例である。これらは対象的な関係がある程度認められる点で 6.1. に類似しているが、二つの対格名詞的な単位を要求するため、6.1. とは異なる構文的なふるまいをするものとして扱うことがふさわしいと思われる。

この構造において、一番目の対格名詞的な単位は動詞が表す過程に含まれる人であり、二番目は動詞の過程の内容あるいは目的を詳しく指定している。つまり、それぞれのカテゴリカルな意味は〈人〉と〈内容〉になる。したがって、このタイプの組み合わせは広い意味で内容伝達を表すと言える。このように、これらにおける一つの対格の名詞的な単位の文法的な意味は[対象]よりも[伝達相手]であり、もう一つの対格の名詞的な単位は[伝達対象]であると言える。この特徴を考慮に入れると、このタイプの組み合わせではある程度対象的な関係が認められるが、先の例(125)～例(127)に比べると、その関係が異なり、対象性が低い。セルビア語学ではこのタイプの組み合わせにおける対格名詞的な単位が二つとも直接目的語だとされてきたが、以上述べたことを考えると、やはり二つの性質が異なることが分かる。直接目的語の中でも多様な関係を表すものが存在することを指摘する必要がある。

このタイプの組み合わせが成り立つことはスラブ諸語の中でもセルビア語の特徴であるため、構文的に興味深い現象であるが、内容を教えることを表す動詞と名詞的な単位との組み合わせ以外、組み合わさる名詞的な単位の数が非常に限られており、不定代名詞 nešto（何か）、否定代名詞 ništa「何も」、指示代名詞[46]（例(133)）あるいは ovu/tu/onu stvar「この/その/あのこと」のような、不定の内容を表している表現がほとんどである。例えば、

(133) Ja bih Vas moli-o[47]

私-NOM:SG である-AOR:1SG あなた-ACC:SG 願う-APP:M:SG

sada još ov-o.

今 ～さらに これ-ACC:SG

「私は今**あなたに**さらに**これも**お**願いしたいです**。（〈直〉私は今**あなたを**さらに**これを**お**願いしたいです**。）」(Gortan-Premk)

依頼を表す動詞は、類似した文脈で以上挙げた名詞的な単位とは別の要素と組み合みわさる場合、za（～のため）と対格の名詞的な単位からなる前置詞句を取ることが現代語で自然である。

[46] 指示代名詞は ovo「これ」、to「それ」、ono「あれ」である。
[47] セルビア語では条件法が biti（「be 動詞」）のアオリストと能動過去分詞から成り立つ。例(133)では「bih molio」になる。biti(「be 動詞」)のアオリスト（bih）と能動過去分詞（molio)の間に、他の単語が入ることがある。

(134) Zamoli-o bih　　te　　za　　pomoć-ø

願う-COND.M:1SG　　あなた-ACC:SG　　〜のために[48]　　手伝い-ACC:SG

「あなたに手伝いをお願いしたい。(〈直〉あなたを手伝いのためにお願いしたい。)」

また、pitati「聞く」は多くの場合は、対格ではなく、o「〜について」、あるいは、za「〜のために」と所格という前置詞句を取る必要がある。

(135) Pita-ti　　majk-u　　o　　očev-oj　　bolest-i/

聞く-INF　　母-ACC:SG　　〜について　　父の-LOC:SG　　病気-LOC:SG

za　　očev-u　　bolest-ø

〜のために　　父の-ACC:SG　　病気-ACC:SG

「母に父の病気について聞く(〈直〉母を父の病気について/のため聞く)」

Gortan-Premk (1971) は、pitati「聞く」を含む句について、不定代名詞あるいは類似した表現と組み合わさることから、これらを二重対格を含む句ではなく、不変化要素との組み合わせとして見る必要があると述べている。同じことが savetovati「アドバイスする」についても言えるとし、セルビア語での不定代名詞の不曲用化の傾向について指摘している。(Gortan-Premk 1971:118)

ただし、尋ねることを表す動詞が、不定代名詞や類似した表現の他に 、pitanje「質問」、uzrok「原因」、razlog「理由」、istina「事実」など限られた数の名詞との組み合わせも考えられるので、依頼を表す動詞とは少し異なる性質を持つことが挙げられる。また、不定代名詞や類似した表現と組み合わさることが pitati「聞く」と savetovati「アドバイズする」だけでなく、二重対格の名詞的な単位を取る動詞全ての特徴として強調する必要がある。それでも、これらの組み合わせの今後の不曲用化が進み、生産性が低くなることが確かに予測できると思われる。

なお、このタイプの組み合わせは、Gortan-Premk (1971) も指摘している、他の格を取る名詞的な単位との類義の用法が見られる。例えば、

[48] 日本語の感覚からすると、なぜ「〜のために」という前置詞を使うかが分かり難いが、この文章は「あなたを手伝いのために(＝手伝ってもらうために)」のような意味になる。

(136) Uči-ti　　neko-ga　　astronomij-u/astronomij-i

導く-INF　　誰か-ACC:SG　　天文学-ACC:SG/DAT

「誰かを天文学に導く（〈直〉誰かを天文学を/天文学に導く）」

内容を教えることを表す動詞に関しては、二つの格の名詞的な単位の用法が類義であると言える。

また、savetovati「アドバイスする」は、一番目の対格名詞的な単位、つまり、 動詞が表す過程に含まれる人を表す要素が与格になることができる。

(137) Savetova-ti　　njeg-a/njem-u　　nešto

アドバイスする-INF　　彼-ACC:SG/DAT:SG　　何か-ACC:SG

「彼に何かをアドバイスする（〈直〉彼を/彼に何かをアドバイスする）」

しかし、この場合、異なる格を取る用法では異なる意味的関係が認められる。つまり、対格を取る場合は二番目の対格の名詞的な単位を省くことができる。その場合、「誰かにアドバイスを与える」という、savetovati の最も基本的な意味よりも、「アドバイスにより誰かを助ける、支える」という意味になる。与格をとる場合は、二番目の対格の名詞的な単位あるいは他の補充的な要素で補う必要がある。

6.3.　人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせ

セルビア語では主格名詞、対格の人称代名詞と動詞という三つの必須要素からなる構造がある。この構造は対格の代名詞が動詞で表される状態と主格で表される事物によって影響される人あるいは生き物を表している。

本論文の筆者はこのタイプの組み合わせを人の「生理的な状態」(例(135))と「心理的な状態」(例(141)) を表す組み合わせとして分類する。対格名詞と動詞との組み合わせの体系におけるこのタイプの組み合わせの位置づけに関しては第八章「人に対する働きかけ」の 8.1.節「生理的な状態」と 8.3 節「心理的な状態」で詳細に説明する。

(138) Guš-i　　ga　　kašalj-ø.

息苦しくさせる-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　咳-NOM:SG

「彼は咳で息苦しくなっている。（〈直〉咳が彼を苦しくさせる。）」

(139) Bol-i　　ga　　nog-a.

痛める-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　足-NOM:SG

「彼は足が痛い。(〈直〉足が彼を痛くさせる。)」

Gortan-Premk(1971)はこれらを文法的目的語（いわゆる論理的主語）の状態を表す句(sintagme s odnosima stanja gramatičkih objekata (tzv. logičkih subjekata))と呼ぶ。

対象的な関係を代表的に表す名詞的な単位と動詞との組み合わせでは、対格で示される要素が動作主の働きかけを受ける消極的な対象であることが最も典型的なパターンである。したがって、このような意味的な関係を表す組み合わせでは、しばしば主語を表す要素が有情物の動作主（典型的に人）であり、目的語を表す要素が消極的な無情物（典型的に物、あるいは、抽象物）である 。

しかし、このタイプの組み合わせはそれと異なり、文の中心となるもの（文でそれの状態が説明されるもの、文の主題）はその文の文法的目的語となり、文法的な主語となるものは対格で示される目的語の状態を起こす原因になる。したがって、Gortan-Premk(1971)はこのタイプの組み合わせの対格で示される文法的な目的語を論理的な主語とみなす。

Gortan-Premk(1971)がこれらを取り上げていることが重要であるが、これらを対格名詞的な単位の特別な構文的ふるまいとして挙げていないことに問題があると感じられる。つまり、Gortan-Premk(1971)はこれらを6.1.と6.2と同じ対象的な関係を表すものと同じグループにしているが、これらは6.1.と6.2.と比べると、異なる構文的パターンであると思われる。

まず、このタイプの組み合わせは三つの必須的要素から成り立つことが6.1.と6.2.との大きな構文上の違いである。6.1.と6.2.でも主語が存在するが、それを省略することができる。6.3. の組み合わせは、主語を除くと全体の意味が完全に不明になる場合が多い。例えば、次の例では、

(140) Uhvati-o　　me　　je　　grč-ø

握る-APP:SG:M　　私-ACC:SG　　である-PRES:3SG　　けいれん-NOM:SG

u　　noz-i.

～の中に　　足-LOC:SG

「私の足がけいれんを起こした。（〈直〉けいれんが私を足に握った。）」

そして、このタイプの組み合わせでは動詞で表される状態を引き起こす原因を表す要素が意志性を持って積極的に働きかけている動作主ではないことも重要な違いである。したがっ

て、このタイプの組み合わせにおける対格を取る名詞的代名詞を本質的に対象としてはみなしにくいと考えられる。なお、対格名詞で示される目的語の状態を表している動詞は全て他動詞ではなく、自動詞である。以上で述べたことから、このような構文的特徴を本質的な対象的な関係と全く同様の現れ方として見ることに無理があると考えられる。

ここではいったんGortan-Premk（1971）のこのタイプの組み合わせの分類について述べる。

a）主語が動詞で表される、対象の状態を引き起こす現象を表しているもの。

(141) Bol-i　ga　njen-a　hladnoć-a. (Gortan-Premk)
痛める-INF　彼-ACC:SG　彼女の-NOM:SG　冷たさ-NOM:SG
「彼は彼女の冷たい態度で傷つく。（〈直〉彼女の冷たさが彼を傷つける。）」

b）主語も述語も対象の状態を示しているもの(例(138))のようなもの）。

(142) Zane-la　ga　vrtoglavic-a. (Gortan-Premk)
ゆらゆらさせる-PST:3SG　彼-ACC:SG　めまい-NOM:SG
「彼はめまいでゆらゆらする。（〈直〉めまいが彼をゆらゆらさせる。）」

c）主語は対格で示される有情物の身体部位を表し、動詞は対象が巻き込まれる過程を表すもの(例(139))のようなもの）。これらはいわゆる論理的主語を含むものである。

d）主語が不明な非人称文[49]。これらにおいてもa、b、cのように、文法的な目的語が動詞で表される状態によって影響される有情物を表しているが、主語が不明瞭である。

(143) Zavij-a　ga　u　trbuh-u. (Gortan-Premk)
痛める-INF　彼-ACC:SG　～の中に　お腹-LOC:SG
「彼はお腹が痛んでいる。（〈直〉彼をお腹に痛めている。）」

[49] 主語がなく、述語が中性３人称の形をしている文である。
Otopli-lo　je.　「暖かくなった。」
暖かくなる-PST:3SG:N

(144) Zagolica-ø　　ga　　na　　smijeh-ø.

くすぐったくさせる-AOR:3SG　彼-ACC:SG　～の上に　笑い-LOC:SG

「彼は笑わされた。（〈直〉彼を笑いにくすぐったくさせた。）」(Gortan-Premk)

(145) Nju　　bi　žignu-lo...　　kad　　bi

彼女-ACC:SG　鋭く痛める-COND.M:3SG　～時に　である-AOR:3SG

on　　spomenu-o　　Rašid-a.　(Gortan-Premk)

彼-NOM:SG　(名前を)挙げる-APP:SG:M　個人名-ACC:SG

「彼女は、彼がラシドの名前を挙げると、 鋭い痛みを感じた。 （〈直〉彼女を、彼がラシドの名前を挙げる時に、鋭く痛めた。）」

e) 名詞的述語[50]を持つ非人称文。このタイプの組み合わせにおいて名詞的述語によって対象（文法的目的語）の状態を表している。以下の例で名詞的述語の部分に線を引く。

(146) Strah-ø　　ga　　je.

恐れ-NOM:SG　彼-ACC:SG　である-PRES:3SG

「彼は怖がっている。（〈直〉彼を恐れである。）」

(147) Neka　piše[51]　　i　　njemu　　ako

書く-IMP:3SG　～も　彼-DAT:SG　もし

ga　　je　　volja.　(Gortan-Premk)

彼-ACC:SG　である-PRES:3SG　意志-NOM:SG

「もし、彼にその気があれば、彼にも書けば良い。（〈直〉もし、彼を意志

---

[50] 名詞的述語は繋辞（jesam/biti という「be 動詞」）と名詞的述語内容語から成り立ち、主語の性質を述べたり、主語を同定したりする。

Ivan-ø　　je　　učenik-ø.

個人名-NOM:SG　である-PRES:3SG　学生-NOM:SG

「イワンは学生である。」

繋辞は jesam/biti という、存在を表す補助動詞で表され、述語の述語的部分をなす。繋辞は特定の意味を持たず、主語と述語を繋げ、時制･法･みとめ方から文を定めている。繋辞は、述語動詞と同様、主語と一致する。

[51] セルビア語では neka という不変化詞と 3 人称の現在形で 3 人称のための命令を作る。3 人称のための命令に線を引く。例(147)では「Neka piše」。

であれば、彼にも書けばよい。）」

Gortan-Premk（1971）がこれらにおける繋辞と名詞的な単位との組み合わせを名詞的述語として扱う。確かに形式的には同じ形をしているが、名詞的述語が主語の性質を述べたり、主語を同定したりするので、これらにおける繋辞と名詞的な単位との組み合わせを名詞的述語として見ることができるかを考える必要があると思われる。その証拠として、このタイプの組み合わせでは繋辞が省かれることがよくあることが挙げられる。

(148) **Brig-a** **me** **(je)** **šta** **misl-iš!**

心配:NOM:SG 私-ACC:SG である-PRES:3SG REL(what)-ACC:SG 考える-PRES:2SG

「**私は**あなたがどう思うか**気にしない**。（〈直〉**私を**あなたがどう思うかが**心配だ**[52]。）」

(149) A reci ti što **te**

そして 言う-IMP:2SG あなた-NOM:SG REL(what)-ACC:SG あなた-ACC:SG

(je) **volja.** (Gortan-Premk)

である-PES:3SG 意志-NOM:SG

「そして、**あなたが言いたい**ことを言ってください。（〈直〉そして、あなたが**あなたを意志（であること）を**言ってください。）」

セルビア語では主語を含まない非人称文は確かに存在しているが、名詞的述語を含む非人称文は存在しない。非人称文には動詞的述語と副詞的述語[53]を持つ文だけがある。

---

[52] この文章では肯定形で否定的な意味が表される。かなり特殊な言い方で、否定的小辞が省かれても否定の意味が保たれている。慣用的な表現としても見られる。

[53] 動詞述語は、主語と一致する標識を持った動詞である。その標識は人称、性と数を含む。例えば、次の文は動詞的述語の例である。

Temperatur-a rast-e. 「気温が**上がる**。」

気温-NOM:SG 上がる-PRES:3SG

動詞的述語を含む非人称文は注 49 で挙げた。副詞的述語は繋辞と副詞的な単位から成り立ち、主語について副詞的内容(場所、状態、時間)を表している。例えば、

Fakultet-ø **je** **daleko.** 「大学は**遠くにある**。」

大学-NOM:SG である-PRES:3SG 遠く

副詞的述語を含む非人称文は天気の概況を表している。

また、このタイプの組み合わせは、目的語となる対格の名詞的な単位が省かれると、意味が不明になる。つまり、Strah ga je（彼は怖がっている）、Briga ga je（彼は気にしない）[54]、Volja ga je（彼は気がある）、Sram ga je（彼は恥ずかしがっている）等は、対格の人称代名詞を省くと（Strah je、briga je、volja je、sram je）、意味を成さない。したがって、このタイプの組み合わせを日本語の「気にする」、「気がする」、「気になる」のように、要素の組み合わせよりも、固定した表現として扱う必要があり、一種の慣用的な用法のように見られると思われる。

以上に述べたことが d)とe)を区別するための根拠になる。その他、d)に分類できるものが常に動詞的述語を持つ。なお、d)では主語が存在しないが、多くの場合は余分でありながら、想定できる。例えば、例(143)～例(145)では主語としてnešto（何か）という代名詞、あるいは、例(143)と(145)ではbol（痛み）や特定の身体部位を表す主語が考えられる。それに対し、e）では主語の存在が想定できない。

Gortan-Premk（1971）はa～cとd)～e)を同じタイプのものとして扱うが、本稿の筆者はa)～c)とe)～d)を対格の名詞的な単位を含む組み合わせの異なるパターンのように考えることができると考える。これらは対格の名詞的な単位が示す有情物の状態を表すことや対象に対して積極的に働きかける動作主が存在しないので、対格の名詞的な単位を対象として扱い難いことが類似点であるが、e)～d)が主語を含まないことは構文上の大きな違いであると考えられる。または、一つの大きな意味的なグループの中でa)～c)が一つの下位グループであり、e)～d)がもう一つ異なる下位グループであることも考えられるが、これらの二つのパターンの異なる性質を考慮に入れる必要がある。なお、e)はa)～d)に比べ、対格の名詞的な単位で示される有情物の状態よりも、むしろ人の気持ちあるいは人の態度を表していることが特徴である。それについて今後考えを整理することが一つの課題である。

6.4. 組み合わせについて補充的な情報を与える対格の名詞的な単位

このタイプの動詞と対格の名詞的な単位との組み合わせは6.1.と同様、動詞と一つの対格の名詞的な単位との組み合わせであるが、6.1.とは異なり、対象的な関係を表さず、物の量、物事の重さ、物事の価値や値段　等を表し、動詞について補充的な情報を与えている。このタイプの組み合わせは、対格の名詞的な単位を省くと、意味が不完全になり、文が成り立たない。対格の名詞的な単位は自動詞とも他動詞とも組み合わさる。これらにおける対格の名詞的な単位は副詞的補語[55]の機能を表す。

Danas	je	hladno.	「今日は寒い。」
今日	である-PRES:3SG	寒い	

[54] 例(148)と同様の表現である。肯定形で否定的な意味を表す。
[55] 3.5.4節を参照

(150) Ov-o　　tež-i　　jedan-ø　　kilogram-ø[56].

これ-NOM:SG　重さがある-PRES:3SG　一-ACC:SG　キロ-ACC:SG

「これは一キロの重さがある。（〈直〉これは一キロを重さがある。）」

(151) Poje-o　sam　　šak-u　　jagod-a.　(Gortan-Premk)

食べる-PST:1SG　一握り-ACC:SG　いちご-GEN:SG

「いちごを一握り食べた。（〈直〉いちごの一握りを食べた。）」

(152) Ulaznic-a　　košt-a　　hiljad-u　　dinar-a.

チケット-NOM:SG　かかる-PRES:3SG　千-ACC:SG　ディナール-GEN:PL

「チケットは千デイナールかかる。（〈直〉ディナールの千をかかる。）」

このタイプの組み合わせで対格を取るものは曲用を持った数詞あるいは数字的な意味や物の量を表す名詞であり、動詞は koštati 「値段がある」、vredeti/imati vrednost「価値がある」、valjati「（高い）価値がある」, stajati「かかる」と biti/težak težiti「重さがある」、meriti、「計る」等である。

6.5.　主部と述部で表す事柄について補足的な情報を与える対格の名詞的な単位

セルビア語では対格の名詞的な単位には文で表す事柄について補足的な情報を与えている用法が見られる。これらには動詞で表される過程の行われる時間あるいは期間を表すもの（153）、(154）、動詞が表す過程の回数を指定するもの（155)、（156）、動作の継続の長さを表すもの（157）と移動や空間の量（158）を表すものがある。これらの要素は文から省いても文が成り立つことが特徴であり、6.1.～6.4. との相違点である。セルビア語ではこの用法が頻繁に見られる。

(153) T-o　　jutr-o　　je kašlja-o　　manje...

その- ACC:SG　朝-ACC:SG　咳をする-PST:3SG　～より少ない程度に

[56] この文では jedan kilogram「一キロ」というように、対格の数詞と対格名詞が並んでいるが、この場合の数詞がむしろkilogram「キロ」を補充的に説明している要素になる。したがって、この構造は二つの対格名詞を必須要素として要求する二重対格構文とは異なる。なお、数詞 jedan「一」以外の数詞や量・値段を表す名詞の場合は、後に来る名詞は対格でなく、属格名詞になる。例(151)と例(152)ではそうである。ゆえに、この構文においては量を補充的にに規定している対格の要素に焦点が置かれていると言える。

「彼はその朝（普通より）少ない程度に咳をしていた...（〈直〉彼はその朝を少ない程度に咳をしていた...）」

(154) Čas-ø kasnije... podig-li su je iz
瞬間-ACC:SG ～の後 上げる-PST:3PL 彼女-ACC:SG ～から
naslonjač-a...
ひじ掛けいす-GEN:SG
「彼らは一瞬後彼女をひじ掛けいすから持ち上げた。(〈直〉彼らは一瞬後を彼女をひじ掛けいすから持ち上げた。)」

(155) Udari-o ga je stotin-u put-a
叩く-APP:SG:M 彼-ACC:SG である-PRES:3SG 百-ACC:SG ～回-GEN:PL
「彼を百回叩いた。（〈直〉彼を回の百を叩いた。）」(Gortan-Premk:139)

(156) Abidag-a obilazi... sv-e radov-e oko
個人名-NOM:SG (視察に) 訪れる 全て-ACC:PL 工事-ACC:PL ～の周り
mosta... po nekoliko puta u danu.
橋-GEN:SG ～の上に いくつか-ACC:SG ～回-GEN:PL ～の中に 日-LOC:SG
「アビドアガは一日に数回橋の周りの全て工事の視察に訪れている。（〈直〉アビドアガは一日に回のいくつかを橋の周りの全て工事の視察に訪れている。)」(Na Drini ćuprija)

(157) Gleda-li smo se jedan-ø[57] dug-i tren-ø...
(顔を) 見合わせる-PST:1PL:REFL 一-ACC:SG 長い-ACC:SG 瞬間-ACC:SG
「我々は互いに長い間顔を見合わせていた。（〈直〉我々は互いに一つの長い瞬間を顔を見合わせていた。）」(Projeća Ivana Galeba)

(158) Naš-i junac-i [su] stotin-e i
我々の-NOM:PL 英雄-NOM:PL である-PRES:3PL 百-ACC:PL ～も
stotin-e kilometar-a putova-li voz-om.
百-ACC:PL キロメートル-GEN:PL 旅をする-APP:PL:M 電車-INST:SG

[57] この文では例(150)と同様、数詞 jedan「一」の後に二つの対格名詞の連続がある。この場合、数詞 jedan「一」は dugi tren「長い瞬間」を修飾している。数詞 jedan「一」以外の要素の場合は後に来る名詞は属格になる(例(155)、(156)、(158))の場合はそうである）。

「我々の英雄達は何百キロメートルも何百キロメートルも電車で旅をしていた。（〈直〉キロメーロルの何百を何百をも電車で...）」(Gortan-Premk)

この用法では対格の名詞的な単位はほとんど述語の意味に影響されず、状況を補足的に説明している。これらの対格の名詞的成分だけ見た場合、動詞の意味的タイプを予測することができない。したがって、これらは名詞的成分と動詞との組み合わせというよりも、動詞から独立して文で表す事柄全体を補足的に説明していると言える。この意味では、文で表す事柄全体を外から説明している日本語の状況語に類似していると思われる。その中では移動や空間の量を表すものだけが他のタイプより動詞との関係が密接である。つまり、例(158)の「何百キロメートル」あるいはkorak (unatrag)「一歩(後ろへ)」、jedan kilometar「一キロメートル」、čitav kilometar「一キロメートル全体」、stotinu metara「百メートル」等の要素についてはある程度移動を表す動詞との組み合わせが想定できる。 これらは文中で副詞的修飾語の機能を果たしていることが特徴である。

次に、第七章～第十三章ではセルビア語における対格名詞の用法に関して述べる。第七章～第十二章では対格名詞と動詞との組み合わせの意味分類を述べ、第十三章では対格名詞が動詞と組み合わさらず、単独で表れる「外的状況を表す対格名詞」に関して紹介する。

第七章　物に対する働きかけ

セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせには「物に対する働きかけ」を表すものが見られる。「物に対する働きかけ」には「変化」、「付着」、「除去」、「移動」、「接触」と「生産」を表すものが見られる。ここではその意味的特徴と構文的特徴について述べる。

このグループでは対格名詞のカテゴリカルな意味が〈もの〉あるいは〈身体部位〉であり、その文法的な意味が[対象]である。動詞が［対象]に対する具体的な働きかけを表している。その働きかけによって[対象]が変化されることが多い。このタイプのむすびつきは具体物を表す名詞と具体的な動作を表す他動詞との組み合わせである。主格名詞はカテゴリカルな意味が〈人〉であり、その文法的な意味が[主体]になることがほとんどである。[対象]の変化の過程によって、このグループをさらに詳細に分けることができる。対格名詞と動詞との関係によって、「物に対する働きかけ」表す組み合わせを「変化」、「付着」、「除去」、「移動」、「接触」、「生産」という６つのグループに分けることができる。これらの例は slomiti prozor「窓を割る」、staviti knjige na policu「本を棚に置く」、odlepiti poster sa zida「壁からポスターを剥がす」、pritisnuti dugme「ボタンを押す」、graditi kuću「家を建てる」である。したがって、このタイプのむすびつきの現れ方を大きく以下のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vt	[対象]ACC
〈人〉		〈もの/身体部位〉

7.1.　変化

このタイプのむすびつきは、動詞で表される具体的な動作によって[対象]の変化が起こることを表している。「変化」を表す動詞を最も典型的なものから以下に挙げる。

razbiti/slomiti 「割る」、skratiti「短くする]、ribati「磨く」、otvoriti「開ける」、ugasiti「（火/電気）を消す」、brisati 「（ガラス/窓を）拭く」 、upaliti「（火/電気）をつける)、zapaliti 「燃やす」、osvetljavati 「照らす」,seći「切る」、prati「洗う」、bojiti/obojiti「色をつける」、farbati/ofarbati「染める」、raširiti「開く/広げる」、razvijati「（地図を）開く」、zašiljavati「研ぐ」、pakovati「（荷物を）詰める」、spremati (kovčege)「（旅行かばんに荷物を）詰める」、ukrašavti 「飾る」、sređivati 「片付ける」、okvasiti 「濡らす」、rastrljavati「（涙を）拭う」、 porusiti/rušiti 「（建物）を壊す」、popraviti「修理する」、pržiti「揚げる」、šminkati「（誰かを）化粧する」、povući 「(筏を)引っ張る」、otključati「（錠を）開ける 」、zalupiti 「ドアをバタンとしめる」、podešavati「（楽器を）調律する」、zagraditi 「（通りを）ブロックさせる」、ograditi 「（川を）囲み込む」、okruživati 「囲む」、 zakovati 「（門を）釘付けする」、oboriti 「（頭を）下げる」、pognuti 「（頭を）下げる」、plesti (kosu u kurjuk)「（髪を）三つ編みにする」、nakriviti 「（帽子を）傾ける」、mešati［（水をワインと）混ぜる］、opustiti (noge)「(足を)リラックスさせる」、pomicati「（足を)動かす」、 sakatiti「（手足を）不自由にする」、zadaviti/podaviti 「絞殺する」、ubiti/pobiti「殺す」、pružiti「（手を）差し出す/伸ばす」、 jesti「食べる」、rskati 「（栗をポリポリ）かみ砕く」、piti「飲む」、progutati 飲み込む、 uzjahati 「乗馬する」

「変化」を表す組み合わせはしばしば変化の[結果の状態]という文法的な意味を表す要素と組み合わさる。また、典型的に[主体]の意志的な動作を表しているものである。その例を以下に挙げる。

(159) Gosp-a　Nol-a　pocrvene-ø　naglo...
婦人-NOM:SG　個人名-NOM:SG　赤くなる-AOR:3SG　急に

dohvati-ø　čaš-u　vod-e　i　**raširi**
取る-AOR:3SG　グラス-ACC:SG　水-GEN:SG　～も　開く-AOR:3SG

prozor-ø　**širom**... (Hronika palanačkog groblja)
窓-ACC:SG　広く

「ノラ夫人は急に顔が赤くなり、水のグラスを取って**窓を広く開いた**...」

(160) Rek-oh　da　**ću oboji-ti**　**prozorsk-i**　**okvir-ø**
言う-AOR:1SG　～ように　染める-FUT:1SG　窓の-ACC:SG　枠-ACC:SG

u　crven-o　ili　zelen-o. (Proljeća Ivana Galeba)
～の中に　赤-DAT:SG　～か　緑色-DAT:SG

「（私は）**窓枠を赤くあるいは緑色に染める**と言った。」

また、[道具]あるいは[手段]という文法的な意味を表す要素と組み合わさることがある。

(161) Okrenu-o se oko drvet-a... priša-o dvorišn-oj
回る-PST:3SG ～の周り 木-GEN:SG 近づく-APP:M:SG 中庭-DAT:SG

kapij-i i oprezno je zatvori-o
門-DAT:SG ～も 用心深く それ-ACC:SG 閉める-APP:M:SG

madanal-om.
掛けがね-INST:SG

「（彼は）木の周りをくるりと周り、中庭の門に近づいて、用心深く(それを)掛けがねで閉めた。」(Derviš i smrt)

したがって、「変化」を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 変化	[対象]ACC	[変化の結果の状態]	[道具/手段] INST
〈人〉		〈もの/身体部位〉		〈もの〉

「変化」を表すものには異なる変化の過程の例が見られる。例えば、表面的な変化(zakovati kapije「ドアを釘付けする」、nakriviti šešir「帽子を傾ける」、brisati prozor 「窓ガラスを拭く」など）、あるいは内部的な変化（razbiti prozor「窓ガラスを割る」、ubiti nedužnog čoveka 「無実の人を殺す」、rskati kestenje「栗をポリポリかみ砕く」、sakatiti udove 「手足を不自由にする」など） を表すものが挙げられる。前者は[主体]の働きかけによって[対象]の様子が変わるが、後者は[対象]の内部的な性質も変わる側面も含まれていると言える。また、[対象]の姿が消えるという変化（ugasiti vatru「火を消す」など）や[対象]が定の状態に引き込まれるという変化（opustiti noge「足をリラックスさせる」）を表すものがある。

動詞 jesti「食べる」、piti「飲む」など、摂食に関するものは[対象]がどうなったかを第一問題にしない点で「変化」を典型的に表すものとは異なるが、これらを含む対格名詞との組み合わせでは動詞が表す動作によって[対象]の性質が変わる側面が含意されているので、このタイプの組み合わせも「変化」を表すものとして認められる。

これらの動詞は[対象]の変化を問題にしないため、[対象] を表す名詞と組み合わさらず、自動詞として使うこともある。この場合、［対象］の存在が含意され、形態的に補語で表さ

なくてもよい。その際、［対象］が単に省略される場合もあるが、[対象]を表さないことによって特殊な意味を帯びる場合もある。

例えば、nema da jede[58]「食べられない（〈直〉食べるためには（十分にお金を/物を）持っていない[59]。）」という表現は[対象]という文法的な意味を表す要素を取らず、文字どおりの意味は「〈直〉食べるためには（十分にお金を/物を）持っていない。」であるが、実際、食べ物の不足より「非常に貧しい状態である」あるいは「非常に貧しい生活を送る」という特殊な意味を帯びている。このふるまいは日本語の動詞「食べる」の「（こんな少ない給料では）食べられない」 のような用法に類似していると言える。

(162) Što tolik-o parč-e, gotovo pola
なぜ そんなに（大きい)-ACC:SG:N スライス-ACC:SG ほぼ 半分
tepsij-e, da ti da-la ?
オーブン皿-GEN:SG ～ように あなた-DAT:SG あげる-APP:SG:M
Nem-a ni ona da **jede**...
ない-PRES:3SG 否定小辞 彼女-NOM:SG ～ように 食べる-PRES:3SG
「なぜ（彼女が）そんなに大きいスライス、ほぼオブーン皿の半分を（あなたに）あげたの。彼女だって**食べられなくて**...（〈直〉彼女も**食べるためには（十分にお金を/物を）持っていない**....）」(Nečista krv)

あるいは、次の例では piti「飲む」は[対象]を表す要素と組み合わさらないが、「酒をたくさん飲む」という特殊な意味を表している。

(163) Zašto li sam uze-o njeg-a za slug-u ? ...
なぜ 小辞 取る-PST:1SG 彼-ACC:SG ～のために 召し使い-ACC:SG
Ne samo da **pij-e**... nego je
否定小辞 だけ ～ように 飲む-PRES:3SG ～だけでなく である-PRES:3SG

[58] Nem-a da jed-e.
ない-PRES:3SG ～ように 食べる-PRES:3SG
「食べられない。（〈直〉食べるためには（十分に物を）持っていない。）」

[59] 「食べられない。（〈直〉食べるためには（十分に物を）持っていない。）」という意味の表現になるが、具体的に[対象]を表す要素、つまり、何を食べるかを表す要素とは組み合わさらない。

i　　bezobrazan-ø.

～も　　失礼-NOM:SG:M

「いったいなぜ彼を召し使いに雇ったのか。（たくさん**酒を**）**飲む**だけでなく、失礼でもある。」

つまり、例(162)や例(163)のような用法は人の特徴あるいは事情を表している。

奥田の分類でも「くう」、「のむ」のような動詞は「もようがえ」を表しているものして挙げられている。

他に、zadaviti「絞殺する」、ubiti「殺す」のような動詞の用法にも注目する必要がある。このタイプの動詞は［対象］を表す要素の語彙的な意味が「人」を表しているため、そのカテゴリカルな意味も〈人〉になると言えそうであるが、このような文脈での「人」は「自由に行動し、意思を持った主体」ではなく、むしろ「消極的な役割の存在」または「消極的な対象」として捉えることができるため、物扱いにすることが適切であると考えられる。したがって、このような例における「人」のカテゴリカルな意味を〈もの〉として扱うことが適切であるように思える。

(164)　....i　ček-a　　da　　**ga**　　**zadav-e**　　i

～も　待つ-PRES:3SG　～ように　彼-ACC:SG　絞殺する-PRES:3PL　～も

mrtv-a　　spust-e　　u　　to　　blat-o

死んだ状態の-ACC:SG　下ろす-PRES:3PL　～の中に　その-ACC:SG　泥-ACC:SG

「...そして、（**自分が**）**絞殺されて**、死んだ状態でその泥に下ろされることを待っている。」（Derviš i smrt）

日本語に関しても奥田のヲ格名詞と動詞との組み合わせの意味分類を考えると、「人を殺す」、「人を絞殺する」のような用法は「物に対する働きかけ」の中の「もようがえ」を表すものとして見ることができる。奥田は「人を殺す」と「人をしなせる」を物の「もようがえ」と人の「生理的な状態変化」との違いを示す例として挙げている（奥田 1968-1972[1983:47]）が、セルビア語では「人をしなせる」のような用法はあまり見られない。日本語では「**人を**絞殺する」の他にも「（人の）**首を**絞める」という言い方があるが、セルビア語では同じ意味の zadaviti が［対象］として〈身体部位〉を表す要素を取ることがない。

7.2.　付着

このグループに属するものは、[対象]が特定の付着先にくっつけられることを表している。したがって、このグループの構造の特徴として、[付着先]が文中に現れることが挙げられる。

「付着」を表す動詞を最も典型的なものから挙げる。

obavijati/obaviti「巻く」、obesiti「掛ける」、staviti/stavljati「入れる」、ostaviti 「放置する」、 zakopati「埋める」、položiti「置く」、 spustiti/spuštati「下げる」、podići「上げる」、pritisnuti 「押しつける」、skloniti「（鍵をポケットに）しまう」、tovariti「（トラックに石炭を）積む」、prisloniti「（頭を壁に）当てる」、spakovati「（荷物を）詰める」、uzidati 「組み入れる」、zaziđivati「(壁に)埋める」、ugurati「（物をどこかに）押し付ける」、popeti (na konja)「（馬に）乗せる」、sakriti/posakrivati「隠す」、 nositi 「（服を）着る」、nositi 「（かばんを脇に）抱える」、 potpisivati「（書類に）サインする」、pecati/upecati「（魚を）釣る」

付着を表す例を以下に挙げる。

(165) Da　im　ne　smeta-ju,　svoj-e
～ように　彼ら-DAT:PL　否定小辞　邪魔する-PRES:3PL　自分の-ACC:PL
tog-e　su　obavi-li　oko　grl-a.
トーガ-ACC:PL　巻く-PST:3PL　～の周り　喉-GEN:SG
「邪魔されないように、彼らは**トーガを**喉に**巻いた**。」(Afrika)

(166) Ponovo　namjesti-ø　daščic-u　i　objesi-ø
再び　固定する-AOR:3SG　小板-ACC:SG　～も　掛ける-AOR:3SG
akvarel-ø　na　star-o　mjest-o....
水彩画-ACC:SG　～の上に　古い-ACC:SG　位置-ACC:SG
「再び小板を固定し、**水彩画を**前の位置に**掛けた**...」(Proljeća Ivana Galeba)

「付着」を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V付着	[対象]ACC	[付着先]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

このタイプの組み合わせでも［対象］という文法的な意味を表す要素の語彙的な意味は「人」を表しているが、物扱いにすることが考えられ、組み合わせ全体が「物に対する働きかけ」を表す例として捉えることができるものが見られる。

(167) Pobijen-ih je mnogo, **nisu** samo
殺す-PPP:M:PL である-PRES:3SG たくさん である-PRES:NEG:3PL ～だけ
Harun-a **zakopa-li** **u tuđ-i grob-ø**.
個人名-ACC:SG 埋める-APP:M:PL ～の中に 他の人の-ACC:SG 墓-ACC:SG
「殺された人がたくさんいて、**他の人の墓の中に埋められた**のは**ハルン**だけではなかった（彼らは**他の人の墓の中に**ハルンだけ**埋めた**のではない）。」
(Derviš i smrt)

動詞 nositi「持っていく/着る」も対格名詞との組み合わせにおいて物の「付着」を表しているが、日本語と違って nositi odelo「（服を）着る」のような、「体に服をつける」という意味を表す用法の他にも nositi naočare「（めがねを）かける」、nositi šešir「（帽子を）かぶる」、 nositi šal「（マフラを）巻く」、nositi cipele「**靴を**履く」、のような組み合わせ、または、nositi oružje「**武器を**持つ」のような組み合わせも作ることができる。この場合、「付着先」が自明であり、常に[主体]の体になるため、文中に特別に現れない場合が多いが、現れる場合もある。

(168) ...a vole-la je crven-a, plav-a i žut-a
そして 愛する-PST:3SG 赤い-ACC:PL 青い-ACC:PL ～も 黄色い-ACC:PL
jel-a i **nosi-la** **haljin-e** t-ih boj-a.
料理-ACC:PL ～も 着る-APP:F:SG ドレス-ACC:PL その-GEN:PL 色-GEN:PL
「そして、彼女が赤、青、黄色の料理が好きで、**その色の服を着ていた**。」
(Hazarski rečnik)

(169) Na glav-i nos-i tropsk-i šešir-ø, a

～の上に 頭-LOC:SG 着る-PRES:3SG トロピカル-ACC:SG 帽子-ACC:SG そして

na nog-ama elegantn-e čizm-e neverovatno

～の上に 足-LOC:PL 上品な-ACC:PL ブーツ-ACC:PL 信じられないほど

mek-e kož-e ispod jahać-ih pantalon-a.

柔らかい-GEN:SG 革-GEN:SG ～の下に ライディング-GEN:PL パンツ-GEN:PL

「頭にはトロピカルな帽子をかぶり、足にはライディングパンツの下に信じられないほどの柔らかい革のブーツを履いている。（〈直〉頭にはトロピカルな帽子を着て、足には...ブーツを着ている。）」(Politka)

［付着先］がこのタイプの動詞と組み合わさり文中に現れることは、［付着先］を特別に強調したい場合、あるいは、［付着先］が自明でなく、必ずしも推測できない場合が見られる。

(170) ...njegov-a mal-a Maj-a nosi-la je na

彼の-NOM:SG 小さい-NOM:SG 個人名-NOM:SG 着る-PST:3SG ～の上に

grudi-ma velik-i bedž-ø.

胸-DAT:PL 大きい-ACC:SG バッジ-ACC:SG

「彼の小さいマヤが大きなバッジを胸にしていた。」(Proljeća Ivana Galeba)

(171) Međutim i ona je četiri godin-e

ところが ～も 彼女-NOM:SG である-PRES:3SG 四 年-GEN:SG

bi-la rob-ø, nosi-la je na grud-ima

である-APP:F:SG 奴隷-NOM:SG 着る-APP:F:SG ～の上に 胸-LOC:PL

i leđ-ima žut-u zvezd-u....

～も 背中-LOC:PL 黄色い-ACC:SG 星-ACC:SG

「ところが、彼女も四年間奴隷でいて、胸と背中に黄色い星をつけていた...（〈直〉胸と背中に黄色い星を着ていた...）」(Upotreba čoveka)

このタイプの用法の他にも［付着先］という文法的な意味の要素が自明であるために文中に現れない動詞がある。例えば、動詞 pecati/upecati 「（魚を）釣る」がその中の一つである。つまり、「魚を釣る」のような文脈では「付着先」は「釣り針」あるいは「漁網」に限られるために、特別に文中に示す必要がない。

7.3. 除去

除去の意味を表す組み合わせは、［対象］が特定の位置から除去されることを表している。したがって、［除去元］という文法的な意味を表している要素が文中に現れることが特徴として挙げられる。

除去を表す動詞に以下のようなものが見られる。

otkinuti 「剥がす/はぎ取る」、kidati「破る」、 počupati「摘む」、dizati/dići/podići「上げる」、spustiti/spuštati「下げる」、vaditi/izvaditi「取り出す」、povaditi「取り出す/引き出す」、izvući/izvlačiti「引き出す」、brisati/izbrisati「消す」、 strugati「こすり落とす」、deljati「彫る」、odvojiti/odvajati 「離す/切り離す」、 sapirati「洗い落とす」、odbaciti「（体からスカーフを）投げ捨てる」、odvajati「分ける」、prosipati「ばらまく」、prosuti「こぼす」、 skinuti「脱ぐ」、odgurnuti 「払いのける」、ispljuvati/ispljuvavati「吐き出す」

その例を以下に挙げる。

(172) Nemačk-a policij-a je uhapsi-la jedn-og

ドイツの-NOM:SG 警察-NOM:SG 逮捕する-PST:3SG 一人-ACC:SG

muškarc-a jer **je** **otkinu-o** **glav-u**

男性-ACC:S ～ので はぎ取る-PST:3SG 頭-ACC:SG

sa voštan-e figure-e Adolf-a Hitler-a.

～から 蝋の-GEN:SG 人形-GEN:SG アドルフ・ヒトラー-GEN:SG

「ドイツの警察は、アドルフ・ヒトラーの蝋人形から**頭をはぎ取った**ので、一人の男性を逮捕した。」(Radio Televizija Srbije)

(173) ...iz jedn-og džep-a izvuka-o je maram-u

〜から 一つ-GEN:SG ポケット-GEN:SG 引き出す-PST:3SG スカーフ-ACC:SG

koj-u je veza-o oko čela, a

REL(which)-ACC:SG 結ぶ-PST:SG 〜の周り そして

iz drug-og rastočen-u kes-u...

〜から 他の-GEN:SG 腐る-PPP-ACC:SG 袋-ACC:SG

「（彼は）頭に巻くスカーフを一つのポケットから引き出して、他のポケットから腐った袋を引き出した。」(U potpalublju)

「除去」を典型的に表している実例は[対象]に〈もの〉という語彙的な意味を表す要素を取るが、他にも[対象]の語彙的な意味が〈身体部位〉になる実例が見られる。その場合、[除去元]という文法的な意味を表す要素が[主体]自身の身体になることが多い。

(174) A onda mi se učini-lo da

そして 〜その時に 私-DAT: SG 気がする-PST:3SG 〜ように

je podiga-o ruk-u, neodlučno, jedva

上げる-PST:３SG 腕-ACC:SG ためらいがちに かろうじて

je odvoji-vši od tijel-a...

それ(手を)-ACC:SG TRANS.PST 〜から 体-GEN:SG

「そして、彼がかろうじて体から腕を離して、ためらいがちに（腕を）上げたような気がした。」(Proljeća Ivana Galeba)

上に挙げた実例における「除去」の現れ方を見ると、このタイプの対格名詞と動詞との組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 除去	[対象]ACC	[除去元]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

動詞 dizati/dići/podići「上げる」と spustiti/spuštati「下げる」は特定の要素との組み合わせによって物の「付着」を表す場合もあれば、「除去」を表す場合もある。例えば、動詞 dizati/dići/podići「上げる」に関しては、コーパスでの現れ方を見ると、「除去」を表すことが典型的な現れ方であるように言えるが、「付着」を表す場合もある。次に挙げる例(175)、(176)は「除去」を表す場合の現れ方であり、例(177)は「付着」を表す現れ方である。

(175) **Podig-la je** kragn-u na bundic-i,...

上げる-PST:3SG えり-ACC:SG ～の上に ファーコート-LOC:SG

「ファーコートの**えりを上げた**...(〈直〉ファーコートの上の**えりを上げた**...)」(Leš u fundusu)

(176) ...dok se uspravlja-la, **podig-la je** i kap-u...

～ながら 立ち上がる-PST:3SG 上げる-PST:3SG ～も 帽子-ACC:SG

「...(彼女は)立ち上がりながら、**帽子を上げた**...」(Golf)

(177) a zatim, pošto **je podig-la**

そして それから ～の後 上げる-PST:3SG

naočar-e na čel-o....

めがね-ACC:PL ～の上に 額-ACC:SG

「それから、額に**めがねを上げた**後、...」(Golf)

例(174)と例(175)は元の位置から上の方へ[対象]を上げることを表している点では物の「除去」の例であると言える。それに対し、例(177)も 特定の位置からの「除去」が当然含意されるにもかかわらず、この文脈はそれを問題にせず、特定の位置への「付着」という側面が強調されるため、この実例は物の「付着」を表すようにも言える。

また、セルビア語の動詞には語彙的な意味が近い動詞が完了体-不完了体という形態的な対立をなすものがある。したがって、動詞に特定の接辞が加わりアスペクトが変わることで、対格名詞との組み合わせも異なる意味的な関係を表す場合がある。そして、不完了体の動詞は対格名詞との組み合わせにおいて典型的に物の「変化」を表すが、完了体の場合は物の「除去」を表していることがある。次の例(178)では不完了体の動詞 brisati「消す/拭く」が[手段]を表す要素と組み合わさり「変化」を表しているのに対し、例(179)と例(180)で見られる完了体の obrisati/izbrisati は物の「除去」を表していると言える。

(178) Kraj-em izbledel-e crn-e maram-e

縁-INST-SG 色あせた-GEN:SG 黒い-GEN:SG スカーフ-GEN:SG

brisa-la je ugl-ove usan-a.

拭く-PST:3SG (口) 元-ACC:PL 唇-GEN:PL

「色あせた黒いスカーフの縁で口元を拭いていた。」(Ujka Dragi sedi pod jabukom)

(179) Proguta-la je nekoliko put-a vazduh-ø i

飲み込む-PST:3SG いくつか ～回-GEN:SG 空気-ACC:SG ～も

obrisa-la znoj-ø sa čel-a...

拭く-APP:F:SG 汗-ACC:SG ～から 額-GEN:SG

「何回か空気を飲み込み、額から汗を拭いた...」(Politika)

(180) Obrisa-o kamen-u prašin-u sa usan-a,...

拭く- APP:M:SG 石の-ACC:SG ほこり-ACC:SG ～から 唇-ACC:PL

「唇から石のほこりを拭いた...」(tren 2: Kazivanja Čeperku)

他にも、動詞 ribati/oribati「磨く/磨き上げる」、prati/oprati「洗う/洗い落とす」、seći/iseći「切る/切り取る」などにも似た現れ方が見られる。例えば、次に挙げる例文では不完了体の seći「切る」は[結果の状態](例(181))あるいは[手段](例(182)) を表している要素と組み合わさり、物の「変化」を表している。それに対し、(例(183))で挙げる完了体の iseći「切る/切り取る」は[除去元]という文法的な意味を表す要素と組み合わさり、物の「除去」を表している。

(181) Ovaj-ø je ljubazno zamoli-ø da

この(人)-NOM:SG 彼女-ACC:SG 親切に 頼む-AOR:3SG ～ように

kupi-ø dv-a kilogram-a kako jedan-ø

買う-PRES:3SG 二-ACC:SG キログラム-GEN:SG ～どのように 一つ-ACC:SG

krompir-ø ne bi seka-o na pola.

ジャガイモ-ACC:SG 否定小辞 切る-COND:3SG ～の上に 半分

「(彼は) 一つのジャガイモを半分に切らないように、彼女に二キロ買うように親切に頼んだ。」(Politika)

(182) Nesreć-a se desi-la juče u šum-i... dok

事故-NOM:SG 起こる-PST:3SG 昨日 〜の中に 森-LOC:SG 〜の間

je M. K. seka-o drv-a.

である-PRES:3SG 名前の頭文字 切る-APP:M:SG 木-ACC:PL

motorn-om tester-om. (Radio Televizija Srbije)

チェーンソー-INST:SG

「事故は昨日、M.K.がチェーンソーで**木を切っている**間に、 森で...起こった。」

(183) Lopov-ø je ulj-e na platn-u...

泥棒-NOM:SG である-PRES:SG 油彩画-ACC:SG 〜の上に カンバス-LOC:SG

iseka-o iz ram-a...

切り取る-APP:M:SG 〜から 額縁-GEN:DG

「泥棒は縁から**油彩画を**...**切り取った**...」(Radio Televizija Srbije)

7.4. 移動

このタイプの組み合わせは[対象]の空間的な位置変化を表している。したがって、この構造では[移動前の場所]と[移動後の場所]という文法的な意味の要素が現れ、これらのカテゴリカルな意味は〈空間〉であることが重要な特徴である。今回、分析の対象にした実例の中には移動を代表的に表す動詞には次のようなものがあった。

baciti/bacati「投げる」、ubaciti 「投げ入れる」、prebaciti「投げ渡す」、vratiti「戻す」、 dovući 「引きずる」、odneti「持っていく」、doneti/donositi「持ってくる」、izneti「持ち出す」、uneti「持ち込む」、preneti/prenositi 「移す」、prevoziti/prevesti「輸送する」、ukrcati「(品物を)踏み積みする」、iskrcati「(品物を)陸揚げする」、istovarivati 「(荷物を)下ろす」、slati「送る」、spuštati/spustiti「下げる/下ろす」、ugurati (čoveka u lift)「(人をエレベーターに)押し入れる/押し入れる」

典型的に物の「移動」を表している実例を以下に挙げる。

(184) Pripadnic-i Kfor-a uhapsi-li su rano jutros 13

メンバー-NOM:SG KFOR 逮捕する-PST:3PL 早く 今朝

Albanac-a, koji **su prevozi-li** sa

アルバニア人 REL(who)-NOM:PL 輸送する-PST:3PL ～から

Kosmet-a **mitraljez-e, minobacač-e** i **drug-o**

地名-NOM 機関銃-ACC:PL 迫撃砲-ACC:PL ～も 他-ACC:SG

savremeno oružj-e ka bezbednosn-oj

現代の-ACC:SG 兵器-ACC:SG ～の方へ セキュリティの-DAT:SG

zoni na jug-u Srbij-e.

ゾーン-DAT:SG ～の上に 南-LOC:SG セルビア-GEN

「KFOR のメンバーは、今朝早く、コソボ・メトヒヤ自治州からセルビアの南のセキュリティゾーンの方へ**機関銃や迫撃砲など他の現代兵器を輸送していた** 13 人のアルバニア人を逮捕した。」(Politika)

(185) **Bakren-e marijaš-e** koje su plaća-li

銅の-ACC:PL コインの種類-ACC:PL REL(which)-ACC:PL 払う-PST:3P

za prevoz-ø, ljud-i **su baca-li** na

～のために 運送-ACC:SG 人々-NOM:PL 投げる-PST:3PL ～の上に

dn-o crn-e skel-e... (Na Drini ćuprija)

底-ACC:SG 黒い-GEN:SG 筏-GEN:SG

「人々は運送のために払っていた**銅貨を**黒い筏の上に**投げていた**。」

(186) Jakov-ø **je izne-o** **pisaći st-o**

個人名-NOM:SG 持ち出す-PST:SG 書くための-ACC:SG 机-ACC:SG

na teras-u, u hladovin-u ladolež-a...

～の上に テラス-ACC:SG ～の中に 陰-ACC:SG ヒルガオ-GEN:SG

「ヤコフはヒルガオの陰のテラスに**机を持ち出した**。」(Noć i magla)

物の「移動」を表す実例は代表的に〈人〉である[主体]が物を移動させることを表しているが、[主体]を表す要素が〈人〉でない例も見られる。この場合、[主体]が輸送手段を表すことが多い。

(187) Poštanski kombij-i **prevozi-li su** **građansk-e predmet-e**

郵便の-NOM:PL バン-NOM:PL 輸送する-PST:3PL 民事-ACC:SG 公文書-ACC:PL

iz Palat-e pravd-e u četiri zgrad-e

～から 司法宮-GEN:SG ～の中に 四 建物-GEN:PL

u Beograd-u... (Politika)

～の中に ベオグラード-LOC

「郵便バンは司法宮から ベオグラードの四棟の建物へ**民事公文書を輸送していた...**」

(188) Na spisk-u bugarsk-ih carinik-a i

～の上に 覧表-LOC:SG ブルガリア-GEN:PL 税関職員-GEN:PL ～も

policij-e naš-lo se i 26 **brodov-a**

警察-GEN:SG 発見される-PST:3SG ～も 船-GEN:PL

koj-i **su prevozi-li** **ovaj-ø** **teret-ø**

REL(which)-NOM:SG 輸送する-PST:3PL この-ACC:SG 荷物-ACC:SG

do barsk-e luk-e.

～まで 地名-GEN:SG 港-GEN:SG

「ブルガリアの税関職員と警察の覧表には**この荷物を**バルの港まで**輸送していた** 26 の**船**が発見された。」 (Politika)

物が輸送される際、輸送手段は通常人が操作するために、上に挙げた例も含めて物の「移動」を表す構造における[主体]のカテゴリカルな意味を広く〈人〉のようにまとめることができると考えられる。また、実例(189)と(190)における[主体]を表す要素と[手段]という文法的な意味を表す要素の相互関係が見られる。つまり、 これらの要素を似た文脈で具格を取る[手段]を表す要素で言い換えることができる。例(189)と(190)の場合は次のようになる。

(189) **Prevozi-li su** **građansk-e predmet-e**

輸送する-PST:3PL 民事-ACC:SG 公文書-ACC:PL

poštansk-im kombij-ima...

郵便の-INST:PL バン-INST:PL

「郵便バンで**民事公文書を輸送していた...**」(Politika)

(190) Prevozi-li su ovaj-ø teret-ø brodov-ima...

輸送する-PST:3PL この-ACC:SG 荷物-ACC:SG 船-INST:SG

「船でこの荷物を輸送していた...」(Afrika)

これらの場合の言い換えの他にも、コーパスの実例において物の「移動」を表すいくつかの例に移動の[手段]を表す要素との共起が見られる。

(191) Čak su i građan-i svoj-im

さえ である-PRES:3PL ～も 住民-NOM:PL 自分の-INST:PL

automobil-ima prevozi-li ranjen-e

自動車-INST:PL 輸送する-APP:M:PL けが人-ACC:PL

do bolnic-a...

～まで 病院-GEN:PL

「住民まで自分の自動車でけが人を病院まで輸送していた...」

(Radio Televizija Srbije)

挙げた実例を元に物の「移動」を表す組み合わせを次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 移動	[対象]ACC	[移動前の場所]	[移動後の場所]
〈人〉		〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉

同じ動詞は異なる環境において物の「移動」を表す場合もあれば、物の「付着」を表す場合もある。動詞 spuštati/spustiti「下げる/下ろす」はその例であり、次の実例における現れ方がそれを示している。

(192) Iz džep-a je izvuka-o hrp-u

～から ポケット-GEN:SG 取り出す-PST:3SG 積み重ね-ACC:SG

zgužvan-ih novčanic-a i na moj-ø

しわくちゃの-PPP:F:GEN:PL 紙幣-GEN:PL ～も ～の上に 私の-ACC:SG

ispružen-ø dlan-ø **spusti-o** **četiri**

広げた-PPP:M:ACC:SG 手のひら-ACC:SG 下ろす-APP:M:SG 四

desetodinark-e.

10ディナール札-ACC:PL

「（彼は）ポケットから10ディナール札のしわくちゃの積み重ねを取り出し、私の広げた手の上に**10ディナール札を**四枚**おいた**。（〈直〉...私の広げた手のひらの上に**10ディナール札を**四枚**下ろした**。）」(Odmor)

(193) Lieberman/Stadler **je spusti-o** **fotografij-u** na sto-ø.

個人名-NOM 下ろす-PST:3SG 写真-ACC:SG ～の上に テーブル-ACC:SG

「リベルマン/スタドレルはテーブルの上に**写真をおいた**。（〈直〉**写真を下ろした**）。」(Besnilo)

(194) Pilot-ø helikopter-a... **spusti-o je**

パイロット-NOM:SG ヘリコプター-GEN:SG 下ろす-PST:3SG

letelic-u skoro u mor-e.

航空機-ACC:SG ほとんど ～の中に 海-ACC:SG

「ヘリコプターのパイロットは...**航空機を**海に**着水させる**ところだった。

（〈直〉**航空機を**海に**下ろす**ところだった。）」(Politika)

例(192)と(193)での動詞 spuštati/spustiti は物の「付着」を表しているが、例(194)は物の「移動」を表している。それは組み合わさる要素の性質にもよると言える。つまり、物の「付着」になる場合、この動詞が対格名詞の他に典型的に取る[付着先]を表す要素は限られた表面という意味的が含まれているが、物の「移動」を表している場合は、[移動後の場所]という文法的な意味を表す要素にはより幅広い空間的な意味の側面が含まれている。これは物の「付着」を表す組み合わせと物の「移動」を表す組み合わせとの大きな違いの一つであると言える。

動詞 ugurati「押し込む」 も似たふるまいを見せている。

(195) Onda sam skin-o košulj-u i **ugura-o**

その時 脱ぐ-PST:1SG シャツ-ACC:SG ～も 押し込む-APP:M:SG

je u korp-u za prljav-o rublj-e.

それ-ACC:SG ～の中に バスケット～のために 汚れた-ACC:SG 洗濯物-ACC:SG

「そして、私は**シャツを**脱いで、汚れた洗濯物のためのバスケットに**それを押し込んだ**。」

(196) ...muškarac-ø ju je ugura-o u kuć-u

男性-NOM:SG 彼女-ACC:SG 押し込む-PST:3SG ～の中に 家-ACC:SG

pritisnuvši joj nož-ø uz grl-o.

押す-TRANS.PST 彼女-DAT:SG ナイフ-ACC:SG ～に対して 喉-ACC:SG

「（その）男性はナイフを喉にて押しつけて**彼女を**家に**押し込んだ**。」

(Politika)

例(195)において[付着先]を表す要素（「汚れた洗濯物のためのバスケットに」）が表面を表しているとまでは言えないが、場所的空間的側面が含まれていないために、この実例を「付着」を表しているものとして扱う。それに対し、例(196)における「家に」という要素が明らかに空間を表しているために、[移動後の場所]という文法的な意味が認められ、例文全体も物の「移動」を表していると見られる。しかし、同時に、物の「移動」を典型的に表している実例に比べ広く見ると、物の「付着」という側面もある程度認められるために、この実例を物の「移動」と物の「付着」の間の境界的な例として扱うことができる。

7.5. 接触

このグループに分類されるものは[対象]自体の変化ではなく、対象との接触を表している。

接触の意味を表している動詞には以下のようなものが挙げられる。

dodirivati/dodirnuti「触れる」、stisnuti「押す/握る」、pritisnuti「（ボタンを）押す」、zgrabiti「つかむ」、potapšati「(肩を)叩く」、lupkati「（軽く）叩く」、trljati「こする」、pridržavati「持つ」、držati「持つ/握る」、 uzeti「取る」、hvatati/uhvatiti「つかむ/受ける」、zahvatiti「掬う」、 gladiti「なでる」、maziti「なでる」、 zagrliti「抱きしめる」、prigrliti「抱き寄せる」、obujmiti「抱える」、privijati「引き寄せる」、 poljubiti「キスをする」、udariti「殴る」、gurnuti「（誰かの胸を）突く」、povući(nekoga za uvo)「（誰かの耳を）引っ張る」、izbiti 「殴打する」、masirati 「マッサージする」、 odgurnuti「押しのける」

(197) Pošto　sam　šak-om　desn-e　ruk-e

～の後　である-PRES:1SG　手-INST:SG　右-INST:SG　腕-GEN:SG

čvrsto　stisnu-o　ob-a　štap-a...

強く　押す-APP:M:SG　両方-ACC:PL　棒-GEN:PL

「右腕の手で強く両方の棒を押してから...(〈直〉棒の両方を押してから...)」　(Golf)

(198) ...s　ob-e　ruk-e　zgrabio je

～と　両方-INST:PL　手-INST:PL　つかむ-PST:3SG

nabačen-u　lopt-u...

投げる-PPP:ACC:F:SG　ボール-ACC:SG

「両手で投げられたボールをつかんでから...」(Politika)

これらの実例から見れば分るように、物の「接触」を表す組み合わせでは[手段/道具]という文法的な意味を表す要素が頻繁に現れる。これは特に[対象]の語彙的な意味が具体物を表している場合はそうである。

このタイプの組み合わせは人が典型的に具体物に触れることを表しているが、[対象]を表す要素の語彙的な意味は具体物でなく、「人」を表す場合も多い。しかし、以前の節でも説明したように、 この場合の「人」は積極的に行動を行うのではなく、消極的に[主体]の働きかけを受ける存在であるために、物扱いにすることができる。したがって、このタイプの組み合わせでも[対象]のカテゴリカルな意味を〈もの〉のようにまとめることができる。[対象]の語彙的な意味は「人」を表している実例においては接触の位置を具体的に定める要素が頻繁に文中に現れる。この要素の文法的な意味を[接触先]として扱うことができ 、そのカテゴリカルな意味が〈身体部位〉になることが多い。

(199) ...on　me　zagrl-i　i

彼-NOM:SG　私-ACC:SG　抱きしめる-AOR:3SG　～も

potapš-e　po　ramnen-u.

叩く-PRES:3SG　～の上に　肩-DAT:SG

「彼は私を抱きしめて、肩を叩いた。」

(200) ...nagnu-o se　i　poljubi-o　ga

身をかがめる-PST:3SG　～も　キスする-APP:M:SG　彼-ACC:SG

u　　čel-o. (Ruski prozor)

～の中に　　額-ACC:SG

「身をかがめて**彼の**額に**キスをした。**（〈直〉...**彼を**額に**キスをした。**）」

この特徴は日本語で物の「接触」を表す組み合わせにくらべると、一つの相違点であると言える。日本語では「接触」の[対象]あるいは[接触先]が〈身体部位〉になる場合、その〈身体部位〉の所有者になる「人」を表す要素とノ格でつなげることが自然な現れ方である。「**私の肩を**叩く」や「彼の額にキスをする」などはその例である。セルビア語では日本語と同じように、「接触」の[対象]が〈身体部位〉を表す実例(201)も多少見られるが、「接触」の動作を〈身体部位〉に対して位置的に表すことの方が多い(例(199)、(200)、(202))。

(201) ...zatim　　**bi**...　　vrhovima　　prstiju

その後　　である-AOR:3SG　　先-INST:SG　　指-GEN:SG

uhvatio　　Bobetovu　　nadlakticu...

取る-APP:M:SG　　個人名の-ACC:SG　　上腕-ACC:SG

「その後、（彼は）指先で**ボベの上腕をつかんだ**...」(Zoe)

(202) ...**uhvati-o**　**sam**　　ga　　za　　ruk-u.

取る-PST:1SG　　彼-ACC:SG　　～のために　　手-ACC:SG

「**彼の**手を**取った。**（〈直〉彼を手に**取った。**）」(Strah i njegov sluga)

上に挙げられた現れ方を元に、セルビア語で物「接触」を表す組み合わせを次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 接触	[対象]ACC	([接触先])	[手段/道具]
〈人〉		〈物/身体部位〉	〈物/身体部位〉	〈物/身体部位〉

「物に対する働きかけ」を表す組み合わせ全体もそうであるが、物の「接触」を表す組み合わせでは特に[主体]を表す要素の語彙的な意味は「人」のほかに身体部位や物を表す名詞も現れる場合がある。この場合、次のような現れ方が見られる。第一に、[主体]の語彙的な意味は身体部位を表すとしても、実際、換喩的に人を表している場合が見られる。この場合、この要素をカテゴリカルな意味を〈人〉としてまとめることができると考えられる。その例を以下に挙げる。

(203) Njegov-a ruk-a, hrabreći je, steza-la
彼の-NOM:SG 手-NOM:SG 勇気づけながら 彼女-ACC:SG つかむ-APP:F:SG
ju je i privija-la sve jače.
彼女-ACC:SG である-PRES:3SG ～も 引き寄せる-APP:F:SG もっと 強く
「彼の手は勇気付けながら、彼女をつかんでもっと強く引き寄せていた。」

(Kroz knjige i književnost)

もう一つの現れ方は[主体]のカテゴリカルな意味が〈もの〉の場合である。このような組み合わせは人の様子あるいは状態を表すことが特徴であると言える。

(204) Vrat-ø mu je steza-la kragn-a od kaučuk-a.
首-ACC:SG 彼-DAT:SG 締める-PST:3SG 襟-NOM:SG ～から ゴム-GEN:SG
「ゴムの襟は彼の首を締めていた。（〈直〉ゴムの襟は彼に首を締めていた。）」（Insekti）

奥田の連語論はヲ格名詞と動詞との組み合わせが作る意味的体系をヲ格名詞と動詞の関係やこれらの性質、また、文中に現れる他の要素の性質を中心に説明しているが、実例(203)や(204)などの現れ方で見ると分るように、対格名詞と動詞との組み合わせの意味的体系の解明のために、[主体]を表す要素（日本語でガ格名詞、セルビア語では主格名詞）の性質やこの要素と文中に現れる他の要素との関係も分析に含めることの重要性を示している。

7.6. 生産

このグループの前置詞なし対格を取る名詞は、働きかけを受けて変化する[対象]ではなく、働きかけの結果としてなる[生産の対象]である。

生産を表す動詞には以下のようなものが見られる。

praviti/napraviti「作る」、plesti/isplesti「編む」、šiti/sašiti「縫う」、krojiti (odelo) 「(服を) 仕立てる」、podići/dizati(ćupriju)「(橋を)建てる」、sagraditi「建てる」、stvarati「作る/創造する」、proizvoditi/proizvesti「生産する」、slikati/naslikati「描く」、izvajati「彫刻する」、pisati/napisati (roman)「(小説を) 書く/書き上げる」、prepisivati (knjige) 「(本を)書き写す」、kopati/iskopati「掘る」、tkati「織る」、presti「紡ぐ」、heklati「糸をかがって作る」、vesti「刺繍する」、sastaviti(zbirku oružja)「(武器のコレクションを)集める」、roditi/izroditi(decu)「(子供を) 生む」、osnovati 「創立する」、 ostaviti(otvore na stubovima)「柱に穴を残す」

物の「生産」を表す実例を次に挙げる。

(205) Dok je ple-la džemper-e, ši-la
～の間に 編む-PST:3SG セーター-ACC:PL 縫う-APP:F:SG
suknj-e men-i i sestr-i,...
スカート-ACC:PL 私-DAT:SG ～も 妹/姉-DAT:SG
「妹/姉と私のために、セーターを編みスカートを縫いながら、...」
(Politika)

(206) Ovako kako pravi-m ovaj-ø lonac-ø
このように ～どのように 作る-PRES:1SG この-ACC:SG 鍋-ACC:SG
od glin-e,..
～から 粘土-GEN:SG (Uspon i pad Parkinsonove bolesti)
「粘土からこの鍋を作っているように、...」

(207) ...skupocen-u haljin-u... saši-la od material-a
高級-ACC-SG ドレス-ACC:SG 縫う-APP:F:SG ～から 生地-GEN:SG

koj-i je dobi-la na poklon-ø

REL(which)-ACC:SG もらう-PST:3SG ～の上に プレゼント-ACC:SG

pre 20 godin-a.

～前に 年-GEN:PL

「...20 年前にプレゼントにもらった生地から...高級なドレスを縫った。」

(Politika)

実例(206)、(207)で見られるように、物の「生産」を表す組み合わせでは[原料]という文法的な意味を表す要素との共起が見られる。また、[生産の対象]が空間的な側面を持つ「建物」や特定の「空間」などになる場合は、「生産の場所」という文法的意味を表す要素が含まれる傾向がある。

(208) ...sagradi-o je 1922. godin-e na plantaž-i pamuk-a

建てる-PST:3SG 年-GEN:SG ～の上に 栽培場-LOC:SG 綿花-GEN:SG

teren-ø za mini golf-ø.

グランド-ACC:SG ～のために ミニ ゴルフ-ACC:SG

「1922 年に綿花栽培場にミニゴルフ場を建てた...」(Politika)

このタイプの組み合わせも[対象]を表す要素の語彙的な意味が「人」であっても、物扱いにし、そのカテゴリカルな意味を〈もの〉として解釈できる実例が見られる。

(209) ...živ-i... u Južn-oj Americ-i, gde

住む-PRES:3SG ～の中に 南の-LOC:SG アメリカ-LOC:SG REL-(where)

se ponovo oženi-o, osnova-o nov-u

REFL 再び 結婚する-APP:M:SG 作る-APP:M:SG 新しい-ACC:SG

familij-u, izrodi-o djec-u.

家族-ACC:SG 生む-PST:3SG 子供たち-ACC:3SG

「彼が再婚し、新しい家族を作り、子供たちを生んだ...南アメリカに住んでいる...」

このように、物の「生産」を表している組み合わせの構造を次のようにまとめることがで

きると言える。

[主体]NOM	V 生産	[生産の対象]ACC	([原料]od+GEN)	([生産の場所]LOC)
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉	〈空間〉

実例の中に物の「生産」と物の「付着」の間の境界的なものが見られた。次に挙げる動詞 ostaviti「残す」の現れ方がその例の一つである。

(210) ...kad　ostavim　trag　mastila
〜時に　残す-PRES:1SG　跡-ACC:SG　インク-GEN:SG
na　ov-oj　hartij-i...
〜の上に　この-LOC:SG　紙-LOC:SG
「インクの**跡を**この紙に**残した**時に、....」(Derviš i smrt)

この現れ方は、インクの跡が出来る点では生産的ではあるが、「この紙に」という要素が空間でなく限られた表面を表し、インクの跡をそこに留めるという意味が含まれる点では、付着的な側面も認められると言える。これに対し、ある程度空間的な側面が含まれている要素と組み合わさり、そこに具体物を創造するというような文脈では、動詞 ostaviti「残す」がより明確に物の「生産」を表すことがある。

(211) ...ali　Neimar　se...　sažalio　i
しかし　建築業者-NOM:SG　REFL　同情する-APP:M:SG　〜も
ostavio　na　stubovima　otvore...
残す-APP:M:SG　〜の上に　柱-LOC:PL　穴- ACC:PL
「しかし、建築業者は同情して、柱に**穴を残した**。」(Na Drini ćuprija)

服や生地の「生産」を代表的に表す動詞の現れ方は日本語とセルビア語の相違点を一つ見せているものがある。日本語では「縫う」、「編む」または「織る」は物の「生産」を表すことのほかに、物の「変化」を表すこともできる。例えば、「**スカートを**縫う」、「**セーターを**編む」、「**じゅうたんを**織る」という場合はヲ格名詞が生産物を表し、組み合わせ全体も物の「生産」を表しているが、「**スカートのほころびを**縫う」、「**毛糸を**編む」や「**亜麻を**織って敷物を作る」という場合はヲ名詞が変化の対象を表し、組み合わせ全体も物

の「変化」という意味になる。これに対し、セルビア語では同じ意味の動詞が例(205)と(207)でも見られるように、 物の「生産」を表す組み合わせを代表的に作り、物の「変化」を表す例がほとんど見られない。似たような文脈では物の「変化」を表したい場合は異なる動詞を使うか、あるいは、動詞を不完了体から完了体に変える必要がある。例えば、動詞 šiti「縫う」を完了体にすると、動詞 zašiti「縫い合わせる」になり、zašiti pocepanu tkaninu（「布切れを縫い合わせる」）のように、物の「変化」を表す組み合わせを作ることができる。動詞の体が変わった場合はそれを別の動詞として扱う必要がある。ヲ格名詞が服や生地を表さない場合はその例外は多少見られる。次の例で動詞 plesti「編む」は[結果の状態]という文法的な意味を表す要素と組み合わさり、物の「変化」を表す。同じ現れ方が日本語の「編む」にも見られる。

(212) Zašto je rid-u kos-u

どうして である-PRES:3SG 赤い-ACC:SG 髪の毛-ACC:SG

ple-la u kurjuk-ø...

編む-APP:F:SG ～の中に 三つ編み-ACC:SG

「どうして彼女が赤毛を三つ編みにしていたのか...（赤毛を三つ編みに編んでいたのか...）」(Upotreba čoveka)

第八章　人に対する働きかけ

「人に対する働きかけ」には「生理的な変化」、「生理的な状態」、「心理的な変化」、「心理的な状態」、「空間的な位置変化」、「社会的場面での人への働きかけ」、と「行為の引き起こし/放任」を表すものが見られる。それぞれの意味的特徴と構文的特徴について述べてみる。

「人に対する働きかけ」がも七つの意味的カテゴリーに分かれる。対格で示される名詞の文法的な意味は［対象］であり、そのカテゴリカルな意味は常に〈人〉になる。このタイプの組み合わせにおける〈人〉というのは、特定の文脈において意志性を持ち自由に行動できる存在を表している。それが前節で見られた、物として扱うことができる「人」との相違点である。この組み合わせにおける動詞は人への働きかけを表している。

ここまで述べてきた「物に対する働きかけ」の下位分類は日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせに同じであるが、「人に対する働きかけ」は日本語とは異なる下位カテゴリーが相当見られる。このことは[対象]への働きかけが具体的であればあるほど、その意味的カテゴリーも類似しているが、具体性が弱まることに伴い、ぞれぞれの言語における意味的カテゴリーの様態が異なってくるためであると言えよう。

8.1.　生理的な変化

このタイプの組み合わせは主格を取る名詞で表される[主体]の働きかけによって、[対象]が「生理的に変化」することを表わている。[主体]は〈人〉、〈現象〉あるいは〈事柄〉を表す。人の「生理的な変化」を表す動詞には以下のようなものがある。

umarati、zamarati/umoriti、zamoriti「疲れさせる」、rasplakati「泣かせる」、nasmejati「笑わせる」、buditi/probuditi「起こす」、grejati/zagrejati「温める」、ošamutiti「めまいをさせる」、omamiti「無感覚にする」、izgladneti 「飢えで弱らせる」、trezniti/otrezniti「正気にする」、zacrveneti「赤くさせる」、oživeti「復活させる」、 zadovoljavati/zadovoljiti「満足させる」、okretati/okrenuti「回す」

人の「生理的な変化」を表す組み合わせの実例を以下に挙げる。

(213) Iz　on-og　kontejner-a　uze-o je

～から　あの-GEN:SG　ゴミのコンテナ-GEN:SG　取る-PST:３SG

promrz-lu beb-u,... privi-o

冷える- APP:F:ACC: SG 赤ちゃん-ACC:SG 寄り添う-APP:M:SG

uz sebe da bi je

～に対して 自分-ACC:SG ～ように である-AOR:3SG 彼女-ACC:SG

zagreja-o,...

温める-APP:M:SG

「そのゴミのコンテナから赤ちゃんを取り、(その赤ちゃんを)温めるために自分に寄り添わせた、...」(Politika)

この意味的関係を表す組み合わせは文中に生理的な変化を起こす[原因]あるいは[手段/方法]という文法的な意味の要素との共起が見られる。この要素は具格を取ることが多い。

(214) Aleksandar-ø Stanković-ø je rasplaka-o glavn-u

個人名-NOM:SG 泣かせる-PST:3SG メインの-ACC:SG

urednic-u HTV-a Hloverk-u Novak- Srzić

エディタ-ACC:SG テレビ局の略称-GEN:SG 個人名-ACC:SG

aluzij-ama na njen-u tešk-u bolest-ø...

暗示-INST:SG ～の上に 彼女の-ACC:SG 重い-ACC:SG 病気-ACC:SG

「アレクサンダー・スタンコヴィッチは彼女の重い病気の暗示でHTVの編長フロヴェルカ・ノヴァク・スルジッチを泣かせた...」(Politika)

人の「生理的な変化」を表す組み合わせは[主体]を表す要素のカテゴリカルな意味が〈人〉以外の場合が見られる。例えば、次に挙げる実例では主格名詞が動作性の名詞(例(215))になり、または、〈現象〉というカテゴリカルな意味(例(216))を表している。この傾向は対格名詞と動詞との組み合わせの構造の分析において[主体]を表す要素の役割も考慮に入れる重要性を示している。

(215) Naprasan-ø odlazak-ø najpopularnij-eg Makedonc-a

突然-NOM:SG 辞去-NOM:SG 一番人気の-GEN:SG マケドニア人-GEN:SG

ražalosti-o je i **rasplaka-o** i

悲しませる-PST:3SG ～も 泣かせる-APP:M:SG ～も

staro-ø i **mlado-ø**.

年寄り-ACC:SG ～も 若者-ACC:SG

「最も人気のあるマケドニア人の**突然の辞去は年寄りも若者も**悲しませ、**泣かせた**。」(Politika)

(216) Diže-m se lak-ø, opsednut-ø, ali

起きる-PRES:1SG REFL 軽い-NOM:SG 取り付かれる-PPP:M:NOM:SG しかし

me već na prv-om korak-u

私-ACC:SG 既に ～の上に 一番目-LOC:SG 歩き-LOC:SG -PRES:3SG

otrijezn-i **glas-ø** vječito budn-og

正気にする-PST:3SG 声-NOM:SG 永遠に 目が覚めている-GEN:SG

djed-a.

おじいちゃん-GEN:SG

「軽くて(何かに)取りつかれた状態で起きるが、一歩歩いただけで、永遠に目が覚めているおじいちゃんの**声が**既に**私を正気にする**。」(Bašta sljezove boje)

上に挙げた実例を元に人の「生理的な変化」を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 生理的変化	[対象]ACC	([原因/手段・方法])INST
〈人/現象/事柄〉		〈人〉	〈事柄〉

8.2. 生理的な状態

人に対する働きかけを表す組み合わせには相当特殊な現れ方が見られる。このタイプの組み合わせは「生理的変化」でなく「生理的な状態」を表すことが特徴である。人の「生理的変化」を表す動詞には完了体の動詞が代表的に現れるが、このタイプの組み合わせではそうでなく不完了体の動詞が対格名詞的な単位と組み合わさる。対格を取る要素はほとんど人称

代名詞になり、多少個人名を表す名詞の例も考えられる。そのカテゴリカルな意味は当然〈人〉になる。そして、このタイプの組み合わせは、原則として[60]三つの要素の組み合わせでないと、成り立たないことが重要な特徴である。つまり、対格を取る人称代名詞も主格を取る名詞も構造上の必須の要素になる。

(217) Boli-ø　　ga　　nog-a.

痛める-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　足-NOM:SG

「彼は足が痛い。（〈直〉足が彼を痛めている。）」

(218) Zane-la　　ga　　vrtoglavic-a. (Gortan-Premk)

ゆらゆらさせる-APP:3SG　　彼-ACC:SG　　めまい-NOM:SG

「彼はめまいでゆらゆらする。（〈直〉めまいが彼をゆらゆらさせる。）」

(219) Uhvati-o　　me　　je　　grč-ø

握る-APP:SG:M　　私-ACC:SG　　である-PRES:3SG　　けいれん-NOM:SG

u　　noz-i.

〜の中に　　足-LOC:SG

「私は足がけいれんを起こした。（〈直〉けいれんが私を足に握った。）」

実例(217)は Boli ga noga「彼は足が痛い」という意味になるが、この三つの要素の組み合わせから主格名詞 noga「足」を省くと、その意味は完全に不明確になる。Boli gaというのは意味がない。これはrasplakati dete 「子供を泣かせる」やzagrejati bebu「赤ちゃんを暖める」などのような、「生理的な変化」を表す組み合わせとの相違点であると言える。これらにおいては主格名詞を省いてもそれが想定でき意味が成り立つので、主格名詞は構造上の必須要素であるとは言えない。しかし、「生理的な状態」を表すものが異なる。同様のことは例(218) と例(219) に関しても言える。zanela ga または uhvatio me というのは意味がない。意味があったとしても、「接触」や「心理的変化」のように全く異なる意味が想定できる。三つ目の要素と組み合わさって初めて人の「生理的な状態」を表すようになる。このことは、対格名詞的な単位と動詞との組み合わせの体系を記述する際に分析に対格の要素と動詞だけでなく主格を取る要素も含めることの重要性を見せていると思われる。

なお、このタイプの組み合わせにおける主格名詞は[対象]に対して積極的に働きかけている[主体]でなく、[外的要因]であると言える。したがって、そのカテゴリカルな意味は〈人〉でなく、〈身体部位〉、〈現象〉または〈事柄〉であると言える。そのために、このタイプの組み合わせは本質的に対象的な関係を表すものとは相当性質が異なると考えられる。対象的な関係を表すものの中でも特殊な現れ方であると言える。主格名詞と対格人称代

[60] 例外も多少見られる。

名詞との組み合わせ全体が人の「生理的な状態」を表している。しかし、対格代名詞における対象性も、それに対する外からの働きかけもある程度認められる以上、「人に対する働きかけ」を表す組み合わせとして分類しておく。

以上のことからこのタイプの組み合わせを次のようにまとめることができる。

V 生理的な状態	[対象]ACC	[外的要因]NOM
	〈人〉	〈身体部位/現象/事柄〉

8.3. 心理的な変化

対格で示される[対象]が主格で示される[主体]の働きかけの影響を受け、心理的に変化していく。文中に心理的な変化を起こす[原因]あるいは[手段/方法]が表されることがある。この要素は具格を取ることが多い。心理的変化を表す動詞に以下のようなものがある。

utešiti「慰める」、iznervirati「いらいらさせる」、uplašiti/plašiti「怖がらせる」、razbesneti「激怒させる」、obradovati「喜ばせる」、ohrabriti「励ます」、bodriti「応援する」、oduševljavati「感動させる」、umiriti「安心させる」、rastužiti「悲しくさせる」、ražalostiti「悲しませる」、urazumiti「理性をはたらかせる」、opterećivati/opteretiti「負担をかける」、uznemiravati「動揺させる」、zabavljati/zabaviti「（気持ちのうえで）ゆったりさせる」

(220) ... jer je osjeća-la da **ga** **oduševljav-a**

～ので 感じる-PST:3SG ～ように 彼-ACC:SG 感動させる-PRES:3SG

poznavanj-em tog čudn-og francusk-og

知識-INST:SG その-GEN:SG 不思議な-GEN:SG フランスの-GEN:SG

jezik-a...

言語-GEN:SG

「その不思議なフランス語の知識で**彼を感動させていた**ことを感じていたので...」(Derviš i smrt)

(221) Ne zastaje-m da **bih** **ponek-og**

否定小辞 止まる-PRES:1SG ～ように である-AOR:1SG 誰か-ACC:SG

obodri-o ili **uteši-o** ponek-om rečj-u,...

励ます-APP:M:SG ～か 慰める-APP:M:SG いくつか-INST:SG 言葉-INST:SG

「（私は）いくつかの言葉で**誰かを励ます**ために、または、（**誰かを**）**慰める**ために止まらない、...」(Golf)

この意味的関係を表す組み合わせでも[主体]が〈人〉を表さない場合が見られる。前節で挙げた実例（215）における動詞 ražalostiti「悲しませる」との組み合わせもそうであり、次に挙げる実例では[主体]を表す主格名詞が〈現象〉を表している。

(222) ...on želi-ø da njegov-ø glas-ø, ne

彼-NOM:SG 望む-PRES:3SG ～ように 彼の-ACC:SG 声-ACC:SG 否定小辞

padne-ø u prazn-o, da nađe-ø

落ちる-PRES:3SG ～の中に 虚空-ACC:SG ～ように 見つける-PRES:3SG

odjek-ø, makar **ga** **taj-ø** **odjek-ø**

反響-ACC:SG ～ても 彼-ACC:SG その-NOM:SG 反響-NOM:SG

u početk-u malo i **uplaši-o**.

～の中に はじめ-LOC:SG 少し ～も 怖がらせる-APP:M:SG

「**その反響が**はじめに**彼を**少し**怖がらせ**ても、彼の声が虚空に落ちないで反響を見つけることを望んでいる。」(Pokošeno polje)

人の「心理的な変化」を表す組み合わせを次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 心理的変化	[対象]ACC	([原因/方法])INST
〈人/現象/事柄〉		〈人〉	〈事柄/現象〉

8.4.　心理的な状態

「人に対する働きかけ」を表す組み合わせには「生理的変化」と「生理的な状態」とが見られたように、人の「心理的変化」を表す組み合わせに対し特殊な現れ方として人の「心理的な状態」を表す組み合わせが認めらる。このタイプの組み合わせは「生理的変化」を表す組み合わせと共通の構造上の特徴が見られる。人の「心理的変化」を表す組み合わせには次のような例が見られる。

(223) Boli-ø　ga　njen-a　hladnoć-a.　(Gortan-Premk)

痛める-PRES:3SG　彼-ACC:SG　彼女の-NOM:SG　冷たさ-NOM:SG

「彼は彼女の冷たい態度で傷つく。（〈直〉彼女の冷たさが彼を傷つける）。」

(224) Brine-ø　me　njena　bolest-ø.

心配させる-PRES:3SG　私-ACC:SG　彼女の-NOM:SG　病気-NOM:SG

「私は彼女の病気が心配だ。（〈直〉彼女の病気が私を心配させている。）」

(225) Plaši-ø　me　samoć-a.

怖がらせる-PRES:3SG　私-ACC:SG　孤独-NOM:SG

「私は孤独が怖い。（〈直〉孤独が私を怖がらせている。）」

(226) Veseli-ø　ga　t-a　vest-ø.

喜ばせる-PRES:3SG　彼-ACC:SG　その-NOM:SG　ニュース-NOM:SG

「彼はそのニュースが嬉しい。（〈直〉そのニュースが彼を喜ばせている。）」

人の「生理的な状態」を表す組み合わせで見られたように、「心理的な状態」を表す組み合わせでも不完了体の動詞が対格名詞的な単位と組み合わさる。対格を取る要素は典型的に人称代名詞になり、そのカテゴリカルな意味は〈人〉になる。そして、このタイプの組み合わせも、「生理的な状態」を表す組み合わせと同様、原則として三つの要素の組み合わせでないと、成り立たないことが重要な特徴である。このように、対格を取る人称代名詞も主格を取る名詞も構造上の必須の要素であると言える。つまり、上の実例における主格名詞を省くと、意味が不完全になる。例えば、以前の文脈が分かる場合にBrine me「心配だ」とは言えても、特定の前の文脈がない場合は、主格名詞を除くと組み合わせの意味が成り立たない。この特徴をutešiti nekoga 「誰かを慰める」、ohrabriti nekoga「誰かを励ます」に

比べると、その性質が異なることが分かる。このことも、対格名詞的な単位と動詞との組み合わせの体系の分析において主格を取る要素の重要性を示していると言える。

このタイプの組み合わせにおいても「生理的な状態」を表す組み合わせと同様、主格名詞は[対象]に対して積極的に働きかけている[主体]でなく、[外的要因]であると言える。そのカテゴリカルな意味は〈現象〉または〈事柄〉になる。このように、「心理的な状態」を表す組み合わせも本質的に対象的な関係を表すものとは性質が異なると考えられる。対象的な関係を表すものの中でもう一つの特殊な現れ方であると考えられる。主格名詞と対格人称代名詞との組み合わせ全体が人の「心理的な状態」を表している。それでも、対格代名詞における対象性とそれに対する外からの働きかけが認められるために、「人に対する働きかけ」を表す意味的関係の一つとして分類しておく。

以上のことから、「心理的な状態」を表す組み合わせを次のように一般化することができる。

V 心理的な状態	[対象]ACC	[外的要因]NOM
	〈人〉	〈現象/事柄〉

8.5. 空間的位置変化

この意味的関係を表すものは主格名詞で示される[主体]の働きかけや指示によって対格名詞で表される〈人〉が特定の空間において移動し、位置を変える。このタイプの組み合わせには人の姿勢変化を表すもの[61]も含まれる。ただし、その実例はそれほど多くは見られない。文中に［移動前の場所］あるいは［移動後の場所］(または両方)という文法的な意味の要素が表されることが特徴である。

uvesti「入らせる」、povesti/odvesti「連れていく」、voditi「連れる」、dovesti/dovoditi「連れてくる」、izbaciti/izbacivati「追い出す」、ispratiti 「見送っていく」、usjesti「座らせる」、poslati/slati「送る」、rastaviti「別れさせる」、izvesti/odvesti「連れ出す」、pokrenuti「動かす」

人の「空間的位置変化」を表す実例を次に挙げる。

[61] 奥田(1968-1972)はこれらを「空間的な位置変化」に分類している。

(227) ...on-ø　　je odve-o　　mo-ga　　brat-a

彼-NOM:SG　連れていく-PST:3SG　私の-ACC:SG　弟/兄-ACC:SG

u　　tvrđav-u...

～の中に　要塞-ACC:SG

「...彼は私の弟を要塞に連れていった...」(Derviš i smrt)

(228) A　kad　je iscrp-ena　(pomoć-ø),

そして　～時に　使い果たす-PASS.PRES:F:3SG　援助-NOM:SG

izbac-e　ih　iz　mal-og　svratišt-a...

追い出す-PRES:3PL 彼ら-ACC:PL ～から 小さい-GEN:SG　たまり場-GEN:SG

「そして、 援助が使い果たされたときに、彼らを小さいたまり場から追い出した。」 (Proljeća Ivana Galeba)

人の姿勢変化という側面が含まれている実例には次のようなものがある。

(229) Starac-ø　me　usjed-e　na　svoj-ø

老人-NOM:SG　私-ACC:SG　座らせる-AOR:3SG　～の上に　自分の-ACC:SG

krevet-ø...

ベッド-ACC:SG

「老人は私を自分のベッドに座らせて、...」

この意味的関係を表す実例の中には[対象]の行動の独立性や[主体]の働きかけの過程や程度には差が見られることは興味深い側面である。ただし、このタイプの組み合わせは[対象]の独立性や自由性に差があるにもかかわらず、全て[主体]の働きかけの影響によって[対象]自体が行動するという側面が含まれていることが特徴であると言える。例えば、上に挙げた実例を比べると、実例(227)より実例(228)の方が[対象]の行動の自由性が高いと言えようが、それでも両方とも[対象]自体が移動する側面が含まれている。これらを

(230) Sutradan　su　opet　doš-li　po　mene,

翌日　である-PRES:3PL 再び　来る-APP:M:PL　～の上に　私-LOC:SG

izve-li　　me　　iz　　sob-e　　na

連れていく-PST:M:PL　　私-ACC:SG　　～から　　部屋-GEN:SG　　～の上に

nečujn-im　　bijel-im　　kolic-ima,　　prevez-li

音のしない-LOC:PL　白い-LOC:PL　　車いす-LOC:SG　　運送する-APP:M:PL

kroz...　　hodnik-e　　i　　ugura-li　　u

～を通して　　廊下-ACC:PL　　～も　　押し入れる-APP:PL　～の中に

lift-ø.

エレベーター-ACC:SG

「翌日は再び私のために来てくれて、音のしない白い車いすに（私を）部屋から**連れていって**、廊下を通して運びエレベーターに押し入れた。」

(Proljeća Ivana Galeba)

例(230)における[対象]の語彙的な意味は「人」であっても、そのカテゴリカルな意味を〈もの〉として扱うことが正しいように思える。この場合は[対象]自体の行動の側面が含まれていないために、物扱いにすることができると考えられる。つまり、もの名詞との組み合わせにおいては代表的に〈人〉の「空間的位置変化」を表す動詞でも〈もの〉の「移動」を表すようになる場合があることが分る。

人の「空間的位置変な」を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 空間的変化	[対象]ACC	[移動前の場所]	[移動後の場所]
〈人〉		〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉

8.6.　社会的場面での人への働きかけ

このタイプの組み合わせでは特定の社会的な場面における[主体]による[対象]への働きかけが表される。その中に三つの意味的関係が見られると思われる。

第一に、[主体]への働きかけによって[対象]の社会的な身分が変化する意味を持つ組み合わせが見られる。これらを「社会的変化」と名づけることができる。「社会的変化」を表す動詞には以下のようなものがある。

zatvoriti「投獄する」、zaposliti「雇用する」、upisati(na fakultet)「(大学に)入学させる」、otpustiti「仕事をやめさせる」、zameniti「(誰かに)」代わる」、isključiti (**nekog** iz nasledstva)「(遺産から**誰かを**)除外する」、 osloboditi「解放する」、unparediti「昇進させる」、predati (**begunca** vlastima)「(**逃亡犯人を**政府に)引き渡す」

この意味的関係を表す組み合わせの実例を次に挙げる。

(231) Jest, hti-o sam da **preda-m** **bjegunc-a**
そう ～したい-PST:1SG ～ように 引き渡す-PRES:1SG 逃亡犯人 CC:SG
stražar-ima, i miran-ø sam radi
ガードマン-DAT:PL ～も 平静な-NOM:SG である-PRES:1SG ～ために
to-ga.
それ-GEN:SG (Derviš i smrt)
「そう、私は**逃亡犯人を**ガードマンに**引き渡し**たかったし、それで平静だ。」

この意味的関係を表す組み合わせでは[社会的な状態]という文法的な意味を表す要素との共起も見られる。

(232) "Vašington-ø post-ø" precizir-a da **su**
ワシントン・ポスト-NOM:SG 特定する-PRES:3SG ～ように である-PRES:3PL
najveć-i donator-i... **zaposli-li** **Bil-a** kao
最も大きい-NOM:PL 寄付者-NOM:PL 雇用する-APP:M:PL 個人名-ACC ～として
konsultant-a ili poslovn-og partner-a.
コンサルタント-ACC:SG ～か ビジネス-ACC:SG パートナー-ACC:SG
「ワシントン・ポストは最も大きい寄付者が**ビルを**コンサルタントまたはビジネス・パートナーとして**雇用した**と特定している。」(Politika)

第二に、[対象]の社会的な身分が変わっていくわけではないが、特定の社会的場面での人間同士の相互行為を表しているため、臨時的にでも人間同士の関係が成り立つという意味的

側面が含まれることが特徴である組み合わせが見られる。この意味的関係を表す動詞を以下に挙げる。

upoznati「知り合いになる」、pozdraviti「挨拶する」、sresti、susresti「会う」、obići、posetiti「訪ねる」、predstaviti (nekoga nekome)「誰かに誰かを紹介する」、sastaviti(dva čoveka) 「(二人を)引き合わせる」

(233) Silaze-ći u kabin-u oko ponoć-i
TRANS ～の中に 船室-ACC:SG ～ごろ 夜中の 12 時-GEN:SG
sreta-m Robert-a, mornar-a Bretonc-a...
会う-PRES:1SG 個人名-ACC:SG 船員-ACC:SG ブルトン人-ACC:SG
「夜中の 12 時ごろ船室に降りながら、ブルトン人の船員、ロバートに会う。(〈直〉...ロバートを会う。)」

(234) Kao da se sam-ø šejtan-ø potrudi-o
～のように REFL 自身-NOM:SG 悪魔-NOM:SG 努力する-APP:M:SG
da sastav-i ov-a dv-a čovjek-a...
～のように 会わせる-PRES:3SG この-ACC:PL 二人-ACC:PL 人-GEN:PL
「悪魔こそがこの二人を引き合わせるために努力したようだ...」 (Derviš i smrt)

第三に、[主体]の働きかけによって[主体]と[対象]との間に成り立つ力関係を表す組み合わせがある。この意味的関係を表す動詞には次のようなものがある。

napasti「攻撃する」、odbraniti「守る」、pobediti「勝つ」、poraziti「負かす」、savladati「打ち勝つ」、spasti/spasavati「救う」、 potčiniti/potčinavati「服従させる」、odbaciti「排除する」

これらも人の社会的身分が変わるわけではないが、相手に対する力関係が変わり、必ず人間のふれあいの結果として成り立つ動作として考えられるために、「社会的場面での人への働きかけ」を表す組み合わせとして分類できる。

(235) Želi-o je　　da　　spas-e　　hadži　　Sinanudin-a...

～したい-PST:3SG　～ように 救う-PRES:3SG　名前の接頭辞　個人名-ACC:SG

「(彼は)ハジ・シナヌディンを救いたかった。」。　(Derviš i smrt)

(236) Ispriča-o je　　kako　　su　　hajduc-i

語る-PST:3SG　　～どのように　である-PRES:3PL　　アウトロー-NOM:PL

napa-li　　dubrovačk-e　　trgovc-e...

攻撃する-APP:M:PL　　ドゥブロヴニクの-ACC:PL　　商人-ACC:PL

「(彼は)アウトローがドゥブロヴニクの商人を攻撃したことを語った。」

(Derviš i smrt)

この意味的関係を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 社会的働きかけ	[対象]ACC
〈人〉		〈人〉

8.7.　人の行為の引き起こし/放任

このタイプの組み合わせにおいて主格名詞は対格を取る[対象]が特定の動作あるいは行為をすることを引き起こす[主体]あるいは[原因]となる。また、動作を行うことを放任する[主体]を表している。これらの動詞の意味が不完全であるために、ほかの動詞あるいは前置詞 na (元の意味:「～の上」)を含む前置詞句で補われる必要がある。この特徴は「人への働きかけ」を表すほかの組み合わせとの相違点であると言える。[対象]は動作や行為を最終的に行う。つまり、次のように、二つのパターンを見せている。

この意味関係を表す動詞には次のようなものがある。

naterati/nagnati/nagoniti/terati 「(行為の引き起こしの意味の) ～させる」

pustiti/puštati「(放任の意味の)～させる」

naterati/nagnati/terati/pustiti/puštati	nek-oga	da	V
～させる	誰か-ACC:SG	～ように	

naterati/nagnati/terati	nek-oga	na+名詞
～させる	誰か-ACC:SG	前置詞(～の上に)

実例を以下に挙げる。

(237) Prodava-la je vojnic-ima hran-u i pić-e,

売る-PST:3SG 兵士-DAT:PL 食べ物-ACC:SG ～も 飲み物-ACC:SG

pušta-la ih da u han-u

let-PST:3SG 彼ら-ACC:PL ～ように ～の中に 宿-LOC:SG

kocka-ju...

賭けをする-PRES:3PL

「彼女は兵士達に食べ物と飲み物を売り、宿で（その兵士達に）賭けをさせていた...（〈直〉...兵士達を賭けさせていた...）」(Derviš i smrt)

(238) ...sjećanj-e i ovaj-ø grob-ø natjera-li su

思い出-NOM:SG ～も この-NOM:SG 墓-NOM:SG make- PST:3PL

ga na poslušnost-ø.

彼-ACC:SG ～の上に 従順-ACC:SG

「思い出とこの墓が彼を従順にさせた。」(Derviš i smrt)

第九章　事に対する働きかけ

「事に対する働きかけ」を表す組み合わせにおいて対格名詞のカテゴリカルな意味は〈事柄〉を表し、その文法的な意味は[対象]になる。動詞がその〈事柄〉に対して働きかける動作を表しているが、それが具体的な働きかけであるとは言い難い。〈事柄〉を表している対格名詞としてまとめられるものの中には状態、うごきや関係などを表している名詞が多い。日本語の場合もそうであるが、このタイプの組み合わせの主な特徴として名詞が抽象的であり、動詞もその抽象的な側面における変化を示すために抽象的であることが挙げられる（奥田 1968-1972[1983:64]）。これはここまで分析してきた「物に対する働きかけ」と「人に対する働きかけ」との相違点である。「事に対する働きかけ」を表代表的に作る動詞を以下に挙げる。

I　状態/うごき/関係の程度の増加/減少
ojačati/pojačati「強める」、ubrzati「速める」、povećati「増やす」 intenzivirati「激化する」、povisiti「高める」、 proširiti「広げる/拡大する」、produbiti「深める」、učvrstiti「固める」、razviti「発展させる」、smanjiti「減らす」、oslabiti/slabiti「弱める」、suziti「狭める」、 ublažiti「和らげる」、olakšati 「簡単にする」、stišati「沈める」

II　状態/うごき/関係の局面
početi/započeti「はじめる」、završiti「終わる」、zaustaviti「止める」、okončati「完成する」

III　状態/うごき/関係の導入・確立
uspostaviti「樹立する」、uvesti(mere)「（政策を）確立する」、podesiti (brzinu mašine)「（機械の早さを）調節する」、doneti「もたらす」

IV　否定的なニュアンスを含んだ変化
iskriviti(istinu)「（真実を）ゆがめる」、 osramotiti(ime)「（名誉）を汚す」、uznemiriti「乱す」、narušiti「侵す」、remetiti「乱す」、ometati「妨げる」、povrediti (autorska prava)「（人権）侵害する」、potiskivati 「鎮圧する」

V　肯定的なニュアンスを含んだ変化
poboljšati「改善する」、stabilizovati「安定させる」、usavršiti「上達させる」

VI　状態/うごき/関係の誘発
prouzrokovati 「おこす」、izazvati「おこす」

VII　状態/うごき/関係の生産
stvoriti、napraviti「作る」、roditi/izroditi「生む」、proizvesti「生産する」、probuditi「よび起す」、izgraditi「立てる」、osloboditi (energiju)「(エネルギーを)発散する」

VIII その他
promeniti「変える」、učiniti「する/させる」、spasti「救う」、ispitati「調べる」、odvući (pažnju)「(注意を)そらす」、 promovisati「推進する」

このタイプの組み合わせを作る動詞の語彙的な意味の中に七つの傾向を一般化することができる。第一に、特定の状態、うごきや関係の程度の増加または減少が見られる。つまり、動詞 ojačati/pojačati「強める」、ubrzati「速める」 、smanjiti「減らす」、oslabiti/slabiti「弱める」などのように、特定の状態、うごきや関係などの程度が高まる・進行する、または逆に、下がる・退行するという意味的な傾向が見られる。第二に、početi/započeti「はじめる」、završiti「終わる」など、状態、うごきや関係などの局面を表す動詞がある。次に、状態、うごきや関係の導入や確立が表すもの、否定的なニュアンスあるいは肯定的なニュアンスを持ち変化を表す動詞と状態、うごきや関係の誘発とその生産を表すものもある。また、これらの意味的なグループに分類できないものも見られる。

「事に対する働きかけ」を表す組み合わせには動詞の働きかけによって〈事柄〉が変わっていくという過程が頻繁に見られる。この意味的関係を代表的に表している実例を次に挙げる。

(239) Brz-ø　privredn-i　uspon-ø　**ojača-o je**　ekonomsk-i,
急速な-NOM:SG　産業的-NOM:SG　上昇-NOM:SG　強める-PST:3SG　経済的-ACC:SG
političk-i,　pa　i　vojn-i,　položaj-ø　Kin-e,　ali
政治的-ACC:SG　そして　も　軍事的-ACC:SG　地位-ACC:SG　中国-GEN:SG　しかし
je　mnogo　gde　**produbi-o**　nepoverenj-e
である-PRES:3SG　多くの　どこ　深める-APP:M:SG　不信-ACC:SG
u　nju.
～の中に　それ-LOC:SG
「急速な産業的上昇は中国の**経済的、政治的**、そして**軍事地位も強めた**が、多くのところでは(中国への)**不信も深めた**。」(Politika)

(240) Tako　**je**　Nemanj-a　**uspostavi-o**　i
そのように　である-PRES:3SG　個人名-NOM　樹立する-APP:M:SG　～も
učvrsti-o　svoj-u　**vlast-ø**　na　teritorij-i
強化する- APP:M:SG　自分の-ACC:SG　政権-ACC:SG　～の中に　領土-LOC:SG
od　Kotor-a　do　Sofij-e...
～から　地名-GEN　～まで　地名-GEN
「そのように、ネマニャはコトルからソフィアまでの領土で自分の**政権を樹立し、強化した**...」(Ilustrovana istorija Srba)

対格名詞自体が具体物を表さず、動詞との組み合わせも具体的な動作として扱うことができないことが特徴である。したがって、このタイプの組み合わせは全体として抽象的な意味を表していると言える。主格名詞のカテゴリカルな意味が〈人〉になることが多いが、〈事柄〉、〈現象〉や〈組織〉を表す場合もあり、その文法的な意味が[主体]あるいは「原因」になる。

したがって、「事に対する働きかけ」を表す組み合わせは大きく次のような構造を見せていると言える。

[主体/原因]NOM	V 変化	[対象]ACC
〈人/事柄/現象/組織〉		〈事柄〉

このタイプの組み合わせが表す現実を考えると、奥田が言うように、うごきや状態などに働きかけて 、その「変化」を引き起こすということはその持ち主である人や物に対して直接的にまたは間接的に働きかけることを媒介しなくては、成り立たない。例えば、「人の興奮をしずめる」というときは、その「興奮」のもちぬしである「人」に対して働きかけることによって「興奮」という状態に「変化」が起こるということになる。しかし、「事に対する働きかけ」を表す組み合わせはそれを扱っておらず、その働きかけの結果としておこる心理状態における「変化」を扱っている（奥田 1968-1972[1983:63]）。

セルビア語で「事に対する働きかけ」を表す組み合わせにも同じ関係が見られる。例えば、osramotiti čoveka「人に不名誉を与える（〈直〉人を不名誉させる）」という言い方はあり、「人に対する働きかけ」を表してる。つまり、名詞 čovek「人」が対格の形を取り[対象]になるが、この組み合わせは「人」の「心理的変化」が起こることを表している。それに対し、osramotiti čovekovo ime 「人の名誉を汚す」という場合は同じ osramotiti という動詞が使われるが、「名誉」の持主である「人」への間接的な働きかけがある程度認められるのに、組み合わせの構造を考えてみると、最終的に「変化」する[対象]が「名誉」になる。つまり、「事」に対して働きかけることによって抽象的概念（ime「名誉」）の「変化」が起こるといえる。この二つの例の違いは「人への働きかけ」を表す組み合わせと「人」がもちぬしである「事」に対する働きかけを表す組み合わせの違いを示していると考えられる。同時に、両方において「人」に対する働きかけが認められることは「人に対する働きかけ」を表す組み合わせと「事に対する働きかけ」を表す組み合わせの関係性を示していると言える。

ただし、上に挙げた奥田の説明は「事に対する働きかけ」を表す組み合わせについて一般的に述べているが、「事に対する働きかけ」の全てが事の「変化」を表すわけでないことに注意を払う必要がある。「事に対する働きかけ」を表すもの中心的な現れ方として事の「変化」を取り出すことができるが、働きかけを受ける〈事柄〉が場所的にあるいは位置的に定められる組み合わせを事の「出現」として扱うことができる。この際、ヲ格名詞（またはセルビア語の場合、対格名詞）が変化する[対象]でなく、[作り出される対象]という文法的な意味を表していると言える。

このように、「事に対する働きかけ」を表す組み合わせには事の「変化」を表すものと事の「出現」を表すもの、二通りの現れ方があるといえる。

9.1.　事の「変化」

このタイプの組み合わせは〈人〉、〈事〉、〈現象〉や〈組織〉などの働きかけによって〈事柄〉の「変化」が起こることを表している。前述のように、特定の現実の「変化」の過程において、抽象的な側面が注目されることが重要な特徴であり、その具体的な側面は問題とならない。

日本語との共通の特徴であるが、「事に対する働きかけ」を表す組み合わせには状態、動きや関係の[所有者]を表す要素[62]との共起が頻繁に見られる。この要素のカテゴリカルな意味は〈物〉、〈人〉または〈事柄〉になる。日本語では属格（ノ格）を取り、セルビア語では属格を取るかまたは対格を取る形容詞になる。

次に、事の「変化」を表す実例を加える。

(241) Taj-ø　neobično　topl-i　kraj-ø　mart-a　mesec-a
その-NOM:SG　不思議に　暖かい-NOM:SG　終わり-NOM:SG　三月-GEN:SG　月-GEN:SG
ubrza-o je　**tok-ø**　stvar-i　i　done-o　kriz-u.
早める-PST:3SG　流れ-ACC:SG　物事-GEN:PL　～も　もたらす-APP:M:SG　危機-ACC:SG
「その不思議に暖かい三月の終わりが物事の**流れを速め**、危機をもたらした。
(Travnička hronika)

(242) Taj-ø　pad-ø　**okonča-o je**　**intern-i**　**konflikt-ø**
その-NOM:SG　崩壊-NOM:SG　完成する-PST:3SG　内部的-ACC:SG　争い-ACC:SG
evropsk-ih　ideologij-a...
ヨーロッパの-GEN:PL　イデオロギー-GEN:PL　(Politikin kulturni dodatak)
「その崩壊がヨーロッパのイデオロギーの**内部的争いを完成させた**...」

(243) Otac-ø　ne　spava-ø　i　brin-e　kako　da
父-NOM:SG　否定小辞　眠る-PRES:3SG　～も　心配する-PRES:3SG　～どのように
spas-e　**svoj-ø**　**političk-i**　**ugled-ø**
取り戻す-PRES:3SG　自分の-ACC:SG　政治的な-ACC:SG　評判-ACC:SG
koj-i　mu　**je**　sin-ø　**naruši-o.**
REL(which)-ACC:SG　彼-DAT:SG　である-PRES:3SG　息子-NOM:SG　侵害する-APP:M:SG
「父は寝ておらず、息子に**侵害された政治的評判を**どのように**取り戻せば**よいかと心 配している。」(Koreni)

したがって、事の「変化」を表す組み合わせの構造を次のように一般化することができる。

[62] 上の例文では「物事」(例(241))、「ヨーロッパのイデオロギー」(例(242))、「自分の」(例(243))という要素がこの関係を表している。

[主体/原意]NOM	V 変化	[対象]ACC	[動き・状態・関係の所有者]GEN
〈人/事柄/現象/組織〉		〈事柄〉	〈物/人/事〉

このタイプの組み合わせの形態的な側面をさらに考えてみると、日本語と同じように、〈事柄〉を表す名詞との組み合わせにおいて事の「変化」を表す動詞には形容詞と共通の起源を持つものがある（奥田 1968-1972[1983:64]）と分かる。例えば、実例には suziti「狭める」、proširiti「広げる」、 olakšati「やさしくする」、otežati「重くする/難しくする」、 povisiti「高くする」、sniziti「低くする」、produbiti「深くする」、povečati「大きくする」、smanjiti「小さくする/少なくする」、oslabiti「弱める」、ojačati/pojačati/jačati「強くする」、učvrsiti「固める」 、skratiti 「短くする」、produžiti「長くする」のような動詞が見られた。

本研究に使われる実例の分析から、形容詞と共通の起源を持つ動詞には状態、うごきや関係の増加/減少（本章の動詞の表ではⅠ）や肯定的/否定的なニュアンスをを含んだ変化（同じくⅣとⅤ）を表すものが多いと分かる。その中には反対語の対が頻繁に見られる。

日本語ではこのような動詞は接尾辞-eru を加えることによって他動詞になる（高める、強める、広げる等）ものが多く見られる。また、「形容詞＋動詞する」（深くする、狭くする等）という形態的なパターンが見られる（奥田 1968-1972[1983:64-65]）。セルビア語では形容詞と共通の起源を持つ不完了体の他動詞でこの意味的関係を表す場合もある程度考えられる（例えば jačati「強くする」、slabiti「弱くする」のような動詞）にもかかわらず、それに接頭辞が付くことで成り立つ完了体の他動詞との組み合わせは最も自然で頻繁に見られるパターンである。

jak → **po**jačati
brz→ **u**brzati
kriv→ **is**kriviti
dubok→ **pro**dubiti
visok→ **po**visiti
bolji→ **po**boljšati
savršen→ **u**savršiti

他に、実例には【動詞 učiniti「する」+対格名詞+形容 INST】(učiniti tišinu večom-「沈黙を大きくする」)というパターンも多少は見られるが、【接頭辞+形容詞と共通の起源をもつ完了体の他動詞】に比べると、少ない。

(244) Jav-i se samo za trenutak-ø (zvuk)

現れる-PRES:3SG だけ ～のために 瞬間-ACC:SG 音-NOM:SG

da **bi učini-o** **tišin-u** još **već-om,...**

～ように する 沈黙-ACC:SG ～さらに 大きい-INST:SG

「**沈黙を**さらに**大きくする**ために、(音が)一瞬だけ現れる...」(Travnička hronika)

(245) Poče-ću malo izdalje, kako **bih...**

始まる-FUT:1SG 少し 遠くから ～どのように である-AOR:1SG

vaš-u **ignorancij-u** **učini-o** još **evidentnij-om...**

あなた方の-ACC:SG 無知-ACC:SG する-APP:M:SG さらに 明らかな-INST:SG

u t-om velik-om i sramn-om trenutk-u

～の中に その-LOC:SG 大きい-LOC:SG ～も 恥ずかしい-LOC:SG 瞬間-LOC:SG

kada vam budem reka-o od čega

～時に あなた方-DAT:PL 言う-FUT.PERF:1SG ～から 何-GEN:SG

je sačinjen-a duš-a t-og vin-a,

作り上げる-PASS.PRES:3SG 魂-NOM:SG その-GEN:SG ワイン-GEN:SG

njeg-ov lažn-i sjaj-ø...

それの-NOM:SG 偽の-NOM:SG 輝き-NOM:SG

「...そのワインの魂、それの偽の輝きが何で作り上げられているかあなた方に言った時、その大きくて恥ずかしい瞬間に、**あなた方の無知を**さらに**明らかにする**ために、少し遠くから始まる。」(Bašta, pepeo)

このパターンを【接頭辞+形容詞と共通の起源を持つ他動詞】という語形成の一つの動詞に言い換えることが可能な場合が多い。

učiniti većim	→	povećati	(大きくする)
učiniti evidentnjijim/jasnijim	→	pojasniti	(明確にする)

9.1.1. 組み合わさる要素の特殊化

特定の組み合わせでは対格名詞の特殊化が見られる。動詞 odvući「引っ張っていく」との組み合わせはその例である。動詞 odvući「引っ張っていく」は具体名詞との組み合わせにおいて物の「移動」を表しているが、組み合わさる名詞が特殊化することによって事の「変化」を表すようになる。この場合、組み合わさる名詞が抽象化することは確かであるが、多くの抽象名詞と自由に組み合わさったときこの意味を実現しているのでなく、主に pažnja「注意」という名詞との組み合わせでこの関係を表す。つまり組み合わさる名詞の範囲が特殊化し、特定の抽象名詞との組み合わせにおいてだけこの意味的関係をなしている。この場合 odvući **pažnju** は「**注意を**引く」という意味になる。この現象は「物に対する働きかけ」と「事に対する働きかけ」の関係性を見せている。下に挙げる実例(246)は物の「移動」を表し、実例(247)が「注意を引く」という意味を成しているときの現れ方である。

(246) Odgovori-o sam mu da mora-m
答える-PST:1SG 彼-DAT:SG ～ように ～なければならない-PRES:1SG
da ponese-m i beb-u... Tako
～ように 持っていく-PRES:1SG ～も 赤ちゃん-ACC:SG このように
sam popodne **odvuka-o** **Džoov-u**
である-PRES:1SG 午後 引っ張っていく-APP:M:SG (個人名)の-ACC:SG
nosiljk-u na četvrt-i sprat-ø i
ベビーキャリア-ACC:SG ～の上に 四階目-ACC:SG 階-ACC:SG ～も
une-o je u sob-u za
持ち込む-APP:M:SG それ-ACC:SG ～の中に 部屋-ACC:SG ～のために
svirk-e.
ギグ-AGG:PL
「赤ちゃんも連れて行かなければならないと、彼に答えた...このように、私は午後**ジョーのベビーキャリアを**四階へ**引っ張って行き**、ギグの部屋に持ち込んだ。」(Politika)

(247) Dok-ø je s majk-om čeka-o da
～間 である-PRES:3SG ～と 母親-INST:SG 待つ-APP:M:SG ～ように
bude-ø odveden-ø na stratišt-e, Tomi se
連れて行く-PASS:FUT:M:3SG ～の上に 処刑場-ACC:SG 個人名-NOM REFL
seća-ø da je začu-o zvuk-ø jedn-og
覚える-PRES:3SG ～ように 聞く-PST:3SG 音-ACC:SG 一つ-GEN:SG
rusk-og avion-a ..., koj-i **je**
ロシアの-GEN:SG 飛行機-GEN:SG REL(which)-NOM:SG である-PRES:3SG
na trenutak-ø **odvuka-o** **pažnj-u** stražar-a.
～の上に 瞬間-ACC:SG 引く-APP:M:SG 注意-ACC:SG ガードマン-GEN:PL
「トミーは、母親と処刑場へ連れて行かれるのを待っている間に、ガードマンの**注意を**一瞬**引いた**、一機のロシアの飛行機の音を聞いたと覚えている。」(Politika)

コーパスの中ではこのような odvući pažnju「注意を引く」という意味を実現する組み合わせの方が物の「移動」を表す組み合わせより頻繁に見られる。

9.1.2. 物の「移動」を表すものと人の「移動」を表すものとの関係性－意味の段階性と意味の境界的な性質

また、動詞 odvući「引っ張っていく」と「人」という語彙的な意味を表す対格名詞との組み合わせが頻繁に見られるが、これらは物の「移動」を表すか人の「移動」を表すか迷う実例が見られる。「物に対する働きかけ」でも既に述べてあるが、語彙的な意味が「人」になる名詞は特定の動詞との組み合わせにおいて〈もの〉というカテゴリカルな意味を実現す

るか、あるいは、〈人〉というカテゴリカルな意味を実現するかによって組み合わせ全体の意味も変わる。例えば、次の実例では主体が〈現象〉であり、対格名詞のカテゴリカルな意味を〈もの〉として扱うことができ、組み合わせ全体も物の「移動」を表すと言える。対象を表す「6 歳の男の子と彼のお母さん」という要素は、「もの」のように解釈できることが行動の独立性または自由性を見せないためである。

(248) Jedan-ø od uličn-ih vrtlog-a **odvuka-o je**
一つ-NOM:SG ～から 通りの-GEN:PL 渦-GEN:PL 引っ張っていく-PST:3SG
šestogodišnj-eg dečak-a i **njegovu majk-u** niz
６歳の-ACC:SG 男の子-ACC:SG ～も 彼の-ACC:SG お母さん-ACC:SG ～の下に
Valjevsk-u ulic-u ka Lazarevačk-om drum-u.
地名-ACC:SG 通り-ACC:SG ～の方へ 地名-DAT:SG 道路-DAT:SG
「通りの渦の一つは**６歳の男の子とそのお母さんを**ヴリェヴォ通りを通ってラザレヴァッツ道路のほうへ**引っ張っていった**。」 (Politika)

また、主体が〈現象〉でなく〈人〉になり、語彙的な意味が「人」である対格名詞的な単位と動詞 odvući「引っ張っていく」との組み合わせも頻繁に見られる。この文脈でも対格を取る要素である「人」というのは行動の独立性・自由性が低いためにそのカテゴリカルな意味が〈もの〉に近いと認められ、その組み合わせも物の「移動」を表す例として解釈できる。

(249) Nek-o **me** je gurnu-o na zemlj-u, zgrabiv-ši
誰か-NOM:SG 私-ACC:SG 押す-PST:3SG ～の上に 地面-ACC:SG つかむ
me za kosu, **odvuka-o**
私-ACC:SG ～のために 髪の毛-ACC:SG 引っ張っていく-APP:M:SG
u kupatil-o i zaključa-o.
～の中に お手洗い ～も 閉じ込める-APP:M:SG
「誰かが**私を**地面に押し、髪の毛をつかんでお手洗いへ**引っ張っていき**、（そこに）閉じ込めた。」 (Politika)

上の実例において[対象]である「私」の行動の独立性が例(248)での［対象］に比べ多少高いと認められるにもかかわらず、「誰かが**私を**地面に押し、髪の毛をつかんで」のように使われているために、この［対象］を「もの」として扱うことがふさわしいことが分かる。つまり、これらの要素との共起は対象である「**私を**」の行動の独立性・自由性が低いことを見せていると思われる。

実例(249)と文脈は似ているものの、次に挙げる実例での［対象］の行動の独立性が前に挙げた実例より高いために、物の「移動」を表すものと人の「移動」を表すものとの間の境界的な例として見られる。

(250) Prijatelj-a sam jedva prepozna-o. Bio je
友達-ACC:SG である-PRES:1SG かろうじて 認識する-APP:M:SG である-PST:3SG
neobrijan-ø, zapušten-ø, prljav-ø. Nesigurno
ひげをそる-PPP:NEG:M:NOM:SG くすむ- PPP:NEG:M:NOM:SG 汚い-NOM:SG 不安定に
se kreta-o, kao da ni-je u svoj-oj
移動する ～のように ～ように いる-PRES:3SG:NEG ～の中に 自分の-LOC:SG
kuć-i,... Unezvereno, ćutke, zgrabi-o me
家-LOC:SG やつれた様子で 黙って ぎゅっとつかむ-APP:M:SG 私-ACC:SG
je za ruk-u i odvuka-o
である-PRES:3SG ～のために 腕-ACC:SG ～も 引っ張っていく-APP:M:SG
u kabinet-ø.
～の中に 自習室-ACC:SG
「（その人が自分の）友達だとかろうじて分かった。（彼が）ひげをそらず、くすんでいて、汚かった。自分の家にいないように不安定に移動し、...やつれた様子で黙って(私の)腕をぎゅっとつかんで私を自習室に**引っ張って行った**。」(Novi Jerusalim)

また、次に挙げる実例での[対象]の行動の独立性・自由性がより高いと言える。

(251) Dr Pheapson ga je uzeo pod ruk-u
タイトル（医師） 個人名-NOM:SG 彼 取る-PST:3SG ～の下に 腕-ACC:SG
i odvuka-o u stran-u.
～も 引っ張っていく-APP:M:SG ～の中に 横-ACC:SG
「Pheapson 医師が彼の腕を取り、横へ**引っ張って行った**。（〈直〉...彼を腕の下にとり、横へ**引っ張って行った**。）」(Besnilo)

この実例を他の実例に比べると、[対象]の行動の独立性・自由性が高いので、人の「移動」を表すものに近いと言える。

「物に対する働きかけ」においても似たような現象を扱ったが、動詞 odvući「引っ張っていく」と語彙的な意味が「人」になる名詞的な単位を含んだ組み合わせの現れ方には、同じ意味的関係における段階性、または、異なる意味的関係を表すものとの間の境界的な例が見られると言える。この段階性と境界的な性質は、対格名詞と動詞の他に、文中に現れるさまざまな要素の存在によって明確にされる。

ただし、これらが物の「移動」あるいは人の「移動」を代表的に表すものでないことを認めざるを得ない。

9.1.3. 物の「変化」と事の「変化」との関係

ここまで分析してきた対格名詞と動詞との組み合わせの意味や関係を分析してみると、物の「変化」と事の「変化」の関係が非常に緊密であることが分かる。特定の動詞は具体名詞

との組み合わせにおいて物が「変化」することを表すが、抽象名詞と組み合わさると、事の「変化」を表すようになる。つまり、組み合わさる名詞が具体名詞であるか抽象名詞であるかによって、同じ動詞が作る組み合わせは物が変化する過程または事柄が変化する過程を表すようになるということである。

このような関係を成す動詞には特に状態/うごき/関係の増加あるいは減少を表すものに多い。これらは ojačati/pojačati「強める」、povećati「増やす」、proširiti「広げる/拡大する」、produbiti「深める」、učvrstiti「固める」、razviti「発展させる」、smanjiti「減らす」、 oslabiti/slabiti「弱める」、suziti「狭める」、skratiti「縮める」等である。また、否定的なニュアンスを含んだ変化を表すもの（iskriviti「ゆがめる」）や肯定的なニュアンスを含んだ変化を表すもの（stabilizovati「安定させる」）も多少見られた。他に、生産を表す動詞にもこのような性質がよく見られる（stvoriti/napraviti「作る」、roditi/izroditi「生む」proizvesti「生産する」、izgraditi「立てる」等）。

例えば、次の例は動詞 proširiti「広げる/広くする」が具体名詞との組み合わせにおいて物の「変化」を表すときの現れ方（252）と事の「変化」を表すときの現れ方（253）である。

(252) On　　**je proširi-o**　　Bogorodičin-u　　crkv-u
彼-NOM:SG　広くする-PST:3SG　聖母マリアの-ACC:SG　教会-ACC:SG
u　tom　manastir-u.
～の中に　その-LOC:SG　修道院-LOC:SG
「彼はその修道院の中に**聖母マリアの教会を広くした**。」(Ilustrovana istorija Srba)

(253) Interesantno　　**si proširi-o**　　moj-u　　idej-u
面白く　広げる-PST:2SG　私の ACC:SG　アイディア-ACC:SG
o　jevrejsk-im　improvizacij-ama.
～について　ユダヤ人の-LOC:PL　即興-LOC:PL
「あなたは私のユダヤ人の即興についての**アイデアを**面白く**広げた**。」(Kronika palanačkog groblja)

9.2.　事の出現

事の「出現」を表す組み合わせは、事の「変化」を表す組み合わせに近い意味的関係を持つが、このタイプの組み合わせの特徴として、新しく成り立つ〈事柄〉を位置的に、場所的に、または分野的に定める要素との共起が挙げられる。つまり、特定の位置、場所または広く言えば特定の分野において新しい〈事柄〉が現れるという意味的関係を表している。

事の「出現」を表す動詞には状態/うごき/関係の導入・確立またはその生産や誘発を表すものが多い。

位置的に、場所的にあるいは分野的に〈事柄〉を定める要素には次のようなものが頻繁に見られた。

a) u（中に）＋名詞 LOC
b) kod（で/に）＋名詞 GEN
c) 名詞 DAT
d) 名詞 GEN

それぞれを含んだ実例を次に挙げる。

(254) Pad-ø americ̆k-og bombarder-a 21. januar-a 1968. godin-e
墜落-NOM:SG アメリカの-GEN:SG 爆撃機-GEN:SG 1 月 21 日-GEN:SG 年-GEN:SG
izazva-o je kriz-u u odnos-ima između-u SAD i
起こす-PST:3SG 危機-ACC:SG ～の中に 関係-LOC:PL ～の間 米国 ～も
njen-og NATO saveznik-a Dansk-e,...
それの-GEN:SG 北大西洋条約機構 同盟国-GEN:SG デンマーク-GEN:SG
「アメリカの爆撃機の墜落は米国とその同盟国であるデンマークとの間の関係に危機を起こした。」 (Politika)

(255) Američk-i plan-ø za razvoj-ø protivraketn-og
アメリカの NOM:SG 計画-NOM:SG ～のために 開発-ACC:SG ミサイル防衛の-GEN:SG
sistem-a stvori-o je zabrinutost-ø kod sv-ih
システム-GEN:SG 作る-PST:3SG 心配-ACC:SG ～のところに 全て-GEN:PL
član-ova međunarodn-e zajednic-e,..
メンバー-GEN:PL 国際的-GEN:SG 社会-GEN:SG
「アメリカのミサイル防衛システムの開発計画は国際社会の全てのメンバーに心配をもたらした。」 (Politika)

(256) Prv-i put-ø na trk-ama u Despotov-u
初めての-ACC:SG ～度-ACC:SG ～の上に 競馬-LOC:SG ～の中に 地名-LOC:SG
bi-la je organizovan-a i kladionic-a, koj-a je
催す-PASS.PST:3SG ～も 賭け-NOM:SG REL(which)-NOM:SG である-PRES:3SG
učesnic-ima i gost-ima ov-e priredb-e
参加者-DAT:PL ～も 観客-DAT:PL この-GEN:SG イベント-GEN:SG
done-la posebn-u neizvesnost-ø,...
もたらす-APP:F:SG 特別な-ACC:SG 不安-ACC:SG
「デスポトヴォでの競馬では初めてこのイベントの参加者と観客に特別な不安をもたらした賭けも催された...」 (Politika)

(257) Taj-ø događaj-ø prouzrokova-o je svakako i
その-NOM:SG 出来事-NOM:SG 引き起こす-PST:3SG 確かに ～も
dalj-a lančan-a pomeranj-a stanovništv-a,...
更なる-ACC:PL 連鎖的-ACC:PL 移動-ACC:PL 人口-GEN:SG
「その出来事は確かに人口の更なる連鎖的な移動も引き起こした、...」
(Politika)

これらの実例では(254)と(257)が状態と動きの誘発を表す動詞、(255)が状態の生産、(256) が状態の導入・確立を表す動詞との組み合わせの例である。

これまで説明した特徴を元に事の「出現」を表す組み合わせを次のように一般することができる。

[主体]NOM	V 出現	[対象]ACC	[出現のところ]
〈人/事柄/現象/組織〉		〈事柄〉	〈事柄〉

9.2.1. 「やりもらい」との関係

実例(254)と実例(255)では[出現のところ]を表す要素のカテゴリカルな意味が〈事柄〉になり、これらが事の「出現」を代表的に表す例であると言えるが、実例(256)における事の「出現」の現れ方が「所有」を表すものの下位カテゴリーである「やりもらい」との関係を見せている。

「やりもらい」は授受関係を表すものであり、典型的に[相手][63]と[授受対象][64]という文法的な意味を持つ要素を含む構造を見せている。「やりもらい」の実例を以下に挙げる。

(258) Majk-a svak-e zor-e peče-ø palačink-e
母-NOM:SG 毎-GEN:SG 夜明け-GEN:SG 焼く-PRES:3SG クレープ-ACC:PL
da bi mi ih vruć-e
～ように である-AOR:3SG 私-DAT:SG それ-ACC:PL 熱い-ACC:PL
done-la za doručak-ø.
持ってくる-APP:F:SG ～のために 朝食-ACC:SG
「母は私に熱いままのクレープを朝食に持ってくるために、毎日の夜明けに(クレープを)焼いている。(〈直〉私に熱いままのそれを朝食に持ってくるために、...クレープを焼いている。)」(Tebi, moja Dolores)

動詞 doneti は「持ってくる」という意味も「もたらす」という意味も含み、「やりもらい」を表すことがその代表的な現れ方である。しかし、実例(256)のような文脈での対格名詞が抽象的な〈事柄〉を表す(doneti učesnicima i gostima neizvesnost-「参加者とお客さんに不安をもたらす」)ために、[授受対象]として解釈できない以上、このタイプの組み合わせを「やりもらい」を表すものとして扱うことができない。このように、doneti「持ってくる/もたらす」という動詞が具体名詞との組み合わせで「もってくる」という意味を持ち「やりもらい」を表すのに対し、〈事柄〉を表す抽象名詞との組み合わせでは事の「出現」を表すことができると考えればよい。したがって、「やりもらい」における[授受対象]が抽象化することによって、組み合わせ全体が事の「出現」を表すものに移行すると

[63] 以下の実例では「私に」という要素になる。
[64] 以下の実例では「それを熱いまま」という要素になる。

言える。ただし、「やりもらい」との関係を考慮に入れると、実例(256)の učesnicima i gostima「参加者とお客さん」のような要素を「出現のところ」でなく、「相手」という文法的な意味を表すものとして解釈できる。このように、この現れ方が事の「出現」を代表的に表す例であるのとは性質が異なり、「やりもらい」との関係が緊密な例であると言える。

日本語にも似た意味的傾向が見られ、「自分に納得をあたえる」のような言い方(奥田1968-1972[1983:87])がこの関係を示していると言えよう。

「やりもらい」と事の「出現」の関係を見せる例はほかにもある。動詞 dati「あげる」は基本的な意味で「やりもらい」(実例(259))を表すが、抽象名詞との組み合わせにおいて事の「出現」(実例(260)、(261)、(262))を表し「与える」という意味になることもある。

(259) ...Konstantin-ø je svoj-ø drug-i zlatnik-ø
個人名-NOM である-PRES:3SG 自分の-ACC:SG 他の-ACC:SG 金貨-ACC:SG
da-o pojc-ima.
あげる-APP:M:SG カントル-DAT:PL (教会音楽家)
「...コンスタンチンはカントル達に**自分の他の金貨をあげた**。」(Hazarski rečnik)

(260) Krečk-o mi je da-o idej-u...
個人名-NOM 私-DAT:SG あげる-PST:3SG アイディア-ACC:SG
「クレチュコは私に**アイディアを与えた**...(〈直〉...私に**アイディアをあげた**...)」 (Ciganski nož)

(261) Reka-o joj je da godin-e
言う-APP:M:SG 彼女-DAT:SG である-PRES:3SG ～ように 年-ACC:PL
prolaz-e, da joj je Egon-ø
経つ-PRES:3PL ～ように 彼女-DAT:SG である-PRES:3SG 個人名-NOM
svoj-im odlask-om da-o pun-u
自分の-INST:SG 離れ去ること-INST:SG あげる-APP:M:SG 完全な-ACC:SG
slobod-u,...
自由-ACC:SG
「数年が経って、エゴンが自分の離れ去ったことで彼女に**完全な自由を与えた**と、彼は(彼女に)言った...(〈直〉...エゴンが自分の離れ去ったことで彼女に**完全な自由をあげた**と、彼は彼女に言った...)」(Sudbine)

(262) ...i on ne nalaža-še nikad prav-og
～も 彼-NOM:SG 否定小辞 見つける-IMPF:3SG 全然 本当の-GEN:SG
odgovor-a koj-i bi ga
答え-GEN:SG REL(which)-NOM:SG である-AOR:3SG 彼-ACC:SG
umiri-o,... uni-o star-o raspoloženj-e
冷静にさせる-APP:M:SG 持ち込む-APP:M:SG 昔の-ACC:SG 機嫌-ACC:SG
u njegov-ø život-ø i da-o
～の中に 彼の-ACC:SG 生活-ACC:SG ～も あげる-APP:M:SG
sv-ima stvar-ima običan-ø tok-ø.
全ての-DAT:PL 物事-DAT:PL 普通の-ACC:SG 流れ-ACC:SG

「...そして彼は、（彼を）冷静にさせ（彼の）生活に昔の機嫌をもたらし、全ての物事に**普通の流れを与える**ようなちょうど良い答えを見つけてはいなかった。（〈直〉全ての物事に**普通の流れをあげるような**本当の答えを見つけてはいなかった。）」(Bespuće)

実例(259)における pojcima という要素は「授受相手」を表し、対格名詞は[授受対象]を表す。それに対し、実例(260)、(261)では mi「私に」、 joj「彼女に」という要素がどちらかと言えば「相手」を表すために、これらの実例での対格名詞が抽象化するものの、「やりもらい」と事の「出現」の緊密な関係を見せているものであると言える。また、実例(262)では svima stvarima「全ての物事に」という要素が〈人〉でなく〈事柄〉を表すために、さらに抽象化していくと言え、この実例は事の「出現」をもっとも明確に表すものであると考えられる。このように、要素の抽象化の段階性において意味の変化もはっきりしてくるということが分かる。

9.2.2. 物の「生産」を表す組み合わせとの関係

事の「出現」を表すものが〈事柄〉が作り出されることを表す以上、当然物の「生産」を表す組み合わせと関係があることがうかがえる。つまり、「生産」を表す動詞が具体名詞でなく抽象名詞と組み合わさるという要素の抽象化によって事の「出現」を表すようになると言える。「生産」を表す動詞が両方の意味的関係を作ることができるのはこの二つのカテゴリーの関係性を示している。

また、奥田が述べているように、物の「生産」を表す組み合わせ[65]がニ格で広げられる[66]場合「出現」のニュアンスを帯びる傾向も物の「生産」と事の「出現」の関係性を見せると言える（奥田 1968-1972[1983:41]）。同じことがセルビア語に関しても言える。例えば、次に挙げる実例はその関係性を見せているように思える。実例(263)は物の「生産」を表すが、「生産対象の出現場所」を示す要素が【前置詞 u（～の中に）+所格名詞】という形をとる。この要素は物の「生産」を場所的に定めている。実例(264)は例(265)と同じ形の「出現のところ」を場所的に定めている要素を含むが、対格名詞が抽象的であり、事の「出現」を表すと言える。それに対し、事の「出現」を表す実例(265)において「出現のところ」を表す要素は同じ形を取るが、その性質が空間的でなく精神的領域を表している。したがって、この実例は組み合わせ全体の意味の抽象化が進んだものとして扱うことができ、事の「出現」をより代表的に表していると言える。これらの三つの実例は物の「生産」と事の「出現」の関係を示すが、実例(264)と実例(265)の間のニュアンスの差は事の「出現」を表すものにおける抽象化の段階性を見せていると考えられる。

(263)	U	t-om	grad-u	su izgradi-li
	～の中に	その-LOC:SG	町-LOC:SG	建てる-PST:3PL

[65] 奥田がいう「結果的なむすびつき」
[66] 本研究で言う場所的・位置的にあるいは分野的に事の「出現」を定める要素、つまり、[出現のところ]という文法的な意味を表す要素のことである。

siln-e velelepn-e bulevar-e...

多い-ACC:PL 立派な-ACC:PL 大通り-ACC:PL

「その町に多くの立派な大通りを建てた...（〈直〉...多い立派な大通りを建てた...）」 (Politika)

(264) ...ministar-ø pravd-e Srbij-e postavi-o je pitanj-e

大臣-NOM:SG 正義-GEN:SG セルビア-GEN:SG する-PST:3SG 質問-ACC:SG

č-ime su to UNMIK i Kfor uopšte

何-INST:SG である-PRES:3PL それ-NOM:SG 部隊名略 〜も 行政名略 いったい

izgradi-li svoj-ø ugled-ø na Kosmet-u...

建てる-APP:M:PL 自分の-ACC:SG 評判-ACC:SG 〜の中に コソボ自治州-LOC:SG

「...セルビアの法務大臣はUNMIKとKforがいったい何をしてコソボ自治州で自分の評判を構築することができたのかという質問をした...（〈直〉自分の評判を建てた...）(Politika)

(265) Jer t-i mesec-i, t-e godin-e,

〜ので その-NOM:PL 月々-NOM:PL その-NOM:PL 年々-NOM:PL

izgradi-li su najbolj-e u men-i, dok su

建てる-PST:3PL 最も良い-ACC:SG 〜の中に 私-LOC:SG 〜間 である-PRES:3PL

me bezbrižn-i dan-i samo kvari-li.

私-ACC:SG 気楽な-NOM:PL 日々-NOM:PL だけ 壊す-APP:M:PL

「なぜかと言えば、気楽な日々が私を壊してばかりいたのに対して、その月々、その年々こそが私の中に最も良いことを構築したからである。（〈直〉最も良いことを建てたからである。）」(Strah i njegov sluga)

組み合わさる対格名詞の抽象化によって異なる意味が成り立つことは動詞roditi/izroditi「生む」が作る組み合わせにおいても見られる。この動詞はizroditi decu「子供を産む」のような組み合わせで物「生産」を表すが、組み合わさる名詞が抽象化することによって事の「出現」を表すようになる。次に挙げる実例は事の「出現」を表すものになる。

(266) A ni jedan-ø od naveden-ih slučaj-eva

そして 否定小辞 一つ 〜から 指定する- PPP:M:GEN:PL 場合-GEN:PL

nije do sada izrodi-o valjan-o

である-PRES:3SG:NEG 〜まで 今 生む-APP:M:SG 良い-ACC:SG

rešenj-e,...

解決-ACC:SG

「しかし、指定された場合の中の一つも今まで良い解決を生み出していない、...（〈直〉指定された場合からの一つも良い解決を産んでいない、...）」(Politika)

(267) Pisa-li su laž-i koj-e je izrodi-o

書く-PST:3PL うそ-ACC:PL REL(which)-ACC:PL 生む-PST:3SG

njihov-ø　　revolucionarn-i　　romantizam-ø.
彼らの-NOM:SG　　革命的な-NOM:SG　　ロマン主義-NOM:SG
「（彼らは）彼らの革命的なロマン主義が**生み出したうそを**書いていた。」
(Gorki talog iskustva)

第十章　所有関係

この意味的関係を表す組み合わせには「物持ち」と「授受」、二通りの現れ方が見られる。「物持ち」は狭義の「所有関係」を表すものとして扱い、「授受」を表すものと一緒に広義の「所有関係」を表すグループを作ると考えられる。

「対象への働きかけ」を表す組み合わせとは違って、このタイプの組み合わせは対象をめぐる人間の所有関係を表している（奥田 1968-1972[1983:89]）。対象への具体的な働きかけまたは対象のある形の変化という側面には焦点が置かれていない。このタイプの組み合わせは「物持ち」の場合、対象の所有を表し、「授受」の場合は対象の所有権の移動を表している（奥田 1968-1972[1983:89]）。

「物持ち」(268)と「授受」(269)を表す例を次に挙げる。

(268) Sefedin-ø Kuk-a **ima-o je** dv-e rezidencij-e za

個人名-NOM:SG 持つ-PST:3SG 二つの-ACC:PL 公邸-ACC:PL ～のために

vreme-ø okupacij-e.

時-ACC:SG 占領-ACC:SG

「セフェディン・クカは占領時代に**二つの公邸を持っていた**。」(Ciganski nož)

(269) ...Konstantin-ø **je** sv-oj drug-i zlatnik-ø

個人名-NOM:SG である-PRES:3SG 自分の-ACC:SG 他の-ACC:SG 金貨-ACC:SG

da-o pojc-ima.

あげる-APP:M:SG カントル-DAT:PL

「コンスタンチンは**他の自分の金貨を**カントル達に**あげた**。」(Hazarski rečnik)

この意味的関係を表すものには所有動詞と所有対象になる多様なカテゴリカルな意味を持つ対格名詞との組み合わせが見られる。

本論文の対格名詞と動詞との組み合わせが作る体系の分析のし方はこれまでのセルビア語学における研究とは異なる部分が大きいが、セルビア語学の代表的な研究も「所有関係」を表すもの存在を重要な現れ方として認める。4.1.1.1.節で述べたように、Gortan-Premk（1971）が「抽象的対象的な関係を表す句」の下位カテゴリーの一つとして「所有関係を表す句」を挙げ、このタイプの句について多少述べている(Gortan-Premk 1971:73-87)。これらは動詞 imati「持つ/ある」と動詞 posedovati「所有する」を取るものであるとし、対格

名詞は具体物（imati kuću 「家を持つ」）、身体部位（imati brkove-「口ひげをはやす」）と主体に関係があるが主体の外部に存在する関係物（imati razlog ljutnje「怒りの理由を持つ」）になるとする。この主張は正しいが、「所有関係」を表す組み合わせを作る対格名詞の性質のまとめとしては不十分である。

また、Arsenijević (2012) は「関係動詞の他動性」の下位カテゴリーとして「所有関係を表す目的語句」を扱い、この意味的関係の多くの現れ方にもふれるが、むしろ他動性という観点または所有者と所有物[67]との関係という観点から所有関係の性質を考察しており、その現れ方や組み合わさる要素の性質[68]については徹底的にまとめていない。

「所有関係」を作る対格名詞には既に述べられたものの他に、第一には主体と関係を持つ人（imati dete「子供がいる（〈直〉子供を持つ）」、imati prijatelja 「友達がいる（〈直〉友達を持つ）」、imati šefa「上司がいる（〈直〉上司を持つ）」等）、つまり、家族・親戚関係、友情関係や仕事関係を表すものも含めるべきである。 Arsenijević (2012) はこのタイプの組み合わせに関して所有者と所有物の相互性を見せるものとして挙げている。つまり、otac ima dete「父は子供がいる（〈直〉父は子供を持つ）」という時は対格名詞になる「子供」に関しても「父がある」というように言えるために相互性が見られるとする。（Arsenijević 2012:125）

第二に、主体の内部に存在する特徴（imati težak karakter-「きつい性格を持つ」）、つまり、主体生来の人格または特徴を表すものも含めるべきである。このタイプの組み合わせは頻繁に対格名詞の他にその名詞を詳細に説明する連体修飾語を含む名詞句が現れる（上の組み合わせでは形容詞 težak「きつい」）。また、所有者の一時的な状態を表す組み合わせも見られる（imati temperaturu「熱がある（〈直〉熱を持つ）」、imati tremu「緊張感を持つ」）。Arsenijević (2012) はこれらを所有者の性質を表すものとする（Arsenijević 2012:122）。

また、具体物を表すものの中でも抽象的な側面が含まれるものとして名詞 novac「お金」あるいは金銭に類似した意味を持つ名詞との組み合わせが頻繁に見られる（imati novac「お金を持つ」）。

このように、対格名詞のカテゴリカルな意味には〈具体物〉、〈身体部位〉、〈人〉、〈事柄〉等のように多様なものがあると見られる。したがって、対格名詞の意味的性質において具体名詞から抽象名詞へという段階性が見られると言える。つまり、「所有関係」を表すものは動詞が具体名詞から抽象名詞にかけて多くのものと自由に組み合わさる性質が見られる。組み合わさる対格名詞の性質によって組み合わせ全体の具体性または抽象性における段階性が見られると言える。

ただし、これらの対格名詞は皆所有対象になりえるものか、または、所有に関する物事が表せるものでないといけない。すなわち、所有動詞との組み合わせにおいて所有に関する表現が作れるものでないといけない。この事実については奥田も述べている。日本語でも、例えば、「日本帝国を売る」、「その志をかう」などのような組み合わせではヲ格名詞が売買、壌渡、所有などの対象になりえないために、その組み合わせ全体も「所有関係」を表さない（奥田 1968-1972[1983:86]）。

---

[67] Arsenijević (2012) は主格名詞を取る要素と対格名詞を取る要素を頻繁に「所有者」、「所有物」として扱うが、「動作主」と「対象」として扱うこともある。

[68] 「物持」を表す動詞の数が非常に限られている（imati「持つ/ある」、 posedovati「所有する」）ので、ここでは主に［対象］の性質を考え、それについてまとめる必要がある。

組み合わさる名詞のカテゴリカルな意味が多様であることは、第一に「物持ち」を表すものに関して言える。「授受」を表すものには〈具体物〉を表す名詞または不動産、金銭、資本、権利や資格を表す抽象名詞との組み合わせが多く見られ、他のカテゴリカルな意味を表す名詞との組み合わせが見られる際は多少特別な用法になる場合がある。例えば、次の例がある。

(270) Reka-o joj je da godin-e
言う-APP:M:SG 彼女-DAT:SG である-PRES:3SG ～ように 年-NOM:PL
prolaz-e, da joj **je** Egon-ø
過ぎる-PRES:3PL ～ように 彼女-DAT:SG である-PRES:3SG 個人名-NOM:SG
svoj-im odlask-om **da-o** **pun-u**
自分の-INST:SG 退去-INST:SG あげる-APP:M:SG 完全な-ACC:SG
slobod-u,...
自由-ACC:SG
「彼は年が過ぎていて、エゴンが行ってしまったことで彼女に**完全な自由を与えた**と言った...（〈直〉...彼女に**完全な自由をあげた...**）」(Sudbine)

ここまでの考察を考慮に入れると、「所有関係」を表す組み合わせにおける要素の文法的な意味は、主格名詞が広く言えば[主体]になり、対格名詞が[所有対象]になると言える。したがって、この意味的関係を表すものの現れ方を大きく次のようにまとめることができる。

[主体・所有者]NOM	V 所有/授受	[所有対象]ACC
〈人/機関〉		〈具体物/身体部位/人/事柄〉

詳細に考えてみると、「物持ち」を表す組み合わせでは[主体]より、むしろ[所有者][69]という側面が生きていると言える(例(271))。それに対し、「授受」を表す組み合わせにおいて主格名詞を取る要素の役割は[対象]に対してより積極的で動作的側面または積極的な主体性が含まれる(例(272))ので、より［主体］に近いものとして扱うことができる

[69] Arsenijević (2012) は動詞 imati「持つ」が主語になる文における主体性が暗黙的であると指摘している。(Arsenijević 2012:120)。

(271) O　tome　ja　**ima-m**

～について　それ-LOC:SG　私-NOM:SG　持つ-PRES:1SG

precizn-e　statistik-e,...

正確な-ACC:PL　統計情報（情報）-ACC:PL

「それについて私は**正確な統計情報を持っている**...」(Sudbine)

(272) David-ø　**je uze-o**　od　čovek-a　cedulj-u

個人名-NOM:SG　取る-PST:3SG　～から　人-ACC:SG　メモ-ACC:SG

i　poče-o　je　zagleda-ti.

～も　始める-APP:M:SG　それ-ACC:SG　見つめる-INF

「ダヴィッドは（その）人から**メモを取り**、見つめ始めた。」(Sudbine)

また、「授受」において対格名詞の意味的性質も［物持ち］を表す場合とは多少異なる。したがって、「所有関係」を表す組み合わせにおいて現れる主格名詞の性質を広義の［主体］として考え、対格名詞を広義の［所有対象］として扱うことができると言っておこう。

セルビア語学では「物持ち」と「授受」[70]との相互関係がある程度認められている[71]が、この二つの意味的関係を表す組み合わせの緊密な性質については触れておらず、「所有関係」を表すものとして主に「物持ち」を扱う。それに対し、本研究の立場は「物持ち」と「授受」を合わせて「所有関係」を表すものとして扱うことである。これは、「物持ち」も「授受」も対象をめぐる人間の所有関係を表すためである（奥田 1968-1972[1983:89]）。

10.1.　「物持ち」

「物持ち」を代表的に表す動詞は imati「持つ/ある」になり、もっとも多くの組み合わせを作る。他にこの意味的関係を表す動詞には動詞 posedovati「所有する」との組み合わせが見られる。

前節で述べたように、このタイプの組み合わせを作る対格名詞には多様な性質が見られ、このことは「物持ち」を表す組み合わせの性質を見せている。対格名詞の具体的性または抽象性によって組み合わせ全体の具体性質または抽象的性質における段階性も定まる。対格名詞が具体的な意味を持てば持つほど、その組み合わせには［所有者］の［対象］に対する所

[70] Arsenijević (2012) は授受動詞との組み合わせを「動作的動詞の他動性」の中の「転換的関係」（dobiti pismo「お菓子を配る」）、「賠償的関係」（primiti nagradu「賞を受ける」として扱う。（Arsenijević 2012:39-43）。

[71] Grickat (1961:67)、Arsenijević (2001:120)

有権が明確に現れると言える。このタイプの組み合わせを本質的な「物持ち」を表すものとして考えることができる。例えば、次に挙げる実例においてはそうである。

(273) Pasoš-ø, sreć-om, ima-m. Iako
パスポート-ACC:SG 幸いに 持つ-PRES:1SG ～のに
nisam putovala vekovima.
旅行する-PST:1SG:F:NEG 世紀-DAT:PL
「何世紀も旅行していないのに、パスポーを幸いにもっている。」
(Treći sektor ili sama žena u tranziciji)

この実例を対格名詞が〈人〉になる場合(例(274))または抽象名詞である場合(例(275))に比べると、抽象性が高くなるにつれて本質的な「物持ち」の性質が弱くなる傾向が見られる。

(274) Ima-o sam samo slug-e, kao što i sada
持つ-PST:1SG:M ～だけ 召使い-ACC:PL ～のように ～も 今
ima-m slug-u. Slug-u, a ne šegrt-a.
持つ-PRES:1SG 召使い-ACC:SG 召使い そして 否定 見習い-ACC:SG
「私には、今も召使いがいるように、召使いしかいなかった。見習いでなく、召使いなのだった。（〈直〉私は、今も召使いを持っているように、召使いしか持っていなかった。見習いでなく、召使いを持っていたのだ。）」
(Strah i njegov sluga)

(275) Zašto ima-m neodoljiv-u želj-u da
なぜ 持つ-PRES:1SG 抑えられない-ACC:SG 欲望-ACC:SG ～ように
pođe-m nek-im drug-im pravc-em, da
行く-PRES:1SG どちらか-INST:SG 他の-INST:SG 方向-INST:SG ～ように
bude-m nek-o drug-i ?
である-PRES:1SG 誰か-NOM:SG 他の人-NOM:SG
「なぜ私は誰か他の人になりたい、どちらか違う方向へ行きたいという抑えら

れない欲望を持っているのか。」（Inicijali）

このように、「物持ち」を扱う際は「物持ち」という概念を広く見る必要があると考えられる。Grickat によると、「所有」というのは昔から主体と主体が興味を持つ「もの」、つまり、主体がそれに対して態度が取れる「もの」との関係を表すようになっている。要するに、主体は自分の認知、観察、ニーズ、感情などの領域に入るものを全て「所有している」とする(Grickat 1961:67)。これは本研究における「物持ち」に関しても言える。[72]

これだけでなく、異なる観点からも対格名詞と「物持ち」を表す動詞との関係を分析してみると、「物持ち」の性質の複雑性が分かる。例えば、対象の主体からの分離性を考慮に入れると、そこに段階性が見られることが分かる。対象の主体からの分離性に関しては Ivić（2006）も触れている。Ivić（2006）によると、人間は対象の主体からの分離性を元に「所有関係」を認知しているということである。即ち、特定の全体の部分は全体から簡単に切り離すことができるが、他の場合はそうでなく、特定の部分なしに全体を考えることができないとする（Ivić 2006:67）。また、Stojanović（1996）は全体がなしに特定の部分が存在しないという部分全体の関係を元に分離が不可能な「所有関係」という概念が説明できるとする（Stojanović 1996:18）。本研究では対象の主体からの分離性を元に「物持ち」を次のように分類できる。

[72] 本研究における「物持ち」とセルビア語学における「所有」という概念はほとんど同じである。

表

カテゴリー	例	主体からの分離性
身体部位	plave oči （青い目）、dugu riđu kosu （長いジンジャーの髪の毛）、duge noge（長い足）、bradu（ひげ） divno okruglo lice （素敵で丸い顔）、beleg（母斑）	
内的特徴	težak karakter （きつい性格）、dobar sluh（よい張力）、 gadnu narav （ひどい気性）、sposobnost（能力）、obrazovanje （教養）	
(外的影響による)内的状態	razlog ljutnje（怒りの理由）、osećanje radosti（喜びの気持ち）、utisak（印象）、ideju（アイディア）、 nameru（つもり）	
一時的身体的状態または精神的状態	temperaturu（熱）、 nesanicu（不眠）、nadljudsku snagu（人間以上の力）、 oči pune suza（涙まみれの目）、 masnicu （あざ）	
主体の外部への社会的影響	moć（力）、 uticaj（影響）、 veze （縁故）、prednost（優先）、 pravo（権利）	
相互的人間関係	oca（父）、 majku（母）、 dete（子供）、prijatelja（友達）、 šefa（上司）、 slugu（召使い）	
出来事の存在	sastanak （会議）、intevju（面接）、razgovor（面談）、 obaveze（用事）	
内容的関係物	Dokaz （証拠）、statistike（統計）、potvrdu（証明）	
金銭	Novac（金）、platu（給料）、džeparac（小遣い）	
物	Pasoš（パスポート）、 kartu （チケット）、naočare（めがね）、 radionicu（スタジオ）、 prodavnicu（店）、 cigaretu（たばこ）	

この分類を見ると、〈身体部位〉から〈物〉にかけて対象の主体からの分離性における段階性が認められると分かる。対象の主体からの分離が不可能であればあるほど対格名詞が連体修飾語で修飾されやすくなることが分かる。この場合、連体修飾語は対格名詞の内容を分別的に説明していると言える。その連体修飾語も形容詞が対格になることがほとんどである。また、形容詞の対格と名詞の部分的属格との組み合わせあるいは否定的小辞と形容詞の対格に伴う名詞の属格との場合も多少見られる。次の例ではそうなる。

(276) Ima-la je　　oč-i　　pun-e　　suz-a. （部分的属格）

持つ-PST:3SG　目-ACC:PL　まみれの-ACC:PL　涙-GEN:PL

「彼女の目は涙まみれだった。（〈直〉彼女は涙まみれの目を持っていた。）」

(277) Nije ima-o　　ni　　trenutak-ø

持つ-PST:3SG:NEG　否定小辞　瞬間-ACC:SG

slobodn-og　　vremen-a. （否定小辞に伴う属格）

暇な-GEN:SG　時間-GEN:SG

「彼は一瞬も暇がなかった。（〈直〉彼は暇な時間の一瞬も持たなかった。）」

対格名詞自体が主体の際立った特徴を表す場合は修飾語を帯びなくなる（imati beleg「母斑を持つ」、imati bradu「ひげをはやす」）。

さらに、本章の表で「物持ち」として現れる「所有関係」を大きく「狭義の物持ち」、「関係」及び「特徴」のようにまとめることができる。

本章の表で挙げた例の中には文脈によって異なるカテゴリーを表すようになるものも当然ある。例えば、次の実例では imati snagu「力を持つ」という組み合わせは一時的身体的・精神的状態を表すと言える。

(278) Oko　dva　po　ponoć-i　　sv-e　　zaspi-ø,　　i　ker-ovi

～ごろ 2　～後 真夜中-LOC:SG 全て-NOM:SG 眠る-PRES:3SG ～も 犬-NOM:PL

i　petl-ovi,　drum-ovi　su prazn-i,　zvezd-a　　više

～も 雄鶏-NOM:PL 道路-NOM:PL 空く-PRES:3PL 星-GEN:PL　もう

nema-ø...　　A　　ja...　　baš　onda　　ima-m

ない-PRES:3SG そして　私-NOM:SG　～こそ　その時　持つ-PRES:1SG

nadljudsk-u　　snag-u!

人間以上の-ACC:SG　力-ACC:SG

「真夜中の２時ごろ犬も、雄鶏も、全てが眠ってしまい、道路が空いていて、星ももうない...しかし、私はその時こそ人間以上の力がある。（〈直〉真夜中後の 2 時ごろ...その時こそ人間以上の力を持つ。）」(Kronika palanačkog groblja)

この実例において oko dva po ponoći「真夜中の 2 時ごろ」と baš onda「その時こそ」という副詞的要素があるために、この文脈における imati nadljudsku snagu（人間以上の力を持つ）が一時的な状態を表していると言える。しかし、異なる文脈では同じ imati snagu（力を持つ）が「内的特徴」を表すことも考えられる。例えば、次の例ではそうである。

(279) On-ø je uobražen-ø, ali je
彼-NOM:SG である-PRES:3SG プライドが高い-NOM:SG しかし である-PRES:3SG
na dobr-om put-u. Veruje-ø u seb-e...
～の上に 良い-LOC:SG 道-LOC:SG 信じる-PRES:3SG ～の中に 自分-ACC:SG
Ima odličn-e udarc-e, ima-ø
持つ-PRES:3SG 優れた-ACC:PL ストローク-ACC:PL 持つ-PRES:SG
igr-u, ima-ø snag-u i pokretljivost-ø.
ゲーム-ACC:SG 持つ-PRES:3SG 力-ACC:SG ～も モビリティー-ACC:SG
「彼はプライドが高いが、良い方向に向かっている。自分自身を信じて...
優れたストロークがあり、ゲームがあり、力とモビリティーを持つ。」
(Politika)

また、通常身体部位を中心的に表す組み合わせは、特定の連体修飾語との共起において一時的身体的状態を表すことがある。例えば、Imati plave oči「目が青い（〈直〉青い目を持つ）」のような連語は形象的使用など特別な文脈を除いて、通常身体部位の恒常的特徴を表すが、次に挙げる実例では zaklopljene「閉じた」という連体修飾語を帯びている以上、一時的状態を表す。

(280) Ima-la je blijed-o lic-e i zaklopljen-e
持つ-PST:3SG 青ざめた-ACC:SG 顔-ACC:SG ～も 閉じる-PPP:N:ACC: PL
oč-i,...
目-ACC:PL
「（彼女は）顔が青ざめて、目を閉じていた、...（〈直〉青ざめた顔と閉じた目を持っていた）」(Put Alije Đerzeleza)

つまり、この組み合わせは一時性を暗示する zaklopljene「とじた」という連体修飾語があるからこそ、身体的状態の一時性を表すと言える。Imati plave oči「目が青い（〈直〉青い目を持つ）」などに比べると、意味的性質が異なることが分かる。

「物持ち」を代表的に表す組み合わせでは[所有者]のカテゴリカルな意味がほとんど〈人〉になるが、〈物・空間〉になる場合もある。この際、[所有者]が無情物である以上、その組み合わせが物の様子または物の特徴を表す。

(281) Kuć-a je bi-la obojen-a plav-o, ima-la dv-a
家-NOM:SG 染める-PASS:PST 青-ACC:SG 持つ-APP:F:SG 二-ACC:SG
velik-a prozor-a i jedn-a mal-a vrat-a,
大きい-GEN:SG 窓-GEN:SG ～も 一-ACC:SG 小さい-ACC:SG ドア-ACC:SG
krov-ø je bi-o visok-ø, od žut-ih dasak-a.
屋根-NOM:SG である-PST:3SG:M 高い-NOM:SG ～から 黄色い-GEN:PL 板-GEN:PL
「家は青に染められて、二つの大きな窓と一つの小さなドアがあり、屋根が高く黄色い板からできていた。（〈直〉家は...二つの大きな窓と一つの小さなドアを持ち、屋根は高く黄色い板からだった。）」(Burleska gospodina Peruna boga groma)

[所有者]が〈機関〉を表す場合もその組み合わせは機関が所有する特徴を表すと言える。

日本語と同じように、「物持ち」を表す組み合わせ[所有対象のありか]という文法的な意味を表す要素によって広げられることがある（奥田 1968-1972[1983:85]）。この要素は主に〈空間〉または〈機関〉を表す。この傾向は特に不動産（282）、空間（283）または金銭を表す対格名詞との組み合わせにおいて見られる。

(282) Nedaleko od mor-a beg-ø je ima-o
遠くなく ～から 海-GEN:SG ベグ（身分名）-NOM:SG 持つ-PST:3SG
lep-o konjsk-o groblj-e klesan-o
美しい-ACC:SG 馬の-ACC:SG 墓地-ACC:SG 掘る-ACC:AG:PPP:N
u mramor-u,...
～の中に 大理石-LOC:SG
「海から遠くないところにベグは大理石に掘られた美しい馬の墓地を持っていた...」(Hazarski rečnik)

(283) ...inače, ima-o je i svoj-ø štand-ø na
ところで 持つ-PST:3SG ～も 自分の-ACC:SG ブース-ACC:SG ～の上に

izložb-i u Međunarodn-om kongresn-om centr-u

展示会-LOC:SG ～の中に 国際-LOC:SG 会議の-LOC:SG センター-LOC:SG

u Berlin-u.

～の中に 地名-LOC:SG

「ところで、（彼は）ベルリンの国際会議センターの展示会に**自分のブースを持っていた**。（〈直〉...ベルリンでの国際会議センターでに展示会に**ブースを持っていた**。）」(Marketing i menadžment biblioteka u svetlu 69. kongresa IFLA-e u Berlinu 2003. godine)

以上のことから、「物持ち」を表す組み合わせを次のように一般化することができる。

[所有者]NOM	V 物持ち	[所有対象]ACC	([所有物のありか] u/na+LOC/ADV)
〈人/物/空間〉		〈物/身体部位/人/事柄〉	〈空間/機関〉

通常「物持ち」を表す組み合わせの中には文脈によって物の「付着」という側面を帯びるものもある。この傾向は、対象の分離が可能であればあるほど見られる。例えば、Imati razne knjge kod kuće「家に**いろいろな本を持つ**」のような例では「本を持つ」という組み合わせが「物持ち」の代表的な例ではあるが、次に挙げる実例では「物持ち」を表しながら、物の「付着」というニュアンスも帯びると言えよう。それは、時間を表す副詞との共起によってできるもので、「本を持つ」という組み合わせに一時的な側面を与えているためである。

(284) Obično u takv-im prilik-ama uzme-m da

普段 ～の中に そんな-LOC:PL 機会-LOC:PL 取る-PRES:1SG ～ように

čita-m knjig-u, ali tada **nisam ima-la knjig-u**,...

読む-PRES:1SG 本-ACC:SG しかし その時 持つ-PST:1SG:NEG 本-ACC:SG

「（私は）普段そんな時に本を読むことが多いが、その時は**本を持ち合わせておらず**、...」(Strah i njegov sluga)

このような文脈は「そのときに手元に本を持たなかった」という意味に近いので、物の「付着」という側面も生きていると思われる。

なお、「付着」の位置が具体的に指示される文脈ではその組み合わせが物の「付着」を表すと言ってもよい場合もある。この傾向は服装類または装飾類を表す対格名詞との組み合わせにおいて見られる。

(285) ...**imal-a je** **prsten-ø** na ruc-i;...

持つ-PST:3SG 指輪-ACC:SG ～の上に 手-LOC:SG

「...手に**指輪をしていた**...（〈直〉...手に**指輪を持っていた**...）」

(Ljudi govore)

この実例における na ruci「手に」という要素が物の［付着先］を表すと考えられる。同じことが次の例における na telu「体に」という要素に関しても言える。

(286) ...jedan-ø od poslanik-a **ima-o je** na tel-u

一人-NOM:SG ～から 代議員-GEN:PL 持つ-PST:3SG ～の上に 体-LOC:SG

tetoviran-u **hazarsk-u** **istoriju** i **topografij-u**.

入れ墨をする-PPP:ACC:SG:F 民族名の-ACC:SG 歴史-ACC:SG ～も 地形-ACC:SG

「一人の代議員は体に**ハザールの歴史と地形の入れ墨をされていた**...

（〈直〉一人の代議員は体に**入れ墨されたハザールの歴史と地形を持っていた**

...）」 (Hazarski rečnik)

また、「付着先」が当たり前で特別に強調されなくても予測できる場合は、組み合わせ全体が物の「付着」を表すことがある。次の例ではそうであり、舞踏会で踊っている若い女性の様子を説明している。このような文脈における動詞 imati「持つ」は nositi「着る/はく」や obući「着る」と同様の使い方である。

(287) Jedn-a **je ima-la** **haljin-u** od tešk-e,

一人-NOM:SG 持つ-PST:3SG ドレス-ACC:SG ～から 厚手の-GEN:SG

otvorenozelen-e svil-e.

ライトグリーンの-GEN:SG 絹-GEN:SG

「一人はライトグリーンの厚手絹の**ドレスを着ていた**。（〈直〉一人はライト

グリーンの厚手絹のドレスを持っていた。）」　(Sa silama nemerljivim)

このような現象を次に挙げる実例に比べると、動詞 imati「持つ」と服装類を表す対格名詞との組み合わせであるのに、その意味的性質が異なることが分かる。次に挙げる実例は「所有関係」を表すものである。

(288) Zato　je　on-a　ima-la　bluz-u
だから　である-PRES:3SG　彼女-NOM:SG　持つ-APP:F:SG　ブラウス-ACC:SG
za　balkon-ø,　i　bluz-u　za　dvorišt-e,
～のために　バルコニー-ACC:SG　～も　ブラウス-ACC:SG　～のために　庭-ACC:SG
i　bluz-u　za　parkić-ø,　i　bluz-u
～も　ブラウス-ACC:SG　～のために　公園-ACC:SG　～も　ブラウス-ACC:SG
za　bioskopčić-ø,...　i　sv-e　jednako
～のために　小さな映画館-ACC:SG　～も　全て-ACC:SG　同じよう
nov-u　bluz-u...
新しい-ACC:SG ブラウス-ACC:SG
「だからこそ、彼女はバルコニーのためのブラウスや庭のためのブラウスも公園のためのブラウスも小さな映画館のためのブラウスも...そして、ずっと同じように新しいブラウスを持っていた...」(Sudbina jednog Čarlija)

この実例において用途を示す【za+名詞 ACC】「名詞+のために」という要素がこの用法における恒常性を指示している以上、この場合の imati bluzu「ブラウスを持つ」というのは「物持ち」を表す例であると言える。これは狭義の「物持ち」を表す例である。

10.2.　「授受」

このタイプの組み合わせはやりもらい、売買、譲渡、掠奪などによる[所有対象]の所有権の移動を表している。（奥田 1968-1972[1983:81]）[対象]の所有権の移動を表している以上、[授受の相手]という文法的な意味を表す要素も「授受」の構造に含まれることは当然である。

「授受」を表す組み合わせには二通りの現れ方がある。奥田（奥田 1968-1972[1983:81-82]）が日本語に関して指摘しているように、対象が主体から遠ざかっていくことを表すものと対象が主体の方へ近づいてくることを表すものがある。セルビア語における「授受」に関してもそう言える。

したがって、対象が主体から遠ざかっていくことを表す組み合わせ（「花子が太郎に本をあげる/与える」）は遠心的な過程を示すと言える。遠心的な過程を表す組み合わせの例は dati poklon「プレゼントをあげる」、kupiti nekome knjigu「誰かに本を買う」、pozajmiti nekome novac「お金を誰かに貸す」等である。それに対し、対象が主体の方に近づいてくることを表す組み合わせ（「花子が太郎から本をもらう/取る」）は求心的な過程を示すと言える。その例は dobiti poklon 「プレゼントをもらう」、primiti nagradu「賞を受ける」、pozajmiti novac od nekoga「誰かにお金を借りる」等である。

前述したように、「授受」を表す組み合わせを作る対格名詞には〈具体物〉または不動産、金銭、資本、権利や資格などを表す抽象名詞との組み合わせが頻繁に見られる。このタイプの組み合わせは[所有対象]の所有権の移動という側面も必ず帯びる。また、所有権の移動にあたって[所有対象]の空間的な移動という側面も含まれることがある。ただし、[対象]の空間的な移動は「所有関係」を表す組み合わせにおいて重要な側面ではない。というのは、空間的な移動を帯びなくても、所有権の移動という側面さえあれば、その組み合わせが「授受」を表すためである。この事実は日本語のヲ格名詞と授受動詞との組み合わせと同様である（「土地をわたす」、「家をあげる」等）（奥田 1968-1972[1983:80]）。

10.2.1. 遠心的授受

遠心的授受を表す動詞には次のようなものが頻繁に見られる。

dati「あげる」、pružiti「手渡す」、pozajmiti (nekome)「（誰かに）貸す」、vratiti「返す」、prodati「売る」、preprodati「再販する」、kupiti(nekome)「（誰かに）買ってあげる」、pokloniti「贈る」、poslati「送る」、ustupiti「ゆずる」、dodati「渡す」、dodati「施す」、nabaviti(nekome)「提供する」、predati「出す/提出する」、predati「引き渡す」、deliti「分ける」、podeliti 「分け合う」[73]、podeliti「配る/回す」dodeliti「あてがう」、posvetiti「ささげる」、 prineti「さずける」、ponuditi「提供する」

遠心的授受を表す組み合わせの実例を次に挙げる。

[73] この動詞は遠心的な過程も求心的な過程も表すことができる。

(289) Posle je devojčic-a Violet-a da-la

それから である-PRES:3SG 女の子-NOM:SG 個人名-NOM:SG あげる-APP:F:SG

Čarlij-u češalj-ø da se očešlja-ø

個人名-DAT:SG 櫛-ACC:SG ～ように REFL 髪をとかす-PRES:3SG

pred ogledalom...

～の前に 鏡-INST:SG

「それから、鏡の前で髪をとかすためにヴィオレッタという女の子はチャーリーに櫛をあげた...」(Sudbina jednog Čarlija)

上記の実例で見られるように、遠心的授受を表す組み合わせは与える相手を表す与格を取る名詞で広げられる。この要素は[授受相手]という文法的な意味を表している。

10.2.2. 求心的授受

求心的授受を表す動詞には次のようなものが多く見られる。

dobiti「もらう/得る」、primiti「受ける」、uzeti「取る」、oduzeti「奪う」、preuzeti 「受け取る」、pozajmiti (od nekoga)「(誰かに/から) 借りる」、kupiti「買う」、 otkupiti「買い取る」、vratiti/povratiti「取り戻す/取り返す」、nabaviti「手に入れる」、sakupiti/prikupiti「集める」、sakupiti/prikupiti「取り立てる」、krasti/ukrasti「盗む」、ukrasti/pokrasti「盗み取る」、pridobiti「さらう/得る」、zadobiti「得る」、izvući「せしめる」、steći「もうける/得る」

(290) Dobi-o je od mene mnogo već-i poklon-ø

もらう-PST:3SG ～から 私-GEN:SG 大分 より大きい-ACC:SG 贈り物-ACC:SG

no što se smeo

～より REFL. ～てもいい

nada-ti, ali oseća-ju-ći da

期待する-INF しかし 感じる-TRANS ～ように

nije steka-o　　moj-e　　simpatij-e,...

得る-PST:3SG:NEG　　私の-ACC:PL　　愛着-ACC:PL

「（彼は）私から期待してもよかったより大分**大きい贈り物**をもらったが、

私の愛着を得なかったと感じながら...」(Afrika)

この実例から分かるように、求心的授受を表す組み合わせは【od(～から)+属格を取る名詞】で広げられる。この要素は[授受相手]という文法的な意味を表している。このように、遠心的授受も求心的授受も[授受相手]を表す要素で広げられる以上、この要素の存在は「授受」を表す組み合わせにおいて重要な構造的な特徴であると言える。

また、この意味を表す組み合わせは[所有対象]の用途を表す【na（～の上に）/za（～のために）+対格名詞】という要素で広げられることがある。例えば、次の実例における【na+poklon】（プレゼントに）[74]というのはそうである。ただし、[所有対象]の用途が欠けても、文の意味が変わらずに十分に成り立つために、構造上の必須的要素であるとは言えない。

(291) Seti-o se　　moj-e　　crven-e　　majic-e...

思い出す-PST:3SG　　私の-GEN:SG　赤い-GEN:SG　Ｔシャツ-GEN:SG

koj-u...　　nisam žele-o　　da　　proda-m,

REL(which)-ACC:SG　　～たい-PST:1SG:NEG　　～ように　売る-PRES:1SG

jer　　sam　　je　　i　　sam

～ので　である-PRES:1SG　それ-ACC:SG　　～も　　(私)自身-NOM:SG

dobi-o　　na　　poklon-ø.

もらう-APP:M:SG　　～の上に　　プレゼント-ACC:SG

「私自身もプレゼントに**もらった**ので**売りたくなかった**私の赤いＴシャツを

（彼が）思い出した。」(U　potpalublju)

そして、次に挙げる実例は空間を表す名詞と求心授受動詞との組み合わせの例である。

[74] 実例においてこの要素を二重線で引く。

(292) Čarli-ø... je dobi-o mest-o za spavanj-e

個人名-NOM:SG もらう-PST:3SG ところ-ACC:SG ～のために 寝ること-ACC:SG

pod Violetin-im krevet-om.

～の下に 個人名-LOC:SG ベッド-INST:SG

「チャーリーは...ヴィオレッタのベッドの下に寝るところをもらった。」

(Sudbina jednog Čarlija)

この実例も例(291)と同じように、[所有対象]の用途を表す要素[75]が含まれる。また、「物持ち」に関しても見られたように、この実例でも[所有物のありか]という文法的な意味を表す要素によって広げられる。したがって、[所有物のありか]を表す要素の存在は「物持ち」だけでなく、「授受」の構造的な特徴であると言える。

最後に挙げる実例は抽象名詞と求心授受動詞との組み合わせの例である。

(293) Vlajsa je dobi-o Nin-ov-u nagrad-u,...

個人名-NOM:SG もらう-PST:3SG 新聞社名-ACC:SG 賞-ACC:SG

「ヴライサはNIN賞をもらった。」(Ponedeljak)

以上のことから、「授受」を表す組み合わせを次のようにまとめることができる。

[主体・所有者]NOM	V 授受	[所有対象]ACC	[授受相手] DAT/od+GEN	([所有物のありか] u/na+LOC/ADV)
〈人/物/空間〉		〈具体物/抽象物〉	〈人〉	〈空間/機関〉

10.3. 助動詞としての所有動詞の用法

通常所有を表す動詞は助動詞としてふるまう場合がある。この傾向は日本語で動作を表すヲ格名詞と授受を表す動詞との組み合わせにおいて成り立つ動詞の用法 (「確答を与える」、「指導を受ける」「自由行動を取る」等) (奥田 1968-1972[1983:87-88]) と類似した現象であると言える。[76]

[75] 注 74 と同様。

[76] この用法は村木新次郎が提唱した「機能動詞」に近い。

セルビア語では、第一に動詞 imati「持つ」と対格名詞との組み合わせの中には動詞の意味が生きていない組み合わせが見られる。この用法では対格名詞の動詞化が進み、その組み合わせは単に名詞で示される事柄が実現されるという意味になる。セルビア語ではこの傾向が思考過程(例(294))や事柄(例(295)を表す抽象名詞と動詞 imati「持つ」との組み合わせにおいて見られる。また、日本語と同じように授受を表す動詞と動作を表す対格名詞との組み合わせにおいても見られる。

この用法における動詞 imati「持つ」を助動詞として扱うことができる。この場合、対格名詞と動詞 imati「持つ」との組み合わせをその名詞と同じ語源を持つ動詞だけで言い換えられる。この事実をこの用法における imati「持つ」の助動詞としての性質の証拠として扱うことができると思われる。次の実例を参考にされたい。

(294) Ona je o Rigout-u **ima-la**
彼女-NOM:SG である-PRES:3SG ～について 個人名-LOC:SG 持つ-APP:F:SG
gor-e mišljenj-e i od sused-a.
より悪い-ACC:SG 意見-ACC:SG ～も ～から 隣人-GEN:SG
「彼女はリゴウトについて隣人よりもより**悪い意見を持っていた。**」(Čovek koji je jeo smrt 1793.)

この実例における imati mišljenje 「**意見を**持つ」というのを動詞 mislti「考える・思う」で言い換えられるので、上記の実例における動詞 imati「持つ」が助動詞の働きをしていると言える。

次の実例は事柄を表す名詞との組み合わせにおける imati「持つ」の助動詞的な用法を示している。

(295) **Ima-la je** običaj-ø da kasni-ø.
持つ-PST:3SG 習慣-ACC:SG ～ように 遅刻する-PRES:3SG
「(彼女は) 遅刻する**習慣を持っていた**。」(Strah i njegov sluga)

セルビア語では動詞 običavati「習慣を持つ」は頻繁に使われる動詞ではないが、上記の実例も **Običavala je** da kasni (遅れる**習慣があった**) のように言い換えることができる。したがって、この実例も動詞 imati「持つ」の助動詞化を示していると言える。

なお、動作を表す対格名詞と動詞との組み合わせにおける動詞 imati の助動詞化の実例が見られる。

(296) Anđel-i su se smeja-li najpre zato što
天使-NOM:PL である-PRES:3PL REFL 笑う-APP:M:PL まず ～ので
bi već ima-li spreman-ø odgovor-ø,...
である-AOR:3PL もう 持つ-APP:M:PL 整える-PPP:SG:M 答え-ACC:SG
「天使たちはもう**整えた答えを持ってい**たので、まず笑っていた。」 (Sa silama nemerljivim)

第二に、日本語の動作を表すヲ格名詞と授受動詞との組み合わせと同じように、セルビア語でも動作を表す対格名詞と授受動詞との組み合わせにおいて動詞が助動詞化する傾向が見られる。次の実例はその傾向を示している。

(297) Milan-ø još jedared pokuša-ø
個人名-NOM:SG ～さらに 一度 やってみる-AOR:3SG
da dobije-ø odgovor-ø,...
～ように もらう-PRES:3SG 答え-ACC:SG
「ミランはもう一度**答えをもらおうとした**...」(Kronika palanačkog groblja)

(298) Kanel-a beleži-ø da je
個人名-NOM:SG 気づく-PRES:SG ～ように である-PRES:3SG
Pantović-ø jedn-om prilik-om ponudi-o objašnjenj-e...
個人名字-NOM:SG ある-INST:SG 機会-INST:SG 提供する-APP:M:SG 説明-ACC:SG
「カネラはパントヴィッチがある機会にあたって**説明を提供した**ことに気づいている...」(Sluge hirovitog lučonoše)

授受動詞の中には能動性を表している動詞と受動性を表している動詞がある。実例(297)における dobiti「もらう」は受動性を表すのに対し、実例(298)における ponudti「提供する」は能動性を表している。動作を表す対格名詞と受動性を表す授受動詞との組み合わせの場合は、動詞 dobiti「持つ」と思考や事柄を表す対格名詞との組み合わせと同じように、同様の内容を名詞と同じ語源の動詞で言い換えることができる。このように、実例(298)における ponudio objašnjenje「**説明を**提供した」というのを動詞 objasniti「説明する」だけで言い換えることができる。これも授受動詞の助動詞としての用法の証拠にもなると言える。

(299) ...ali nik-o još **nije...** **objasni-o**

しかし 誰も-NOM:SG まだ である-PRES:3SG:NEG 提供する-APP:M:SG

kako da se pomogne-ø

～どのように ～ように REFL 手伝う-PRES:3SG

takv-im učenic-ima i njihov-im roditelj-ima...

そんな-DAT:PL 生徒-DAT:PL ～も 彼らの-DAT:PL 両親-DAT:PL

「...しかし、どのようにそんな生徒たちと彼らの両親を手伝ってあげればいいかと誰も**説明しなかった...**」(Politika)

実例(298)と同じように、実例(299)も能動性が含まれ、対格名詞と動詞との組み合わせを名詞と同じ語源の動詞だけで言い換えることができる。この場合は ponudio **objašnjenje**「**説明を**提供した」というのを動詞 objasniti「説明する」で言い換えられる。

以上のことから、セルビア語でも所有動詞の中には特定の条件において助動詞的な働きかけをするものがあることが分かる。

第十一章　心理的なかかわり

11.1.　「認識の組み合わせ」

「認識の組み合わせ」は[主体] と [対象]との間の認識的な作用を表している。奥田もこのタイプの組み合わせに関して述べているように、「認識の組み合わせ」において動詞は認識的な活動を表し、ヲ格名詞はその認識活動の向かっていく対象である（奥田 1968-1972[1983:92]）。セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせに関しても同じことが言える。したがって、このタイプの組み合わせにおける対格名詞の文法的な意味を広く言えば[認識対象]のように一般化できる。ガ格名詞は[主体]である。対格名詞のカテゴリカルな意味は下位分類においてそれぞれ異なるが、〈具体物〉、〈現象〉、〈人〉および〈抽象物/事柄〉になる。「認識の組み合わせ」の中には下位カテゴリーとして扱う次の三通りの組み合わせのタイプが認められる。

- 「感性的な組み合わせ」　gledati film「映画を見る」
- 「知的な組み合わせ」　analizirati okolnosti「状況を分析する」
- 「発見の組み合わせ」　pronaći pčelinje gnezdo u uglu zida「壁の角に蜂の巣を見つける」

それぞれに関して次に述べる。

11.1.1.　「感性的な組み合わせ」

「感性的な組み合わせ」では動詞が感性的な経験を示し、対格名詞はその[対象]になる。したがって、対格名詞の文法的な意味は[知覚対象]になると言える。[知覚対象]というのは、人間の知覚で捉えられる内容を表す名詞になる以上、そのカテゴリカルな意味は〈物〉、〈人〉または〈現象〉になる。感性的経験を表す動詞が抽象名詞と組み合わさる場合に主に「感性的な組み合わせ」を表さなくなり、次節で説明する「知的な組み合わせ」を作るようになる。[知覚対象]と動詞で表される感性的な活動とは直接かかわる。セルビア語の動詞にも、当然、視覚活動、聴覚活動、嗅覚活動と味覚活動を表すものがある。（奥田 1968-1972[1983:92]）。

視覚活動を表す動詞に関して言えば、動詞 gledati「見る」を中心に類似した意味の動詞のグループがある。これらは videti 「見る・見かける」、pogledati「見上げる」、posmatrati「監視する」、 promatrati 「観察する」等である。

視覚的活動を表す「感性的な組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(300) Okrenu-o **sam** se i **vide-o**: **vlasulj-u**.
振り返る-PST:3SG REFL. ～も 見る-APP:M:SG かつら-ACC:SG
「振り返って**かつらを見た。**）」(Strah i njegov sluga)

(301) **Gleda-o** **me** **je** bez reč-i
見る-APP:M:SG 私-ACC:SG である-PRES:3SG なし 言葉-GEN:SG
nek-o vrem-e.
特定の-ACC:SG 時間-ACC:SG
「彼は何も言わずしばらく**私を見ていた**。（〈直〉...言葉なしに**私を見ていた**。）」(Strah i njegov sluga)

(302) **Pogleda-la sam** mu **lic-e**, nije izgleda-o
見上げる-PST:3SG 彼-DAT:SG 顔-ACC:SG 見える-PST:NEG:3SG
kao da je bolestan-ø.
～のように ～ように である-PRES:3SG 病気の-NOM:SG
「彼の**顔を見上げた**が、病気のようではなかった。（〈直〉彼に**顔を見あげた**...）(Sve zveri što su sa tobom)

日本語では視覚的活動を表す「感性的な組み合わせ」はヲ格名詞と動詞との組み合わせがほとんどであるが、セルビア語では対格名詞と動詞との組み合わせの他に、前置詞 u（～の中に）+対格名詞から成り立つ前置詞句と動詞との組み合わせも見られる。例えば、gledati **ga**「**彼を**見る」と gledati u njega「彼の方を見上げる（〈直〉彼の方へ見上げる）」という二通りの言い方があり、後者の方がその目線の方向性が強調される場合があるが、必ずしもそうではない。また、動詞 piljiti「目を細くして見る」、 buljiti「じっと見る」等のような、特別な意味的ニュアンスが含意される視覚活動動詞も前置詞なし対格名詞と動詞とが組み合わさらず、前置詞 u（～の中に）+対格名詞という前置詞句と動詞との組み合わせを作る。

次に挙げる例は動詞 gledati「見る」と pogledati「見上げる」が前置詞句を取る場合の実例である。

(303) Većin-a je gledala u zemlj-u.

大部分-NOM:SG 見る-PST:SG ～の中に 地面-ACC:SG

「（人々の）大部分は**地面を見ていた**。（...地面の方に**見ていた**。）」

(Sudbine)

(304) "Kiš-a će", pogleda-la je u sunce-ø i

雨-NOM:SG である-FUT:3SG 見上げる-PST:3SG ～の中に 太陽-ACC:SG ～も

zastrepe-la od njegov-og brz-og bežanj-a.

怖がり出す-APP:F:SG ～から 彼の-GEN:SG 速い-GEN:SG 脱出-GEN:SG

「「雨になりそうだ」と**太陽を見上げて**、彼の速い脱出を怖がり出した...

（〈直〉**太陽の方に見上げて**...）」(Koreni)

聴覚的経験を表す動詞には slušati「聞く」、saslušati「聞いてあげる/聞いてくれる」、čuti「聞こえる」、načuti「（噂などが）耳に入る」のような動詞がある。

(305) Sta-li smo... i ubrzo sam ču-o škrip-u

止まる-PST:1PL ～も 間もなく 聞く-PST:1SG きしむ音-ACC:SG

tešk-e kapij-e.

重い-GEN:SG 門-GEN:SG

「止まったら、...間もなく重い門の**きしむ音を聞いた**。」(Strah i njegov sluga)

(306) Irac-ø ga opet nije slušao,...

アイルランド人-NOM:SG 彼-ACC:SG また 聞く-PST:NEG:3SG

「アイルランド人はまた**彼の話を聞いていなかった...**（〈直〉...**彼を聞いていなかった...**）」 (Sa silama nemerljivim)

また、嗅覚的経験を表す動詞には mirisati/pomirisati/omirisati「嗅ぐ」のような動詞がある。そして、味覚を表す動詞は probati「試す/味わう」や okusuti「味わう」等が代表的である。

(307) Nagnu-o se i **pomirisa-o** vod-u u
身をかがめる-PST:3SG ～も 嗅ぐ-APP:M:SG 水-ACC:SG ～の中に
tegl-i.
つぼ-LOC:SG
「彼は身をかがめて、つぼの中の**水を嗅いだ**。」(Sve zveri što su sa tobom)

(308) Ovako je...uzviknuo dom Perinjon-ø kada **je**
このように 叫ぶ-PST:3SG 個人名-NOM:SG ～とき である-PRES:3SG
prv-i put-ø **okusi-o** šampanjac-ø.
一番目-ACC:SG ～回-ACC:SG 味わう-APP:M:SG シャンパン-ACC:SG
「初めて**シャンパンを味わった**ときにドン・ペリニヨンはこのように叫んだ。」

感性的な経験を表す動詞は〈物〉を表す名詞と組み合わさるが、この名詞はその「物」の動きや内容を表す以上、特定の文脈では〈現象〉を表す名詞に近いと言える。例えば、セルビア語でも日本語でも slušati klavir「**ピアノを**聞く」のような言い方も当然あるが、「ピアノ」というのは「物」であるにも関わらず、このタイプの組み合わせの意味はむしろ「ピアノの演奏を聴く」、「ピアノの演奏の内容を聞く」や「ピアノの音を聞く」ということを表していると言えよう。この特徴は「感性的な組み合わせ」を「物に対する働きかけ」（特に物の「接触」を表す組み合わせ）を表す組み合わせと区別する特徴であると考えられる。[対象]に対するかかわり方が異なるからこそ、この二つのカテゴリーを別に立てる必要性があるわけである。

以上のことから「感性的な組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 感性	[知覚対象]ACC
〈人〉		〈具体物/現象/人〉

11.1.2. 「知的な組み合わせ」

セルビア語では analizirati problem「**問題を**分析する」、razmatrati situaciju「**事態を**検討する」、predvideti rezultat「**結果を**予測する」、razumeti nečiju patnju「誰かの**苦しみを**理解する」等は「知的な組み合わせ」の例である。「知的な組み合わせ」は動詞が思考活動を表し、対格名詞はその思考の[対象]になる抽象名詞である。[対象]と言って

も「物に対する働きかけ」や「人に対する働きかけ」を表す組み合わせに比べると、対象の「変化」という側面等が含まれない以上、その対象性は当然低い。また、奥田が述べているように、「感性的な組み合わせ」に比べると、「知的なむすびつき」では物や現象を媒介にして、その分析や総合によって抽出される内容が名詞で表される。したがって、「感性的なむすびつき」と違って「知的なむすびつき」における対象性は間接的であと言える（奥田 1968-1972[1983:97]）。

この意味的関係を表す組み合わせにはセルビア語と日本語との差が多く見られる。それはヲ格名詞または対格名詞と動詞の間の対象性のためであると言える。つまり、セルビア語では対象への働きかけが弱くなればなるほど、日本語より動詞が対格名詞と組み合わさり難くなる傾向が見られる。というのは、動詞で表される動作や作用と[対象]の間の対象性が低くなればなるほど、対格名詞でなく前置詞句と動詞との組み合わせが頻繁に見られるわけである。したがって、セルビア語で対格名詞と動詞が組み合わさり「知的な組み合わせ」を作る過程は日本語ほど生産的でないと言えよう。特に、「知的関係」を代表的に表す動詞 misliti/razmišljati「考える」や動詞 misliti「思う」の場合はそうである。動詞 misliti/razmišljati「考える」は対格名詞を取らず、「o（について）+名詞 LOC」という形になる。例えば、「戦争の悲惨さを考える」等は日本語で普通に言えるが、セルビア語では必ず「戦争の悲惨さについて考える」という言い方をする必要がある。また、動詞 misliti「思う」に関して言えば、「**彼の身分を**思う」のような場合は misliti na njegov položaj「na（～の上に+ACC）」という前置詞句になる。日本語では「身分を思う」も「身分について思う」両方が可能であるが、セルビア語は異なる。もっとも、mislti **nešto**[77] **「何かを考える」**という言い方があるが、これは不定代名詞との組み合わせのときだけでありむしろ話し言葉で会話の中でだけ使うために、例外的であると言える。それに対し、動詞 analizirati「分析する」、ispitivati「詰問する」、 razmatrati「検討する」、predvideti「予測する」、razumeti「理解する」のようなものは動詞「考える」や「思う」より対象性が含まれる動詞であり対格名詞と組み合わさる。なお、これらの動詞は、日本語より、〈人〉を表す名詞と組み合わさる能力がかなりある。例えば、analizirati nekoga「誰か（のふるまい）を分析する」、ispitivati neprijatelja「敵を詰問する」等はその例である。

動詞と組み合わさる名詞は主に抽象的である以上、頻繁に修飾を受けることがある。そうすることよって抽象的な[対象]がある程度具体化されるまたは定められると言えよう。例えば、razumeti nečiju **patnju**「誰かの**苦しみを**理解する、predvideti **rezultat** ispita「試験の**結果を**予測する」等ではそうである。これを構造上の重要な特徴として取り上げることができる。

セルビア語で「知的な組み合わせ」を代表的に作る思考動詞や思考の結果を表す動詞を次に挙げる。

[77] この例では不定名詞 nešto「何か」が対格の形になる。

razumeti/shvatiti「理解する」、analizirati「分析する」 、ispitivati 「検討する」、razmatrati/ispitivati「考察する」、predvideti「予測する」、 proreći 「うらなう」、pretpostaviti「予想する」、uvideti/prozreti「見抜く」、 utvrditi/saznati「見極める」、 primetiti「気づく/認める」 、znati/poznavati 「知る」、tumačiti「解釈する」promatrati 「観察する」、posmatrati「監視する」、opažati「察知する」

「知的な組み合わせ」の代表的な実例を次に挙げる。

(309) Iako nikada nije vide-o fotografsk-i apparat-ø,
～ものの ～決して 見る PST:3SG:NEG 写真用の-ACC:SG カメラ-ACC:SG
on-ø **je razume-o** ce-o mehanizam-ø
彼-NOM:SG 理解する-PST:3SG 完全な-ACC:S しくみ-ACC:SG
rukovanj-a nj-im;...
取り扱い- GEN:SG 彼（それ）-INST:SG
「カメラを見たことがないものの、彼はその取り扱いの完全なしくみを**理解していた**、...」(Afrika)

(310) On-ø je reka-o da **je** Vlad-a detaljno
彼-NOM:SG 言う-PST:3SG ～ように である-PRES:3SG 政府-NOM:SG 詳細に
analizira-la moguć-e posledic-e svetsk-e
分析する-APP:SG:F 可能な-ACC:PL 結果-ACC:PL 世界的-GEN:SG
ekonomsk-e kriz-e...
経済的-GEN:SG 危機-GEN:SG
「彼は政府が世界的経済危機の**可能性を**詳細に**分析した**と言った...」
(Politika)

本来感性的体験を表す動詞は現象名詞または知覚で捉えることが可能な内容を表す名詞と組み合わさると、「感性的な組み合わせ」を作るが、このタイプの動詞が抽象名詞または動作を表す名詞と組み合わさることによってその意味が抽象化し、「知的な組み合わせ」を作る。動詞 promatrati「観察する」、okusiti「味わう」等との組み合わせはそうである。これは当然文脈にもよることであり、異なる文脈においては同じ要素の組み合わせでもより

「感性的な」ニュアンスを帯びることも考えられる。　つまり、直接視覚で捉えられない内容を表す名詞と組み合わさると、「知的な関係」を作ると言える。

(311) Dr　John-ø Hamilton-ø　**je**　**skup-ø**

博士-(略語)　個人名ーNOM　である-PRES:SG　集まり-ACC:SG

promatra-o　bez　radoznalost-i.

観察する-APP:SG:M　なし　好奇心-GEN:SG

「ジョン・ハミルトン博士は好奇心なしに**集まりを観察していた**。」

この実例における動詞 promatrati「観察する」は動詞「見る」とほとんど同じ意味で使われているので、この組み合わせは「感性的な組み合わせ」であると言える。次に挙げる実例も目で捉えられる内容が対象となるので、同じことが言える。

(312) Ozbiljn-im　pogled-om　**promatra-o je**　kralj-ø

真剣な-INST:SG　まなざし-INST:SG 観察する-PST:3SG　国王-NOM:SG

svoj-u　**kćerk-u**　kako　jeca-ø　i

自分の-ACC:SG　娘-ACC:SG　～どのように　すすり泣く-PRES:3SG　～も

ruk-e　krši-ø,...

手-ACC:PL　割る-PRES:3SG

「国王は真剣なまなざしですすり泣いたり手をもんだりする**娘**の様子**を観察していた**。（〈直〉国王は真剣なまなざしですすり泣いたり手をもんだりする**娘を観察していた**。）」（Kroz carstvo nauka）

また、次に挙げる実例は「知的」関係を表しているものの、「感性的組み合わせ」と「知的な組み合わせ」の間の境界的な例であるとも言える。というのは、対象になる対格名詞は具体的な動作を表す以上、その動作が主体によって実際に目で捉えられる文脈も考えられる。その場合は「感性的むすびつき」の側面が強くなると言えよう。

(313) ...mnog-e　human-e　organizacij-e　sa　otvoren-om

多くの-NOM:PL　人道の-NOM:PL　組織-NOM:PL　～と　あけすけな-INST:SG

podozrivošć-u　promatra-ju　dolazak-ø　američk-ih

疑い-INST:SG　観察する-PRES:3PL　到着-ACC:SG　米国の-GEN:PL

vojnik-a　u　afričk-u　zemlj-u...(Politika)

兵士-GEN:PL　～の中に　アフリカの-ACC:SG　国-ACC:SG

「多くの人道援助関連の組織は米国の兵士の（その）アフリカの国への**到着を**あけすけな疑いの目で**観察している**。」

それに対し、次の実例における動詞 promatrati「観察する」は「理解する」という意味に近いので、「知的な組み合わせ」であると言える。

(314) Dobr-o　i　loš-e　raspoloženj-e　doslovce　menja-ø

良い-NOM:SG ～も 悪い-NOM:SG　機嫌-NOM:SG　文字通り　変える-PRES:3SG

način-ø　na　koj-i　promatra-mo

方法-ACC:SG　～の上に　REL(which)-ACC:SG　観察する-PRES:1PL

svet-ø.

世界-ACC:SG

「良い機嫌と悪い機嫌は文字通り私たちの**世界の観察**の仕方を変える。

（〈直〉良い機嫌と悪い機嫌は文字通り私たちが**世界を観察する**方法を変える。）」

なお、実例(315)と(316)においては対格名詞がさらに抽象的である以上、その組み合わせの意味全体もさらに抽象化し「知的な組み合わせ」の代表的な例であるとも言える。

(315) Danas　postavljen-o　pitanj-e　ja　promatra-m

今日　載せる-PPP:ACC:SG:N 質問-ACC:SG　私-NOM:SG　観察する-PRES:1SG

sa　drug-og-a　ugl-a.

～から　他の-GEN:SG　角度-GEN:SG

「私は今日**された質問を**違う観点から**見ている**。（〈直〉私は今日された**質問を**他の角度から**観察している**。）」

(316) Mora-mo kritički da **promatra-mo**

なければならない（must） 批判的に ～ように 観察する-PRES:1PL

naš-u istorij-u a ne da

我々の-ACC:SG 歴史-ACC:SG そして 否定小辞 ～ように

traži-mo uteh-u u nj-oj.

探す-PRES:1PL 慰め-ACC:SG ～の中に それ-LOC:SG

「そこに慰めを探すのではなく、**我々の歴史を**批判的に**観察し**なければならない。」

これらの実例における動詞 promatrati「観察する」の意味は「分析する」または「考察する」に近い。

類似した傾向は日本語においても、特に動詞「感じる」と「見る」との組み合わせの場合に見られる（奥田 1968-1972[1983:100-104]）。

ここまで述べた現象は「感性的な組み合わせ」と「知的な組み合わせ」の関わりと連続性を示していると言える。

また、動詞 čitati「読む」、pročitati「読み切る」は通常、日本語と同じように知覚対象になり得る名詞と組み合わさり、「感性的な組み合わせ」を作っている（čitati knjigu「本を読む」、pročitati pismo「手紙を読みきる」）（奥田 1968-1972[1983:95]）が、この動詞は抽象名詞または人名詞とみ合わさった時に「知的な組み合わせ」を表す場合もある。このことも「感性的な組み合わせ」と「知的な組み合わせ」のつながりを見せている例の一つになる。次の実例における pročitati「読み切る」は「人の行動を見抜く」、「読み取る」のように解釈できる。

(317) Njegov-i interes-i su se poklapa-li sa državn-im... a

彼-NOM:PL 関心-NOM:PL 重なる-PST:3PL:REFL ～と 国の-INST:SG そして

sv-i su mog-li da stan-u u

皆-NOM:PL できる-PST:3SG ～ように 入る-PRES:3PL ～の中に

jedn-u reč-ø: vlast-ø. Odmah **sam**

一つ-ACC:SG 単語-ACC:SG 権力-NOM:SG すぐに である-PRES:1SG

ga **pročita-o.**

彼-ACC:SG 読みきる-APP:SG:M (Strah i njegov sluga)

「彼の関心は国のと重なっており、（その関心は）皆一つの「権力」という単語に入ることができた。すぐに**彼の行動を読み取った**。（〈直〉すぐに**彼を読みきった**。）」

物の変化等具体的な動作を表す動詞も抽象名詞と組み合わさる場合に「知的な組み合わせ」を作ることがある。この傾向は具体的な対象への働きかけからの類推によって成り立つ意味の抽象化でもあると言えるが、「物に対する働きかけ」と「知的な組み合わせ」の関わりを見せていると考えられる。例えば、動詞 progutati「飲み込む」は次の実例において「（無理矢理に）認める」という意味になり、「知的なむすびつき」を作っている。

(318) Ćutke　　je,　　ipak,　　proguta-o
黙って　である-PRES:3SG　それでも　飲み込む-APP:SG:M
odluk-u　　kancelar-a　　Gerhard-a Šreder-a　　i
決断-ACC:SG　首相-GEN:SG　個人名-GEN:SG　～も
prihvati-o　　resor-ø　　odbran-e.
引き受ける-APP:SG:M　部-ACC:SG　防衛-ACC:SG
「それでも、（彼は）黙ってゲアハルト・シュレーダー首相の**決断を認めて**、防衛部を引き受けた。（〈直〉...黙ってゲアハルト・シュレーダー首相の**を飲み込んで**...）」

以上のことから「知的な組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 思考	([思考対象の所有者]) GEN/ACC	[思考対象]ACC
〈人〉		(〈人/出来事/事柄〉)	〈事柄・抽象物/人〉

11.1.3.　「発見の組み合わせ」

このタイプの組み合わせはその時点まで存在を認識していなかった物や事柄を見つけることを表している。動詞は具体名詞とも抽象名詞とも自由に組み合わさる。「発見の組み合わせ」は感性的な側面が含まれ、知的な側面も含まれている。この特徴は同じ意味的関係を表す日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせと同様である（奥田 1968-1972[1983:105-106]）。

セルビア語でこの組み合わせを典型的に作る動詞は naći/pronaći「見つける」または otkriti「発見する」である。「発見の組み合わせ」は[発見のありか]という文法的な意味の要素を含んでいる。[発見のありか]には具体名詞も抽象名詞も現れる。このタイプの組み合わせにおける対格名詞の文法的な意味は[発見の対象]になり、そのカテゴリカルな意味は〈具体物〉または〈抽象物・事柄〉になる。

「発見の組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(319) David-ø **je naša-o** u radionic-i

個人名-NOM:SG 見つける-PST:3SG ～の中に アトリエ-LOC:SG

velik-u, debel-u kuk-u.

大きい-ACC:SG 重い-ACC:SG フック-ACC:SG

「ダヴィッドはアトリエに**大きくて太いフックを見つけた**。」(Sudbine)

(320) ...Aleksandar-ø Albreht-ø **je naša-o** **rođak-e** i

個人名－NOM:SG 見つける－PST:3SG 親戚-ACC:PL ～も

poznanik-e... u London-u, Ženev-i Pariz-u,

知人-ACC:PL ～の中に 地名-LOC:SG 地名-LOC:SG 地名-LOC:SG

Štokholm-u...

地名- LOC:SG

「...アレクサンダー・アルブレヒトはロンドン、ジュネーブ、パリ、ストックホルムなどに**親戚や知人を見つけた**...」(Sudbine)

次に抽象名詞と組み合わさる時の「発見」を表す実例を挙げる。

(321) ″ Odlično ″, kazah-ø kao da **je**

「すばらしい」 言う-AOR:1SG ～のように ～ように である-PRES:3SG

u složen-oj situacij-i **pronaš-la**

～の中に 複雑な-DAT:SG 状況-DAT:SG 見つける-APP:F:SG

dobitnič-k-i potez-ø.″

勝利の-ACC:SG 動き-ACC:SG

「彼女が複雑な状況の中に**勝利を見つけた**ように、私は「素晴らしい」と言った...」　(Glu pak)

動詞 videti「見る」は基本的な意味で「感性的な組み合わせ」を作るが、このタイプの 3 つの要素の構造に入ると、「発見の組み合わせ」を作る。それに対し、同じ意味の動詞 gledati「見る」はこのような構造を成さず、「感性的な組み合わせ」だけ作る。作る可能性があるのは、その不完了体の動詞 ugledati「見かける/見つけだす」である。

(322) Pre　nek-i　dan-ø　**je**　u　novin-ama
～前に ある-ACC:SG　日-ACC:SG　である-PRES:3SG　～の中に　新聞-LOC:PL
vide-o　njen-u　slik-u.
見る-APP:M:SG　彼女の-ACC:SG　写真-ACC:SG
「数日前に（彼は）写真に**彼女の写真を見た**。」(Ponedeljak)

(323) I　t-u　**sam**　nakaznost- ø　prv-i
～も　その-ACC:SG　である-PRES:1SG　見苦しさ-ACC:SG　一番目-ACC:SG
put-ø　**vide-la**　u　ov-oj
～回-ACC:SG　見る-APP:F:SG　～の中に　この-LOC:SG
blagosloven-oj　zemlj-i.
恵む-PPP:SG:F:LOC　国-LOC:SG
「**その見苦しさを**この恵まれた国に**見た**のは初めてだった。」(Kronika palanačkog groblja)

ここで述べた現象は「感性的な組み合わせ」と「発見の組み合わせ」の連続性を見せている。

そして、類似した傾向は動詞 pročitati「読みきる」や他の感性的動詞に関しても言える。次の例では「発見」の他に誰かの精神的状態の解釈またはその分析というニュアンスも含まれるので、「知的な」側面も含まれていると言える。

(324) **Pročita-o je**　sažaljenj-e　u　njen-im　oč-ima.
読み切る-PST:3SG　哀れ-ACC:SG　～の中に　彼女の-LOC:PL　目-LOC:PL

「彼女の目の中に哀れを読み取った。（〈直〉...哀れを読み切った。）」

このような例は「感性的な組み合わせ」、「知的組み合わせ」と「発見の組み合わせ」の相互連続性を見せている。

また、同じ現象は動詞 prepoznati 「認識する」、primetiti「気づく/認める」との組み合わせにおいても見られる。

以上のことから「発見の組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 発見	[発見物のありか]u+LOC	[発見の対象]ACC
〈人〉		〈具体物/出来事/事柄〉	〈具体物/事柄・抽象物〉

11.2. 「伝達の組み合わせ」

「伝達」を表す組み合わせには二通りの現れ方が見られると言える。一つは「通達」であり、もう一つは「教育目的の人への内容伝達」と言えよう。

このタイプの組み合わせは特定の情報の伝達を表すので、動詞が典型的的に言語活動や内容の伝達活動を表し、対格名詞は抽象名詞になる。

11.2.1. 「通達」

「通達」を表す組み合わせは日本語でよく見られるが、セルビア語ではもっと限られている。「父の病状を尋ねる」、「誰かの関係を話す」などは日本語で普通に見られるヲ格名詞と動詞との組み合わせであるが、セルビア語ではこういった関係を多くの場合前置詞句と動詞との組み合わせで表す。例えば、pitati za očevu bolest「父の病状を尋ねる」の場合 za（～のために）と対格名詞からの前置詞句になり、また、govoriti o nečijem odnosu「誰かとの関係について話す」の場合は o（～について）と所格名詞との前置詞句との組み合わせを成す。言語活動を表す動詞は典型的に o（～について）と所格名詞からなる前置詞句と動詞と組み合わさる。

それでも、「通達」を表す組み合わせはセルビア語にも見られるので、別のカテゴリーとして立てる必要がある。対格名詞は抽象的であり、そのカテゴリカルな意味は主に〈事柄〉または〈状態〉になると言える。これらが[主体]とは別に存在している〈事柄〉または〈状態〉であるために、それに向かう活動の対象性も含まれることは重要な特徴である。したがって、その文法的な意味は「伝達対象］になる。このタイプの組み合わせでは［伝達の相手］という文法的な意味を表す要素がその構造に入っている。［伝達相手］を表す要素は典型的

に与格の人名詞である。この要素の存在は「通達の組み合わせ」を「認識の組み合わせ」と構造上区別する根拠になっている。

セルビア語で「通達」を表す動詞は次のようになる。

preneti「伝える」、izneti「述べる」、objasniti「説明する」、opisati「記述する」、ispričati 語る 、predavati「教える」

次に、「通達」を表す実例を挙げる。

(325) ″Objasni-o vam je i rizik-ø
説明する-APP:M:SG あなた-DAT:SG である-PRES:3SG ～も 危険-ACC:SG
ko-me se izlaže-ø vaš-a
REL(which)-DAT:SG REFL さらす-PRES:3SG あなたの-ACC:SG
žen-a ？″
妻- NOM:SG
「（彼は）あなたに奥様が身をさらしている危険を説明してあげましたか。
（（彼は）あなたにあなたの妻が身をさらしている危険を説明しましたか。）」(Besnilo)

(326) Sinhu-a je u celini prenela
新華社-NOM:SG である-3SG ～の中に 完全-LOC:SG 伝える-APP:F:SG
sv-e rezultat-e izbor-a,...
全ての-ACC:PL 結果-ACC:PL 選挙-GEN:PL (Politika)
「新華社は完全に選挙の全ての結果を伝えた...」

(327) ...ispriča-la mi svoj-u životn-u prič-u.
語る-APP:F:SG 私-DAT:SG 自分の-ACC:SG 人生-ACC:SG 話-ACC:SG
「...（彼女は）私に自分の人生の話を語った。」(Svet)

以上のことから「通達の組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 通達	[伝達相手]DAT	[伝達対象]ACC
〈人〉		〈人〉	〈事柄/状態〉

11.2.2. 「教育目的の内容伝達」

限られた場合においては[伝達相手]という文法的な意味の要素は与格だけでなく、対格を取ることもある。この傾向は主に教育あるいは特定の知識を与える目的で人に〈内容〉を伝達する文脈において見られる。したがって、教育または特定の知識を与える目的の人への〈内容〉の伝達というのは「伝達」の特殊な現れ方として挙げられる。このタイプの組み合わせでは[伝達の相手]という文法的な意味の要素は前置詞なし対格名詞を取る。そして、その[伝達対象」も同じく前置詞なし対格名詞を取る。この要素のカテゴリカルな意味は〈内容〉になると言える。この意味的関係を表す動詞の数が限られているが、対格名詞との組み合わせにおいて意味上でも構文上でも特徴がはっきりしているために、「伝達」の下位カテゴリーとして立てる必要がある。 上に述べたように、[伝達対象]だけでなく、[伝達相手]を表す要素も対格名詞的な単位を取ることが際立った特徴である。 [伝達対象]を表す要素は与格の名詞的な単位で表されることもある。対格を取る名詞的な単位になる場合は二重対格構造を成す。この構造はスラブ語の中でもセルビア語の特殊な構造である。

奥田(1968-1972)ではこのような意味的カテゴリーは特に立てていないが、セルビア語では際立った特徴を持つ構造になるために、本研究では立てる必要がある。

この意味的関係を表す動詞には次のようなものがある。

podučiti/podučavati、poučiti/poučavati、učiti/naučiti 「教える」

教育目的の伝達の実例を次に挙げる。

(328) U Carigrad-u **ga** **je**
～の中に 地名-LOC 彼-ACC:SG である-PRES:3SG
jedan-ø oficir-ø... **poučava-o** i astronomij-u.
一人-NOM:SG オフィサー-NOM:SG 教える-APP ～も 天文学-DAT:SG
「コンスタンティノープルでは一人のオフィサーが**彼に天文学を教えていた**。
(〈直〉...**彼を天文学を教えていた**。)」(Derviš i smrt)

この意味的関係を表す組み合わせの構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 教育目的の伝達	[伝達相手]ACC	[伝達対象]ACC/DAT
〈人〉		〈人〉	〈内容〉

11.3.　「態度を表す組み合わせ」

ここまで記述した意味的関係を表す組み合わせに比べると、このタイプの組み合わせが物事あるいは特定の人に対する[主体]の態度を表すことは重要な特徴である。態度というのは、[主体]の感情、評価、判断などを含む。その態度の[対象]になり得るもののカテゴリカルな意味は〈物〉、〈事柄〉、〈現象〉、〈人〉等、多様である。このように、態度を表す動詞が多様なカテゴリカルな意味の名詞と比較的に自由に組み合わさる傾向も「態度の組み合わせ」の重要な構造上の特徴として挙げられる（奥田 1968-1972[1983:113]）。このことは日本語に関してもセルビア語に関しても言える。「認識の組み合わせ」の場合もそうであるが、セルビア語における「態度の組み合わせ」は日本語ほど生産的でないが、特別の意味的関係を表すカテゴリーとして立てる必要がある。対象性が低くなればなるほど動詞と対格名詞が組み合わさり難くなることはセルビア語の特徴であると言える。

このタイプの組み合わせも次のように、三通りの現れ方が見られる。

・「感情的な態度の組み合わせ」　voleti knjige「本を好む」

・「知的な態度の組み合わせ」　smatrati nekoga dobrom osobom「誰かを良い人だとみなす」

・「表現的な態度の組み合わせ」　hvaliti dete「こどもをほめる」

11.3.1.　「感情的な態度の組み合わせ」

このタイプの組み合わせでは動詞が[対象]に向かう感情を表している。ヲ名詞のカテゴリカルな意味は〈物〉、〈人〉、〈事柄〉など多様である。その文法的な意味は[感情の対象]であると言える。人間の感情的な態度は多様な種類の[対象]に向かう以上、対格名詞のカテゴリカルな意味には特に制限がないと言える。このことは構造上の重要な特徴であると言える。ただし、セルビア語では感情的な態度を表す動詞の中に対格名詞でなく、属格名詞（bojati se zmija「蛇を恐れる」）、与格名詞（zavideti nekome「誰かをうらやましく思う」）または前置詞句を求めるもの（uživati u pešačenju「ハイキングを楽しむ」、zazirati od laži 「うそを厭う」も相当ある。

「感情的な態度」を表す動詞には次のようなものが見られる。

voleti「愛する/好む」、zavoleti「好きになる」、 mrzeti「憎む」、 zamrzeti「ひどく嫌いになる」、prezirati「ひどく嫌う」、simpatisati「愛着を感じる」、 poštovati「尊敬する」、ceniti「高く評価する」、uvažavati「敬う/認める」、 obožavati「あこがれる」、 sažaljevati「哀れむ」、žaliti「気の毒に思う」、potcenjivati「軽蔑する」

「感情的な態度」を表す組み合わせの実例を次に挙げる。

(329) Vole-o　　ju　　je　　i

愛する-APP:M:SG　　彼女-ACC:SG　　である-PRES:3SG　　～も

sažaljeva-o　　istovremeno.

哀れむ-APP:M:SG　　同時に

「**彼女を愛する**と同時に**哀れんでもいた**。」(Ruski prozor)

(330) Sport-ø　　sam　zavole-la　　uz　　oc-a...

スポーツ-ACC:SG　　好きになる-PST:1SG　　～の傍らに　　父-ACC:SG

「父の傍らに**スポーツが好きになった**...（〈直〉...**スポーツを好きになった**...）」

(331) A　　tvoj-ø　　sud-ø　　sam

そして　　あなたの-ACC:SG　　判断-ACC:SG　　である-PRES:1SG

uvek　　ceni-o...

いつも　　評価する-APP:M:SG

「そして、（私は）**あなたの判断を**いつも**高く評価していた**...」

(Mansarda)

感情的な態度を表す動詞には感情的な態度を表しながら評価的なニュアンスを含むものもある。このタイプの動詞は poštovati 「尊敬する」、ceniti「高く評価する」、uvažavati「敬う/認める」、sažaljevati「哀れむ」、žaliti「気の毒に思う」、potcenjivati「軽蔑する」のような動詞である。また、評価的なニュアンスが感情的な側面より強い動詞がある。これらは negirati「否定する」、potvrditi「肯定する」、ignorisati「無視する」のような動詞である。このタイプの動詞を含む実例を以下に挙げる。

(332) ...ona　　je negira-la　　učešć-e　　u　　prevar-i...

彼女-NOM:SG　否定する-PST:3SG　参加-ACC:SG　～の中に　詐欺-LOC:SG

「...彼女は詐欺への**参加を否定していた**...」(Politika)

(333) Premijer-ø　Bler-ø　　je　　potpuno ignorisa-o

首相-NOM:SG 個人名-NOM:SG である-PRES:3SG　完全に　否定する-APP:M:SG

protest-e　i　zahtev-e　njihov-ih　učesnik-a.

デモ-ACC:PL　～も　要求-ACC:PL　それらの-GEN:PL　参加者-GEN:PL

「ブレア首相は**デモ**およびそれらの参加者の**要求を**完全に**無視していた**。」

(Politika)

もっぱら感情的な態度を表す組み合わせも評価的なニュアンスが含まれる組み合わせも合わせて広義の「感情的な態度の組み合わせ」として扱うことができると考えられる。

このタイプの組み合わせでは[感情の内容]という文法的な意味の要素が現れることがある。この要素のカテゴリカルな意味は〈人〉、〈事柄〉または〈抽象物〉になることが多い。このような要素の存在は「態度を表す組み合わせ」を「認識の組み合わせ」または「伝達の組み合わせ」と区別できる、構造上の重要な特徴である。「感情的な態度の組み合わせ」の場合、この要素は主に前置詞 kao「～のように」と対格名詞との前置詞句になる。次の実例においてはそうである。

(334) Ali,　sv-e　　što　　je dolazi-lo　od

しかし　全て-ACC:SG　REL(what)-ACC:SG　来る-PST:3SG　～から

Zorke　on　je poštovao　kao　nek-i

個人名-GEN:SG　彼-NOM:SG　尊敬する-PST:3SG　～のように　一種の-ACC:SG

fetiš-ø　kao　svetinj-u.

フェティッシュ--ACC:SG　～のように　神聖-ACC:SG

「しかし、彼はゾルカからあふれでていた**ものを全てを**一種のフェティッシュとして、神聖として**尊敬していた**。」(Došljaci)

以上のことから「感情的な態度の組み合わせ」を次にように一般化することができる。

[主体]NOM	V 感情的	[感情の対象]ACC	[感情の内容]
〈人〉		〈物/人/事柄〉	〈人/事柄/抽象物〉

11.3.2. 「知的な態度の組み合わせ」

「知的な態度の組み合わせ」は[主体]の思考活動の結果としての特定の[対象]に対する判断的な態度を表している。このタイプの組み合わせを作る動詞の数はとても限られているが、主に思考または判断を表すものである。これらの動詞には smatrati「みなす」、oceniti「評価する/判断する」、protumačiti「解釈する」、proanalizirati「分析する」のようなものがある。「知的な態度の組み合わせ」の特徴は構造に三つ目の要素、[判断の内容]を表す要素を含むことである。前節の「感情的な態度の組み合わせ」に関しても言えるように、この要素は「態度を表す組み合わせ」の全てに見られるものであり、このタイプの組み合わせを他の意味的カテゴリーと区別させる要素になる。この要素のカテゴリカルな意味は〈人〉、〈物〉、〈事柄〉または〈抽象物〉になる。対格名詞のカテゴリカルな意味も〈人〉、〈物〉、〈事柄〉または〈抽象物〉になり、その文法的な意味は[思考・判断の対象]になる。したがって、このタイプの組み合わせは動詞の種類が限られているが、他の要素の意味的性質には制限がほとんどないと言えよう。このことも構造上の重要な特徴として扱うことができる。

「知的な態度の組み合わせ」を代表的に作る動詞 smatrati「みなす」の場合、[思考・判断]を表す要素は具格名詞または za 前置詞（～のために）と対格との前置詞句になる。次に挙げる実例ではそうである。

(335) Doktor-ø Vajs-ø je sv-e egzaktn-e
博士 個人名-NOM:SG である-PRES:3SG 全て-ACC:PL 精密な-ACC:PL
nauk-e smatra-o zanat-ima, dakle neč-im
科学-ACC:PL みなす-APP:M:SG 工芸-INST:PL つまり 何か-INST:SG
neintelektualn-im i nespekulativn-im,...
非知的-INST:SG ～も 非思索的-INST:SG
「ヴァイス博士は全ての精密化学を工芸、つまり何か非知的で非思索的なものとみなしていた...」(Sudbine)

(336) Svoj-u lepot-u je smatra-la za talenat-ø;...
自分の-ACC:SG 美しさ-ACC:SG みなす-PST:3SG ～のために 才能-ACC:SG
「彼女は自分の美しさを才能とみなしていた、...」(Došljaci)

そして、oceniti「評価する/判断する」、protumačiti「解釈する」、proanalizirati「分析する」のような動詞は前置詞 kao「～のように」と対格名詞の前置詞句のという形の[思考・判断の内容]を表す要素を取ることが多い。

(337) Kostjurin-ø nije mrze-o Pavl-a, ali ga
個人名-NOM:SG 憎む-PST:NEG:3SG 個人名-ACC:SG しかし 彼-ACC:SG
je oceni-o u sebi kao drsk-og,
評価する-PST:3SG ～の中に 自分-LOC:SG ～のように 厚かましい-ACC:SG
brbljiv-og, oficir-a,...
口の達者な-ACC:SG 士官-ACC:SG
「コスチューリンはポールを憎まなかったが、自分の中では彼を厚かましくて口の達者な士官として評価した...」(Seobe)

(338) Prv-i je ″Njujork-ø tajms-ø ″ ov-aj
最初-NOM:SG である-PRES:3SG ニューヨーク・タイムズ この-ACC:SG
dokument-ø protumačio kao ponud-u
書類-ACC:SG 解釈する-APP:M:SG ～のように 申し出-ACC:SG
Srbij-e za podel-u Kosov-a...
セルビア- GEN:SG ～のために 分割-ACC:SG 地名-GEN:SG
「最初にこの書類をセルビアのコソボの分割の申し出のように解釈したのはニューヨーク・タイムズだった...」(Politika)

日本語では動詞「思う」が代表的に「知的な態度の組み合わせ」を作る動詞であると言えるが、セルビア語では「思う」に相当する動詞 misliti はそうではない。「知的な組み合わせ」に関しても述べたが、この動詞は前置詞なし対格名詞を取ることができず、常に前置詞句を取る。思考過程を代表的に表す動詞 misliti「思う」と razmišljati「考える」は前置詞なし対格名詞を取らないことはセルビア語の特徴であると言える。前にも述べたように、このことは対象性の程度と対格名詞との組み合わさり方との関係によると考えられる。

11.3.2.1. 「知的な組み合わせ」と「知的な態度の組み合わせ」の連続性

「知的な態度の組み合わせ」は当然「知的な組み合わせ」と緊密な関係を持つ。同じ語源の動詞が不完了体で「知的な組み合わせ」を表すが、完了体で「知的な態度の組み合わせ」を作ることは興味深い現象である。このことは「知的な組み合わせ」と「知的な態度の組み合わせ」との連続性を物語っていると思われる。例えば、不完了体の動詞 tumačiti「解釈する」や analizirati「分析する」は代表的に「知的な組み合わせ」を作るが、それらの完了体の対である protumačiti「解釈する」や izanalizirati「分析する」 は「知的な態度の組み合わせ」を表す文脈を作ることが多い。「知的な態度の組み合わせ」を作る場合は[思考・判断の内容]を表す要素も含む。このことは次に挙げる実例からも見られる。実例(339)は「知的な組み合わせ」を表すのに対し、実例(340)は「知的な態度の組み合わせ」を表すものである。

(339) Kako **je** još **tumači-o** **simbolik-u**
どのように である-PRES:3SG ～さらに 解釈する-APP:M:SG 象徴性-ACC:SG
svog-a sn-a?
自分の-GEN:SG 夢-GEN:SG
「（彼は）他にどのように自分の夢の**象徴性を解釈していた**のか。」
(Peščanik)

(340) **T-u činjenic-u** **protumači-la je** kao dokaz-ø
その-ACC:SG 事実-ACC:SG 解釈する-PST:3SG ～のように 証拠-ACC:SG
da njen-i sugrađan-i ″dobro zna-ju šta-ø
～ように 彼女の-NOM:PL 市民-NOM:PL よく 知る-PRES:3PL 何-NOM:SG
je istin-a, a šta laž-ø″.
である-PRES:3SG 真実-NOM:SG そして 何-NOM:SG うそ-NOM:SG
「（彼女は）仲間の市民たちが何が真実であり何がうそであるかよく知っている証拠のように**その事実を解釈した**。」(Politika)

11.3.2.2. 「感性的な組み合わせ」と「知的な組み合わせ」における「観察する」の相互性

「感性的な組み合わせ」も「知的な組み合わせ」も作ることができる動詞 promatrati や posmatrati「観察する/監視する」は[思考・判断の内容]を表す要素で広げられる場合、「知的な態度の組み合わせ」を表すようになる。この現象はこれらの三つの意味的カテゴリーの相互性を見せている。そして、「感性的な組み合わせ」または「知的な組み合わせ」の「知的な態度の組み合わせ」への移行の現象も見せていると言える。このように、次に挙げる実例(342)は「感性的な組み合わせ」の例であるが、同じ人名詞と組み合わさってもその前に挙げる実例(341)は「知的な態度の組み合わせ」を示すものである。

(341) Svoj-u žen-u i svoj-u dec-u ja
自分の-ACC:SG 妻-ACC:SG ～も 自分の-ACC:SG 子供-ACC:SG 私-NOM:SG
nisam posmatra-o kao suprotnost-ø Crn-ima.
監視する-PST:NEG:1SG ～のように 反対-ACC:SG 黒人-DAT:PL
「私は自分の妻と自分の子供たちを黒人とはちがって監視しなかった。」
(Afrika)

(342) Pognu-o se prema men-i i pažljivo
かがむ-PST:3SG ～に向かって 私-DAT:SG ～も 注意して
me posmatra-o kroz naočar-e.
私-ACC:SG 観察する-APP:M:SG ～を通して 眼鏡-ACC:PL
「私の方に身をかがめて、注意して私を眼鏡を通して観察していた。」
(Šetnje pored reke)

感性的動詞である gledati「見る」も[思考・判断の内容]を表す要素を伴うことによって「知的な態度の組み合わせ」を作る傾向も多少見られるが、この仕組みは日本語の動詞「見る」の場合ほど生産的ではない。

「知的な態度の組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 知的	[思考・判断の対象]ACC	[思考・判断の内容]
〈人〉		〈物/人/事柄〉	〈物/人/事柄〉

11.3.3.　「表現的な態度の組み合わせ」

このタイプの組み合わせも[主体]の[対象]に対する態度を表す。その態度は感情的であっても判断的または評価的であっても、言葉を使って表現できる動詞に主に現れる。「表現的な態度」を表す動詞は次のように見られる。

hvaliti/pohvaliti「ほめる」、grditi/izgrditi「叱る」、kritikovati「批判する」、kuditi「とがめる」、 uvrediti/vrđati「けなす」、proklinjati「ののしる」、optužiti/optuživati「せめる」、zadirkivati「からかう」

対格名詞のカテゴリカルな意味はほとんど〈人〉であるが、〈物〉や〈抽象物〉にもなることができる。その文法的な意味は[感情・判断の対象]になる。

このタイプの組み合わせも構造に三つ目の要素を伴うことは他の「態度を表す組み合わせ」との共通点である。ただし、「感情的な態度の組み合わせ」の場合もそうだったが、この要素の存在は必須的ではない。それに対し、「知的な態度の組み合わせ」の場合、この要素が含まれないと、その組み合わせが成り立たないという状況が見られる。そして、「感情的な態度の組み合わせ」と「知的な態度の組み合わせ」の場合、感情や思考・判断[内容]を表す要素が具格名詞または名詞句であるのに対し、「表現的な態度の組み合わせ」の場合、この要素は名詞句または従属節になる。この特徴を三つの「態度を表す組み合わせ」の間での構造上の特殊性のように扱うことができる。「表現的な態度の組み合わせ」において[内容]を表す要素の文法的な意味を[表現の内容]のよう扱うことができる。

「表現的な態度の組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(343) **Hvali-o je**　　Bosanc-e　　$\boxed{\text{što su}}$

ほめる-PST:3SG　民族名-ACC:PL　～ので　である-PRES:3PL

$\boxed{\text{jednostavn-i i uzdržljiv-i i što im}}$

単純だ-NOM:PL　～も　遠慮深い-NOM:PL　～も　～ので　彼ら-DAT:PL

$\boxed{\text{sirotinj-a ni-je nasrtljiva}}$...

貧乏人-NOM:SG　である-PRES:NEG:3SG　乱暴-NOM:SG

「（彼は）$\boxed{\text{単純で遠慮深く、貧乏人は乱暴でないと}}$、**ボスニア人をほめていた...**（$\boxed{\text{単純で遠慮深く、貧乏人は乱暴でないので}}$**ボスニア人をほめていた...**）」(Travnička hronika)

(344) Glavn-i hašk-i tužilac-ø Karl-a del Ponte ...

主任の-NOM:SG 地名の-NOM:SG 検事-NOM:SG 個人名-NOM:SG

je nedavno **kritikova-la** hrvatsk-u

である-PRES:3SG 最近 批判する-APP:F:SG 国名の-ACC:SG

vlast-ø zbog njen-e nekooperativnost-i...

政府-ACC:SG ～ので それの-GEN:SG 非協力関係-GEN:SG

「ハーグの（国際戦犯法廷の）主任検事であるカルラ・デル・ポンテ氏は最近クロアチアの政府を非協力関係のために**批判した**...」(Politika)

(345) ...pa kad **je** nek-a gospođ-a

そして ～ときに である-PRES:3SG ある-NOM:SG 夫人-NOM:SG

na pijac-i jedn-u Kameničank-u

～の上に 市場-LOC:SG 一人-ACC:SG 地名の住民-ACC:SG

pohvali-la da je iznenađujuće

ほめる-APP:F:SG ～ように である-PRES:3SG 驚くほど

kulturn-a,...

教養のある-NOM:SG

「そして、ある婦人は驚くほど教養があると、一人のカメニッツァの女性を市場で**ほめた**ときに...」(Politika)

以上述べたことから「表現的な態度の組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 知的/感情的	[感情・判断の対象]ACC	[表現の内容]従属節/前置詞句
〈人〉		〈物/人/事柄〉	〈物/人/事柄〉

11.4. 「モーダルな態度を表す組み合わせ」

心理活動を表す動詞が対格名詞と組み合わさり、[主体]の[対象]に対するモーダルな態度を表すことがある。セルビア語では、例えば tražiti pomoć「手伝いを求める」、 želeti uspeh「成功を望む」、planirati putovanje「旅行を予定する」等のような組み合わせは「モーダルな態度を表す組み合わせ」の例である。

このタイプの組み合わせについては構造に[主体]と[対象]の他に態度の[内容]を表す三つ目の要素を含めず、そのことがこのタイプの組み合わせを「態度を表す組み合わせ」と区別させる特徴であると言える。

また、「モーダルな態度を表す組み合わせ」を作る対格名詞には動作性を含む名詞が多いことが特徴である。動作性を含む名詞の他に、多少〈具体物〉または〈抽象物〉や〈状態〉を表す名詞との組み合わせも見られるが、これらの数は限られる。

「心理的なかかわり」の全ての意味的カテゴリーに関しても同じことが言えるが、「モーダルな態度を表す組み合わせ」を作る動詞と対格名詞との組み合わせの成立はセルビア語の場合、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせほど生産的ではない。セルビア語ではこういった意味的関係を前置詞句で表すことが多い。また、セルビア語では思考動詞の代表的なものである misliti「思う」 や razmišljati「考える」 がこのタイプの組み合わせを作らないことは日本語との相違点であると言える。[78]

「モーダルな態度を表す組み合わせ」には「要求的な組み合わせ」と「意図的な組み合わせ」という二通りの現れ方が見られる。

11.4.1. 「要求的な組み合わせ」

このタイプの組み合わせでは[主体]の[対象]に対する要求、願望または禁止などが表れる。「要求的な組み合わせ」を作る動詞には次のようなものがある。

želeti「望む」、poželeti「欲しくなる」、 zabraniti/zabranjivati「禁止する」、tražiti「もとめる/要求する」、 dozvoliti「認める/許可する」、 oprostiti「許す」、očekivati 「期待する」、narediti「命令する」

このタイプの組み合わせは[相手]を表す要素で広げられることが多い。この特徴は「所有関係」における「授受」との類似していると考えられる。しかし、「授受」とは違って、この

[78] 奥田が指摘しているように、思考動詞「思う」や「考える」を含む「実行を思う」や「帰国を考える」のような、動作名詞との組み合わせは「モーダルな態度のむすびつき」となり（奥田 1968-1972[1983:131-132]）、これらの動作名詞を抽象化すると、「実行のことを考える」または「帰国のことを考える」のような組み合わせは「知的なむすびつき」の例であると言える。

タイプの組み合わせにおける[相手]というのは、対格名詞で示される動作の主体でもあることは重要な特徴である。このことに関しては奥田が指摘している（奥田 1968-1972[1983:132]）。セルビア語でこのタイプの組み合わせにおける[要求の相手]という要素は代表的には前置詞 od（～から）と属格名詞との前置詞句または与格名詞になる。

「要求的な組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(346) ...**naredi-ø** **oduzimanj-e** životinj-a ukoliko se
命令する-APP:M:SG 没収-GEN:SG 動物-GEN:SG ～ば REFL
nije postupi-lo po rešenj-u inspektor-a, koj-i
行動する-PST:3SG ～の上に 決定-LOC:SG 検査官-GEN:SG REL(which)-NOM:SG
je zabrani-o ili **naredi-o** **mer-u**
禁止する-PST:3SG ～か 命令する-APP:M:SG 対応-ACC:SG
otklanjanj-a nedostatak-a.
除去-GEN:SG 欠陥-GEN:SG
「...欠陥の除去という**対応を命令した**または**禁止した**検査官の決定に応じて行動しなかった場合、動物の**没収を命令した**...」(ZAKON O DOBROBITI ŽIVOTINjA)

「要求的な組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 要求・願望・禁止	[要求の対象]ACC	[要求の相手]GEN＋名詞/DAT
〈人〉		〈動作/物/事柄/状態〉	〈人/機関〉

11.4.2. 「意図的な組み合わせ」

このタイプの組み合わせは[主体]の[対象]に対する意図、つまり、予定、計画や約束などが表される。このタイプの組み合わせを作る動詞の数は非常に限られており、ほとんど planirati「予定する/計画する」、isplanirati「企てる/計画する」、pokušati/pokušavati「試みる」、utvrditi「定める」、odrediti「規定する」、obećati「約束する」である。対格名詞は代表的に動作名詞であるが、多少〈事柄〉や〈状態〉を表すものも見られる。

「意図的な組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(347) Tvrd-e　　da　　je　　ona　　unapred
主張する-PRES:3PL　～ように　である-PRES:3SG　彼女-NOM:SG　事前に
isplanira-la　　vojn-u　　akcij-u　　u
企てる-APP:F:SG　　軍事の-ACC:SG　行動-ACC:SG　～の中に
Južn-oj　　Osetij-i.
南の-LOC:SG　地名-LOC:SG
「（グルジアは）事前に南オセチアでの**軍事行動を企てた**と主張している。」
(Radio Televizija Srbije)

「意図的な組み合わせ」を次のように一般化することができる。

[主体]NOM	V 意図・計画・約束	[意図の対象]ACC
〈人〉		〈動作/物/抽象物/状態〉

第十二章　状況的な組み合わせ

「状況的な組み合わせ」は対象的な関係を表さないので、特殊な意味的関係になると言える。ここまで述べた意味的カテゴリーの全てでは対象性が認められたが、このタイプの組み合わせは大いに異なる。また、他動詞だけでなく、自動詞とも組み合わさることが可能なのは重要特徴である。セルビア語ではこのタイプの組み合わせは他の意味的カテゴリーに比べると、それほど頻繁に見られないので、対格名詞と動詞との組み合わせの周辺的な現われ方であるとも考えられる。それでも、構造上の際立った特徴を持つ以上、対格名詞と動詞との組み合わせの体系に必ず含める必要がある。また、今まで分析した意味的カテゴリーは文の成分という観点から考えると、対格名詞は常に「直接目的語」という機能を果たしていたが、「状況的な組み合わせ」はそうでなく、「補語」または「修飾語」という機能をはたしているものもあることはこのタイプの組み合わせの特殊性を示している。

セルビア語では「状況的な組み合わせ」を大きく二つのグループに分けることができる。これらは「状況的空間・時間を表す組み合わせ」と「状況的量を表す組み合わせ」になる。この場合の「状況」というのを広義の「状況」として扱うことがふさわしい。「状況的空間・時間を表す組み合わせ」を作る動詞の数は非常に限られているが、「状況的量を表す組み合わせ」を表す組み合わせは逆に対格名詞の特殊化が大いに見られ数詞になる場合が多い。それぞれの作例を、下位カテゴリーも含めて、次に挙げる。

Ⅰ「状況的空間・時間を表す組み合わせ」

- 「空間を表す組み合わせ」
  - 「離れる過程を表す組み合わせ」：

    napustiti sobu「部屋を出る」、 ostaviti ostrva「島を離れる」
  - 「通過を表す組み合わせ」：

    proći šumu「森を通る」
- 「時間を表す組み合わせ」

  provesti letnji raspust 「夏休みを過ごす」

Ⅱ「状況的量を表す組み合わせ」

- 「狭義の量を表す組み合わせ」

  kupiti kilogram-ø jabuk-a「りんごを一キロ買う」
- 「物事の重さ、物事の価値・値段 を表す組み合わせ」

  težiti jedan-ø kilogram-ø「一キロの重さがある」

・「時間的量を表す組み合わせ」

provesti jedno veče u hotelu 「ホテルで一晩を過ごす」

potrošti jedan sat na dogovor「打ち合わせに一時間を費やす」

・「空間の量を表す組み合わせ」

preći malu razdaljinu 「わずかな距離を渡る」

pretrčati dva kilometra 「二キロメートル走る」

12.1. 「状況的な空間・時間を表す組み合わせ」

12.1.1. 「空間を表す組み合わせ」

このタイプの組み合わせでは対格名詞は常に〈空間〉を表すものになる。動詞は移動動詞になり、特定の〈空間〉から離れる過程を表す動詞と特定の〈空間〉を通過する過程を表す動詞という二つのタイプの動詞が見られる。

離れる過程を表す動詞には代表的に napustiti「離れる」と ostaviti「置いていく」が見られる。「離れる過程を表す組み合わせ」には次のような例が見られる。

(348) On-ø je napusti-o učionic-u.

彼-NOM:SG 離れる-PST:3SG 教室-ACC

「彼は教室を離れた。」

(349) Ostavi-li smo arhipelag-ø Los-ø, produži-li

動き続ける-PST:1PL 列島-ACC:SG 地名-ACC:SG 続く-APP:M:PL

kroz več-e.

～を通して 夜-ACC:SG

「（私たちは）ロス列島を後にして、夜中ずっと進んでいた。」(Afrika)

「離れる過程を表す組み合わせ」における対格名詞の文法的な意味は[出発点]になると言える。それでも、ある程度の対象性も認められる。このタイプの対象性に関しては奥田も「町を歩く」や「谷間を流れる」のような組み合わせのところで述べているが、この場合の〈空間〉名詞は単なる〈空間〉を表しているのでなく、動作が成り立つために必要な対象で

もあるとする（奥田 1968-1972[1983:144]）。奥田は「事務所を出る」や「岸を離れる」のような組み合わせのところでこのタイプの対象性に関しては特別に述べていないが、本論文の筆者は「離れる過程を表す組み合わせ」にもある程度の対象性が認められることが重要な特徴であると強調しておきたい。

以上のことから、「離れる過程を表す組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vintr/tr 移動	[出発点]ACC
〈人〉		〈空間〉

「通過を表す組み合わせ」を作る動詞は prelaziti/preći「渡る」、proći「通り過ぎる」、preplivati「泳ぎ渡る」や prepešačiti「歩きとおす」のようなものがある。対格名詞のカテゴリカルな意味は〈空間〉になる。その文法的な意味は[経路]になるが、「離れる過程を表す組み合わせ」と同様、ある程度の対象性が認められると言える。「通過を表す組み合わせ」の例を次に挙げる。

(350) **Preša-o sam** potom popreko cel-u prašum-u;
渡る-PST:1SG その後 ～を横切って 全体の-ACC:SG 熱帯雨林-ACC:SG
preko dv-e stotin-e kilomet-ara.
～以上 二-ACC:SG 百-ACC:PL キロメートル-GEN:PL
「その後、二百キロメートル以上の熱帯雨林の全体を横切って**渡った**。」

以上のことから「通過を表す組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vintr 移動	[経路]ACC
〈人〉		〈空間〉

対象性を含まないことは「状況的な組み合わせ」の重要な特徴であると述べたが、「空間を表す組み合わせ」はある程度対象性を含んでいるために、「状況的な組み合わせ」の中でも特殊なものであると言える。対象的な関係を表しているものと状況的なものの間の境界的な意味的カテゴリーとしても見ることができる。

12.1.2. 「時間を表す組み合わせ」

このタイプの組み合わせでは対格名詞が〈時間〉を表し、その文法的な意味を[状況的時間の規定]として扱うことができる。動詞には典型的には動詞 provesti「過ごす」が表れる。その他に動詞 prenoćiti「外泊する」や prespavati「寝て過ごす」との組み合わせも多少見られる。「時間を表す組み合わせ」の実例を次に挙げる。

(351) Popodn-eva　sam provodi-o　kod　njega
午後-ACC:PL　過ごす-PST:1SG　～のところに　彼-GEN:SG
u　apotec-i.
～の中に　薬局-LOC:SG
「彼の薬局で**午後を過ごしていた**。」(Proljeća Ivana Galeba)

(352) Zajedničk-i　smo uči-li,　zajedničk-i　provodi-li
共同して　勉強する-PST:1PL　共同して　過ごす-APP:M:PL
slobodn-e　časov-e,...
自由な-ACC:PL　時間-ACC:PL
「(私たちは) 一緒に勉強して、一緒に**自由な時間を過ごしていた**。」
(Proljeća Ivana Galeba)

「時間を表す組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vintr	[状況的時間の規定]ACC
〈人〉		〈時間〉

12.2.　「状況的量を表す組み合わせ」

12.2.1.　「狭義の量的関係を表す組み合わせ」

このタイプの組み合わせを本質的量的関係を表す組み合わせとして扱うことができる。したがって、組み合わさる動詞にはそれほど意味的制限がないが、主に[主体]の意志的な動作を表す他動詞である。組み合わさる名詞は常に〈量〉を表すものである。場合によっては、名詞でなく曲用を持った数詞になる。〈量〉を表す要素の他にはその〈量〉を種類の面で規定している属格名詞の要素も代表的に表れる。この要素の方がむしろ[対象]に近いものとして見られる。対格を取る名詞的な単位を文の成分という観点から見ると、「副詞的な補語」という機能を果たしている。したがって、その文法的な意味を[量の規定]として扱うことができる。

(353) Kupuje-ø　　kilogram-ø　　jabuk-a.

買う-PRES:３SG　　一キロ-ACC:SG　　りんご-GEN:PL

「りんご一キロを買っている。」

(354) Potroši-o　sam　　milion-ø　　dinar-a.

費やす-PST:1SG　　100 万-ACC:SG　　ディナール-GEN:PL

「100 万ディナールを費した。」

このタイプの組み合わせを次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vtr 動作	[量の規定]ACC	[対象]
〈人〉		〈量〉	〈物〉

12.2.2.　「物事の重さ、物事の価値・値段　を表す組み合わせ」

セルビア語では「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」が見られる。このタイプの組み合わせは自動詞と対格名詞とが組み合わさる点で特殊なものであると言える。また、動詞が［主体]の意志的な動作を表さないことも「狭義の量的関係を表す組み合わせ」

との相違点である。「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」を作る動詞はむしろ状態を表すものであり、koštati「値段がある」、stajati「かかる」、vredeti/imati vrednost「価値がある」、valjati「（高い）価値がある」と biti težak/težiti「重さがある」、meriti「計る」になる。対格名詞は前節で扱った「狭義的量的関係を表す組み合わせ」と同様、カテゴリカルな意味が〈量〉になる。その文法的な意味を[重さ・価値・値段の規定]として扱うことができる。この要素も文の成分という観点から見ると、「副詞的補語」になる。対格の数詞と量を表す対格名詞がともに動詞と組み合わさることが代表的に見られる。数詞といっても主に jedan/jedna/jedno「一」と dva/dve/dva「二」という曲用を持った数詞のことである。

(355) Ov-o　　tež-i　　jedan-ø　　kilogram-ø.

これ-NOM:SG　　重さがある-PRES:3SG　　一-ACC:SG　　キロ-ACC:SG

「これは一キロの重さがある。」

場合によっては数詞が省かれる文脈も考えられる。例えば、上に挙げた例文を Ov-o tež-i kilogram-ø.」というように言い換えることが可能である。

「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」を次のように一般化することができる。

[存在物]NOM	Vintr	[重さ・価値・値段の規定]ACC
〈物/抽象物〉		〈量〉

12.2.3.　「時間的量を表す組み合わせ」

対格名詞が時間だけでなく、その〈時間の量〉も表す場合、その組み合わせを「時間的量を表す組み合わせ」として扱うことができる。この傾向は日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせと類似していると言える（奥田 1968-1972[1983:147]）。なお、セルビア語では「時間を表す組み合わせ」に〈時間の量〉を表す修飾語がつくと、「時間的量を表す組み合わせ」になる傾向が見られる。このタイプの組み合わせを表す例には次のようなものがある。

(356) Proves-ti　　jedn-o　　več-e　　u　　Tokij-u

過ごす-INF　　一つ-ACC:SG　　晩-ACC:SG　　～の中に　　ホテル-LOC:SG

「東京で一晩を過ごす」

(357) Potroši-ti　jedan-ø　sat-ø　na　dogovor-ø

費やす-INF　一-ACC:SG　時間-ACC:SG　～の上に　打ち合わせ-ACC:SG

「打ち合わせに一時間を費やす」

(358) Prespava-ti　dv-e　noć-i　kod　prijatelj-a

寝て過ごす-INF　二つ-ACC:SG:　夜-GEN:PL　～のところに　友達-GEN:SG

「二晩を友達のところに泊まる（〈直〉夜の二を友だちのところに泊まる）」

このタイプの組み合わせを作る動詞には代表的に provesti「過ごす」、 prenoćiti「外泊する」、 prespavati「寝て過ごす」 、odsesti 「泊まる」などがある。ヲ格の名詞的な単位は数詞 jedan/jedna/jedno「一」または dva/dve/dva「二」[79]と時間を表す名詞との組み合わせになる。数詞 jedan/jedna/jedno「一」の場合はそれと組み合わさる名詞も対格を取るが、数詞 dva/dve/dva「二」の場合にはその後に来る名詞は対格でなく、属格名詞になる。この要素のカテゴリカルな意味を〈時間の量〉として考えられる。その文法的な意味は[時間の量の規定]になると言える。主格名詞の文法的な意味は[主体]になり、そのカテゴリカルな意味は代表的に〈人〉になるが、多少〈機関〉になる文脈も考えられる。

以上のことから、「時間的量の量を表す組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vtr	[時間の量の規定]ACC
〈人/機関〉		〈時間の量〉

12.2.4.　「空間の量を表す組み合わせ」

「空間の量を表す組み合わせ」を作る動詞は[主体]の意志的な移動動詞を表すものになり、全て自動詞である。対格名詞は代表的には距離あるいは経路を表し、距離/経路の長さを規定している要素に修飾される場合がある。その例を次に挙げる。

(359) Pre-ći　mal-u　razdaljin-u

渡る-INF　わずかな-ACC:SG　距離-ACC:SG

「わずかな距離を渡る」

[79] 以前述べたように、現代セルビア語ではこの二つの数詞しか曲用を持っている数詞として残っていない。「三」以上の数詞は既に曲用を持っていない。

また、「メートル」、「キロメートル」など、長さの測定単位が数詞で修飾される場合も、その数詞が対格を取る。修飾する数詞が jedan「一」以外の場合、長さの測定単位を表す名詞は属格になる。

(360) Pretrča-ti　dv-a　kilometr-a

走る-INF　ACC:SG　キロメートル-GEN

「二キロメートル走る（〈直〉キロメートルの二を走る）」

(361) Proputova-ti　stotin-e　kilomet-ara　voz-om

旅行する-INF　百-ACC:PL　キロメートル-GEN:PL　電車-INST:SG

「電車で数百キロメートル旅行する（〈直〉キロメートルの数百を電車で旅行する）」

それに対し、数詞 jedan「一」の場合は、数詞も長さの測定単位である名詞も対格になる。

(362) Skoči-ti　jedan-ø　metar-ø

跳ぶ-INF　一-ACC:SG　メートル-ACC:SG

「一メートル跳ぶ（〈直〉メートルの一を跳ぶ）」

したがって、対格名詞的な単位の文法的な意味を[距離・経路の量的規定]として扱うことができる。そのカテゴリカルな意味は〈距離・経路の量〉になる。

以上のことから「空間の量を表す組み合わせ」を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	Vintr	[距離・経路の量的規定] ACC
〈人〉		〈距離・経路の量〉

第十三章　外的状況を表す対格名詞的な単位

第七章から第十二章までに説明してきた意味的カテゴリーは全て対格名詞的な単位との組み合わせだったが、この第十三章で説明するタイプの対格名詞的な単位の現れ方については、対格名詞的な単位が直接に動詞と組み合わさるというのでない。つまり、この章で説明する用法では対格名詞的な単位が主語と述部で表される事柄を外から説明していると言える。この意味ではこの用法は日本語の状況語の用法に似ていると言える。そして、このタイプの名詞的な単位は文で表される事柄に対し補足的な情報を与えることが特徴である。第七章から第十二章までで扱った意味的カテゴリーにおける対格名詞的な単位は文中の機能が典型的には「直接目的語」または「副詞的補語」であったが、「外的状況を表す対格名詞」は「副詞的修飾語」になる。この用法において対格名詞的な単位が文から省かれてもその文が成り立つことが特徴であるので、名詞的な単位の一種の独立した現れ方であるとも言える。対象的な関係を表す組み合わせに比べると、この用法は周辺的であるとは言えるが、セルビア語の対格名詞的な単位の用法の特殊性を見せているために、特別に述べる必要がある。

このタイプの名詞的な単位には時間や期間を表すものと回数・頻度を表すものがある。

13.1.　「外的時間・期間を表す対格名詞的な単位」

このタイプの名詞的な単位は全て時間を表すものであり、その数が限られているので特殊化していると言える。この用法における代表的な名詞は dan「日」、 noć「夜」、 jutro「朝」、 veče「晩/夜」、 čas/tren「瞬間」、 popodne「午後」、 prepodne「午前」 になる。この用法では名詞が単独で現れることがほとんど見られず[80]、ほとんど連体修飾語を伴う。その連体修飾語は主に数詞 jedan「一」、prvi「一番目」、drugi「二番目」または形容詞的代名詞 ovaj/ova/ovo「これ」、taj/ta/to「それ」と onaj/ona/ono「あの」になる。その他に、svaki/svaka/svako「全ての」や neki/neka/neko「ある/特定の」という形容詞的代名詞を伴うこともある。[81]

(363) T-o　jutr-o　je kašlja-o　manje...

その- ACC:SG　朝-ACC:SG　咳をする-PST:3SG　～より少ない程度に

「（彼は）その朝（普通より）少ない程度に咳をしていた...（〈直〉彼はその朝を（普通より）少ない程度に咳をしていた...）」

[80] 多少は見られる。実例(364)はそうである。
[81] これらの連体修飾語については Gortan-Premk も述べている（Gortan-Premk:131)。

(364) Čas-ø kasnije... podig-li su je iz
瞬間-ACC:SG ～の後 持ち上げる-PST:3PL 彼女-ACC:SG ～から
naslonjač-a...
ひじ掛けいす-GEN:SG
「彼らは一瞬後彼女をひじ掛けいすから上げた...（〈直〉彼らは一瞬後を彼女をひじ掛けいすから持ち上げた...）」

この用法には動作の継続の長さを表すものも含められる。

(365) Gleda-li smo se jedan-ø dug-i tren-ø...
（顔を）見合わせる-PST:1PL:REFL 一-ACC:SG 長い-ACC:SG 瞬間-ACC:SG
「我々は互いに長い間顔を見合わせていた...（〈直〉我々は互いに一つの長い瞬間を顔を見合わせていた...）」

なお、対格名詞が ceo/čitav「完全の」という形容詞を伴うこともある。

(366) Cel-o popodn-e je gleda-o televizij-u.
完全の-ACC:SG 午後-ACAC:SG 見る-PST:3SG テレビ-ACC:SG
「一晩中テレビを見ていた。（〈直〉一晩中をテレビを見ていた。）」

(367) Čitav-u noć-ø govrio je o tom-e.
完全の-ACC:SG 夜-ACC:SG 話す-PST:SG ～について それ-LOC:SG
「一晩中それについて話していた。（〈直〉一晩中をそれについて話していた。）」(Gortan-Premk)[82]

この他に、序数詞 prvi/prva/prvo と drugi/druga/drugo という連体修飾語を伴うものもある。

[82] Gortan-Premk はこのタイプの組み合わせを実例(363)～実例(365)と違う性質のもの、つまり、量的時間的関係として位置付けている（Gortan-Premk:141）が、本論文の筆者はこのような実例が本質的に量的関係を表すものとは違うと考える。量的なニュアンスが認めらてもこのような実例を広義の期間や動作の継続の長さを表すものとして扱うことができるという立場である。そして、これらも主語と述部で表す事柄を外から説明している特徴を持っている点では前に挙げた実例と同じ意味的関係を成すと言える。

(368) S...　visin-e　ugleda-ø　prv-i　put-ø

～から　高さ-GEN:SG　見る-AOR:3SG　一番目-ACC:SG　～回-ACC:SG

Skararsk-o　jezer-o.

地名-ACC:SG　湖-ACC:SG

「高いところから初めてスカダル湖を見た。（〈直〉一回目をスカダル湖を見た。）」[83]

この用法における名詞のカテゴリカルな意味は〈時間・期間〉となり、その文法的な意味は[外的時間的状況]になると言える。したがって、「外的時間・期間を表す対格名詞」の用法を次にようにまとめることができる。

[外的時間的状況]ACC	
〈時間・期間〉	事柄

13.2.　「外的回数・頻度を表す名詞的な単位」

この用法において対格名詞的な単位は動詞が表す過程の回数や頻度を指定するものになる。対格名詞的な単位になるのは常に数詞 jedan「一」または数を表す名詞 stotina「百」、hiljada「千」と milion「100 万」である。その後に来る名詞は対格でなく属格を取り、名詞 put「～回/度」に限られるので、組み合わさる要素の特殊化の例であると言える。

(369) Stotin-u　put-a　ga　je　udari-o.

百-ACC:SG　～回-GEN:PL　彼-ACC:SG　叩く-PST:3SG

「彼を百回叩いた。」

(370) Hiljad-u　put-a　sam　t-i

千-ACC:SG　～回-GEN:PL　である-PRES:1SG　あなた-DAT:SG

ispriča-o　t-u　prič-u.

話す-APP:M:SG　その-ACC:SG　話-ACC:SG

[83] Gortan-Premk はこのようなものも量的関係を表すものとして位置付けている（Gortan-Premk:140）。

「その話をあなたに千回話した。」

「外的回数・頻度を表す名詞的な単位」の用法を次のようにまとめることができる。

［外的回数・頻度］ ACC	
〈回数〉	事柄

次の十四では第七章～第十三章で説明した対格名詞の用法を元に対格名詞と動詞との組み合わせの意味分類におけるカテゴリー間の相互関係に関して述べる。

第十四章　対格名詞と動詞との組み合わせの意味分類におけるカテゴリー間の相互的関係

第七章から第十三章までは対格名詞と動詞および文的要素との組み合わせの意味分類について述べてきたが、分類をしていくうちに、全ての実例を分類の特定の意味的なカテゴリーに完璧に入れることができず、二つのカテゴリーの中間的もの、二つのグループをつなげるもの、構造が変わることによって異なる意味的な関係を表すもの、そして、どのカテゴリーに分類すれば良いか簡単に決めることが難しいものが見られる。ここではそのような場合について例を挙げながら述べる。

セルビア語の「前置詞なし対格」名詞と動詞からなる組み合わせを分析する際に意味的な関係を詳細に分類し続けることも可能であるが、分類の特定のカテゴリーに簡単に入れることができないものも注意する必要がある。これらは特定のカテゴリーの間のもの、二つのカテゴリーをつなげるもの、または、特定のカテゴリーの間の相互関係を示しているものである。

それらには、次のようなものが見られる。

(1) 構造の拡大による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化

(2) 組み合わさる要素の意味的な性質の変化による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化

(3) 意味的な分類がし難い対格名詞と動詞との組み合わせ

(4) 構文的なコンタミネーション

(5) 組み合わさる要素の特殊化に伴う対格名詞と動詞との組み合わせの慣用的な用法

これらを考察することによって対格名詞と動詞との組み合わせの体系全体をさらに理解することを試みることができる。

奥田の分類においてもこのような現象が多く見られたが、セルビア語の「前置詞なし対格」名詞と動詞との組み合わせの関係を観察してみると、日本語と似ているものもあれば、異なる場合もあることが分る。

14.1.　構造の拡大による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化

特定の意味的な関係を表す動詞の中には構造が変更することによって異なる意味的な関係を表すものがある。例えば、動詞 ređati「並べる」、 spakovati「（かばん/荷物を）詰める」、vezati 「結ぶ」、sušiti「乾かす」、raširiti「開く/広げる」、namazati「ぬる」などが具体名詞と組み合わさり、二つの要素からなる構造を作り、「物にする働きかけ」の中の対象の「変化」という意味的な関係を表している 。しかし、これらが三つの要素からなる構造を作る際、「物に対する働きかけ」の中の対象の「付着」という意味的な関係を表している。この場合、組み合わさる対格名詞が同じ具体名詞であっても、[付着先]という文法的な意味を表す要素である場合に、この意味になる。

例えば、動詞 spakovati「（かばん/荷物を）詰める」の現れ方で言えば、以下の例(371)では物の「変化」を表し、例(372)では物の「付着」を表していることが見られる。

(371) Čim-ø　je diplomira-la　na　Elektrotehničk-om　fakultet-u,
すぐに　卒業する-PST:3SG　～の上に　電気工学の-LOC:SG　学部-LOC:SG
spakova-la　je　kofer-e　i　uputi-la se.
（荷物を）詰める-PST:3SG　スーツケース-ACC:PL　～も　向かう-PST:3SG
na　istok-ø.
～の上に　東方-LOC:SG
「電気工学部を卒業したとたんに、スーツケースを詰め、東方に向かった。」

(372) A　gospođ-a　Biljan-a Plavšić-ø　spakova-la je　svoj-ø
そして　氏-NOM:SG　個人名-NOM:SG　詰める-PST:3SG　自分の-ACC:SG
neseser-ø　u　omanj-u　putn-u　torb-u.
ポーチ-ACC:SG ～の中に 小さ目-LOC:SG　旅行用の-LOC:SG　かばん-LOC:SG
「そして、ビリャナ・プラヴシッチ氏は自分のポーチを小さ目の旅行かばんに詰めた。」

例(371)と例(372)において spakovati「（かばん/荷物を）詰める」の現れ方それぞれは次のような構造を見せている。

物の「変化」

[主体]NOM	spakovati 変化	[対象]ACC
〈人〉		〈もの〉

物の「付着」

[主体]NOM	spakovati 付着	[対象]ACC	[付着先] u+LOC
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉

日本語の「詰める」には上に挙げたような、物の「変化」を表す用法がないが、他の動詞の用法においては同じ現象が見られる。例えば、動詞「満たす」の用法はその例である。「**コップを**水で満たす」という場合には「コップ」の「変化」が強調され、「コップをいっぱいにする」というような意味になるが、「コップに**水を**満たす」という場合は、「コップに水を入れる」というような意味になり、「付着」という側面が強調される。それに対し、セルビア語の同じ意味の動詞 napuniti「満たす」には「変化」を表す用法しか見られず、同じ文脈で「付着」を強調する場合は別の動詞を使う必要がある。また、日本語の「**部屋を**人形で飾る」と「部屋に**人形を**飾る」や「**壁を**ペンキで塗る」と「壁に**ペンキを**塗る」との違いも同じ現象の現れを示している。セルビア語の ukrasiti「飾る」と ofarbati「（ペンキを）塗る」という動詞にも物の「変化」を表す用法しかなく、「付着」を表したい場合は別の動詞を使う必要がある。

このように、同じ動作であっても、異なる構造で表現されることによってその動作の異なる側面に注目されることがある。日本語では、「壁をペンキで塗る」といった構造は通常「壁」全体を「ペンキ」で「塗る」ということを表しているが、「壁にペンキを塗る」という構造では「壁」の一部を「ペンキ」で塗るという意味も考えられる。

また、「ごはんに**のりを**巻く」という例は「のり」を「ごはん」に「くっつける」という動作を示しているが、「のりで**ごはんを**巻く」という例は巻物を作る時のように、まずのりを敷いてその上にごはんをうすく広げて乗せ、次にその上に具を乗せ巻くような動作をすることを示している。前者は「のり」の「付着」を表しているが、後者は「ごはん」の「変化」を表していると言える。また、「中庭で**ベンチを**作る」と「中庭に**ベンチを**作る」も異なる構造において異なる側面が強調されることの例の一つである。前者における「中庭で」という空間的な意味が含まれる要素は「動作が行われる場所」という文法的な意味を表すが、後者における「中庭に」という要素はむしろ「対象の出現場所」という文法的な意味を表していると言える。

セルビア語の raširiti「広げる/開く」という動詞も似たようなふるまいを見せている。この動詞が具体名詞と組み合わさる場合、物の「変化」を表す組み合わせを作るのが基本的な用法であると言える。

(373)...pojavi-o　jedan-ø　sredovečn-i　čovek-ø
現れる-PST:3SG　一人-NOM:SG　中年の-NOM:SG　男性-NOM:SG
koji　je raširi-o　crnogorsk-u　zastav-u...
REL(which)-NOM:SG　広げる-PST:3SG　地名の-ACC:SG　国旗-ACC:SG
「モンテネグロの国旗を広げた中年の男性が一人現れた。」(Politika)

しかし、同じ動詞が[付着先]あるいは[接近先]を表す要素と組み合わさる場合は例(374)と(375)で見られるように、物の「付着」を表すようになる。

(374) Onda　sam...podiga-o　svoj-u　jakn-u　i　raširi-o
その時　持ち上げる-PST:1SG　自分の-ACC:SG ジャケット～も　広げる-APP:SG:M
je　preko　naslon-a　fotelj-e
それ-ACC:SG　～を覆って　背-GEN:SG　ひじかけいす-GEN:SG
「それから、私は自分のジャケットを持ち上げ、ひじかけいすの背に広げてかけた。（〈直〉ジャケットを持ち上げ、それをひじかけいすの背を覆って広げた。）」

(375) I　potež-e　iz　donj-eg　džep-a　jedan-ø
～も　引き出す-AOR:3SG　～から　下の-GEN:SG　ポケット-GEN:DG　一つ-ACC:SG
velik-i　plan,　rašir-i　ga
大きい-ACC:SG　図面-ACC:SG　開く-AOR:3SG　それ-ACC:SG
po　stol-u...
～の上に　テーブル- LOC:SG
「そして、下のポケットから大きな図面を一枚引き出し、（それを）テーブルの上に開いておいた。」(Proljeća Ivana Galeba)

日本語の「広げる」という動詞にもこのような用法が見られる。例えば、「**新聞を**広げた」という場合は物の「変化」を表すが、「**新聞を**床に広げた」というような場合は、「新聞を敷いた」あるいは「新聞を開いて置いた」という意味に近く、物の「付着」を表していると言える。

また、構造の要素が拡大することによって 「接触」を表す動詞が「所有」を表すようになる例も見られる。例えば、動詞 držati「持つ/握る」は典型的には物との「接触」を表し、次のような構造を見せている。

物の「接触」

[主体]NOM	držati 接触	[対象]ACC	za(～のために)/u(～の中に)+[接触先]ACC
〈人〉		〈物〉	〈物/身体部位〉

(376) U ruc-i je drža-la crn-u lepez-u.

～の中に 手-LOC:SG 持つ-PST:3SG 黒い-ACC:SG 扇子-ACC:SG

「（彼女が）**手に黒い扇子を持っていた**。」 (Seobe)

[接触先]という文法的な意味を表す要素の代わりに[手段]という文法的な意味を表す要素が現れることがある。

(377) Papas-ø Avram-ø uhvati-ø papig-u

個人名-NOM 個人名字-NOM:SG 掴む-AOR:3SG オウム-ACC:SG

koj-a je kandž-ama drža-la

REL(which)-NOM:SG である-PRES:3SG かぎづめ-INST:PL 持つ-APP:SG:F

fenjer-ø.

カンテラ-ACC:SG

「パパス・アヴラムは**かぎづめでカンテラを持っていた**オウムを捕まえた。」

(Hazarski rečnik)

しかし、以下の例では同じ動詞が「所有物のありか」という文法的な意味を表す要素と組み合わさることによって「所有」の中の「物持ち」を表すようになる。

(378) Samo sam ja zna-o
だけ である-PRES:1SG 私-NOM:SG 知る-APP:SG:M
u koj-oj fioc-i **drž-i** **veš-ø**,
～の中に どの-LOC:SG 引き出し-LOC:SG 持つ-PRES:3SG 下着-ACC:SG
a u koj-oj **nakit-ø**.
そして ～の中に どの-LOC:SG ジュエリー-ACC:SG
「私だけが（彼女が）どの引き出しに**下着を入れている**かどの引き出しに**ジュエリーを入れている**か知っていた。」（〈直〉私だけが（彼女が）どの引き出しの中に**下着を持っている**か、どの引き出しに**ジュエリーを持っている**か知っていた。）

この場合は次のような構造を見せている。

[主体]NOM	držati ものもち	[対象]ACC	u(～の中に)+[所有物のありか]LOC
〈人〉		〈物〉	〈物/空間〉

例(378)での u fioci「引き出しの中に」という要素と例(376)の「u ruci」という要素を比べると、前者はある程度空間的な側面が認められ、そこに留めておくというニュアンスが含まれているために、「接触先」でなく「所有物のありか」という文法的な意味を表していると言える。したがって、例文全体にも「物持ち」という意味があると認められる。

14.2. 組み合わさる要素の意味的な性質の変化による対格名詞と動詞との組み合わせの意味的な変化

前節では動詞 raširiti「広げる/開く」が物の「変化」や「付着」を典型的に表している時について述べてきたが、14.2 節と 14.3 節では同じ動詞を中心に特定の環境での異なるふるまいを観察し、いくつかの意味的な現れ方についても述べる。

例(374)、(375)ではこの動詞が物の「付着」を表していることが見られたが、この他に似たような環境で「移動」のニュアンスが加わる場合がある。次の例では動詞 raširiti「広げる/開く」は例(374)、(375)と同じように具体的な意味を表す対格名詞を取るが、「頂上」や「中庭」という、空間的な側面が含まれる名詞と組み合わさっている。

(379) Ovoga put-a **je** na vrh-u, odnosno
この-GEN:SG ～回-GEN:SG である-PRES:3SG ～の上に 頂上-LOC:SG つまり
visin-i od 8.850 metar-a, **raširi-o**
高さ-LOC:SG ～から メートル-GEN:PL 広げる-APP:SG:M
transparent-ø "Zaustavi-te klimatsk-e promen-e".
バナー-ACC:SG 止める-IMP:2PL 気候の-ACC:PL 変動-ACC:PL
「今回は頂上、つまり、8500 メートルの高さ(のところ)に「気候変動を止めろ！」という**バナーを広げておいた**。」

(380) ...a Dragan-a se vrati-la da **raširi-ø**
そして 個人名-NOM:SG 戻る-PST:3SG ～ように 開く-PRES:3SG
suncobran-ø u dvorišt-u.
パラソル-ACC:SG ～の中に 中庭-LOC:SG
「そして、ドラガナは**パラソルを**中庭に**開いておく**ために戻った。」

この文脈での「頂上」や「中庭」は、例(374)と(375)での「ひじかけいすの背」や「テーブル」に比べると、限られた表面ではなく空間的な側面が含まれるため、これらの名詞のタイプが違うことが分かる。そのため、「頂上」や「中庭」は単なる「付着先」または「近接先」を表す要素であると言い難くなる。なお、例文全体の意味を考えてみると、 特定の目的のために 「対象」を存在する場所からそこに留めておくという側面が認められる。したがって、これらの要素には[移動後の存在箇所]という文法的な意味が加わると考えられる。このように、例(379)、(380)全体に空間的なニュアンスがある程度含まれると認められ、「付着」を典型的に表すものとは性質が異なると考えられる。しかし、同時にこれらの例文は 物の「移動」を代表的に表しているものとは違うことも認める必要がある。物の「移動」を典型的に表している用例を以下に挙げる。

(381) Potom **su** **kovčeg-ø** od ružin-og drv-eta sa
それから である-PRES:3PL 棺-ACC:SG ～から バラの-GEN:SG 木-GEN:SG ～と
tel-om pesnik-a preuze-la njegov-a pesnič-a
死体-INST:SG 詩人-GEN:SG 引取る-APP:PL:F 彼の-NOM:PL 詩人の-NOM:PL
sabrać-a i **une-la** **ga**
仲間-NOM:PL ～も 持ち込む-APP:PL:F ACC:SG
u Saborn-u crkv-u...
～の中に 大聖堂の-ACC:SG 教会-ACC:SG

「それから、詩人の死体の入ったバラの木の**棺を**詩人仲間たちが引き取り、大聖堂に**持ち込んだ**...」

上に挙げた例を元に物の「移動」を表す組み合わせの構造を次にようにまとめることができる。

物の「移動」

[主体]NOM	[対象]ACC	iz/sa+ [移動前場所]GEN	u/na/po+[移動後の場所]ACC/LOC	V 移動
〈人〉	〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉	

日本語でも通常「付着」を表している動詞が特定の環境において「移動」を表すようになる現象も上に説明したセルビア語の例に似ていると考えられる。例えば、「入れる」という動詞がその一つであり、「財布に**お金を**入れる」における「財布に」という要素が「付着先」という文法的な意味を表し、この例が物の「付着」を表していると言える。それに対し、「体育館に**ピアノを**入れる」における「体育館」には「移動後の存在箇所」という文法的な側面が含まれると見られ、例全体にも「移動」の意味が認められる。ほかにも、似た現象が「担ぐ」のような動詞の用法にも見られる。「担ぐ」には「**荷物を**背中に担ぐ」のような用法が見られ、物の「付着」を表すが、「**大きな荷物を**駅から自宅まで担いだ」のような構造では「駅から」という要素が「移動前の場所」という文法的な意味、「自宅まで」という要素が「移動後の場所」を表し、この場合の「担ぐ」は「担いで移動する」のように解釈できる。 日本語の物の「付着」と物の「移動」[84]を表すヲ格名詞と動詞と組み合わせの構造の違いをまとめてみると、次のようになる。

物の「付着」

[主体]ガ	[対象]ヲ	[付着先]ニ	V 付着
〈人〉	〈もの〉	〈もの〉	

物の「移動」

[主体]ガ	[対象]ヲ	[移動前場所]カラ	[移動後の場所]ニ/ヘ/マデ	V 移動
〈人〉	〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉	

[84] 奥田の用語を使うと、「物にたいする働きかけ」の中の「とりつけ」と「うつしかえ」のことである。

要素の意味的な性質の変化には意味が抽象化する傾向が大いに見られる。

動詞 raširiti「広げる/開く」には、さらに次のような用法も見られる。抽象的な内容を表す対格名詞と組み合わさることによって「通達」を表すようになるのである。その際、「通達の相手」という文法的な意味を表す要素と共起することも考えられるが、その相手はほとんど集合的な存在あるいは集団的な存在である。

(382) Ta staric-a, bez koj-e ne
その-NOM:SG 年寄り-NOM:SG なし REL(which)-GEN:SG 否定小辞
biv-a nijedan-ø porođaj-ø u imućnij-im kuć-ama,
である- PRES:3SG 一つも 出産 ～の中に 裕福な-LOC:PL 家-LOC:PL
raširi-la je još više **kazivanj-e** o gospođ-i
開く-PST:3SG ～さらに 多く 話- ACC:SG ～について 婦人-LOC:SG
Davil-ø kao majc-i i domaćic-i.
個人名-NOM ～のように 母親-LOC:SG ～も 主婦-LOC:SG
「裕福な家での出産が（彼女が）いなくては一つも考えられないというその年寄りの婦人は母親でもあり主婦でもあるダヴィル婦人についてのたくさんの**話を**さらに**広めた**。」 (Gospođa Davil)

例(382)に見られる raširiti「広げる/開く」の現れ方は次のような構造を見せている。

「通達」

[主体]NOM	raširiti 通達	[伝達対象]ACC	[伝達相手] DAT/前置詞+LOC
〈人〉		〈通達内通〉	〈人/集合的・集団的存在〉

例(382)自体では「伝達相手」としての集団的な存在が見られないが、このような文脈では「（裕福な家/村の）人々に」あるいは「村に」などのような要素との共起が想定できる。

このような意味の現れ方を動詞の多義性のように見ることができるか、構造の変化の中で現れる意味として見る必要があるか決め難いことがある。

また、同じ動詞が[伝達対象]を表す対格名詞ではなく、現象、物事の状態、動きや関係を表す対格名詞と組み合わさることによって「事に対する働きかけ」の中の「変化」を表すようになる。この場合、「主体」を表す主格名詞が現象を表すことが頻繁に見られる。

(383) Strahuj-e se da **će** obiln-e padavin-e
恐れる-PRES:3SG:REFL ～ように want-PRES:3PL 大量の-NOM:SG 雨-NOM:PL
naredn-ih mesec-i **raširi-ti** **epidemij-u**.
次の-GEN:PL 月-GEN:PL 開く-INF (伝染病の)流行-ACC:SG
「大量の雨は次の数ヶ月の間（伝染病の）**流行を広げる**恐れがある。」

例(383)の raširiti の現れ方の構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	raširiti 事の 変化	[対象]ACC
〈人/現象〉		〈現象/物事の状態/動き/関係〉

また、 例(384)、(385)のように、特定の状態の「変化」を表す組み合わせも見られた。このタイプの組み合わせはその変化が現れてくる[場所]を表す要素との共起も多く、その場合は空間的な意味も含まれているために、状態の変化が及んだという意味的な側面も含まれていると言える。

(384) Vođ-a kavkask-ih ekstremist-a...odavno (je)obeća-o
リーダー-NOM:SG 地名の-GEN:PL 過激派-GEN:PL 昔から 約束する-PST:3SG
da **će raširi-ti** **rat-ø** na teritorij-u cel-e
～ように 開く-FUT:3SG 戦争-ACC:SG ～の上に 領地-ACCSG 全体-GEN:SG
Rusij-e.
地名- GEN:SG
「カフカスの過激派のリーダーは昔からロシアの領地全体に**戦争を広げる**と約束していた。」

(385) ...Ugo Čaves očeku-je da će...uspe-ti
個人名-NOM:SG 期待する-PRES:3SG ～ように 成功する-FUT:3SG

da　　**rašir-i**　　**antiimperijalističk-i**　　**žar-ø**

～ように　開く-PRES:3SG　反帝国主義的な-ACC:SG　熱意-ACC:SG

po　　čitav-om　　kontinent-u.

～の上に　全体-LOC:SG　大陸-LOC:SG

「ウゴ・チャベスは大陸全体に**反帝国主義的な熱意を広める**ことに成功すると期待している。」

動詞 raširiti「広げる/開く」が基本的な用法において具体的な動作を表し、具体名詞と組み合わさる際に物の「変化」を表しているが、組み合わさる要素の抽象化によって事の「変化」を表すようになることはこの二つのカテゴリーの緊密な相互関係を示している。

また、例(384)と例(385)に見られる「場所」を表す要素は14.１節と14.2節で挙げた、物の「付着」を表す例における「付着先」と緊密な関係を持っていると言える。これは事の「変化」を表す例も物の「付着」を表す例も、この二つのタイプの要素が同じ前置詞 na/po「～の上に」を含むことから考えられる。したがって、このことは事の「変化」を表す組み合わせと物の「付着」を表す組み合わせの間の相互関係性を見せていると言える。これらの組み合わせの意味的性質を考えると、前者が元々存在する範囲から新しい場所的範囲に状態を広げることを表し、後者が元の位置から新しい位置に物をくっつけるという側面を含意することでも類似していると言える。なお、このタイプの関係性は物の「移動」を表す組み合わせに見られる「移動後の場所」という要素との共起に関しても認められる。物の「移動」を表す組み合わせは元の場所から新しい場所に物を移動させるということを表しているためである。したがって、物の「付着」、物の「移動」と事の「変化」という三つの意味的関係を表す組み合わせの間に相互関係性が認められると考えられる。

前置詞 na/po「～の上に」を含んだ「移動後の場所」という要素が出現する物の「移動」の例を以下に挙げる。

(386) **Bakren-e**　**marijaš-e**　koj-e　su plaća-li　za

銅の-ACC:PL　コイン-ACC:PL　REL(which)-ACC:PL　払う-PST:3PL　～のために

prevoz-ø,　ljud-i　**su baca-li**　na　dn-o　crn-e

運送-ACC:SG　人々-NOM:PL　投げる-PST:3PL　～の上に　上-ACC:SG　黒い-GEN:SG

skel-e...

筏-GEN:SG

「人々は運送のために払っていた銅貨を黒い筏の上に**投げていた**。」(Na Drini ćuprija)

(387) Odnekud dovuč-e svežanj-ø ilustracij-a,

どこからか 引っ張り寄せる-AOR:3SG 束-ACC:SG イラスト-GEN:PL

bac-i ih na klavir-ø i

投げる-AOR:3SG それ-ACC:PL ～の上に ピアノ-ACC:SG ～も

stane nestrpljivo listati.

始まる-AOR:3SG 性急に めくる-INF

「どこからかイラストの束を引っ張り寄せピアノの上に投げ、性急にめくり始めた」(Proljeća Ivana Galeba)

日本語のヲ格名詞の抽象化によって新しい意味的なタイプの組み合わせが成立する例として動詞「おこす」の用法が挙げられる。「おこす」は基本的な用法で物の「変化」を表す。例えば、「木をおこす」という組み合わせがその例である。しかし、例えば「事故を起こす」のように、この動詞が抽象名詞と組み合わさる場合に事の「変化」を表すようになる。また、人名詞との組み合わせにおいて人の「生理的な変化」を表す現れ方もあり、 組み合わさる要素の意味的な性質が一般的に変化することによって新しい意味が成り立つことの例である（「子供を起こす」）。それに対しセルビア語で同じ意味の動詞 probuditi「起こす」には物の「変化」を表す用法は見られない。セルビア語でこの動詞のもっとも頻繁に見られるタイプの組み合わせは人の「生理的な変化」（probuditi dete「子供をおこす」）を表すものと事の「出現」（probuditi sumnju u njemu「彼に疑いを起こす」を表すものである。物の「変化」を表したい場合は他の動詞 uspraviti「立てる」を使う（uspraviti drvo「木を立てる」）。

14.3. 意味的な分類がし難い対格名詞と動詞との組み合わせ

対格名詞と動詞との組み合わせにはどのように分類すれば良いか悩むものがある。動詞 ubiti/pobiti「殺す」、ugušiti「窒息死させる」、zadaviti/podaviti 「絞殺する」のような動詞が作る組み合わせがその例である。このタイプの動詞が取る対格名詞が人名詞である場合、意味的な側面で見れば「人に対する働きかけ」の中の「生理的な変化」を表すと言いたくなるが、probuditi nekoga 「誰かを起こす」、rasplakati dete「子供を泣かせる」、uspavati dete「子供を眠らせる」のような、人の「生理的な変化」を典型的に表す例に比べると、この二つの組み合わせ全体の意味に異なるニュアンスが含まれていると言える。つまり、「人を殺す」、「人を窒息死させる」や「人を絞殺する」における「対象」は完全に消極的な存在のように見られるが、probuditi nekoga 「誰かを起こす」、rasplakati dete「子供を泣かせる」、uspavati dete「子供を眠らせる」における対象は主体の刺激を受けてある程度自由に行為を行い、意志性を持った「対象」でもある。したがって、これらにおける人名詞のカテゴリカルな意味が異なると言える。つまり、「人を殺す」などにおける対

格名詞を物扱いにして、そのカテゴリカルな意味が〈人〉ではなく〈もの〉であると認めることができるので、このタイプの組み合わせが「物に対する働きかけ」の中の「変化」を表すとも考えられる。これらの動詞は物の「変化」を表す組み合わせでもよく見られる具体的な「手段/道具」を表す要素と共起することも物の「変化」を表す組み合わせとの関係を示していると言える。

(388) Rej Gosling... prizna-o je da **je**

個人名-NOM:SG 認める-PST:3SG ～ように である-PRES:3S

sv-og ljubavnik-a obolel-og od sid-e

自分の-ACC:SG 恋人-ACC:SG 病気の-ACC:SG ～から エイズ-GEN:SG

uguši-o jastuk-om.

窒息死させる-APP:SG:M 枕-INST:SG

「レイ・ゴスリングは**エイズにかかっていた自分の恋人を**枕で**窒息死させた**ことを認めた。」(Politika)

それに対して、 人の「生理的な変化」を典型的に表す組み合わせでは対象の変化が具体的な「手段」を通してではなく、主体の行為あるいは言葉からの刺激を元にしておこる。しかし、同時にこれらの語彙的な意味の側面も考慮に入れると、人が生きている状態から死んでいる状態になることを表している点では人の「生理的な変化」を表しているため、分類し難いものである。

物の「変化」を表す組み合わせの構造と人の「生理的な変化」を比べてみると、次のようになる。

物の「変化」

[主体]NOM	V 変化	[対象]ACC	([手段/道具]) INST	([結果の状態])
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉	

人の「生理的な変化」

[主体]NOM	V 生理的変化	[対象]ACC
〈人〉		〈人〉

動詞 ubiti/pobiti「殺す」や ugušiti「窒息死させる」なども組み合わさる対格名詞が抽象化することによって、事の「変化」を表すこともできる。

(389) Teško mi je da se liš-im...
悔しい 私-DAT:SG である-3SG ～ように 自分-ACC 奪う-PRES:1SG
lijep-og sjećanj-a.. ali nisam moga-o da
美しい-GEN:SG 思い出-GEN:SG しかし できる-PST:1SG:NEG ～ように
uguš-im **sumnj-u**.
窒息死させる-PRES:1SG 疑い-ACC:SG
「自分から美しい思い出を奪うのが悔しかったが、**疑いを抑える**ことができなかった。（〈直〉**疑いを窒息死させる**ことができなかった。）」

(390) ...Zapad-ø je ćuta-o kad je... Tito... više
西洋-NOM:SG 黙る-PST:3SG ～時 である-PRES:3SG 個人名-NOM:SG 多く
put-a **uguši-o** **albansk-e** **pobun-e**.
～回-GEN:PL 窒息死させる-PST:3SG 地名の-ACC:PL 反乱-ACC:PL
「チトー（大統領）が**アルバニアの反乱を**複数回**鎮圧した**時、西洋は黙っていた。（〈直〉**アルバニアの反乱を窒息死させた**時、...）

(391) ...mrz-im njegov-u hladn-u izdvojenost-ø i
憎む-PRES:1SG 彼の-ACC:SG 冷たい-ACC:SG 孤立-ACC:SG ～も
mračn-o ćutanj-e, koj-e **ubij-a**
暗い-ACC:SG 沈黙-ACC:SG REL(which)-ACC:SG 殺す-PRES:3SG
nad-u.
希望-ACC:SG
「**希望を打ち砕いている**彼の暗い沈黙と冷たい孤立を憎んでいる。（〈直〉**希望を殺している**彼の暗い沈黙...）」

14.4.　構文的なコンタミネーション

言語学においてコンタミネーションの例として語彙的なコンタミネーションが頻繁に挙げられている。つまり、異なる単語の混成によって新しい単語が成立することである。例えば、「やぶる」と「さく」という動詞から「やぶく」という動詞が成立することがその例である。また、「とらえる」と「つかまえる」という動詞から「とらまえる」という動詞が成立することもそうである。

しかし、言語の現象を見ていると、構文的なコンタミネーションという現象も現れることが分かる。構文的なコンタミネーションというのは、二つの構造の混成によって、一時的にでも新しい構造が成立することである。例えば、2 節で挙げたような、動詞「担ぐ」の例で構文的なコンタミネーションを示すことができる。「担ぐ」は基本的な意味の用法において「付着」を表し、次のような構文を見せている。

[主体]ガ	[対象]ヲ	[付着先]ニ	V 付着
〈人〉	〈もの〉	〈もの〉	

例:　人が大きな荷物を肩に担ぐ

しかし、典型的には「移動」を表す要素と組み合わさることによって一時的に「移動」も表すようになる。つまり、「担ぐ」は「移動前の場所」と「移動後の場所」という文法的な意味を表す要素との組み合わせにおいて、「付着」と「移動」の構文の混成を見せていると言える。

[主体]ガ	[移動前の場所]	[移動後の場所]	[対象]ヲ	([付着先]ニ)	V 付着
〈人〉	〈空間〉	〈空間〉	〈物〉	〈物〉	

例:　人が駅から自宅まで大きな荷物を（肩に）担いだ。

動詞の意味が代表的には特定の意味のカテゴリーを表しているが、構造を変えることによって新しい意味を帯びることがセルビア語においても見られる。例えば、動詞 uzeti「取る」は典型的には「授受」を表す組み合わせを作るが、構造を変えることによって「付着」というニュアンスを帯びることもある。まず動詞 uzeti が「所有」の中の「授受」を表している場合、次のような構造を見せている。

[主体]NOM	uzeti 授受	[対象]ACC	od(から)+[相手]GEN
〈人〉		〈物〉	〈人〉

例：Sestra　**je uzela**　knjigu　od　prijatelja.

妹-NOM:SG　取る-PST:3SG　本-ACC:SG　～から　友だち-GEN:SG

「妹が友達から**本を**取った。」

しかし、この動詞が次のような例文の場合のように、「付着先」という文法的な意味を表す要素と組み合わさり、「相手」という文法的な意味を表す要素と組み合わさらない場合は物の「付着」を表すようになる。

(392) Zagrli-la sam　ga　i　poljubi-la　i　**uze-la sam**

抱く-PST:1SG　彼-ACC:SG　～も　キスをする-APP:SG:F　～も　取る-PST:1SG

ga　u　kril-o.

彼-ACC:SG　～の中に　膝-ACC:SG

「 私は**彼を**抱き、キスをして、膝の上に**乗せた**。（私は...**彼を**膝に**取った。**）」

したがって、例(392)における構造は動詞 uzeti「取る」が典型的に取る構造を作らず、次にような二つの構造をとると、まとめることができる。

[主体]NOM	uzeti 付着	[対象]ACC	u(～の中に)+[付着先]ACC
〈人〉		〈物〉	〈物/身体部位〉

また、動詞 uzeti が異なる環境において物の「接触」を表すことがある。この場合は[接触先]という文法的な意味を表す要素と組み合わさる。

(393) ...**uze-la**　ga　je　za　ruk-u

取る-APP:SG:F　彼-ACC:SG　である-PRES:3SG　～のために　手-ACC:SG

i　　privuk-la　　jasl-ama.

～も　　引き寄せる-APP:SG:F　　まぐさおけ-DAT:PL

「彼女は**彼の**手を**取り**、まぐさおけの方に引き寄せた。（〈直〉**彼を**手に**取り**、...）」(Koreni)

したがって、例(393)に見られる動詞 uzeti の用法を次のようにまとめることができる。

[主体]	uzeti 接触	[対象]ACC	za(～のために)+[接触先]ACC
〈人〉		〈物〉	〈物/身体部位〉

この現象を構文的なコンタミネーションとして名付けることができる。これらの動詞 uzeti の現れ方は中心的な用法ではないため、構造の変化における新しい意味として導入できるというよりも、特定の文脈において構造の混成によって臨時的に新しい意味が現れた例として挙げることができる。

例文(393)で見られる対格名詞も語彙的な意味が「人」であるが、カテゴリカルな意味を考えてみると、物扱いにすることができるものの例である。

また動詞 pritisnuti/pritiskati/stisnuti/stiskati「押す」、stezati「締め付ける」は典型的には「接触」を表し、「手段/道具」や「接触先」を表す要素を文中に頻繁に組み合わさる。その構造を次のようにまとめることができる。

[主体]NOM	V 接触	[対象]ACC	([接触先])	[手段/道具]
〈人〉		〈物/身体部位〉	〈物/身体部位〉	〈物/身体部位〉

(394) Pošto　**sam**　šak-om　desn-e　ruke

～の後　である-PRES:1SG　手-INST:SG　右の-GEN:SG　腕-GEN:SG

čvrsto　**stisnuo**　**oba**　štapa....

強く　押す-APP:SG:F　両方-ACC:SG　棒-GEN:PL

「右手で**棒を両方**強く**押した**後は...」(Golf)

(395) Znojav-im　dlan-om　jedn-e　ruk-e

汗をかいた-INST:SG　手のひら-INST　一つ-GEN:SG　手-GEN:SG

steza-la je　　oružj-e...

締め付ける-PST:3SG　武器-ACC:SG

「片方の汗をかいた手のひらで武器を締め付けていた...　」

「接触先」を表す要素を含む組み合わせは「対象」名詞がほとんど身体部位を表し、「接触」をもっとも典型的に表す例ではないが、セルビア語ではこの用法は頻繁に見られる。

(396) ...on　me　zagrl-i　i　potapš-e

彼-NOM:SG　私-ACC:SG　抱きしめる-AOR:3SG　～も　叩く-PRES:3SG

po　ramnen-u.

～の上に　肩-DAT:SG

「彼は私を抱きしめて、肩を叩いた。(〈直〉私を抱きしめて、肩の上に叩いた。)」

stisnuti「押す」と stezati「締め付ける」は「付着先」という文法的な意味を表す要素と組み合わさる際、「付着」という意味を帯びることもある。この現象を「接触」と「付着」の構文的コンタミネーションの例の一つとして扱うことができる。

(397) Stiska-o sam　još　dugo　t-u　kutiju　u　naručju,...

押す-PST:1SG　～さらに　長い間　その-ACC　箱-ACC:SG　～の中に　懐-LOC:SG

「さらに長い間その箱を懷に押しつけていた...」

(398) Kaž-i　mi　reka-o je　Petkutin-ø

言う-IMP:2SG　私-DAT:SG　言う-PST:3SG　個人名-NOM:SG

Kalin-i　stežu-ći　je　u　naručj-u...

個人名-DAT:SG　締め付けながら　彼女-ACC:SG　～の中に　懷-LOC:SG

「ペチュクティンはカリナを懷に抱きしめながら、「私に言ってください」と言った...(〈直〉彼女を懷に締め付けながら、カリナに...と言った...)」

例(396)も例(397)、(398)も一種の位置を表す要素を含んでいる。例(396)ではその要素がpo ramenu「肩の上に」であり、例(397)と例(398)ではそれがu naručju「懐に」という要素である。この二つの要素を比べてみると、前者は「対象」が接触する位置を指定するが、後者は「対象」をそこにしばらく留めるための位置を表している。したがって、この二通りの要素の文法的な意味も明らかに異なり、文の構造も異なると言える。前者は「接触先」という文法的な意味を表し、後者は「付着先」であると言える。

このように、例(397)と例(398)は次のような構造を成していると言える。

[主体]NOM	V stiskati/stezati	[対象]ACC	u[付着先]LOC
〈人〉		〈もの〉	〈もの/身体部位〉

14.5. 組み合わさる要素の特殊化に伴う対格名詞と動詞との組み合わせの慣用的な用法

前節では動詞 uzeti「取る」の基本的な用法と構造的なコンタミネーションを起こす場合を扱ってきた。これらは動詞 uzeti「取る」が自由な組み合わせを作る時の用法である。これ以外に、この動詞が異なる構文的な環境の中で慣用的な組み合わせを作る場合が見られた[85]。動詞 uzeti「取る」が対格の抽象名詞あるいは出来事名詞と組み合わさる際、さらに［認識の領域］という文法的な意味を表す要素を伴う場合、その組み合わせが「心理的な関わり」を表すようになる。この際、認識の領域を表す名詞の数が非常に限られているため、組み合わさる要素の特殊化が起こると認められる。これらは obzir「考慮」や razmatranje「配慮」という名詞であり、u「の中に」という前置詞と前置詞句を作ることで認識の領域という文法的な意味を表す要素になる。なお、この場合、認識の領域を表す前置詞句の要素の間に形容詞など他の要素を加えることができない。このタイプの組み合わせは自由な組み合わせというより、慣用的な組み合わせでとして扱う必要があると言える。

(399) Pri odmeravanj-u novčan-e kazn-e... sud-ø
〜にあたって 測定-DAT:SG 金銭上の-GEN:SG 罰金-GEN:SG 裁判所-NOM:SG
će posebno **uze-ti** **u obzir-ø**
である-PRES:3SG 特に 取る-INF 〜の中に 考慮-ACC

[85] 奥田(1967)によると、自由な意味というのは、多義語において基本的であり、そこからは派生的な意味が出てくる意味である。文の中で単語の機能、連語の構造、単語の形態、慣用句にしばられない意味のことである。慣用的な組み合わせというのは、組み合わさっている二つの単語のうち一つは自由な意味を保存し、もう一つはその単語の組み合わせでしか現れない意味のことである。例えば、日本語の「世話をやく」、「あぐらをかく」、「うそをつく」などの連語における動詞の意味がその例である。これらの組み合わせにおける動詞の意味は慣用句にしばられた意味とする。

i　　imovn-o　　stanj-e　　učinioc-a.

～も　　財産の-ACC:SG　　状況-ACC:SG　　違反者-GEN:SG

「罰金の測定にあたって裁判所は特に**違反者の財産状況も考慮に入れる**。

（〈直〉違反者の**財産状況も考慮の中に取る**。）」

(400) Po　　potreb-i　　mor-a　　se　　**uze-ti**　　u　　obzir-ø

～の上に　必要-LOC:SG　must-PRES:3SG REFL　取る-INF　～の中に　考慮-ACC:SG

ponašanj-e　　material-a　　na　　nisk-im　　temperature-ama...

反応-ACC:SG　　原料-GEN:SG　　～の上に　　低い-LOC:SG　　気温-LOC:SG

「必要に応じて原料の低温での**反応も考慮に入れる**必要がある。（〈直〉反応も**考慮の中に取る**必要がある。）」

このような組み合わせは「知的むすびつき」を表す。例(399)、(400)を例(392)と動詞 uzeti の代表的な意味に比べると、対格名詞の抽象化によって新しい意味が現れるとも考えられるために、これらの三通りの意味の間の相互関係が認められると言える。また、前置詞 u「～の中に」が基本的な用法において位置あるいは存在のありかを表すことも、例(399)、(400)における動詞 uzeti の意味と具体的な意味を表す場合との関係を見せていると考えられる。

第十五章　日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの類似点と相違点

ここまで見られたように、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせには、基本的な用法として「コップをわる」、「パンを食べる」、「子供を泣かせる」のような、対象への働きかけを表すものもあれば、心理的過程(「数学の問題を理解する」、「病気をおそれる」)や状況的な関係(「人ごみの中を歩く」、「部屋を出る」、「わずかな距離を歩く」)を表すものもある。

セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせにも、日本語のヲ格名詞と同様、対象への働きかけ (zapaliti kuću 「家を燃やす」) が基本的用法であるが、心理的な過程を表すもの(voleti nekoga 「誰かを愛する」、zapamtiti reči pesme 「歌の歌詞を覚える」)や状況的な関係を表すもの (provesti dan 「一日を過ごす」) などがある。

基本的な用法において日本語のヲ格名詞とセルビア語の対格名詞は似ていることが多いが、対象への働きかけが希薄になる場合は相違点も見られる。ここではその類似点および相違点についてまとめる。

本章で挙げる例文には奥田(1968-1972)と Gortan-Premk(1971)に挙げられているものが多いが、ほとんどの場合、適宜省略して示した。そのほかの例文は筆者の作例である。

15.1.　両者の類似点

15.1.1.　両者の基本的な用法

日本語のヲ格名詞と動詞の組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの基本的用法は、具体的な物(例(401)、(402)、(403))あるいは人への働きかけ(例(404))を表している場合である。対象への働きかけが強ければ強いほど、日本語ではヲ格名詞、セルビア語では対格名詞になりやすい。動詞で表される過程によって対象の変化が起こることがこのタイプの組み合わせの特徴である。

(401)	Razbi-ti	šolj-u	「コップを割る」
	割る-INF	コップ-ACC:SG	
(402)	Isprlja-ti	pantalon-e	「ズボンを汚す」
	汚す-INF	ズボン-ACC:PL	

(403) Zapali-ti　　kuć - u　　「家を燃やす」

燃やす-INF　　家-ACC:SG

(404) Rasplaka-ti　　prijatelj-a　　「友達を泣かせる」

泣かせる-INF　　友達-ACC:SG

15.1.2.　所有を表す組み合わせ

所有を表す組み合わせでは、ヲ格名詞が[所有の対象]であり、動詞がその対象に対する所有権、あるいは、その所有権の移動を表す(「お金を財布に持つ」、「友達にプレゼントをあげる」)。

セルビア語の対格名詞にも所有を表す用法が見られる。対象は具体物(例(405)、例(407))でも、主体の外部に存在する関係物(例 406)でも表すことができる。

(405) Ima-ti　　kuć-u

持つ-INF　　家-ACC:SG

「家を持つ」

(406) Ima-ti　　razlog-ø　　ljutnj-e

持つ-INF　　理由-ACC:SG　　怒り-GEN:SG

「怒りの理由がある（〈直〉怒りの理由を持つ）」

(407) Pozajmi-ti　　prijatelj-u　　novac-ø

貸す-INF　　友達-DAT:SG　　お金-ACC:SG

「友達にお金を貸す」

セルビア語では、身体的な特徴も所有を表す対格名詞と動詞との組み合わせで表すことができる。

(408) Ima-ti　　brkov-e

持つ-INF　　口ひげ-ACC:PL

「口ひげをはやす（〈直〉口ひげを持つ）」

15.2.　両者の相違点

対象への働きかけが希薄になる組み合わせには、日本語のヲ格名詞の使用範囲がセルビア語の対格名詞の使用範囲より広い場合が見られる。特に知的活動、通達と状況的な関係を表すものがそうである。しかし、待遇関係と本質的量的関係を表すことと空間の量を対格名詞的な単位の数詞的要素で表すことでは、セルビア語の対格名詞の使用範囲が日本語のヲ格名詞の使用範囲より広いと言える。また、二つの対格名詞を持つ二重対象的な関係を表す組み合わせ、主格名詞が重要な働きをする「人の生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせはセルビア語の特徴であり、日本語には見られない。

以下ではセルビア語と日本語のこのような相違点について順に説明する。

15.2.1.　知的活動を表す組み合わせ

日本語では、動詞が思考活動を表し、抽象的ヲ格名詞がその対象を表す組み合わせがよく見られる(「公害問題を考える」、「子供の気持ちを理解する」)。

セルビア語でもこのような関係を対格名詞で表すことが多少ある。

(409) Razmotri-ti　psihičk-o　stanj-e　izbeglic-a
考察する-INF　精神的-ACC:SG　状態-ACC:SG　難民-GEN:SG
「難民の精神状態を考察する」

しかし、特に razmišljati「考える」、あるいは、misliti「思う」という動詞と組み合わさる場合、「o　(について)＋所格」という形を取ることが多い。

(410) Razmišlja-ti　o　problem-ima　zagađenj-a
考える-INF　～について　問題-LOC:PL　公害-GEN:SG
「公害問題について考える」

(411) Misli-ti　o　status-u　žen-a　u
思う-INF　～について　身分-LOC:SG　女性-GEN:PL　～の中に
društv-u
社会-LOC:SG

「女性の社会での身分について思う」

15.2.2.　通達を表す組み合わせ

このタイプの組み合わせでは、動詞は言語活動を表し、ヲ格名詞はその言語活動で表現される現実の物事を表している。このタイプの組み合わせも、ヲ格名詞になるのは抽象名詞である(「(誰かに)あなた方の関係を話す」、「(父に)将来のことを相談する」)。

セルビア語ではこのような関係が「o　(について)＋所格」という形を取る。

(412) Priča-ti　nekom-e　o　svoj-oj　strast-i

語る-INF　誰か-DAT:SG　～について　自分の-LOC:SG　情熱-LOC:SG

「誰かに自分の情熱について語る」

(413) Pita-ti　majk-u　o　očev-om

たずねる-INF　母-ACC:SG　～について　お父さんの-LOC:SG

zdravstven-om　stanj-u

健康の-LOC:SG　状態-LOC:SG

「母に父の病状についてたずねる(〈直〉母を父の病状についてたずねる)」

15.2.3.　待遇関係を表す組み合わせ

特定の社会的場面での待遇関係を表す組み合わせのことをここで「待遇関係を表す組み合わせ」という。このタイプの組み合わせを作る動詞として pozdraviti「挨拶する」、pomoći/pomagati「助ける/支援する」、pitati「尋ねる/訪ねる」、moliti/zamoliti 「頼む」、sresti「会う」が挙げられる。これらはセルビア語で対格名詞と組み合わさるが、日本語では「助ける/支援する」以外、ヲ格名詞ではなく、ニ格名詞になる。組み合わさる名詞は人を表すので、このタイプの組み合わせは人への働きかけを表すと言える。そして、典型的には人間同士の相互関係を表している点では、臨時的にでも特定の人間関係が成り立つことを表していると言える。

(414) Pozdravi-ti　　prijatelj-a　　na　　ulic-i

挨拶する-INF　　友達-ACC:SG　　～の上の　　通り-LOC:SG

「道で友達に挨拶する（〈直〉道で**友達を**挨拶する）」

(415) Pomo-ći　　prijatelj-a　　u　　nevolj-i

助ける-INF　　友達-ACC:SG　　～の中に　　困ったこと-LOC:SG

「**友達を**困った時に助ける（〈直〉**友達を**困ったことで助ける)」

ただし、セルビア語の pomoći/pomagati「助ける/支援する」は対格名詞だけでなく、与格名詞を取る場合がある。しかし、その時は「助ける/支援する」という語彙的な意味ではなく、「手伝う」という語彙的な意味を実現する。

(416) Dec-a　　svak-i　　dan-ø　　pomaž-u

子供-NOM:PL　～毎-ACC:SG　日-ACC:SG　手伝う - PRES;3PL

majc-i　　u　　kuhijnj-i.

母-DAT:SG　　～の中に　　台所-LOC:SG

「 子供たちは毎日**母**の台所での用事を**手伝っている。**（〈直〉子供たちは毎日台所での**母に手伝っている**)。」

15.2.4.　状況的関係を表す組み合わせ

状況的な関係を表す組み合わせは対象への働きかけを表さないため、セルビア語では対格を取らない場合がある。このタイプの組み合わせには移動(「**廊下を**歩く」、「**階段を**のぼる」)、時間(「**夏休みを**楽しく過ごす」)、狭義の状況(「**人ごみの中を**歩く」)、時間の量(「**二晩を**(友人の家)に寝る」)あるいは空間の量(「**わずかな距離を**歩く」)を表すものがある。

時間(417)と時間の量(418)を表す点では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞の組み合わせが類似している。

(417) Proves-ti　　letnj-i　　raspust-ø　　na　　mor-u.

過ごす-INF　　夏の-ACC:SG　休み-ACC:SG　～の上に　～海辺-ACC:SG

「夏休みを海辺で過ごす」

(418) Prespava-ti　dv-e　noć-i　u　prijateljev-oj

寝る-INF　二つ-ACC:PL　晩-GEN:SG　～の中に　友人の-LOC:SG

kuć-i.

家-LOC:SG

「二晩を友人の家で寝る」

しかし、次の場合では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの相違点が見られる。

15.2.4.1.　移動を表すもの

日本語では、ヲ格名詞と動詞との組み合わせで特定の経路での移動を表すことができる(「堤防を歩く」、「大通りを走る」、「(川が)谷底を流れる」)が、セルビア語では基本的に具格名詞と動詞との組み合わせで表す。

(419) Hoda-ti　obal-om　mor-a

歩く-INF　海岸-INST:SG　海の-GEN:SG

「海岸を歩く(〈直〉海岸で歩く)」

(420) Trča-ti　hodnik-om

走る-INF　廊下-LOC:SG

「廊下を走る(〈直〉廊下で走る)」

ただし、次のような場合は異なる表現手段を取る。

何かの上での移動を表すもの(「湖水のうえをとぶ」のようなもの)は「iznad(～のうえ)+属格」という形になる。

(421) Lete-ti　iznad　jezer-a

飛ぶ-INF　～の上　湖水-GEN:SG

「湖水の上を飛ぶ」

下の方向への移動を表すもの(「坂を降りる」のようなもの)は「niz(～の下)+対格」という形、あるいは、具格名詞を取ることができる。

(422) Silazi-ti　niz　padin-u/padin-om

降りる-INF　～の下に　坂-ACC:SG/INST:SG

「坂を下りる（〈直〉坂の下へ下りる）」

また、ヲ格名詞で示される場所から離れていくことを表すもの(「部屋を出る」のようなもの)は基本的に「iz/od（～から)+属格」という形を取ることが多い。

(423) Iza-ći　iz　sob-e

出る-INF　～から　部屋-GEN:SG

「部屋から出る」

(424) Udalji-ti　se　od　obal-e

離れる-INF　REFL　～から　海岸-GEN:SG

「海岸から離れる」

セルビア語にもこのような関係が対格名詞で表される場合も多少あるが、ostaviti「置いていく」と napustiti 「離れる」という動詞の場合に限られる。

(425) Ostavi-ti　za　sob-om　grčk-a

残す-INF　～の後ろ　自分-INST:SG　ギリシャの-ACC:PL

ostrv-a

島-ACC:PL

「ギリシャの島を後にする　（〈直〉ギリシャの島を自分の後ろに残す)」

15.2.4.2.　狭義の状況的関係を表す組み合わせ

このタイプの組み合わせは、ヲ格名詞には「雪」、「雨」、「人ごみ」、「暗がり」など自然現象あるいは人間の作り出す物理的な、生理的な現象を表すものが現れる。そして、「～の中を」で空間化されることが多い(奥田 1968-1972[1983:145])。このタイプの組み合わせは、セルビア語では「kroz（～を通して)+対格」という形を取る。

(426) Hoda-ti　kroz　miris-ø　cveć-a

歩く-INF　～を通して　匂い-ACC:SG　花-GEN:SG

「花の匂いの中を歩く」

(427) Žuri-ti　prema　stanic-i　kroz　magl-u

急ぐ-INF　～の方へ　駅-DAT:SG　～を通して　霧-ACC:SG

「霧の中を駅の方へ急ぐ」

15.2.4.3.　空間の量を表す組み合わせ

空間の量を表す組み合わせは、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせが類似している場合がある。それはヲ格名詞(セルビア語では対格名詞)が距離あるいは経路を表し、距離/経路の長さを記述的に説明している要素に修飾される場合である。

(428) Pre-ći　mal-u　razdaljin-u

渡る-INF　わずかな-ACC:SG　距離-ACC:SG

「わずかな距離を渡る」

しかし、セルビア語では「メートル」、「キロメートル」など、長さの測定単位が数詞で修飾される場合も、その数詞が対格を取る。修飾する数詞が jedan「一」以外の場合、長さの測定単位を表す名詞が属格になる。

(429) Trča-ti　dv-a　kilometr-a

走る-INF　ACC:SG　キロメートル-GEN

「二キロメートル走る」

(430) Putova-ti　stotin-e　kilometar-a　voz-om

旅行する-INF　百-ACC:PL　キロメートル-GEN:PL　電車-INST:SG

「電車で数百キロメートル旅行する（〈直〉数百キロメートルを旅行する）」

また、数詞 jedan「一」の場合は、数詞も長さの測定単位である名詞も対格になる。

(431) Skoči-ti　jedan-ø　metar-ø

跳ぶ-INF　一-ACC:SG　メートル-ACC:SG

「一メートル跳ぶ（〈直〉一メートルを跳ぶ）」

日本語ではこれに類似した用法が見られず、移動の量を数詞的な要素で表すと、その要素は格形式を取らない。

なお、セルビア語には変化数詞が少ないため、この用法が限られている。

15.2.5.　本質的量的関係を表す組み合わせ

15.2.4. 節では時間の量と空間の量を扱っていたが、物の量、物事の重さ、物事の価値・値段と特定の過程の回数を表すものを「本質的量的関係を表す組み合わせ」とする。これらは 15.2.4.3.　で述べた二つの言語の相違点と似た関係が見られる。このタイプの組み合わせも、曲用を持った数詞的要素の場合のみ対格の用法として扱うことができる。これらには次のような三つの用法が見られる。

15.2.5.1.　物の量を表す組み合わせ

セルビア語では対格名詞で示される要素が物の量を表している組み合わせがある。

(432) Kupu-je　kilogram-ø　jabuk-a.

買う-PRES:３SG　一キロ-ACC:SG　りんご-GEN:PL

「りんごを一キロ買っている。」

15.2.5.2.　物事の重さ、物事の価値・値段　を表す組み合わせ

そして、物事の重さあるいは物事の価値・値段を表している組み合わせがある。このタイプの組み合わせは自動詞と組み合わさる点では特殊なものであると言える。このタイプの組み合わせを作る動詞は koštati「値段がある」、valjati「（高い）価値がある」、stajati「かかる」、imati vrednost/vredeti「価値がある」と biti težak/težiti「重さがある」、meriti「計る」である。

(433)　Ov-o　　tež-i　　jedan-ø　　kilogram-ø.

これ-NOM:SG　重さがある-PRES:3SG　一-ACC:SG　キロ-ACC:SG

「これは一キロの重さがある。」

15.2.5.3.　特定の過程の回数を表す組み合わせ

第三に、動詞が表す過程の回数を指定する組み合わせも見られる。対格で示される数詞または数詞的な意味の名詞と属格で示される put「～回/～度」という名詞から成り立つ。

(434)　Stotin-u　put-a　ga　je　udari-o.

百-ACC:SG　～回-GEN:PL　彼-ACC:SG　叩く-PST:3SG

「彼を百回叩いた。」

この節で扱ったような、対格で示される名詞的要素と動詞との組み合わせは日本語のヲ格名詞と動詞との用法には見られない。このような関係を日本語で表したい場合は、数詞的要素が格を取らない。

15.2.6.　人の生理的な状態と心理的な状態を表す組み合わせ

セルビア語では、対格名詞は動詞で表される状態と文法的な主語で表される事物によって影響される人あるいは生き物を表している。このタイプの組み合わせでは、対格を取るものはほとんど固有名詞と人称代名詞である。

(435)　Guš-i　ga　kašalj-ø.
息苦しくさせる-PRES:3SG　彼-ACC:SG　咳-NOM:SG
「彼は咳で息苦しくなっている 。(〈直〉咳が彼を苦しくさせる。)」

(436)　Bol-i　ga　nog-a
痛む-PRES:3SG　彼-ACC:SG　足-NOM:SG
「彼は足が痛い。(〈直〉足が彼を痛くさせる。)」

(437) Brin-e　me　njen-a　bolest-ø.
心配させる-INF　私-ACC:SG　彼女の-NOM:SG　病気-NOM:SG
「私は彼女の病気が心配だ 。(〈直〉彼女の病気が私を心配させる。)」

日本語にはこのような構文が存在せず、このような関係を【X は　Y が　状態】構文(「私は足が痛い。」、「私は彼女の病気が心配だ。」)で表すことがある。また、動詞で表される状態によって影響される人あるいは生き物はガ格になり、状態を起こす原因はデ格で表されることがある(「彼が咳で息苦しくなっている。」、「彼が飢餓で苦しんでいる。」)。

15.2.7.　二重対象的な関係を持つ組み合わせ

このタイプの組み合わせを作る動詞は učiti/naučiti/poučiti「教える」、moliti/zamoliti「頼む」、pitati/zapitati/upitati「聞く」など、伝達や言語活動を表すものである。これらの動詞は二つの対象を要求するため、文中に対格名詞が二つ現れる。

(438) Uči-ti　đak-e　pesm-u
教える-INF　生徒-ACC:PL　歌-ACC:SG

「生徒に歌を教える（〈直〉生徒を歌を教える）」

(439) Pita-ti　　neko-ga　　pitanj-e

聞く-INF　　誰か-ACC:SG　　質問-ACC:SG

「誰かに質問をする　（〈直〉誰かを質問を聞く）」

一番目の対格名詞は動詞が表す過程に含まれる人であり、二番目は動詞の過程の内容あるいは目的を詳しく指定している。二番目の対象は動詞に関わっているだけでなく、一番目の対象にも関わっている。

日本語には二重ヲ格構文がないため、動詞が表す過程に含まれる人をニ格で表す（「生徒に歌を教える」）。

15.3.　終わりに

以上第十五章では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせとセルビア語の対格名詞と動詞の組み合わせの類似点と相違点について述べてみた。対象への働きかけを強く表す場合、日本語のヲ格名詞とセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの用法が類似している。しかし、対象への働きかけが希薄になる場合、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの使用範囲とセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの使用範囲が異なることが多い。また、二重対格名詞を持つ構文と 人の状態を対格名詞で表す構文はセルビア語の特徴であり、日本語には見られない。

第三部　結論と今後の課題

十六章　結論

本研究ではセルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせを中心にセルビア語の対格名詞的な単位の用法を考察し、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの用法との類似点や相違点について考察した。研究の結果、次のことが分かった。

16.1.　セルビア語における対格名詞の現れ方のパターン

セルビア語における対格名詞と動詞には日本語とは異なる組み合わさり方が見られることが分かった。セルビア語には大きく言えば五通りのパターンが見られる。第六章で述べたことを改めてまとめると、次のようになる。

(a) 対格名詞的な単位の用法の基本的なパターン—本質的な対象的な関係を表わす組み合わせ

対格名詞的単位が動詞と組み合わさるときは、ほとんどの場合対象的な関係を表している。名詞的な単位は典型的に「直接目的語」という機能を果たしている。obrisati trag「跡を消す」、 držati detetu glavu 「子供の頭を持つ」、vratiti ljude na obalu reke「人々を川の岸辺へ戻す」などはこのパターンを見せているものである。

これらは対格を取る名詞的な単位に最も多く見られる用法である。このタイプの対格名詞的な単位と動詞との組み合わせの中には多様な意味的関係が見られる。また、その中の対象性に程度の差が見られる。

対格名詞の現れ方の意味的な分類との関係から言うと、対象的な関係を表す組み合わせのほとんどはこのパターンを見せている。その例外は人の「生理的な状態」と人の「心理的な状態」を表す組み合わせである。また、「状況的な組み合わせ」の中でも、「状況的な空間・時間を表す組み合わせ」（12.1.節）はこのパターンである。その中で「空間を表す組み合わせ」にはある程度対象性が認められる(preći prašumu「熱帯雨林を渡る」)以上、このパターンになるのは当然のことである。このパターンを見せている組み合わせの中では「時間を表す組み合わせ」だけ（provesti popodne 「午後を過ごす」）が対象性を見せない。

(b) 二重対格の名詞的な単位を含む構造

このパターンの特徴は二つの対格名詞的な単位を含むことである。これらは広い意味で「伝達」を表すと言える。それで、対格名詞の現れ方の意味的な分類における「伝達の組み

合わせ」（11.2.節）の下位カテゴリーである「教育目的の内容伝達」はこのパターンを最も代表的に見せているものである。

(110) Uči-ti　　đak-e　　pesm-u

教える-INF　　生徒-ACC:PL　　歌-ACC:SG

「生徒に歌を教える（〈直〉生徒を歌を教える）」

その他に、「伝達の組み合わせ」の下位カテゴリーである「通達」（pitati nekoga pitanje 「誰かに質問を聞く」）にも、「モーダルな態度を表す組み合わせ」（11.4.節）の下位カテゴリーである「要求的な組み合わせ」（zamoliti nekoga nešto「誰かに何かを頼む」）にも多少このパターンが見られるが、これらは周辺的であり組み合わさる対格名詞的な単位は非常に特殊化している。いずれにしても、このパターンを見せているものは第十一章で見た「心理的なかかわり」を表すものの一部だけである。

(c) 人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせ

これらは、他の構文的パターンに比べると、原則として三つの要素の組み合わせでないと、成り立たないことが重要な特徴である。また、このタイプの組み合わせの際立った特徴は、主格名詞を必須要素として含むことである。対格名詞の現れ方の意味的な分類でいうと、このパターンを見せているものは「人に対する働きかけ」（第八章）の下位カテゴリーである「生理的な状態」と「心理的な状態」を表すものである。つまり、このパターンを示すものは全ての「状態」を表すと考えられる。

人の生理的な状態

(217) Boli-ø　　ga　　nog-a.

痛める-PRES:3SG　　彼-ACC:SG　　足-NOM:SG

「彼は足が痛い。（〈直〉足が彼を痛くさせる。）」

人の心理的な状態

(223) Boli-ø　　ga　　njen-a　　hladnoć-a. (Gortan-Premk)

痛める-INF　　彼-ACC:SG　　彼女の-NOM:SG　　冷たさ-NOM:SG

「彼は彼女の冷たい態度で傷つく。（〈直〉彼女の冷たさが彼を傷つける。）」

(d) 組み合わせについて補充的な情報を与える対格の名詞的な単位

このタイプの動詞と対格の名詞的な単位との組み合わせは対象的な関係を表さず、物の量、物事の重さ、物事の価値や値段等を表し、動詞について補充的な情報を与えている。これらにおける対格の名詞的な単位を省くと、文の意味が不完全になる。対格の名詞的な単位は自動詞とも他動詞とも組み合わさる。これらにおける対格の名詞的な単位は「副詞的補語」（3.5.4.節）の機能を表す。

対格名詞の現れ方の意味的な分類の関係で言うと、このパターンを見せているものは「状況的量を表す組み合わせ」（12.2.節）の下位カテゴリーである「狭義的量的関係を表す組み合わせ」（Potrošio je million dinara「100万ディナールを費やした」）、「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」(Ovo teži jedan kilogram「これは一キロの重さがある」)および「空間の量を表す組み合わせ」（Pretrčati dva kilometra「二キロメートル走る」）である。

(e) 主部と述部で表す事柄について補足的な情報を与える対格の名詞的な単位

このパターンは文で表す事柄について補足的な情報を与えている用法である。

この用法では対格の名詞的な単位は述語の意味に影響されず、状況を補足的に説明している。したがって、これらは名詞的成分と動詞との組み合わせというよりも、動詞から独立して文で表す事柄全体を補足的に説明していると言える。文で表す事柄全体を外から説明しているという意味では、この用法は日本語の状況語に類似していると思われる。

したがって、対格名詞の現れ方の意味的な分類との関係から言うと、これらは全て「外的状況を表す対格名詞」（第十三章）になる。その中には下位カテゴリーである「外的時間・期間を表す対格名詞的な単位」（To jutro je kašljao manje「（彼は）その朝少ない程度に咳をしていた」）と「外的回数・頻度を表す名詞的な単位」（Stotinu puta ga je udario「彼を百回叩いた」）がある。

これらの要素は文から省いても文が成り立つことが特徴であり、「副詞的修飾語」（3.6.1.節）という機能を果たしている。

16.2. 対格名詞の現れ方の分類

既に見てきたように、セルビア語では対格名詞には動詞との組み合わせにおける現れ方と連語から独立した単独の現れ方が見られる。これらは「対格名詞と動詞との組み合わせ」（第七章から第十二章に相当）と「外的状況を表す対格名詞」（第十三章に相当）のように名付ける。対格名詞と動詞との組み合わせの体系が本研究の中心である。

この16.2.節では「対格名詞と動詞との組み合わせ」の分類と「外的状況を表す対格名詞」の分類をそれぞれ、16.2.1.節と16.2.2.節においてを図の形でまとめて見る。簡単な例を加えながら、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味および文法的な意味という観点から全て

の意味的カテゴリーを一般化してみる。一般化のモデルの例は次のようになる。

[要素の文法的な意味]NOM	V の性質	[要素の文法的な意味]ACC
〈要素のカテゴリカルな意味〉		〈要素のカテゴリカルな意味〉

16.2.1.　対格名詞と動詞との組み合わせ

対格名詞と動詞との組み合わせを大きく「対象的な関係を表わす組み合わせ」と「状況的な組み合わせ」のように分けることができる。その体系は次のようになる。

I　対象的な組み合わせ

① 対象に対する働きかけ

(a)　物に対する働きかけ

変化

[主体]NOM	V 変化	[対象]ACC	[変化の結果の状態]	[道具/手段] INST
〈人〉		〈もの/身体部位〉		〈もの〉

slomiti tanjir「皿を割る」、obojiti prozor u crveno「窓を赤く染める」

付着

[主体]NOM	V 付着	[対象]ACC	[付着先]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

obaviti toge oko grla「喉にトーガを巻く」、okaciti akvarel na zid「水彩画を壁にかける」

除去

[主体]NOM	V 除去	[対象]ACC	[除去元]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

otkinuti glavu sa voštane figure「蝋人形から頭をはぎ取る」

移動

[主体]NOM	V 移動	[対象]ACC	[移動前の場所]	[移動後の場所]
〈人〉		〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉

prevoziti predmete iz Palate pravde u zgrade「司法官から建物へ公文書を輸送する」

接触

[主体]NOM	V 接触	[対象]ACC	([接触先])	[手段/道具]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

šakom stisnuti oba štapa「手で両方の棒を押す」

生産

[主体]NOM	V 生産	[生産の対象]ACC	([原料]od+GEN)	([生産の場所]LOC)
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉	〈空間〉

praviti lonce od gline「粘土からなべを作る」、sagraditi teren na plantaži pamuka「木綿栽培に運動場を建てる」

(b) 人に対する働きかけ

生理的変化

[主体]NOM	V 生理的変化	[対象]ACC	([原因/手段・方法])INST
〈人/現象/事柄〉		〈人〉	〈事柄/抽象概念〉

rasplakati glavnu urednicu aluzijama「暗示で編集長を泣かせる」

生理的な状態

V 生理的な状態	[対象]ACC	[外的要因]NOM
	〈人〉	〈身体部位/現象/事柄〉

Boli ga noga.「彼は足が痛い。(〈直〉足が彼を痛めている。)」

心理的変化

[主体]NOM	V 心理的変化	[対象]ACC	([原因/方法])INST
〈人/現象/事柄/抽象概念〉		〈人〉	〈事柄/抽象概念〉

utešiti prijatelja lepim rečima「やさしい言葉で友達を慰める」

心理的な状態

V 心理的な状態	[対象]ACC	[外的要因]NOM
	〈人〉	〈現象/事柄〉

Brine me njena bolest.「私は彼女の病気が心配だ。（〈直〉彼女の病気が私を心配させている。）」

空間的位置変化

[主体]NOM	V 空間的変化	[対象]ACC	[移動前の場所]	[移動後の場所]
〈人〉		〈もの〉	〈空間〉	〈空間〉

izbaciti glumce iz malog svratišta 「俳優たちを小さいたまり場から追い出す」、odvesti brata u tvrđavu「兄を要塞に連れて行く」

社会的場面での人への働きかけ

[主体]NOM	V 社会的働きかけ	[対象]ACC
〈人〉		〈人〉

zaposliti Bila kao konsultanta「ビルをコンサルティングとして雇用する」、sastaviti dva čoveka「二人を引き合わせる」

人の行為の引き起こし/放任

naterati/nagnati/terati/pustiti/puštati	[対象] ACC	da	動詞
～させる	〈人〉	～ように	

puštati vojnike da se kockaju「兵士たちに賭けをさせる」

naterati/nagnati/terati	[対象]ACC	na+名詞
～させる	〈人〉	前置詞(～の上に)+ACC

naterati dete na poslušnost「子供を従順になるようにさせる」

(c) 事に対する働きかけ

変化

[主体/原意]NOM	V 変化	[対象]ACC	[動き・状態・関係の所有者]GEN
〈人/事柄/現象/組織〉		〈事柄〉	〈もの/人/事〉

ubrzati tok stvari「物事の流れを速める」、okončati interni konflikt「内部的争いを完成する」

事の出現

[主体]NOM	V 出現	[対象]ACC	[出現のところ]
〈人/事柄/現象/組織〉		〈事柄〉	〈事柄〉

izazvati krizu u odnosima između SAD i Danske「米国とデンマークの関係に危機を起こす」

② 所有関係

物持ち

[所有者]NOM	V 物持ち	[所有対象]ACC	([所有物のありか] u/na+LOC/ADV)
〈人/物/空間〉		〈具体物/身体部位/人/事柄〉	〈空間/機関〉

imati pasoš「パスポートを持つ」、 imati kuću na obali mora「海辺に家を持つ」

授受

[主体・所有者]NOM	V 授受	[所有対象]ACC	[授受相手] DAT/od+GEN	([所有物のありか] u/na+LOC/ADV)
〈人/物/空間〉		〈具体物/抽象物〉	〈人〉	〈空間/機関〉

dati Čarliju češalj「チャーリーに櫛をあげる」、 dobiti poklon od prijatelja「友達からプレゼントをもらう」

③ 心理的なかかわり

(a) 認識の組み合わせ

感性的な組み合わせ

[主体]NOM	V 感性	[知覚対象]ACC
〈人〉		〈具体物/現象/人〉

gledati film「映画を見る」、 čuti škripu kapije「門のきしむ音を聞く」

知的な組み合わせ

[主体]NOM	V 思考	([思考対象の所有者]) GEN/ACC	[思考対象]ACC
〈人〉		(〈人/出来事/事柄〉)	〈事柄・抽象物/人〉

razumeti mehanizam rukovanja「取り扱いのしくみを理解する」、analizirati posledice svetske krize「世界的危機の結果を分析する」

発見の組み合わせ

[主体]NOM	V 発見	[発見物のありか]u+LOC	[発見の対象]ACC
〈人〉		〈具体物/出来事/事柄〉	〈具体物/事柄・抽象物〉

naći rođake u Londonu 「ロンドンに親戚を見つける」

(b)　伝達の組み合わせ

通達

[主体]NOM	V 通達	[伝達相手]DAT	[伝達対象]ACC
〈人〉		〈人〉	〈事柄/状態〉

ispričati prijatelju svoju životnu priču「友達に自分の人生の話を語る」

教育目的の内容伝達

[主体]NOM	V 教育目的の伝達	[伝達相手]ACC	[伝達対象]ACC/DAT
〈人〉		〈人〉	〈内容〉

podučavati nekoga astronomiju「誰かに天文学を教える（〈直〉誰かを天文学を教える）」

(c)　態度の組み合わせ

感情的な態度の組み合わせ

[主体]NOM	V 感情的	[感情の対象]ACC	[感情の内容]
〈人〉		〈もの/人/事柄〉	〈人/事柄/抽象物〉

voleti nekoga 「誰かを愛する」、poštovati profesora「先生を尊敬する」

知的な態度の組み合わせ

[主体]NOM	V 知的	[思考・判断の対象]ACC	[思考・判断の内容]
〈人〉		〈もの/人/事柄〉	〈物/人/事柄/抽象物〉

smatrati egzaktne nauke zanatima「精密化学を工芸とみなす」

表現的な態度の組み合わせ

[主体]NOM	V 知的/感情的	[感情・判断の対象]ACC	[表現の内容]従属節/前置詞句
〈人〉		〈もの/人/事柄〉	〈もの/人/事柄/抽象物〉

pohvaliti nekoga da je kulturan「誰かを教養があるとほめる」

(d)　モーダルな態度を表す組み合わせ

要求的な組み合わせ

[主体]NOM	V 要求・願望・禁止	[要求の対象]ACC	[要求の相手]GEN＋名詞/DAT
〈人〉		〈動作/もの/抽象物/状態〉	〈人/機関〉

narediti oduzimanje životinja「動物の没収を命令する」

意図的な組み合わせ

[主体]NOM	V 意図・計画・約束	[意図の対象]ACC
〈人〉		〈動作/もの/抽象物/状態〉

isplanirati vojnu akciju「軍事行動を企てる」

Ⅱ　状況的な組み合わせ

①　状況的空間・時間を表す組み合わせ

(a) 空間を表す組み合わせ

離れる過程を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vintr/tr 移動	[出発点]ACC
〈人〉		〈空間〉

napustiti sobu「部屋を離れる」、 ostaviti ostrva「島を離れる」

通過を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vintr 移動	[経路]ACC
〈人〉		〈空間〉

preći prašumu「熱帯雨林を渡る」、prepilvati reku「川を泳ぎ渡る」

(a) 時間を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vintr	[状況的時間の規定]ACC
〈人〉		〈時間〉

provesti popodne 「午後を過ごす」、prespavati dan「日を寝て過ごす」

②　状況的な量を表す組み合わせ

(a) 狭義の量を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vtr 動作	[量の規定]ACC	[対象]ACC
〈人〉		〈量〉	〈もの〉

potrošiti milion dinara「100 万ディナール費やす（〈直〉ディナールの 100 万を費やす）」

(b) 物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ

[存在物]NOM	Vintr	[重さ・価値・値段の規定]ACC
〈もの/抽象物〉		〈量〉

Ovo teži jedan kilogram「これは一キロの重さがある」

(c) 時間的量を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vtr	[時間の量の規定]ACC
〈人/機関〉		〈時間の量〉

provesti jednu noć u hotelu「ホテルで一晩を過ごす」

(d) 空間の量を表す組み合わせ

[主体]NOM	Vintr	[距離・経路の量的規定] ACC
〈人〉		〈距離・経路の量〉

skočiti jedan metar 「一メートル跳ぶ（〈直〉一メートルを跳ぶ）」、pretrčati dva metra「二キロメートルを走る（〈直〉キロメートルの二を走る）」

16.2.2. 外的状況を表す対格名詞的な単位

この用法では対格の名詞的な単位が主語と述部で表される事柄を外から説明しているものである。この現れ方は次のように分類できる。

① 外的時間・期間を表す名詞的な単位

[外的時間的状況]	
〈時間・期間〉	事柄

To jutro je kašljao manje.「（彼は）その朝（普通より）少ない程度に咳をしていた。」

② 外的回数・頻度を表す名詞的な単位

[外的回数・頻度]	
〈回数〉	事柄

Hiljadu puta ga je udario.「千回彼を叩いた。」

16.3.　対格名詞と動詞との組み合わせの体系におけるカテゴリー間の相互関係

16.2.で振り返ったのは対格名詞の用法の基本的な分類であるが、特定の意味的なカテゴリーに分類できないものも見られる。というのは、カテゴリーの間の中間的なもの、二つのグループをつなぐもの、構造が変わることによって異なる意味的な関係を表すもの、どのカテゴリーに分類すれば良いか判断が難しいものが見られるからである。

具体的に言えば、次のような傾向が見られた。

(a) 構造の拡大による異なる意味的なカテゴリーの成立

例えば、動詞 spakovati「（かばん/荷物を）詰める」 が二つの要素の構造を作る際、「物に対する働きかけ」における「変化」を表しているが、同じ動詞が三つの要素の構造に入ると、「付着」を表すようになる（14.1.節を参照）。

物の「変化」

[主体]NOM	spakovati 変化	[対象]ACC
〈人〉		〈もの〉

spakovati kofere「スーツケースを詰める（〈直〉スーツケースをいっぱいにする」

物の「付着」

[主体]NOM	spakovati 付着	[対象]ACC	[付着先] u+LOC
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉

spakovati neseser u torbu「ポーチをかばんに詰める」

このような現象は二つの意味的カテゴリーの連続性、相互関係を見せているとする。

(b) 組み合わさる要素の意味的な性質の変化による新しい意味の成立

例えば、動詞 raširiti「広げる/開く」は典型的には「物に対する働きかけ」の下位カテゴリーである「付着」を表し、その構造の特徴として[付着先]を表す要素を伴う。raširiti jaknu preko naslona fotelje「ジャケットをひじかけいすの背に広げる」や raširiti plan po stolu「図面をテーブルの上に広げる」のような例ではそうである。しかし、[付着先]がより〈空間〉的なニュアンスを帯びるものになると、組み合わせ全体も典型的に「付着」を

表すものでなく、「移動」という側面が認められる。次の例ではそうである（14.2.節を参照）。

(380) ...a　Dragan-a　se vrati-la　da　**raširi-ø**
そして　個人名-NOM:SG　戻る-PST:3SG　～ように　開く-PRES:3SG
suncobran-ø　u　dvorišt-u.
パラソル-ACC:SG　～の中に　中庭-LOC:SG
「...そして、ドラガナは**パラソルを**中庭に**開いておく**ために戻った。」

このような例をカテゴリーの間のものとして扱うことができる。この場合は物の「付着」と物の「移動」の間の例として見られる。

組み合わさる要素の意味的な性質の変化の頻繁に見られる傾向として、要素の意味の抽象化が多く挙げられる。例えば、上に挙げた動詞 raširiti「広げる」は具体名詞でなく抽象的な名詞と組み合わさる際に異なる意味的関係を表す。抽象的な内容を表す名詞と組み合わさる場合に「伝達の組み合わせ」の下位カテゴリーである「通達」を表すようになる(raširiti kazivanje「**話を**広める」）（14.2.節を参照）。また、現象や状態を表す抽象名詞と組み合わさる場合に「事に対する働きかけ」の下位カテゴリーである「変化」を表す（raširiti epidemiju「**伝染病の流行を**広げる」）（14.2.節を参照）。

このような現象も異なる意味的カテゴリーの相互関係を見せているとする。

(c) 意味的な分類がし難いもの

本論文では ubiti čoveka 「**人を**殺す」、zadaviti nekoga「**誰かを絞殺する**」のような組み合わせを「物に対する働きかけ」の下位カテゴリーである「変化」を表すものとして扱っている（14.3.節を参照）。その根拠として、[対象]の消極的な性質が挙げられる。これらを rasplakati dete 「**子供を**泣かせる」や probuditi nekoga「**誰かを**起こす」など「人に対する働きかけ」の下位カテゴリーである「生理的な変化」を代表的に表すものに比べると、[対象]の意志性や積極的な役割に程度の差が認められるために、前者と後者の性質が異なるとする。なお、ubiti čoveka 「**人を**殺す」、zadaviti nekoga「**誰かを絞殺する**」などは[手段/道具]を表す要素で広げられる点でも、物の「変化」を表す組み合わせの構造に似ている（ugušiti nekoga jastukom「枕で**誰かを**窒息死させる」）。しかし、このタイプの組み合わせの語彙的な意味を考慮に入れると、人が生きている状態から死んでいる状態になるという側面が認められ、「生理的変化」を表しているとも言える。したがって、このようなものは特定の意味的カテゴリーとして定めることが難しく、判断に迷うものである。

(d) 構文的なコンタミネーション

本論文で扱った構文的コンタミネーションというのは、二つの構造の混成によって,新しい構造が一時的に成り立つ現象である（14.4.節を参照）。

例えば、物の「接触」を代表的に表す組み合わせは多くの場合〈身体部位〉というカテゴリカルな意味の［接触先］または[手段/道具]を表す要素で広げられるために、次のような構造を成すと言える。

[主体]NOM	držati V 接触	[対象]ACC	[接触先]	[手段/道具]
〈人〉		〈もの/身体部位〉	〈物/身体部位〉	〈もの/身体部位〉

potapšati nekoga po ramenu「誰かの肩を叩く（〈直〉誰かを肩の上に叩く）」、stezati dlanovima oružje「手のひらで武器を締め付ける」

しかし、この構造は［接触先］でなく、[付着先]という文法的な意味を表す要素で広げられることがある。その際、「接触」と「付着」の構造のコンタミネーションが起こると言える。この場合、[付着先]を表す要素は「対象」をそこにしばらく留めるための位置を示し、次のような構造を成していると考えられる。

[主体]NOM	V 接触	[対象]ACC	u[付着先]LOC
〈人〉		〈もの〉	〈もの〉

stiskati kutiju u naručju「箱を懐に押す」

(e) 組み合わさる要素の特殊化に伴う慣用的な用法の成立

通常異なる意味的カテゴリーを表すものが特定の構文的環境において慣用的な組み合わせを作る傾向が見られた。例えば、動詞 uzeti「取る」は通常「授受」を表す（uzeti knjigu od prijatelja「友達から本を取る」）が、対格の抽象名詞あるいは出来事名詞と組み合わさり、さらに［認識の領域］という文法的な意味を表す要素を伴う場合、その組み合わせが「心理的な関わり」の下位カテゴリーである「知的な組み合わせ」を表すようになる。（14.5.節を参照）［認識の領域］を表す名詞の数が非常に限られているため、組み合わさる要素の特殊化が認められる。これらは obzir「考慮」や razmatranje「配慮」という名詞であり、u「～の中に」という前置詞と［認識の領域］を表す前置詞句を作る。［認識の領域］を表す前置詞句の要素の間に形容詞など他の要素を加えることができず、なお［認識の

領域］を伴わない場合に動詞 uzeti が「知的な組み合わせ」を作る傾向が見られないために、これらを慣用的組み合わせとする。

以上で述べた傾向を考察することによって対格名詞と動詞との組み合わせの体系をより理解することができる。その考察の結果、対格名詞と動詞との組み合わせの体系におけるさまざまな意味的カテゴリーは独立して存在するのでなく、相互に結ばれている体系を作っていることが分かる。

16.4. セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせと日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの類似点と相違点

日本語のヲ格名詞とセルビア語の対格名詞の用法の類似点と相違点に関しては第十五章で考察した、本論文の最後に改めてまとめておく。

(a) 基本的な用法

基本的な用法ではセルビア語の対格名詞と日本語のヲ格名詞が類似している（razbiti šolju「コップをわる」、jesti hleb「パンをたべる」、rasplakati dete「子供を泣かせる」）部分が大きいが、対象への働きかけが希薄になるにつれて相違点も現れてくる。

(b) 「知的な組み合わせ」と「通達」

セルビア語では組み合わせにおける対象性が弱くなればなるほど、対格名詞と動詞が組み合わさり難く、動詞と前置詞句との組み合わせが成り立ちやすいという傾向が見られた。例えば、日本語では「身分を思う」や「公害問題を考える」など、「知的な組み合わせ」や「自分の情熱を語る」のような「通達」を表す組み合わせが普通に見られるが、セルビア語ではこのような組み合わせは必ず前置詞句になる（misliti na nečiji položaj「誰かの身分について思う」、razmišljati o problemima zagađenja「公害問題について考える」、pričati o svojoj strasti「自分の情熱について語る」）。このように、日本語では組み合わせにおける対象性が低くてもヲ格名詞と動詞との組み合わせがセルビア語に比べ、盛んであると言える。これは特に「知的組み合わせ」と「通達」を表す組み合わせに関して見られる。（15.2.1.節と 15.2.2.節を参照）

ただし、セルビア語では「伝達の組み合わせ」の下位カテゴリーである「教育目的の内容伝達」という意味的関係（podučavati nekoga astronomiju「誰かに天文学を教える（〈直〉誰かを天文学を教える）」）が見られ、これらは二重対格名詞の構造を成している。このような構造は日本語には見られない。（15.2.7.節を参照）

(c) 待遇関係

セルビア語では社会的場面における「待遇関係」を表すものは対格名詞と動詞との組み合わせが頻繁に見られるが、これらは日本語でニ格名詞を取ることが多い。例えば、pozdraviti prijatelja 「友達に挨拶する」、sresti profesora na ulici「道で先生に会う」 zamoliti prijatelja za pomoć「友達に手伝いを頼む」などはその例である。これらは第一に「人に対する働きかけ」を表すものが多いが、「モーダルな態度を表す組み合わせ」にも多少見られる（動詞 zamoliti「頼む」との組み合わせ）。（15.2.3.節を参照）

(d) 「所有関係」

意味的カテゴリーの範囲に関して言えば、セルビア語では「所有関係」を表す対格名詞と動詞との組み合わせは日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせより広いと分かる。例えば、セルビア語では人の性格の特徴（imati gadnu narav「（あの人は）気性がひどい。（〈直〉ひどい気性を持つ」）や身体的特徴 imati bradu 「ひげをはやす」、imati plave oči「（あの人は）目が青い」 、imati zabrinut izraz lica「心配そうな顔をする」を所有構造で表すことが普通にあるが、日本語ではそれほど頻繁ではない。また、人間関係を表す点でもセルビア語の対格名詞の用法の方が日本語より広い（imati (dobrog) šefa「（よい）上司がいる（〈直〉よい上司を持つ）」、imati dete「子供がいる（〈直〉子供を持つ）」）。なお、人の一時的状態を表す組み合わせに関しても同じことが言える（imati temperaturu 「熱がある（〈直〉熱を持つ）」imati upalu pluća 「肺炎になる（〈直〉肺炎を持つ）」、imati strah od nastupa「舞台負けを感じる（〈直〉舞台負けを持つ）」）。（15.1.2.節を参照）

(e)「状況的な組み合わせ」

日本語では状況的な関係を表すものはセルビア語より範囲が広い。

第一に、「空間的な組み合わせ」の範囲はセルビア語より広い。日本語では経路を表すヲ格名詞が移動動詞と組み合わさる傾向が頻繁に見られる（「道を歩く」、「（川が）谷底を流れる」）が、セルビア語ではこのような意味的関係を表すためには具格名詞を使う（hodati ulicom「道で歩く」、 teći dolinom「谷底で流れる」）。離れる過程(napustiti sobu「部屋を離れる」)と通過を表す（preći planinu「山を越える」）点では両方の言語が類似しているが、このような組み合わせはセルビア語においてむしろ周辺的である。例えば、離れる過程を表す場合に前置詞 iz と属格名詞との前置詞句が移動動詞と組み合わさる傾向が頻繁に見られる（izaći iz sobe「部屋から出る」）。通過を表す組み合わせでも前置詞句で表すことが多い（proći pored kolibe 「小屋を通る（〈直〉小屋の隣を通る）」）。また、上方向への移動や下方向への移動も必ず前置詞句で表される（leteti iznad jezera「湖の上を飛ぶ」、silaziti niz stepenice「階段を下りる」）。

さらに、狭義の状況的な関係を表す組み合わせ（「人ごみの中を急ぐ」、「暗がりを歩く」）もセルビア語では前置詞句と移動動詞との組み合わせで表される（žuriti kroz gomilu ljudi「〈直〉人込みを通して急ぐ」、hodati kroz tamu「〈直〉暗がりを通して歩く」）。（15.2.4.節を参照）

ただし、「狭義の量を表す組み合わせ」（kupiti kilogram jabuka「りんごを一キロ買う」）、「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」（težiti jedan kilogram「一キロの重さがある」）と「空間の量を表す組み合わせ」（prtrčati dva kilometra「二キロメートル走り渡る」）を見ると、その範囲がセルビア語では広い。（15.2.5.節を参照）

(f) 人の「生理的な状態」と「心理的な状態」

人の「生理的な状態」と「心理的な状態」表す組み合わせはセルビア語の特徴であり、主格名詞を必須要素として含む。このような現れ方は日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせには見られない。（15.2.6.節を参照）

人の生理的な状態

(217) Boli-ø ga nog-a.

痛める-PRES:3SG 彼-ACC:SG 足-NOM:SG

「彼は足が痛い。（〈直〉足が彼を痛くさせる。）」

人の心理的な状態

(223) Boli-ø ga njen-a hladnoć-a.

痛める-PRES:3SG 彼-ACC:SG 彼女の-NOM:SG 冷たさ-NOM:SG

「彼は彼女の冷たい態度で傷つく。（〈直〉彼女の冷たさが彼を傷つける。）」

16.5.　今後の課題

本論文ではセルビア語における対格名詞の用法を考察し、ヲ格名詞と動詞との組み合わせの用法について日本語と比べてみた。

日本語学の方法論を使い、セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせを考察することが本論文の出発点であったが、それに伴いセルビア語の対格名詞の用法をより広く見ることができ、日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの体系や組み合わさるパターンと比べることができた。このように、本研究はセルビア語学に貢献できると同時に、セルビア語学と日本語学をつなぐ研究にもなると考えられる。また、セルビアでの日本語教育においても応用できる部分が大きい。

しかしながら、本研究には残された課題があるので、それに関して述べる。

セルビア語では「状況的な組み合わせ」は他の意味的カテゴリーに比べて対格名詞と動詞との組み合わせの周辺であると述べたが、際立った構文的特徴を持つものである以上、この意味的カテゴリーを将来より詳しく考察する必要がある。それにあたってより多くの実例を元にこのタイプの組み合わせの意味的構文的一般化を行いたい。また、「状況的な組み合わせ」の中の意味的カテゴリーの相互関係、特に「時間を表す組み合わせ」(provesti popodne「午後を過ごす」、provesti slobodne časove「自由な時間を過ごす」と「時間的量を表す組み合わせ」（provesti dve noći「二晩を過ごす」、potrošiti jedan sat na dogovor「打ち合わせに一時間を費やす」）、また、「空間を表す組み合わせ」（ostaviti arhipelag Los 「ロス列島を離れる」、preći prašumu「熱帯雨林を渡る」）と「空間の量を表す組み合わせ」（pretrčati dva kilometra「二キロメートル走り渡る」）との相互関係を分析したい。それはこのタイプの組み合わせの間には境界的なもの[86]や分類し難いもの[87]もあるために、重要であるように思われる。なお、同じ作業で「外的状況を表す対格名詞」の考察を深めたい。「外的状況を表す対格名詞」のような用法は日本語には存在せず、セルビア語の特殊な現れ方である以上、言語上の現象としては興味深くその研究をより詳細に行う価値があると思われる。

そして、奥田（1968-1972）の「を格の名詞と動詞との組み合わせ」では「心理的なかかわり」の下位カテゴリーとして「内容規定的なむすびつき」が挙げられている。このタイプのむすびつきを「通達のすむすびつき」または「知的なむすびつき」と区別することが難しいので、これらの違いを体系的に定めることは非常に興味深く重要である。例えば、日本語では「うそを言う」や「日本語を話す」のようなものは「通達の内容規定」を表すものになるが、「日本語のことを話す」というのは「通達のむすびつき」になる。また、「対策を考える」というのは「思考の内容規定」を表すが、「公害問題を考える」というのは「知的なむすびつき」の例である。セルビア語にも「内容規定的なむすびつき」の存在が認められる。例えば、govoriti japanski 「日本語を話す」、reći laž 「うそを言う」、osmisliti

[86] 例えば、provesti jedno veče 「一晩を過ごす」の代わりに provesti veče「晩を過ごす」という言い方をすることもある。

[87] 例えば、preći prašumu「熱帯雨林を渡る」は「状況的な空間を表す組み合わせ」の代表的な例であるが、celu 「全体の」という修飾語が prašumu「熱帯雨林」に付くと、「状況的な空間を表す組み合わせ」として分類すべきか「空間的な量を表す組み合わせ」として分類すべきか判断に迷う。

taktiku「方策を考える」などの言い方はセルビア語にもある。したがって、これらを豊富な例を元に一般化し、意味的カテゴリーとして定める必要があるように感じられる。また、このタイプの組み合わせをセルビア語の「通達」を表す組み合わせや「知的な組み合わせ」と区別し、その違いを説明する必要がある。

本研究では日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの体系及びセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの体系の類似点と相違点に関して述べてみた。しかし、この考察には足りない部分もあり、より詳しく行う必要がある。それにあたって分析する実例の数を増やし、類似しているところと異なるところに関してさらに深く考える必要がある。「所有関係」や「知的な組み合わせ」などのように、日本語にもセルビア語にも存在している意味的カテゴリーがある。これらは同じようであるが、ぞれぞれの言語における特定の意味的カテゴリーは独自性を持っている。このような特徴を考察することは有意義であるように思われる。また、日本語あるいはセルビア語にない意味的カテゴリーに関して異なる言語の立場から考察することも興味深く思われる。将来には本研究を対照的な研究の方向に発展させていきたい。

用例出典

Albahari, D. (1982) *Šetnje pored reke*. u: Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka; Filip Višnjić (priredio Miroslav Josić Višnjić), Beograd.

Andrić, I. (1920) *Put Alije Đerzeleza*. u: Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka; Filip Višnjić (priredio Miroslav Josić Višnjić), Beograd.

Andrić, I. (1945a) *Na Drini ćuprija,* Prosveta, Beograd.

Andrić, I.(1945b) *Travnička hronika*. Državni izdavački zavod Jugoslavije, Beograd.

Arsenijević, V. (1994) *U potpalublju.* Rad, Beograd.

Basara, S. (2006) *Uspon i pad Parkinsonove bolesti*. Dereta, Beograd.

Blagojević, B. (1975) *Sve zveri sto su sa tobom*. Nolit, Beograd.

Božović, S. (1984) *Tebi, moja Dolores*. Četvrti jul, Beograd.

Bulatović, M (1965) *Insekti*. U: Suvremena jugoslavenska novella, Znanje, Zagreb.

Crnjanski, M. (1062) *Seobe druga knjiga*. Antologija srpske književnosti, Učiteljski fakultet.

Ćosić, B. (1937) *Kroz knjige i književnost*. Rajković, Beograd.

Ćopić, B. (1970) *Bašta sljezove boje*. Svjetlost, Sarajevo.

Ćosić, B. (1961) *Pokošeno polje*. Prosveta, Beograd.

Ćosić, D. (1954) *Koreni*. Antologija srpske književnosti, Učiteljski fakultet.

Demić, M. (2006) *Sluge hirovitog lučonoše*. Agora, Zrenjanin.

Desnica, V. (1957) *Proljeća Ivana Galeba.* Antologija srpske književnosti, Učiteljski fakultet.

Đurđević, M.(2001) *Treći sektor ili sama žena u tranziciji*. Žagor, Beograd.

Đurđević, M. (2012) *Leš u fundusu.*Laguna, Beograd.

Isaković, A (1983) *Tren 2: kazivanja Čeperku*. Prosveta, Beograd.

Kapor, M(1984) *Zoe*. Znanje, Zagreb.

Kiš, D. (1962) *Mansarda*. Službeni glasnik, Beograd.

Kiš, D.(1965) *Bašta, pepeo*. Službeni glasnik, Beograd.

Kiš, D. (1972) *Peščanik*. Službeni glasnik, Beograd.

Kiš, D (1983) *Noć i magla*. Službeni glasnik, Beograd.

Kiš, D. (1990) *Gorki talog iskustva*. Službeni glasnik, Beograd.

Kuzmanović, R (1990) *Odmor*. Beograd.

Kuzmanović, R.(1995) *Anje, anje*. Čigoja štampa, Beograd.

Kuzmanović, R.(1998) *Golf.* Čigoja štampa, Beograd.

Mihailović. D. (1983) *Ujka Dragi sedi pod jabukom.*

Milanković, M. (1950) *Kroz carstvo nauka*. Antologija srpske književnosti, Učiteljski fakultet.

Nedeljković, D. (2008) *Ponedeljak*. VBZ, Beograd.

Nikolić, D. (1999) *Ciganski nož*. u: Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka; Filip Višnjić, Beograd. (priredio Miroslav Josić Višnjić).

Novaković, M. (1999) *Strah i njegov sluga*. Revision Publishing, Beograd

Pavić, M. (1984) *Hazarski rečnik*. Prosveta, Beograd.

Pavlović, M. (1991) *Ilustrovana istorija Srba 1-4*. Litera, Beograd

Pekić, B. (1987) *Besnilo*. BIGZ, Beograd.

Pekić, B. (1988) *Novi Jerusalem*. (elektronska verzija).

Pekić, B. (1999) *Čovek koji je jeo smrt 1793.* u: Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka; Filip Višnjić, (priredio Miroslav Josić Višnjić). Beograd.

Petrović, R. (1921) *Burleska gospodina Peruna boga groma*. Sveslovenska knjižarnica, Beograd.

Petrović, R.(1927) *Sa silama nemerljivim*. Nolit, Beograd.

Petrović, R. (1930) *Afrika*. Nolit, Beograd.

Petrović, R.(1931) *Ljudi govore*. G. Kon, Beograd.

Popović, A. (1968) *Sudbina jednog Čarlija*.

Popović, M. (1994) *Sudbine*. Dereta, Beograd.

Sekulić, I. (1958) *Kronika palanačkog groblja.*

Selimović, M. (1966) *Derviš i smrt*.Svjetlost, Sarajevo.

Stanković, B. (1910) *Nečista krv*. Aleksandrija, Valjevo.

Stevanović, V. (1999) *Inicijali*. u: Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka; Filip Višnjić (priredio Miroslav Josić Višnjić),Beograd.

Tišma, A. (1976) *Upotreba čoveka.* (elektronska verzija)

Velikić, D. *Ruski prozor*. (elektronska verzija)

Župan, V. (2004) *Marketing i menadžment biblioteka u svetlu 69. kongresa IFLA-e u Berlinu 2003. godine*.

初出一覧

ヨカ，サーニャ（2012）「セルビア語の述語文における文の成分について」『対照言語学研究』22，pp.19-33，海山文化研究所

ヨカ，サーニャ（2014）「セルビア語における「前置詞なし対格」を含む句について」『日本研究教育年報』18（2013 年度版）pp.35-53,東京外国語大学日本課程

参考文献

日本語の参考文献

奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会（編）1983, pp. 151-279 に所収）

奥田靖雄（1962）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会（編）1983, pp. 281-323 に所収）

奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8, むぎ書房（奥田 1985, pp. 3-20 に再録）

奥田靖雄（1968-72）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28, むぎ書房（言語学研究会編 1983, pp. 3-20 に再録）

奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」『教育国語』45, むぎ書房（奥田 1985 pp. 67-84 に再録）

奥田靖雄（1979）「意味と機能」『教育国語』58（奥田 1985, pp. 159-169 に再録）

奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房　言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料集）』むぎ書房

ジャクシルク, アクマタリエワ（2014）『キルギス語の〈持続〉を表わす助動詞―jat-、tur-、otur-、jur-を中心に―』東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士論文

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

鈴木重幸・鈴木康之（1983）「編集にあたって」言語学研究会編 1983『日本語文法・連語（資料集）』pp. 3-19, むぎ書房

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

中山健一（2010）「『V シテイク』『V シテクル』の語彙化（lexicalization）について」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』4, pp. 65-85, 東京外国語大学（TUFS）大学院総合国学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」

成田節（2010）「ドイツ語にみる文の成分」『国文学　解釈と鑑賞』74-7, pp. 141-147, 至文堂

早津恵美子（2009）「語彙と文法の関わり―カテゴリカルな意味―」『政大日本研究』6, pp. 1-70, 国立政治大学日本語文学系

早津恵美子（2010）「連用修飾語の解体―再構築にむけて」『国文学　解釈と鑑賞』74-7, pp. 60-68, 至文堂

早津恵美子（2015）「カテゴリカルな意味（上）―その性質と語彙指導・文法指導―」『東京外国語大学論集』91, pp. 1-33, 東京外国語大学

早津恵美子（2016）「カテゴリカルな意味（下）―その性質と語彙指導・文法指導―」『東京外国語大学論集』92, pp. 1-19, 東京外国語大学

早津恵美子（2017）「ヲ格名詞と動詞からなる連語についての奥田靖雄氏の 2 つの論文について」国際連語論学会編『鈴木泰先生古希記念論文集』pp. 124-141, 日本語文法研究会

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

姫野昌子（2001）「複合動詞の性質」『日本語学』20-8, pp. 6-15, 明治書院

松本泰丈（2005）「品詞と文の部分」松本編『語彙と文法の相関―比較･対照研究の視点から―社会文化科学研究科研究プロジェクト』123 千葉大学大学院社会文化科学研究科（松 本泰丈 2006『連語論と統語論』至文堂, pp. 249-269 に再録）
宮島達夫（2005）「連語論の位置づけ」『国文学　解釈と鑑賞』74-7, pp. 9–30, 至文堂
三代川隆也（2015）「《関係表現》を表す連語―《物へのはたらきかけ》を表す連語からの意味の抽象化―」『日本研究教育年報』19（2014 年度版）pp. 59-76, 東京外国語大学日本課程
村木新次郎（1980）「日本語の機能動詞をめぐって」『研究報告集』2（国立国語研究所報告 65）, pp. 17-75, 秀英出版
村木新次郎（2010）「文の部分と品詞」『国文学　解釈と鑑賞』74-7, pp. 102-111, 至文堂
柳沢民雄（2010）「ロシア語の文の成分」『国文学　解釈と鑑賞』74-7, pp. 135-140, 至文堂

セルビア語の参考文献

Alanović, Milivoj (2009), „Leksičko-sintaksička sredstva pasivizacije“(受身化の語彙的構文的手段), Naučni sastanak slavista u Vukove dane, 38/1, str. 123–133.
Alanović, Milivoj (2010), „Tipološke odlike i principi klasifikacije leksičko-gramatičkih kauzativa“（語彙的文法的使役の類型的特徴と分類の原則）, Naučni sastanak slavista u Vukove dane, 39/1, str. 361–375.
Alanović, Milivoj(2011), *Kauzativnost- manipulativnost: od koncepta ka formi*(使役性–操作性：概念から形態に向かって), Novi Sad, Filozofski fakultet u Novom Sadu.
Alanović, Milivoj(2012), „Kauzativno-manipulativni glagoli: derivaciono motivisane semantičke i argumentne varijacije“(使役的操作的動詞：派生に基づく意味的項的バリエーション), Tvorba reči i njeni resursi u slovenskim jezicima: zbornik radova sa četrnaeste međunarodne naučne konferencije Komisije za tvorbu reči pri Međunarodnom komitetu slavista / glavni urednik Rajna Dragićević, str. 453–467.
Arsenijević, Nada (2007a), „O konstrukcijama s osnovnim brojem“(基本数詞を持つ構造をめぐって), Zbornik Matice srpske za filologiju i lingvistiku, Novi Sad, Matica srpska, str. 45-55.
Arsenijević, Nada (2007b), „Tranzitivnost i padeži objekta u srpskom jeziku“(セルビア語における他動性と目的語の格), Zbornik Matice srpske za slavistiku, 71-72, Novi Sad, Matica srpska, str. 377-389.
Arsenijević, Nada (2010), „Semantika pravog objekta u standardnom srpskom jeziku“（セルビア標準語における直接目的語の意味), Srpski jezik serija 1, XV 1/2, Beograd, Naučno društvo za negovanje i proučavanje srpskog jezika, str. 177-187.
Arsenijević, Nada (2012), *Padeži pravog objekta u standardnom srpskom jeziku*(セルビア標準語における直接目的語の格), Novi Sad, Filozofski fakultet u Novom Sadu.

Gortan-Premk, Darinka(1971), *Akuzativne sintagme bez predloga u srpskohrvatskom jeziku*(セルボ・クロアチア語における「前置詞のない対格」を含む句),Institut za srpskohrvatski jezik, Biblioteka južnoslovenskog filologa, Nova serija, knj.2.

Grickat, Irena (1961), "Razvoj značenja glagola imati "(「動詞「持つ」の意味の発達」). Radovi.XVIII knj.6.Sarajevo, str. 67-81.

Ivić, Milka (1983), *Iskazivanje objekta u (standardnom) srpskom jeziku* ((標準)セルビア語における目的語の表現), Lingvistički ogledi, Biblioteka XX vek, Beograd, Prosveta.

Ivić, Milka (2002), *Red reči* (語順), Beograd, Biblioteka XX vek.

Ivić, Milka (2006), „Kognitivni aspekti fenomena partonimije " (部分・全体関係論の認知的側面). Zbornik Matice srpske za slavistiku. 70. Novi Sad: Matica srpska,str. 13-21.

Klajn, Ivan (2005), *Gramatika srpskog jezika* (セルビア語の文法), Beograd, Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.

Piper, Predrag i dr.(2005), *Sintaksa savremenoga srpskog jezika: prosta rečenica*(現代セルビア語の統語論-単文) , Institut za srpski jezik SANU, Beograd,str.33-118.

Stanojčić, Živojin i Popović, Ljubomir (1994), G*ramatika srpskoga jezika- Udbženik za I*、*II*、*III*、*IV razred srednje škole*(セルビア語の文法-高校Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ年のための教科書), Zavod za udženike i nastavna sredstva, Beograd, str. 206-237.

Stevanović, Mihailo (1974), *Savremeni srpskohrvatski jezik- II Sintaksa*(現代セルビア･クロアチア語-II 統語論), Naučna kniga, Beograd, str.23-152.

Stojanović, Smiljka (1996), *Binarne relacije posesije u engleskom i srpskohrvatskom jeziku.* (英語及びセルボ・クロアチア語における所有の二項的関係) Beograd: Filološki fakultet.

Tanasić, Sreto (2005), *Sintaksičke teme*(構文論の題目), Beograd, Beogradska knjiga.

ロシア語の参考文献

Виноградов, В.В. (1947а), Русский язык(ロシア語), Москва.

Виноградов, В.В. (1947б), Об основных типах фразеологических единиц в русском языке(ロシア語における主なフレーズ的単位について) ,Сборник《А.А. Шахматов》, Москва.

Виноградов, В.В.(1950), Понятие синтагмы в синтакси сесовременного языка (現代語の構文論における句の定義)Москва.